

## 論文要旨

### 奄美のシマ（集落）にみる文化資本を活かした地域経営 —長寿と人間発達を支える伝統と協働のダイナミズム—

富澤 公子

#### 1 はじめに

長寿・超高齢社会が進行する中で、加齢を衰え・衰退とみる「福祉的」でネガティブな老年学が世界的な主流をなしている。本論文は、これら既存の高齢者観に真っ向から対峙する。超高齢期は、介護リスクや認知症リスクが高まる時期とされるが、多様な潜在能力と文化的価値をも有している。本論文は、後者の側面に注目し、それらを引き出し活かしていく長寿地域の地域経営とそこに機能する社会経済システムを明らかにする。

これまで、効率や若さを価値とする経済成長下では超高齢者の経験や潜在能力は注目されず、むしろ、超高齢者は支援コストのかかる対象としてネガティブに評価されてきた。しかし、祭りや伝統文化が継承されているコミュニティでは、超高齢者は地域の文化資本を体化する存在として地域の文化に寄与し、さらに進んで、超高齢者の能動的・主体的行為が地域の新たな文化や経済に貢献する可能性も少なくない。

本論文では、文献調査やフィールド調査、インタビュー調査、アンケート調査からの実証を踏まえ、学際的視点から超高齢者のポジティブな側面と、長寿・超高齢社会における多世代共生と健康長寿を実現する地域コミュニティのあり方を考究する。

#### 2 問題認識と研究課題

##### 2.1 問題認識

従来、加齢は、身体機能の衰退や要介護リスク、認知症リスクの高まりとして、ネガティブにとらえる傾向がみられる。この傾向は、次（現役）世代における医療費などの社会保険、租税負担の増大に注目する結果となり、世代間の利害対立を不可避的なものとして固定化する。

本研究では、心身機能の低下からサクセスフル・エイジング（幸福な老い）には否定的と捉えられる85歳以上の超高齢者を対象とし、老いと関係する彼ら／彼女らの経験や叡智、超越等の潜在能力に光をあて、彼ら／彼女らの人間発達を支援し、世代間の共生を実現している長寿地域の地域経営とそこに機能する社会経済システムを明らかに

することを目的としている。

その実証の地として、奄美のシマ（集落）のコミュニティ特性に注目し、老年学や心理学、社会学、経済学、経営学、民俗学や文化経済学などの多様な学際的成果を取り入れ解説する。それらを通じ、過疎化や高齢化が進行し、GDPの経済指標では低域にある奄美が、衰退地域ではなく逆に健康長寿と幸福な老いを実現している地域経営のモデル地域であることを明らかにする。

これから、ますます進展する長寿・超高齢社会は、少子高齢化の深刻化として危惧される未来ではない。むしろ、それとは逆のシナリオ、可能性を示唆するのが、奄美の事例である。健康長寿者のもつ老いの価値に光を当てることによって、新たな生き方や地域のあり方が浮かび上がる。多世代との共生のなかで地域の文化資本を活かしたつながりやきずなが強固に形成され、健康長寿と幸せな老いが実現していく。人生 100 年時代のサクセスフル・エイジング（幸福な老い）には、それぞれの地域にある文化資本を活かした地域経営が重要となる。本研究は、こうした問題認識と視点で貫かれている。

## 2.2 研究課題

本研究ではこれらを明らかにしていくために、次の 4 つの研究課題を設定し考察していくこととする。

一つ目は、超高齢者の人間発達の現場として、健康長寿者の多い奄美のシマ（集落）のコミュニティに焦点を当て、祭りや伝統行事、習慣などの（無形の）文化資本を活かし長寿を実現している地域経営と社会経済システムを明らかにすることである。

二つ目は、超高齢者の精神的次元の力量ともいえる老年的超越傾向に注目する。超高齢者の存在は、若い頃の産業と生活における労働の苦しみや喜びという体験を経たのちに身につけた心の落ち着き、生活や仕事の知恵、熟達した技などを含む「精神的資産」として、その存在は次（現役）世代へ影響を与えうると把握する。

三つ目は、虚弱化する身体に適応しながら利他性への移行や世代性が高まっていく、超高齢者の幸福感の醸成に注目する。幸福の客観的基礎には、心や知恵の問題だけでなく仕事を通じての協働による学びあい・育ちあいも幸福への欲求として把握できる。その過程で互いの人格を尊重しあうという信頼関係が形成される。超高齢者は、若い頃の厳しい仕事や生活と比較して現在を生きている。超高齢者の幸福感は次（現役）世代の幸福とは質的に異なっていることを明らかにする。

四つ目に、人と人とのつながりのなかで高まる人間発達と生活の質に注目する。つながりやきずなという社会関係資本の概念は、単なる人間同士の信頼関係というよりも、仕事や生活上の「困ったときはお互い様」という協働と関わる信頼関係である。そこには、「乏しいものを分かち合う」という利他の精神が公正な分配に係わる幸福感を醸成し、信頼関係を深めることが見えてくるのである。

### 3 分析枠組みと実証方法

#### 3.1 研究対象者とそのねらい

本研究の対象者は超高齢者である。これまでの通説では、超高齢期は長寿ゆえの脆弱さが顕著な時期として、サクセスフル・エイジング（幸福な老い）には否定的である。しかし、筆者のこれまでの長寿地域での超高齢者研究を踏まえ、超高齢者をポジティブな視点から捉え直ししている。超高齢者は、現役世代からもたらされる経済資本からの支援（年金制度や医療制度、経済的援助）を受けながら、コミュニティの支えの中で、これまでの経験から蓄積された英知やノウハウなどの潜在能力を地域に還元しうる存在となりうる。そうした超高齢者の潜在能力に光を当て、次世代との共生システムの要をなす存在として位置づけている。

#### 3.2 研究対象地とそのねらい

本研究の実証の場は、「長寿で子宝の島」と称される伝統的共同体の残る奄美のシマ（集落）である。奄美は100歳以上の百寿者が多い地域であり、超高齢者たちの生き生きとした笑顔と長生きを楽しんでいる暮らしに注目する。自然の営みや循環を大切にする暮らしや祭り、伝統文化が継承されたコミュニティのなかで、超高齢者は先代から伝わる祭りや儀式、踊りの所作、ノウハウを体化した存在として、若い人に伝える役割の場がある。奄美の事例から、コミュニティ要因が超高齢者の健康長寿と幸福な老いに関連することが考察可能となる。

#### 3.3 実証・分析方法

実証方法として、祭り・シマ（集落）の居住空間などのフィールド調査や、超高齢者や集落区長への質問紙によるアンケート（量的）調査、超高齢者の百寿者と同居する家族へはインタビュー（質的）調査を実施する。分析は、量的調査は統計ソフト SPSS で

分析し、質的調査は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析法を用いて分析をする。

#### 4 先行研究の課題と本研究の視角

本研究が主眼としているのは、従来のネガティブな超高齢者論から脱却し、超高齢者の人間発達に焦点を当て、それらを形成・発展させる地域のコミュニティ要因を明らかにすることである。その実証のために、奄美のコミュニティのベースにある伝統文化を基軸にした地域経営の機能を解説する。

この試みは、今後進展する長寿・超高齢社会において、健康長寿と幸福な老いを実現するうえでの有用な示唆が得られるものと確信する。しかし、このような視点からの先行研究は見られない。そのため本研究では、老年学や心理学、社会学、経済学、経営学、民俗学、文化経済学などの様々な学際的分野からの成果を統合化し、それら成果を踏まえ、超高齢者の人間発達と地域コミュニティ特性という2つの視角からアプローチして、実証研究につなげている。

##### 4.1 超高齢者の人間発達へのアプローチ

###### 4.1.1 ジェロントロジー（老年学）からネオ・ジェロントロジーへの転換

本研究では、長寿・超高齢社会における元気な高齢者／超高齢者の出現を背景に、加齢を一律に衰退・衰えととらえていたジェロントロジー（老年学）から、学際的で多様な高齢者像・人間発達の視野に立つ、新しい老年学ともいえるネオ・ジェロントロジーの視点に立脚する。つまり、高齢者を虚弱で支えられる者として、福祉的分野を主に研究してきた老年学から、「<老い>の豊かさや価値についての歴史的・思想的・比較文化的分析、蓄積された経験が大きな資産となり、これらによって形成された暗黙知の伝承の民俗学的・文化人類学的考察などを含んだ研究への必要性」に注目したのである。

このような、老いの豊かさに光を当てることによって、超高齢者の生活基盤や医療を支えている社会保障制度の積極的側面もまた評価の対象となりうる。この視点から、奄美の健康長寿者を生み出す地域の経営や社会経済システムに注目する。奄美の超高齢者の家計面は、現役世代が担う国民年金や医療保険制度、自治体の敬老慰労金に支えられている。自給自足的経済も加わるが、現金収入の持つ意味は大きい。超高齢者の自律生活において、家族や近隣との付き合いなど、生活の質を確保する現金の意味合いは大き

いのである。

老いの価値や超高齢者の潜在能力に光をあてるネオ・ジェロントロジーの分野から、経済のみならず文化をも視野に入れることによって、健康長寿を実現する奄美のシマ（集落）の社会経済システムの考察が可能となる。

#### 4.1.2 マクロな超高齢社会論からミクロな長寿・超高齢社会論への転換

これまでの超高齢社会論においては、経済資本に限定された従来の大量データを集めたマクロ的な議論が主流であった。それに対し本研究では、地域という視点から、教育や文化を含む身近なデータなど、微小で多様なものを集めて積み上げる。そのことで、従来は見ることのできなかつたもの、見落としていたものも見えてくると判断する。

つまり、これまでの超高齢社会論では、超高齢者は叡智やノウハウなどの潜在能力を持つ存在ではなく、単なる量として把握されていた。その結果、超高齢者一人ひとりの役割や機能、存在意義を主たる研究対象とはしていない。その理由は以下のとおりである。

第一にあげられるのは、超高齢者は所得を獲得する能力を欠いた存在、つまり、所得を獲得する能力をもつ人々にとっての負担、あるいは、コストとして把握する傾向である。この場合には、高齢化の進行は社会保険料、租税など、社会的負担の増として把握される。これらの研究の視点は、人的能力を各人の稼得能力、所得獲得能力として把握している点に特徴がある。したがって、高齢化は経済資本の減少、所得獲得能力の低下を意味し、超高齢者は（所得獲得能力の高い）現役世代からの世代間所得再分配によって支援される存在となる。この結果、超高齢者層全体がマイナスイメージで把握され、超高齢者の増加は社会的コストや社会保障費の増大として、人々の意識においては負のイメージが共有されていく。

第二にあげられるのは、人的能力を経済資本として経済的価値を生む「元手」あるいは、「元本」として把握していることである。しかし、人間を人的能力としての経済資本や稼得能力に限定せず、それらを稼得能力を獲得する前提条件ともいうべき、潜在的諸能力の獲得過程にまで視野を広げる必要がある。そうすれば、「稼ぐ」には職業能力が必要であること、職業能力を身につけるには、幼児期には家庭における人格形成教育、地域における社会教育や義務教育、後期中等教育、職業教育や高等教育などの学校教育の存在が浮かび上がってくる。

本来は、一人ひとりの発達や生きがい、生活の質をも取り扱わなければ稼働能力の形成の前提条件は解明できない。だが、大量現象としての高齢化に焦点が当てられた結果、超高齢者の価値は負担感ばかりが強調されている。このようなマクロな視点では、超高齢者の教育機能や地域貢献を通じた地域の発展、さらには、少子高齢化社会からの脱却という未来への道筋は見出されない。

#### 4.1.3 超高齢者の潜在能力への視座

人間発達の経済学における「潜在能力」の視点は、超高齢者への新たな理解を示唆している。1980年代、A.センは、商品開発の経済学から人間発達の経済学へ、という経済学のパラダイム転換を提起した。そこでセンは、人間の幸福な状態や福祉の水準としては、人が達成に成功する「機能」（人がなしえること、なしうること）と、人がこれらの機能を達成する「潜在能力」に関心を寄せている。また、「貧困は単に所得が低いというよりも、むしろ基本的な潜在能力の剥奪である」と指摘する。

このことを、超高齢者の現実に当てはめるならば、年金等の充実で生存の最低限度の所得は保障されているものの、社会的役割から離脱させられた高齢期／超高齢期を過ごす人にとっては、自らの自己実現や生きがい創造の機会は少なくなる。そのような環境下にある彼ら／彼女らは、物質的には豊かな生活であっても、いわば潜在能力のはく奪状況として、精神的には生きがいのある生活とはいえないだろう。現に、祭りや伝統行事が希薄になった都市部では、地域の年中・共同行事も薄れ、それに伴い地域の多様な職人能力も衰退している。超高齢者は、地域での社会参加や役割を発揮する機会もなくなっている。都市での高齢者／超高齢者の孤独や孤立化は深刻な状況にある。

一方、文化経済学の視点からの超高齢者は、地域コミュニティにおける自然や伝統文化から学びつつ、これまでの経験、熟練した技やノウハウを蓄積し、目には見えない無形の文化資本を体化した存在として捉えられる。実際、祭りや伝統行事が継承されているコミュニティでは、超高齢者は先代から引き継いだ習慣や祭りの精神、技、ノウハウを次世代に伝える機会と役割の場がある。

#### 4.1.4 超高齢者の幸福への視座

幸福の基礎としての文化と経済の関係は、量産体制下では矛盾すると考えられてきた。しかし、両者が多品種少量生産システム時代や、祭り、民俗芸能、農林漁業や地場産業

などの発展と相互補完的であるとの研究が進んでいる。また、文化経済学からは、心理学が発見した超越の境地を、幸福を実現する近道の発見と実践による文化資本の充実として位置づけることができる。そして、この道の生き方を構想する力量を身につけた人々として超高齢者が位置付けられる。他方、超高齢者は文化資本を身につけているだけでなく、人生の各段階でそれぞれに自らの生き方を構想・創意工夫・ノウハウとして蓄積し、最終段階では最適なものを選択するという事実も重要な意味をもつ。

加えて、加齢に伴う幸福感の増大を超高齢者のポジティブな発達とみなす老年的超越理論からの示唆がある。超高齢者は、加齢に伴う精神的発達によって現役世代と異なる価値観や世界観の変容を経て、高齢者よりも幸福感が高まることが実証されている。同様に生涯発達心理学からは、超高齢期における適応的な発達が可能であることを示めすバルテスの SOC 理論からの示唆がある。これらの理論からは、超高齢者は構想力（ノウハウといえる）によって、少ないエネルギーを最適化して行動していることに注目することができる。

## 4.2 地域コミュニティへのアプローチ

### 4.2.1 老いの価値への社会経済的視座

超高齢者が増大している今日の時代には、これまでの現役世代の価値観である経済的・物的な財や資本への貢献度だけではなく、老いの経験が無形資産（価値）や社会の共通資本として、社会経済的に考察するプロセスや老いの潜在能力を経済学的に考察することが求められる。

しかしながら、近代化や高度成長、都市化の進行で、コミュニティの希薄化、農村における稲作の衰退などによって地域固有の文化は弱体化し、自然資本と共生する文化資本としての無形資産の研究は、民俗学などで触れられてはいるものの研究の蓄積がない。

このようななかで本研究が注目するのは、無形資産はかつての日本の伝統的共同体に一般的にみられた、祭りや習慣、結いを媒介としたものであること。そしてこれらは、互いの生命や生活を尊重しあう相互支援・互助の人間関係のなかで形成されていたものであるということである。

さらに社会経済的視点からみると、個人は孤立した存在でなく、様々な経済・社会関係を築き、歴史的背景をもつ社会的存在でもある。加えて、自然や風土と共生し、家族や社会集団、地域コミュニティと関わりながら暮らす生活のなかでは、超高齢者は知恵

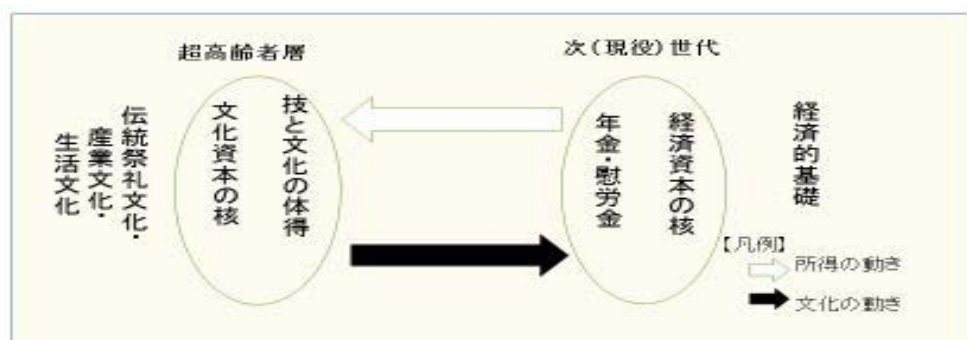
者としての役割があり、潜在能力を発揮する居場所があった。

例えば天野（2006）は、民俗学者宮本常一の著書『忘れられた老人』には、「狭くて息苦しい、利害の衝突しがちな村共同体の中で、常に共生の可能性を求めてきた老人の『知』のありようが見てとれる」と記している。その根拠として、「老人の知が持つ有効性は、長年にわたる経験の中で蓄えられてきたことだけにあるのではない。それが世俗の秩序に拘束されない自由さを持っているからである。…そこにあるのは、衰退した老いの姿ではない。村の歴史の流れを見通し、共生への志をもった老いの姿である」と論じている。かつての日本の老人たちは、地域コミュニティでの役割やノウハウを発揮する存在として重要な役割を果たしていたことがみえてくる。共同体の基盤が残る奄美の超高齢者のポジティブな心性や適応、幸福感を解明するうえで重要な視点となる。

#### 4.2.2 文化資本と経済資本の再分配システムへの視座

超高齢者層の文化資本と次（現役）世代のもつ経済資本との相互交流・連関としての文化資本と経済資本の再分配システムは以下のように考えられる。

図表 序-1 地域コミュニティにおける文化資本と経済資本の再分配システム



健康長寿を体現している超高齢者は、豊富な人生体験の中で、伝統祭礼文化・仕事・生活における知識・ノウハウ・職人の力量などを文化資本の核として蓄積している。そのような役割の場があるコミュニティでは、超高齢者は文化を再生産する担い手でもある。一方、超高齢者がこのような機能を発揮しうる経済的な基礎は、現在の社会保障制度における国民年金制度や医療保険制度であり、ここには、次（現役）世代から超高齢者への所得の再分配が行われる。超高齢者は自己の文化資本を活かして、次（現役）世代との学びあい・育ちあいの交流の場を通じ、超高齢者と若い世代との文化の再分配システムが機能する。



これらのことを踏まえて、奄美のシマ（集落）において文化資本と経済資本の分配がどのように機能するか、実証を通じ明らかにしていくこととする。

#### 4.2.3 文化資本を生かした長寿地域の地域経営

地域の祭りや伝統行事が健康長寿と幸福な老いに与える影響についての考察は、筆者以外の先行研究では見当たらない。しかし、超高齢者の人間発達をめぐる自然や社会の環境要因や地域・場における存在意義や主体的役割について研究の視野を広げていくと、新たな超高齢者像が見えてくる。すなわち、自然環境を保全しつつ、人と人との心のつながりや信頼関係を持続的に発展させる力量を身につけ、先覚の実践や智慧、徳などから学び継承するなかで、個々人は多様で質の高い文化資本を体得している超高齢者像である。

そのことを、長寿地域である奄美のシマ（集落）でみてみよう。一つ目に、奄美には日本の各地で廃れていった伝統的共同体の基盤がある。二つ目に、自然環境に恵まれ、昔からの祭りや年中行事、民俗芸能などの伝統行事が継承されている。三つ目に、集落の環境整備などの年中行事や共同作業などの集落自治の取り組みがある。四つ目に、相互扶助や結いの習慣のなかで絆やつながりが強固に残っている。これらコミュニティの基盤が長寿の地域要因や支援要因となって、自律し長生きを楽しんでいる超高齢者の実態が明らかにされてくる。

長寿地域の奄美には、豊かな自然や新鮮な食べ物などの自然資本、交流や馴染みの関係などの社会関係資本、年中行事や伝統行事などの文化資本など、経済資本に還元できない長寿を支える豊かな資源が存在している。奄美のシマ（集落）に着目し、文化資本が活かされた健康長寿の地域経営を考察する意味がここにある。

一方、都市部では、高度成長期の人口集中・流入の中で宅地化が進行し、自然は減少し、伝統的な祭りなども衰退していった。退職後の高齢者／超高齢者は地域コミュニティでの地域の絆が断ち切れ、希薄化の中で孤立し、彼ら／彼女らの地域での役割や居場所はなくなってきている。高齢者は年金制度と引き換えに地域貢献する働く場を失ったともいえる。

#### 4.2.4 健康長寿のまちづくりへの視座

昨今、従来の医療や福祉行政の枠にとどまらない、まちづくり、都市政策として、健

健康長寿のまちづくりが注目されている。超高齢社会への挑戦として、国や自治体、先進企業で取り組まれている。そこでは、“2025年問題”に象徴される介護問題への解決が急務だという危機意識が共有されている。加えて、健康長寿のまちづくりを推進するには、健康寿命だけを取り上げて個人モチベーションになりえないという認識がある。

つまり、辻（2017）は、「人は長生きのために長生きするのはなく、家族と自分の関係や地域における自身の存在意義を背景として元気に活躍するのであって、そういう意味でコミュニティの有無は超高齢社会に大きな影響を及ぼす」と指摘する。これまでの健康寿命重視から、コミュニティの中で自分がどう生きるかという視点が長寿の時代には重要である、ということが指摘されるようになったのである。

今後、長寿・超高齢社会にふさわしい、健康長寿のまちづくりをすすめていくためには、地域コミュニティの再生、つながりやきずなの再生、超高齢者と次（現役）世代との共生などの課題が浮かび上がってくる。それぞれの地域固有の自然や文化資本を活かし、家族・近隣・地域・多世代がつながる。そのような地域コミュニティを創造していく。そのことこそが、長寿時代にふさわしいと健康長寿のまちづくりの道筋となろう。

さらに健康長寿を共有するためには、長寿地域の農村と都市との交流も重要となる。健康長寿の地域要因を豊かに内蔵している農村の住民の経験と、地域のきずなが希薄になった都市の住民が、お互いの資源を交換しながら交流しあって、ともに健康長寿を実現するという新たな仕組みも必要となってくると考える。

以上、先行研究の課題から本研究を通観する視角をまとめてみると、超高齢者の健康長寿や幸福感の高まりは、地域固有の自然や文化、習慣などの地域のコミュニティ特性を含めて考察することによって、解明されるということである。つまり、超高齢者は、地域の固有の歴史や文化、ノウハウを次世代へつなぐ主体的な自己を確信することで、受動的な幸福感だけでなく能動的で超越的な幸福感を持つように深化していく。そのことが解き明かされるのである。

しかしながら、現状では、超高齢者の地域貢献に注目した能動的な老いがもたらす健康長寿の効用や、それを支える地域コミュニティの役割に焦点をあてた研究は見当たらない。本研究は、伝統的共同体の残る長寿地域、奄美の自然資本・文化資本・社会関係資本に注目し、超高齢者の長寿と幸福感を紐解くことによって、この未踏の領域を切り拓こうとするものである。

## 5 各章の関連性と概要

本論文の構成は序章・終章を含めて、全 11 章で 3 部から構成される。序章は、長寿・超高齢社会論と人間発達への地域コミュニティ・アプローチとして、本研究の中心となる研究課題の章であり、本研究全体を通観する部分である。**第 1 部は**、人間発達と地域コミュニティに関する理論編として、3 章から構成される。

**第 1 章は**、超高齢期の機能と適応に関する章で、本研究の対象者である超高齢者について老年学分野の先行研究をベースに、超高齢期の生物的・心理的・社会的特性を明らかにするとともに、精神的次元のスピリチュアリティや老年的超越に注目し、超高齢者の精神的適応につながる考察を行っている。このことから、超高齢者は、前期・後期高齢者とは異なる心理適応があることが明らかにされる。

**第 2 章は**、「老年的超越理論」を用いて、超高齢者のポジティブな心性を考察している。特に、超高齢者の人間発達と脆弱な身体に適応し幸福な老いを実現する要因については、加齢に伴う発達に焦点を当てた老年的超越理論から考察することによって、超高齢者のポジティブな心性と老いの成熟の多様な側面が明らかにされた。これらから、奄美の超高齢者の幸福感を紐解く理論的基礎が提示される。

**第 3 章は**、奄美における文化資本を活かした地域経営と社会経済システムの機能に光をあてる。それを解説するうえでキーワードとなる、地域経営や社会経済システム概念を捉え直し、奄美の長寿を実現している内部の諸要因を明らかにしている。特に、祭りや伝統行事を継承してきた奄美のシマ（集落）の伝統的共同体の機能に注目する意義、そして、都市コミュニティの崩壊の中で、伝統共同体のなかにあるつながりやきずなの今日的意義、祭りが継承されている長寿地域での地域経営の持つ意味、さらに、長寿・超高齢社会の進展の中で、奄美のシマ（集落）の健康長寿のまちづくりのモデルとしての可能性について言及している。

**第 2 部では**、翻弄され、抑圧された奄美の歴史やその成り行きを紐解き、現在の人々の寛容性ともいえる精神的大らかさの原点を明らかにしている。さらに、奄美の辿ってきた歴史から形成されているシマ（集落）の暮らしと伝統行事や習慣に密着し、超高齢者の幸福感の醸成に関わる文化資産について、民俗学的視点からも学びつつ、掘り下げている。そのなかから、奄美のシマに残る祭りや伝統行事などの文化資本の役割や結いの習慣などが、奄美の社会関係資本を豊かにし、実質所得だけでは測れない豊かさと幸福度を高める要因が明らかにされている。

**第4章は**、奄美の辿ってきた特異な歴史と人々の寛容性（大らかさ）に焦点を当てている。奄美の歴史を辿ることで、搾取された奄美の人々の精神世界が理解された。そして、祭りや伝統行事は過酷な労働を生きる力に変換し、人々のエネルギー源として機能していった歴史や、極貧のなか乏しい食料を分け合い、命をつないできた結いの基盤が明らかにされている。

**第5章は**、奄美のシマの豊かな伝統文化と超高齢者の役割をテーマにした実証編で、奄美における自然資本、文化資本、社会関係資本の実際について、フィールド調査やアンケート調査、インタビュー調査から明らかにしている。

奄美のシマ（集落）の生活空間には祈りの居住空間や自然を崇めるアニミズムの世界が残っている。暮らしの中に祈りの世界があり、カミ山、カミ道、行事の際の祭場や祈り場がある。これらは、厳しい自然の中で生きていくための生存の知恵として、今も継承されている。また伝統行事の豊年祭や八月踊りは、日常の「ケ」から非日常の「ハレ」の行事となって、1年のエネルギーを蓄積する場であり、なかでも超高齢者には儀式や技を伝える役割の場が用意されている。

さらに、年齢に関する伝統行事、年の祝いは奄美独特の行事があり、祭りや伝統行事は、シマの人々の共同行事として、お互いの無事と豊作に感謝する、楽しみの場として機能している。超高齢者はこのようななかで、さらに長生きを目指すエネルギーが醸成されることが明らかにされている。

**第6章は**、現在の奄美のコミュニティの「場」が、超高齢者の幸福感にどのような影響を与えているかを分析している。伝統行事や習慣、信仰を中心とした暮らしや、超高齢者を支援する奄美の集落や地域の取り組み、そして現代版の結いの機能の実際に注目し、奄美の「場」と「場所の意志」から超高齢者の主観的・客観的満足感の連関が明らかにされている。

加えて、集落の区長へのアンケート調査からは、奄美の集落の紐帯の強さ、伝統と習慣の継承の高さ、社会関係資本の豊かさ、高齢者評価の高さ、健康長寿者の多さが明らかにされている。カイ二乗検定からは、老人クラブの加入率の高さは集落の高齢者の活動の高さ、集落の紐帯の強さ、集落行事の多さ、集落の伝統行事の継承などと統計的に有意に関連することが明らかにされている。このことは、超高齢者の活動は、集落の紐帯の強さや伝統行事の継承に大きな力を発揮しているということである。

さらに、奄美のシマ（集落）には、現役世代からの年金や子どもや行政からの長寿祝

い金などを受け取りながら、一方で、超高齢者の持てる叡智や文化資本を次世代の安心や地域づくりに生かす社会経済システムが機能していた。このようなシマ（集落）の地域性と超高齢者の自律意識が相乗効果となって、長寿を実現する地域経営として機能していることが明らかにされている。

**第3部**は、3章構成で、超高齢者の老いと文化をテーマにし、超高齢者へのインタビュー調査やアンケート調査から構成されている。

**第7章**は、奄美の超高齢者の老年人的超越意識の量的調査について、高齢者との比較も加え、統計ソフト SPSS で分析したものである。暮らし向きや行動能力、心理適応、老い観、そして、老年人的超越については筆者の老年人的超越尺度を用いて実証した。その結果、超高齢者の高い生活満足感と高い地域愛着度などが明らかにされ、健康な超高齢者は100歳をめざしていることが浮かび上がってきた。

老年人的超越の因子分析からは、下位次元として、宇宙的超越、自我超越、執着の超越の3つの次元が明らかにされた。執着の超越は、北欧では見られなかったもので、日本特有の文化に起因するものと考えられる。これらの結果からは、ネガティブな超高齢者観を否定し、身体能力は衰えながらも老いと共存し、満足感の高い暮らしが実現している実態が明らかにされたのである。

**第8章**は、奄美の超高齢者の長寿と幸福な老いの語りについての質的調査の結果である。分析手法は、質的分析法の1つである M-GTA（修正版・グラウンデッド・セオリー・アプローチ）法を用いて行った。M-GTA 法は分析の最小単位 of 概念をつくり、概念をカテゴリー化してコアの概念を導くもので、その結果からは、老年人的超越の3層構造モデルが明らかにされた。最下部には人格形成基盤の次元、日々の営みの次元、そこから精神世界につながる次元である。中心部の日々の営みの次元には、「目標は100歳」というコアカテゴリーが導き出された。

さらに、超高齢者が到達していく精神世界の次元では、「目標は100歳」という長生きを楽しむ生と向かいあいながら、「老年人的超越」が形成されていく。老年人的超越の次元は、第7章の量的調査から明らかにされた3つの次元を追認するものであった。奄美の超高齢者の目標は100歳というポジティブな側面に起因するのは、社会関係資本が重層し、豊かな人間関係のみならず、自然とのつながりや文化を媒介とした自己の有用性がその要因であることが明らかにされた。

**第9章**は、与論島における在宅死と看取りの文化についての質的調査である。奄美は、

『文芸春秋』2014年5月号で全国の在宅医療充実度ランキングで第1にランクされている。その象徴的な島が与論島である。病院死が8割を超える日本において、入院できる病院（81床）がありながら、与論島は逆に自宅死が8割を超えている。その要因を分析している。

最終章では、以上の理論・実証研究から明らかにされた地域コミュニティにおける長寿と幸福な老いの課題と展望を示している。

## 6 本研究の到達点

### 6.1 文化資本を活かした地域経営モデルを提示

一つ目は、文化資本を活かした地域経営のモデルを提示したことである。超高齢者を包摂しながら持続可能なコミュニティを形成しているシマ（集落）のコミュニティ、さらには超高齢者の長寿と人間発達を支える長寿地域の地域経営ともいえる、文化資本を活かした地域経営の実態を明らかにした。加えて、地域での役割や信頼感などの「つながり」意識が、超高齢者の存在意義や潜在能力を高め、精神的次元にも安寧をもたらす効用となること。このことは、地域とのつながりのなかで老いることの重要性が再認識された。

また、長寿の地域要因を解読する試みは、これまでの長寿研究にはない視点であった。本研究から、幸福な老いを実現するうえで地域のコミュニティ環境づくりの重要性が理解される。加えて、地域での祭りの年中・伝統行事の継承や、地域での超高齢者の潜在能力を活用する有効性が明らかにされた。現代における結いや知識結いに焦点化すると、多世代の交流を目指した新たな地域再生と健康長寿のまちづくりにとって有用な視点がみえてくる。

### 6.2 経済資本と文化資本の再分配機能の解明

二つ目は、経済資本と文化資本の再分配機能を解明したことである。奄美の長寿を実現しているシステム構造は、経済資本の軸と教育・文化にかかわる軸からとらえることによって、文化資本と経済資本との関係が解明でき、文化資本の影響を受けて、経済資本にも変化が現れることが明らかにされた。

文化資本の軸として、超高齢者の人生体験から獲得された「目にみえない文化資本」から、祭りなどの文化的伝統が伝えられ、次（現役）世代はこれらの文化的伝統を創造

的に発展させる場が提供される。同時に、経済資本の軸から見ると、超高齢者がこのような機能を発揮しうる基礎は、国民年金制度や医療保険制度である。これらの制度によって超高齢者は衣食住、移動、交流などの機会を活かす経済力を得て文化の再分配システムを機能させる。文化の再分配システムは、現役世代の所得を生み出す基礎となり、さらに経済資本を生み出すという循環が生じる。

つまり奄美には、超高齢者層が地域コミュニティにおける文化を再生産する担い手となり、次世代との学びあい・育ちあいの中で文化資本が継承され、創造的に発展していく姿があった。地域コミュニティにおける超高齢者層の文化資本と経済資本の総合的考察を通じて、地域再生の展望を実証的に解明することができた。

### 6.3 都市と農村における社会保障システムの相互連関

三つ目は、都市と農村における社会保障システムの相互連関を明らかにしたことである。超高齢者がこのような機能を発揮しうる経済的な基礎としての社会保障制度、すなわち国民年金制度や医療保険制度である。年金など、現役世代からの超高齢者への所得の再分配が行われ、超高齢者にとっては少額であっても、衣食住、移動、交流などの機会を活かす経済力となるのである。

同時に、都市における人権や学習社会に向けての動きは、工場法などの成立を契機に社会権が確立に向かい、すべての市民を対象とする社会保障制度を生み出し、このシステムが農村部や地域コミュニティにも普及し、人権、学習権、生存権、営業権などを支える近代的システムとして定着した。都市高齢者の成果の上に、新たなシステムは全国・農村部にも広がり、地域コミュニティにおける高齢者の経済基盤の一つとなったのである。

本結果からは、地域コミュニティにおいて超高齢者層の文化資本と経済資本の相互連関・交流が明らかにされるとともに、今後は、都市と農村における社会保障システムとコミュニティの再生・持続的発展へのつながりが考察可能となったのである。

### 6.4 奄美の長寿多子化の要因の解明

四つ目は、奄美の長寿多子化の要因を解明したことである。奄美は、健康長寿者の多さと同時に、高い出生率をも実現している。その地域的・文化的要因を、経済資本に還元できない奄美のシマの豊かな資本に求め、自然・風土、伝統文化、習慣・信仰、結い・

知識結いなどのコミュニティ特性から解明することができた。

つまり、奄美の長寿多子化を実現している要因は、固有の伝統文化を内在するシマ(集落)の共同体コミュニティから育まれた、幸福感を醸成する伝統的心性ともいえる「大らかさ」である。奄美の人々のこのような幸福への価値観は、従来の経済学の「効用」を最大化して行動する物的資本の経済資本ではなく、奄美の固有価値を形成する自然資本、文化資本、社会関係資本の3つの資本から成り立っているということである。

このことが超高齢者の潜在能力を引き出し、長寿を尊び、「子どもは地域の宝」という価値観を形成する。近隣の支援環境のなかで、超高齢者にとっても老年的超越を形成する幸福な老いと長寿に導かれ、これらは、子育て中の母親にとっても安心して暮らせる環境となって、長寿多子化をもたらしている要因として明らかにされたのである。

## 7. 残された課題

一つ目に、本研究から明らかにされたのは、日本の近代化の過程で失った伝統的共同体が持っていた豊かな社会関係資本の重層性である。これら資本は長寿の時代を生きる今日の人々こそ、最も希求していることであるということである。今後、他地域でのコミュニティ再生に際し、重要な研究課題として浮かび上がってきたことである。

二つ目に、現在の年金や医療などの社会保障制度の中で、経済と健康の基盤を得た超高齢者は、自らが内在する文化資本を生かし現役世代の経済資本を活用しながら、生き生きとした老後を過ごす上での地域コミュニティの果たす役割の重要性である。

ここにおいては、祭りや伝統行事が地域コミュニティの結束の源であり、長寿を支援する地域経営としてどのように生かすという地域課題が浮かび上がってきたことである。

三番目に、さらに少子高齢化が進む日本では、健康長寿と出生率の向上は今後の大きな政策課題として横たわっている。しかし、本土からはるか離れた離島で、GDPの経済指標では低域にある奄美で長寿と子宝が実現している。このことに注目して、奄美の事例からそれぞれの地域が解決のための方策を考えていくという課題が浮かび上がってきたということである。

四つ目に、本研究が明らかにした結果は、長寿地域奄美の超高齢者という限定された地域・対象者であった。このことから、今後は同テーマで、それぞれの地域で実証を重ねていき、人生100年時代に対応する健康長寿と幸福な老いを全国的に実現していく



という研究課題が残されている。

## 8 おわりに

近年の健康長寿のまちづくりにおいて、健康寿命を伸ばすには個人のモチベーションだけでなく、社会との多様なつながり、とくに家族や地域における自分の存在意義が欠かせないことが指摘されるようになってきた。

人生 100 年時代を迎え、健康概念も変化している。これまでの「健康」か「病気」という 2 区分でなく、大多数の人は、“病気は持っているけれど病人ではない”「未病」の概念が提案されるようになってきた。

改めて、長寿・超高齢社会では、「未病」の人がより多く地域で暮らせるコミュニティの創造が重要となっている。奄美では改めて「未病」の概念を使うことなく、「未病」の人が多く活躍しているコミュニティである。都市部で気づき始めた健康長寿のまちづくりにおいても、奄美の事例は先進地として参考になろう。

加えて、地域消滅の危機感が高まる中、奄美の事例が示すことは、祭りや人々のつながり、きずなが続く限り地域は消滅しないということである。その要には、地域の財や文化資産を体化する超高齢者と、次（現役）世代とが学びあい・育ちあう場の重要性がある。文化創生、地域創生の健康長寿のまちづくりは、そのような場を通じてこそ実現するであろう。

最後に、都市と農村、伝統の技や文化との共生については、研究が開始されたばかりであるが、今後の日本における地域コミュニティの研究を拓くうえで重要な視点となる。今後は、農村の地域コミュニティの経験から学びつつ、都市における地域コミュニティ再生に向けて、都市部や現役世代を対象とした同様の調査を行うことが課題となっている。

健康長寿と幸福な老いに向けて、地域経営の視点からコミュニティ研究が一層発展し、実証する方向性と課題を確認して、本論文の展望としたい。そのことによって、ポジティブな長寿・超高齢社会への未来が期待されてくる。

## 目次

序章 長寿・超高齢社会における人間発達と地域コミュニティ・アプローチ	- 1-
1. はじめに	- 1-
1.1 問題の所在	- 1-
1.2 研究の目的	- 4-
2. 研究領域と分析枠組み	- 4-
2.1 研究領域	- 4-
2.2 分析枠組み	- 6-
2.2.1 研究対象者の選定とそのねらい	- 6-
2.2.2 研究対象地の選定とそのねらい	- 6-
3. 本研究の視角—人間発達と地域コミュニティ・アプローチ	- 7-
3.1 人間発達へのアプローチ	- 7-
3.1.1 ジェロントロジー（老年学）からネオ・ジェロントロジーへの転換	- 7-
3.1.2 マクロな超高齢社会論からミクロな長寿・超高齢社会論への転換	- 8-
3.1.3 超高齢者の潜在能力への視座	- 9-
3.1.4 超高齢者の幸福感への視座	- 10-
3.2 地域コミュニティへのアプローチ	- 11-
3.2.1 老いの価値への社会経済的視座	- 11-
3.2.2 文化資本と経済資本の再分配システムへの視座	- 12-
3.2.3 文化資本を生かした長寿地域の地域経営	- 13-
3.2.4 健康長寿のまちづくりへの視座	- 14-
3.2.5 奄美の伝統と協働のダイナミズムに注目して	- 15-
4. 実証方法	- 15-
4.1 調査方法	- 15-
4.2 分析方法	- 16-
4.3 実証領域	- 16-
5. 先行研究の検討と本研究の新規性	- 16-
5.1 長寿の地域要因の実証	- 16-
5.2 長寿の「地域経営」モデルの提示	- 16-
5.3 人間発達と潜在能力アプローチの有用性	- 17-
5.4 経済資本と文化資本の相互関連システムの解明	- 17-
5.5 奄美の長寿多子化傾向の解読	- 18-
6. 本研究の構成	- 18-
第1部 超高齢期の人間発達と地域コミュニティ	- 21-

<b>第1章 超高齢期の機能と適応</b>	<b>-22-</b>
1. はじめに	-22-
2. 加齢と人格発達	-23-
2.1 心の加齢	-23-
2.2 SOC（補償を伴う選択的最適化）理論	-24-
2.3 超高齢期の機能特性	-25-
2.4 超高齢期の認知機能	-26-
2.5 超高齢期の人格発達	-26-
2.6 超高齢期の幸福感	-27-
3. 生涯発達からとらえた超高齢期	-28-
3.1 生涯発達心理学	-28-
3.2 ライフサイクル論	-29-
3.3 第9段階（超高齢期）の発達課題	-30-
3.4 超高齢期のサクセスフル・エイジング	-31-
4. 超高齢期における老いと死の受容	-32-
4.1 経験からくる老いの発達	-32-
4.2 超高齢期における老いの受容	-33-
4.3 超高齢期における死の受容	-33-
4.4 超高齢期のスピリチュアリティと幸福感	-34-
5. おわりに	-36-
<b>第2章 超高齢期の人間発達—老年的超越理論</b>	<b>-37-</b>
1. はじめに	-37-
1.1 サクセスフル・エイジングの理論背景	-37-
1.2 トーンスタムの異議申し立て	-38-
2. 老年的超越理論の理論枠組み	-38-
2.1 加齢と老年的超越	-38-
2.2 超越次元	-39-
2.2.1 「宇宙的なつながり」の次元	-39-
2.2.2 「自己」次元	-40-
2.2.3 「社会と個人の関係性」の次元	-40-
3. 老年的超越理論の実証	-40-
3.1 トーンスタムの実証研究	-40-
3.1.1 調査の枠組み	-40-
3.1.2 調査尺度	-41-
3.1.3 結果	-42-

3.2 老年的超越とスピリチュアリティの関連	-42-
4. 超高齢期における老年的超越	-43-
4.1 第9段階（超高齢期）と老年的超越	-43-
4.2 エリクソン仮説の実証	-44-
4.3 老年的超越：超高齢期を測る理論的道具	-44-
4.4 老年的超越：ケアの場での看護スタッフの見方	-44-
4.5 老年的超越の実証上の課題	-47-
5. おわりに	-48-
<b>第3章 奄美にみる長寿の地域経営と社会経済システム</b>	<b>-50-</b>
1. はじめに	-50-
1.1 「奄美」のコミュニティへのまなざし	-50-
1.2 本章の目的	-50-
1.3 「文化資本を活かした地域経営」とは何か	-51-
2. 奄美のシマ（集落）にみる「社会経済システム」	-52-
2.1 社会経済システムへの新たな視座	-52-
2.2 奄美のシマ（集落）の資本と超高齢者	-52-
2.3 奄美のシマ（集落）に機能する社会保障システム	-53-
2.4 社会保障システムにおける都市と農村の相互連関	-54-
2.4.1 社会保障制度の都市から農村への波及	-54-
2.4.2 農村から学ぶ都市のコミュニティの再生	-55-
3. 長寿地域の共同体コミュニティ	-55-
3.1 奄美のシマ（集落）における文化資本を活かした地域経営	-55-
3.2 長寿地域の共同体機能と超高齢者の役割	-57-
3.3 長寿時代における共同体への関心	-57-
4. コミュニティ・集落・共同体の再考	-58-
4.1 コミュニティの概念	-58-
4.2 日本の集落共同体の成立史	-59-
4.3 日本の集落共同体の特徴	-60-
4.4 日本の風土と集落共同体	-61-
5. 共同体への新たな視座と再評価	-61-
5.1 共同体の捉えなおし	-61-
5.2 都会の荒廃と高齢者の地位の低下	-62-
5.3 共同体の評価：否定から肯定へ	-63-
5.4 協働の持つ力	-64-
6. 地域創生と健康長寿のまちづくり	-64-

6.1 地域創生から地域経営へ	-64-
6.2 奄美における地域経営、健康経営の可能性	-65-
7. おわりに；長寿・超高齢社会におけるコミュニティと地域経営への視座	-67-
<b>第2部 奄美群島の歴史・文化とシマ（集落）のコミュニティ</b>	<b>-68-</b>
<b>第4章 奄美群島の歴史と人々の精神性</b>	<b>-69-</b>
1. はじめに	-69-
2. 奄美の地域特性	-69-
2.1 自然環境・人口	-69-
2.1.1 位置	-69-
2.1.2 人口・世帯数	-70-
2.1.3 地形と気候	-70-
2.1.4 自然環境	-70-
2.1.5 自然の脅威	-71-
2.1.6 産業と就業	-71-
2.1.7 人々の暮らし	-72-
2.1.8 人々の団結	-72-
2.2 奄美の島の構成	-73-
2.2.1 奄美大島	-73-
2.2.2 喜界島	-73-
2.2.3 徳之島	-73-
2.2.4 沖永良部島	-73-
2.2.5 与論島	-74-
2.3 奄美の経済	-74-
2.4 シマ（集落）の暮らしと伝統行事	-75-
2.5 精神文化・習慣	-76-
2.6 長寿・子宝	-76-
2.6.1 長寿要因	-77-
2.6.2 子宝要因	-78-
2.6.3 「長寿・子宝プロジェクト」の推進	-78-
2.6.4 課題は男性の平均寿命	-79-
3. 奄美の歴史	-79-
3.1 歴史の持つ意味	-79-
3.2 奄美へのまなざし：島尾敏雄の視点	-80-
3.3 奄美の近世までの精神史	-81-
3.3.1 奄美世（アマンユ）	-82-

3.3.2	按司世 (アジユ)	-82-
3.3.3	那覇世 (ナハユ)	-83-
3.3.4	大和世 (ヤマトユ)	-83-
3.3.5	砂糖島としての植民地	-83-
3.4	近代の精神史	-84-
3.4.1	「黒糖地獄」とヤンチュ (家人)	-84-
3.4.2	奄美と西郷隆盛	-85-
3.4.3	奄美の人々の抵抗史	-86-
3.4.4	母間騒動にみる受け継がれるアイデンティティ	-86-
3.5	明治の精神史	-87-
3.5.1	明治以降ヤンチュ (家人) 解放運動	-87-
3.5.2	黒糖勝手 (自由) 売買運動	-87-
3.4.3	独立経済とソテツ地獄	-88-
3.6	奄美の近世と人々の抵抗	-89-
3.7	占領下の精神史	-90-
3.7.1	復帰運動に示した人々の団結	-90-
3.7.2	奄美ルネッサンス	-92-
3.7.3	復帰下での新聞社の創設	-92-
3.7.4	復帰運動に貢献した地域婦人会	-92-
3.7.5	占領下の教育	-93-
3.8	復帰後・戦後の暮らし	-94-
3.8.1	奄振：奄美振興措置法と奄美の人々	-94-
3.8.2	終戦後の暮らしのエネルギー	-94-
4.	奄美の「一重一瓶」習慣に見る独立・対等	-95-
4.1	「一重一瓶」習慣	-95-
4.2	世帯構成に見る独立・対等	-96-
4.3	家意識の強弱	-97-
4.4	暮らしの中の祈り	-97-
5.	おわりに	-98-
5.1	歴史から培われたアイデンティティ	-98-
5.2	歴史からつながる精神性と生活文化	-99-
<b>第5章 シマ (集落) の豊かな伝統文化と超高齢者</b>		<b>-100-</b>
1.	はじめに	-100-
1.1	奄美のシマ (集落) に注目する	-100-
1.2	奄美のシマの資本 (自然・文化・社会関係) を幸福研究に生かす	-100-

2. 奄美のシマ（集落）に残る祈りと生活空間	-101-
2.1 奄美のシマ（集落）の形状	-101-
2.2 奄美のシマ(集落)と暮らし	-103-
2.3 人々の精神性	-104-
2.4 暮らしの祈り	-104-
2.5 ネリヤ・カナヤと聖なる水	-105-
2.6 ハレとケ	-105-
2.7 奄美のノロとユタ	-106-
2.8 超高齢者とスピリチュアリティ	-107-
3. シマ（集落）における祭りや年中行事の実際	-107-
3.1 シマ（集落）の文化資本：伝統行事の実際	-108-
3.2 年齢に関する伝統行事	-108-
3.2.1 子どもの成長を祝う「七草」の行事	-108-
3.2.2 シマ（集落）の成人式	-109-
3.2.3 年の祝い	-110-
3.3 旧暦8月の祖霊祭	-112-
3.3.1 アラセツ行事（秋名集落）	-112-
3.3.2 八月踊り	-115-
3.4 旧暦9月の大和村の豊年祭	-116-
4. 伝統行事を支える人々	-117-
4.1 祭りのこと	-117-
4.2 長寿のこと	-119-
4.3 海の神様と大工の神様への祈り	-120-
4.4 若い頃の機織りの話	-121-
4.5 Uさんが語った民話	-121-
5. おわりに	-123-
5.1 奄美のシマ（集落）のコミュニティ特性	-123-
5.2 奄美の伝統行事と超高齢者の暮らし	-124-
5.3 目にみえる文化資本、目にみえない文化資本	-124-
<b>第6章 長寿を支えるシマの現代版結いのかたち</b>	<b>-126-</b>
1. はじめに	-126-
1.1 結いの発生史	-126-
1.2 知識結いの発生史	-127-
2. 奄美大島の風土とシマ（集落）の現在版結い	-128-
2.1 奄美の風土・大らかさ	-128-

2.2	宇検村・阿室の集落の語り	-129-
2.3	笠利の八月踊りの語り	-129-
2.4	自宅で島唄サロンを主宰する語り	-130-
2.5	高齢者／超高齢者を支える結い	-130-
2.6	長寿を支える結いの風土	-131-
2.7	子どもを支える結いの風土	-132-
2.8	郷友会による知識結いの実際	-133-
3.	徳之島における結いと超高齢者の役割	-134-
3.1	シマロ（方言）の見直しと超高齢者の活躍	-134-
3.2	夏目踊りにみるシマ（集落）の利他性	-135-
3.3	「浜踊り」の伝承を通じた多世代交流	-137-
4.	区長を対象としたアンケート調査からみるシマ（集落）の紐帯と超高齢者の役割	-138-
4.1	奄美のシマ（集落）の紐帯の強さ	-138-
4.2	集落の共同・年中・伝統行事の多さ	-139-
4.3	伝統と習慣の継承の強さ	-140-
4.4	老人クラブ加入率の高さ	-140-
4.5	社会関係資本の豊かさ	-141-
4.6	集落高齢者への評価の高さ	-141-
4.7	長寿の地域要因：経済資本ではない奄美の豊かさ	-142-
4.8	高齢者と関連する項目の統計的検定	-143-
5.	シマ（集落）のコミュニティを支える行政・報道機関	-144-
5.1	地元新聞社の役割	-144-
5.2	地域メディアの支援	-144-
5.3	シマ（集落）社会を結ぶ自治体広報紙	-145-
5.4	長寿を支援する行政	-145-
6.	おわりに	-146-
6.1	シマの蓄積された叡智	-146-
6.2	超高齢者の自主性・自立性	-147-
6.3	奄美のシマ（集落）の紐帯と超高齢者の役割	-147-
	第2部のまとめ	-148-
	第3部 超高齢者の老いと文化	-150-
	<b>第7章 奄美・超高齢者の老いと「老年的超越」</b>	<b>-151-</b>
1.	はじめに	-151-
2.	研究の目的と枠組み	-151-



2.1	目的	-151-
2.2	枠組み	-152-
2.2.1	データ収集と対象者	-152-
2.2.2	質問紙の構成及び分析データ	-152-
2.3	倫理的配慮	-153-
2.4	データの内容	-153-
2.4.1	基本属性	-153-
2.4.2	行動能力	-153-
2.4.3	心理的適応	-153-
2.4.4	老い観	-154-
2.5	老年的超越尺度項目	-154-
3.	超高齢者を対象とした調査結果	-155-
3.1	対象者の基本属性	-155-
3.2	行動能力の状況	-156-
3.2.1	日常の行動能力	-156-
3.2.2	超高齢者の1週間の仕事	-156-
3.3	心理的適応状況	-156-
3.3.1	生活満足度	-156-
3.3.2	地域愛着度	-157-
3.3.3	長生き観	-157-
3.3.4	現在の心境	-157-
3.3.5	日中の楽しみごと	-158-
3.4	老い観	-158-
3.5	老年的超越傾向	-159-
3.5.1	老年的超越の認識状況	-159-
3.5.2	探索的因子分析	-160-
3.5.3	重回帰分析	-161-
3.6	超高齢者調査からの考察	-161-
3.6.1	奄美超高齢者のポジティブな老いの意識	-161-
3.6.2	長生きは家族や周囲への信頼感	-162-
3.6.3	楽しみごとを支える地域要因	-162-
3.6.4	超高齢期の老年的超越傾向	-163-
4.	高齢者（ライフサイクル第8段階）と超高齢者（ライフサイクル第9段階）を比較した調査結果	-164-
4.1	対象者の基本属性	-164-

4.2	心理的適応状況	-165-
4.3	現在の心境属性	-165-
4.4	日中の楽しみごと	-166-
4.5	時間展望	-166-
4.6	老い観	-167-
4.7	老年的超越項目	-167-
4.7.1	クロス分析とカイ二乗検定	-167-
4.7.2	探索的因子分析	-168-
4.7.3	因子の命名	-168-
4.7.4	下位尺度相関と $t$ 検定	-169-
4.8	調査結果の考察	-170-
5.	まとめ	-172-
6.	おわりに：本研究の意義と今後の課題	-173-
<b>第8章 奄美・超高齢者の語り（インタビュー）にみる幸福な老いと老年的超越の階層モデル</b>		<b>-174-</b>
1.	はじめに	-174-
1.1	調査地域と対象者	-174-
1.2	倫理的配慮	-174-
2.	研究方法	-174-
2.1	調査方法	-174-
2.2	分析方法	-175-
2.3	分析プロセス	-176-
2.4	概念の生成過程	-177-
3.	結果	-179-
3.1	日々の営みの次元	-181-
3.1.1	確立した生活スタイル	-181-
3.1.2	ポジティブな人生観	-182-
3.1.3	社会的行為	-183-
3.1.4	ネガティブな語り	-185-
3.2	形成基盤の次元	-186-
3.2.1	環境因子	-186-
3.2.2	形成因子	-187-
3.3	精神世界の次元：老年的超越	-188-
3.3.1	自我超越	-188-
3.3.2	執着の超越	-188-

3.3.3 宇宙的超越	-188-
4. 考察	-189-
4.1 先行研究との関係	-190-
4.1.1 ネガティブな超高齢者像を否定する実態	-190-
4.1.2 ライフサイクル第9段階の確認	-191-
4.1.3 超高齢期に対する評価	-191-
4.1.4 超高齢期と時間展望	-191-
4.1.5 北欧の実証研究の違い	-192-
5. おわりに	-192-
<b>第9章 奄美・与論島における看取りの文化</b>	<b>-194-</b>
1. はじめに	-194-
1.1 魂の島：与論島	-194-
1.2 問題の所在	-194-
2. 日本における看取りの現状	-195-
2.1 死の場所の推移	-195-
2.2 病院死の増加と死生観の変容	-196-
2.3 在宅死を阻止する要因	-197-
3. 与論島における看取りの現状	-198-
3.1 与論島の概要	-198-
3.2 在宅死の継承と与論神道	-198-
3.2.1 与論島における死	-198-
3.2.2 与論神道	-199-
3.2.3 聞き取り事例	-200-
4. 与論島での在宅死の継承要因	-200-
4.1 土葬・洗骨の葬法の堅持	-201-
4.2 相続と家制度	-202-
4.3 家制度についての聞き取り事例	-202-
4.4 医療機関の支援	-202-
4.5 移動しやすい島の規模	-203-
5. 考察	-203-
5.1 看取り文化継承の要因	-203-
5.2 継承システムの機能	-204-
6. おわりに	-205-
<b>終章 地域コミュニティにおける長寿と幸福な老いの課題と展望</b>	<b>-206-</b>
1. はじめに	-206-

2. 本研究の構成	-207-
3.明らかにされたことは何か	-211-
3.1 長寿地域の文化資本を活かした地域経営の実際	-211-
3.2 健康長寿の経済システム構造：経済資本と文化資本の再分配	-211-
3.3 都市と農村における社会保障システムの相互連関への考察	-212-
3.4 奄美の長寿多子化の要因の解明	-212-
4. 全体的考察	-212-
5. 課題と展望	-213-
5.1 残された課題	-213-
5.2 展望	-214-
あとがき	-216-
参考文献	

## 序章 長寿・超高齢社会における人間発達と地域コミュニティ・アップ ローチ

### 1 はじめに

#### 1.1 問題の所在

多くの方が長生きを享受できる大衆長寿の時代を迎えている。平均寿命は年々伸長し、男性 81.09 歳、女性 87.26 歳と男女ともに 81 歳を超えている（2018）。戦後 70 年間で、男女ともに 30 歳以上の伸長である<sup>1</sup>。100 歳以上の百寿者は、調査が開始された 1963（昭和 38）年の 153 人から 67,824 人（2017 年）と、47 年間連続して増加している<sup>2</sup>。国内・世界最高齢長寿者は 117 歳まで存命した田島ナビさん（奄美・喜界島）である<sup>3</sup>。百寿者の増加につれ長寿研究の対象者も、これまでの 100 歳以上から 105 歳以上の超百寿者へ、そしてさらに 110 歳以上のスーパーセンテナリアンへ移行している<sup>4</sup>。まさしく 21 世紀初頭において、人類が希求してきた長寿は実現しつつある。

一方で、今日の社会では長寿は「長すぎる老い」として、医療費の上昇による社会活動（国民皆保険、後期高齢者医療制度）などに対する負担として国家財政赤字化の主要な原因とされる傾向にある。しかも深刻な財政赤字化については、累進課税システムの後退や大災害による公共工事の拡大、新冷戦下における防衛費の増加、日銀による国債引受けの拡大など多くの要因があるにもかかわらず、高齢化による医療費・介護費用の増加が、国家財政赤字の最大の要因としてクローズアップされる。そこに、少子化による人口減少への危機感が重なってくる<sup>5</sup>。

少子化の要因は、①晩婚化、②未婚率の上昇、③平均出生児数の低下<sup>6</sup>であり、高齢化の要因は、死亡率の低下による 65 歳以上人口の増加、②少子化の進行による若年人口の減少が主なものである<sup>7</sup>。それらは、①社会保障給付（医療、介護、年金）の増加による社会全体の負担増、②労働力減少に伴う経済成長率の減速、③社会全体の活力低下、④若者世代の経済負担の増加など、次（現役）世代への社会経済的負担の増大として理解され、世代間対立の図式が固定化することになる。

この背景には、効率・生産性を優先させる経済成長至上主義のもとで若さが賞賛され、高齢者は非生産的で社会のお荷物、国家財政や経済発展にとってブレーキという

<sup>1</sup> 終戦直後（1947）の平均寿命は男性 50.06 歳、女性 53.96 歳。厚生労働省（2018）「Press Release 27 年日本人の平均寿命」（平成 30 年 7 月 20 日付）。

<sup>2</sup> 厚生労働省（2017）「Press Release 百歳高齢者の対象者は 32,097 人」では、新たに 32,097 人が仲間入りし、100 歳以上は合計 67,824 人である（2017/9/15 閲覧）。

<sup>3</sup> 田島さんは 2018 年 4 月 21 日死去のため、現在は田中力子さん 116 歳（福岡市）である（2019/4/2 閲覧）。

<sup>4</sup> 新井康通・廣瀬信義（2017）「これからの百寿者研究：スーパーセンテナリアン研究」『老年社会科学』39（1）、32-37 頁

<sup>5</sup> Google で検索すると少子高齢化は 9,300,00 件、人口減少は 4,100,000 件がヒットする（2017/9/5 閲覧）。

<sup>6</sup> 内閣府（2004）『平成 16 年版少子化社会白書』。

<sup>7</sup> 内閣府（2017）『平成 29 年版高齢社会白書』。

視点がある<sup>8</sup>。そのため、高齢者は一様に非生産的・社会的負担として統計的に把握され、十把一絡げに量として把握されてきた。しかし、このようなマクロ的アプローチでは、老いることの価値や高齢者の幸福感、生活の質を研究対象とすることはできない。

老いや高齢者の生活の質に注目すれば、加齢は一様に衰退現象ではない。内閣府が毎年表彰しているエイジレス・ライフ実践事例<sup>9</sup>では、年齢にとらわれず新たなことに挑戦する超高齢者（85歳以上：oldest old）や百寿者（100歳以上：centenarian）の方々が、現役で仕事や趣味に活躍する姿が紹介されている。歳を重ねて、さらに潜在能力を開花させて活躍するスーパー老人の存在もある<sup>10</sup>。したがって、高齢者の叡智や潜在能力、生き方などが周囲の人々に与える影響や、長生きを幸せと感じる要因や地域づくりに注視した議論も必要である。

長寿・超高齢社会の進展においては、マクロ的な方法だけでなく、高齢期／超高齢期の幸福感に焦点を当てた文化生活や役割、地域との関わりなど、ミクロなレベルでの研究も必要となっている。

世界の長寿地域（ブルーゾーン）で知られるバルバギア地方（イタリア）、沖縄（日本）、イカリア島（ギリシャ）などでは、長寿者は共通して、体を動かし、健康的な食生活で、孤独ではなく、生きがいがあるなど、満足度の高い生活を送っている実態が明らかにされている<sup>11</sup>。

また、近年では、老いを生涯発達過程の一部として捉えることにより、潜在能力や叡智、歳を重ねる幸福感などが明らかにされている。加齢に伴って人は内省的なものごとを考え、利他的な傾向になることも注目されている<sup>12</sup>。自己／他者の幸福をどうすれば実現できるか、潜在的な力量をどのように発揮して現実の社会にどう貢献するかなど、損得勘定では測れない多様な思考性を携えていく傾向にある。

さらに、経済生活を基礎とした高齢者／超高齢者の文化生活へと研究領域を拡大すると、各地における地域形成の歴史的背景も重要な意味を帯びてくる。その際の生活の質において注目すべきは、全国規模での都市化の進展と労働基準法や社会保障制度の確立、それによる自由時間の増大や学習機会の拡大である。

このような全国的傾向は、地域における伝統的コミュニティにも波及してきた。と

<sup>8</sup> 例えば、「膨らむ医療費次世代にツケ」（日本経済新聞 2017/2/12 付朝刊）。日経 BP ビジヨナリー研究所（2018）「医療経済の視点から探る増大必死の”高齢者医療負担“への処方箋」。

<sup>9</sup> 内閣府（2017）『エイジレス・ライフ実践事例』（2018/7/10 閲覧）。

<sup>10</sup> 柴田博（2016）『スーパー老人のヒミツは肉だけではない』社会保障出版社。スーパー老人の定義は、「そこそこ長生きで、生涯現役を目指し、世のため人のために、そして自分のために一生懸命生きている人」としている（17頁）。

<sup>11</sup> ダン・ピュイトナー（2010）『ブルーゾーン：世界の100歳人（センテナリアン）に学ぶ健康と長寿のルール』（千名紀訳）ディスカヴァー・トゥエンティワン。

<sup>12</sup> Tornstam, L（2017）『老年の超越：歳を重ねる幸福感の世界』（富澤公子・タカハシマサミ訳）晃洋書房、（Gerotranscendence ; A Developmental Theory of positive Aging, Springer, 2005）。

りわけ、社会保障制度は地域における人権の基礎となり、個人の自立を可能とし、封建制や家制度の呪縛など共同体の負の遺産を克服して、市民の自立と共同のバランスを確立させてきた。この中で、共同体のもつ文化や技の継承による地域の創造的発展の可能性が拡充していくことになった。

なかでも、祭りや伝統行事が継承されている地域では、高齢者／超高齢者は、国民健康保険・年金制度による健康と少額ながらの現金収入を生かしつつ、祭りや儀式を次の世代に引き継ぐ役割を担い、そのことが自身の存在意義と自立生活を支え、健康長寿の源となっている<sup>13</sup>。

一方で、これまでの長寿研究では、主に医学・保健・衛生サイドから遺伝子や食文化、ライフスタイルなど、個々人が受け取る給付や個々人の生活習慣に着目されてきた<sup>14</sup>。しかし近年、遺伝要因よりもライフスタイルなどの環境要因の重要性が明らかにされてきている<sup>15</sup>。その反面、長寿者の暮らしのベースにある地域のコミュニティ特性と健康長寿との関連については十分な議論はされていない<sup>16</sup>。

しかし、健康長寿者の多い長寿地域の自然や文化、祭りや伝統行事、相互扶助、人々のつながりなどのコミュニティ特性に注目すると、個人と地域コミュニティのバランスによって健康長寿と幸福な老いを実現していることが理解される<sup>17</sup>。健康長寿に寄与するコミュニティの役割や健康長寿を支える地域経営ともいえる、地域システムの存在に注目した研究も必要となっている。

これからますます進展する長寿・超高齢社会は、少子高齢化の深刻化として危惧される側面も無視できない。しかし同時に、健康長寿者のもつ老いの価値に光を当て、現役世代と共に学びあい・育ちあいながら、次世代と共生し、人生100年時代の長寿生活と幸せな老いを実現していくことが地域の課題となってくる。

このような地域コミュニティの持続的な発展に向けた新たなシステムのモデルが、奄美には現実に存在している。そのような奄美のシステムをモデルとしながら、必要な変更を加えて、各地において実現する道を拓くことこそ、喫緊の国民的課題となっている。

## 1.2 研究の目的

従来、加齢は、身体機能の衰退や要介護リスク、認知症リスクの高まりとして、ネ

<sup>13</sup> 富澤公子・Masami Takahashi (2014)「健康長寿におけるコミュニティの役割；奄美群島の幸福な老い」、『ユニバーサル財団 豊かな高齢社会の探求』、1-15 頁。

<sup>14</sup> 廣瀬信義・鈴木信 (1999)「百寿者研究の現状と展望」『日本老年医学会雑誌』36 (4)、219-228 頁。

<sup>15</sup> 白澤卓二 (2010)「老化学説と老化制御」『日本老年医学雑誌』478 (1)、24-27 頁。

<sup>16</sup> 杉村和彦 (2007)「健康長寿研究の地域論的展開」、『福井県立大学論集』、29、39-55 頁。

<sup>17</sup> 富澤公子 (2018b)「少子高齢化社会から長寿多子化社会へ；長寿で子宝の島奄美群島から発信する健康長寿と幸福な老いの実現」『経済科学通信』No.145、53-59 頁。

ガティブにとらえる傾向がみられた。この傾向は、次世代における医療費などの社会保険、租税負担の増大に注目する結果となり、世代間の利害対立を不可避的なものとして固定化する。そのような通説に対峙するのが、本研究である。

本研究は、長寿時代を背景に人口の増大傾向にある 85 歳以上の超高齢者を対象として取り上げる。老いと関係する経験や叡智、超越等の潜在能力を持続・創造する主体として彼ら／彼女らに光をあて、それらを形成・発展させる世代間の共生を実現している長寿地域の地域経営やそこに機能する社会経済システムを明らかにする。

その要をなすものとして、長寿地域である奄美の集落（以下、シマ）のコミュニティ特性に注目し、老年学や心理学、社会学、経済学、経営学、民俗学や文化経済学などの学際的手法を用いて考究する。

## 2 研究領域と分析枠組み

### 2.1 研究領域

本研究は、4 つの研究領域から構成される。一つ目に、超高齢者の人間発達の現場として、健康長寿者の多い奄美のシマのコミュニティに焦点を当てる。そこにおいて、祭りや伝統行事、習慣などの（無形の）文化資本を活かし、長寿を実現している地域経営と社会経済システムを明らかにする。そのために、従来の社会経済的な研究枠組みを超えて、超高齢者を取り巻くシマの人々、居住空間、一人ひとりの行動や意識、伝統文化や習慣などを調査対象として、質的・量的統計処理も行う。これらの実証を通じ、超高齢者は、経験や生活のノウハウ、潜在能力を発揮し（無形の）文化資本を体化した存在として、家庭や地域に貢献する社会的役割を担っていることを明らかにする。

二つ目に、超高齢者の精神的次元の力量ともいえる老年的超越傾向に注目する。超高齢者は、心理学や社会学の研究成果からも、また、文化経済学における産業と生活を担う文化資本という概念からも、「精神的資産」として理解される。つまり、超越という心理学の概念からは、若い頃の産業と生活における労働の苦しみや歓びという体験を経たのちに身につけた心の落ち着きとも理解できる。このように、生活や仕事の知恵、熟達した技などを含む「精神的資産」として把握できる。このような理解は、超高齢者の生活習慣や超越の心理をそのものとして聞き取るだけでなく、地域という場における対話のなかで、「語られる人生」のなりたち、おいたちを複数以上調査して、共通のものを文脈的価値として把握してこそ可能となる<sup>18</sup>。

三つ目に、虚弱化する身体に適応しながら利他性への移行や世代性が高まっていく超高齢者の幸福感の醸成に注目する。幸福については各国などの幸福度指標が作成さ

<sup>18</sup> 富澤公子（2009b）「奄美群島超高齢者の日常からみる『老年的超越』形成意識」、『老年社会科学』、30、477-488頁。他、超高齢者へのインタビュー調査から解読されている。



れ、国際比較が可能となる時代となった<sup>19</sup>。厚生経済学においても、従来の効用理論を基礎とするものから幸福理論（well-being の達成）への発展を遂げ、人間の幸福を幸福感だけでなく幸福感を生み出す客観的基礎も研究されてきた。幸福の客観的基礎には心や知恵の問題だけでなく、仕事を通じての協働による学びあい、育ちあいも幸福への欲求として把握できる。その過程で互いの人格を尊重しあうという信頼関係にあることが理解されるのである<sup>20</sup>。

超高齢者は長年の経験から、協働することによって互いの文化資本を充実させる構想力を育てて、最適なエネルギーの活用によって最大の幸福を実現しうることを認識している。超高齢者は、それらは幸福への歩みとして自覚しており、若い頃の厳しい仕事や生活と比較して現在を生きている<sup>21</sup>。

このことは、センの次の指摘とも響き合い、超高齢期の幸福感は現役世代の幸福とは質的に異なっていることが見えてくる。

「自らの幸福とは：（超高齢者の場合は）潜在能力を開花することである。自らの欲求とは：（超高齢者の場合は）近隣と共に生きて共に励ましあい高まりあうことである。自らの厚生に関する自己の見解とは：（超高齢者の場合は）若い頃と比較しての今の幸福という認識である。自分の動機とは：（超高齢者の場合は）隣人を大事にして次世代を育てることである。選択行動における自己の最大化対象とは：（超高齢者の場合は）若い頃と比較して、今を積極的に選択し幸福感を最大化することである」<sup>22</sup>。

四つ目に、人と人とのつながりのなかで高まる人間発達と生活の質に注目する。つながりやきずなという社会関係資本<sup>23</sup>の概念は、単なる人間同士の信頼関係というよりも、仕事や生活上の「困ったときはお互い様」という協働と関わる信頼関係であり、「乏しいものを分かち合う」という利他の精神が公正な分配に係わる幸福感を醸成し、信頼関係を深めることがわかる。

アマルティア・センらは人間発達の視点から、国際的に比較できる生活の質の指標（平均余命や識字率など）を作っている<sup>24</sup>。しかし、地域で、一人ひとりの人間発達の現場で、人と人とのつながりやコミュニティへの参画、役割などの具体的な人間発達に踏み込んだ生活の質までは議論されていない。本稿では、超高齢者の人間発達と

<sup>19</sup> アマルティア・センの人間開発指標（HDI—Human Development Index）は、厚生（ウェルフェア）の考え方としてインカム（所得）・アプローチからケイパビリティ（潜在能力）アプローチへの転換を打ち出し、国連開発計画（UNDP）が実施されている。

外務省 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000281386.pdf>（2018/6/3 閲覧）。

<sup>20</sup> 池上惇（2017）『文化資本入門』、京都大学学術出版会。

<sup>21</sup> 富澤公子（2009a）「ライフサイクル第9段階の適応としての「老年的超越」；奄美群島超高齢者の実態調査からの考察」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』2、327-335頁。

<sup>22</sup> アマルティア・セン（1988）『福祉の経済学』「合理的馬鹿」の批判、14頁。

<sup>23</sup> 社会関係資本：ソーシャルキャピタルは、社会の地域における人々の信頼関係やむすびつきを表す概念。

<sup>24</sup> ステイグリッツ、ジョセフ・E・ら（2012）『暮らしの質を測る；経済成長率を超える幸福度指標の提案』福島清彦訳、一般社団法人金融財政事情研究会。

生活の質を高める奄美のシマの要因を分析する。

これらの分析枠組みに立脚し、地域コミュニティという視点から教育や文化を含む身近なデータを積み上げる。このような方法で全体像を把握する方法は、従来の経済資本に限定された大量データを集めるマクロ的な議論よりも、長寿・超高齢社会において隠されているポジティブな事実を発見しうる研究方法ではないかと考える。

## 2.2 分析枠組み

### 2.2.1 研究対象者の選定とそのねらい

本研究の対象者は超高齢者である。これまでの通説では、超高齢期は長寿ゆえの脆弱さが顕著な時期として、サクセスフル・エイジング（幸福な老い）には否定的でさえある<sup>25</sup>。しかし本研究ではこれまでの長寿地域での超高齢者研究の結果を踏まえ、超高齢者をポジティブな視点から捉え直している。超高齢者は、現役世代からもたらされる経済資本からの支援（年金制度や医療制度、経済的援助）を受けながら、コミュニティの支えの中で、これまでの経験から蓄積された叡智やノウハウなどの潜在能力を地域に還元しうる存在となりうる。そうした超高齢者の潜在能力に光を当て、次世代との共生システムの要をなす存在として位置づける。

### 2.2.2 研究対象地の選定とそのねらい

本研究の実証の場は、「長寿で子宝の島」と称される奄美群島（以下「奄美」と略）の伝統的共同体の残るシマである。奄美は100歳以上の百寿者が多い地域である。シマの超高齢者たちの生き生きとした笑顔と長生きを楽しんでいる暮らしに注目する。自然の営みや循環を大切にする暮らしの中で、祭りや伝統文化が継承されている。超高齢者は先代から伝わる祭りや儀式、踊りの所作、ノウハウを身体に身につけた存在として、若い人に伝える役割の場がある。

奄美の事例からは、コミュニティ環境が超高齢者の健康長生きと幸福な老いに関連することが考察可能となる。さらに、単なる事例ではなく、地域コミュニティにおける持続的発展のモデルとして、各地で失われた文化的伝統や世代間共生のシステムづくりに貢献することができる。その解明に向けて、文化資本と経済資本の循環モデルを基礎に、多様な学際的成果を取り入れつつ研究し、奄美を衰退地域ではなく、逆に長寿・超高齢社会の到来の中で健康長寿と幸福な老いを実現している、地域経営のモデル地域であることを明らかにする。

---

<sup>25</sup> Baltes, P.B. & Smith, J. (2003) New frontier in the future of aging; From Successful Aging of the young old to the dilemmas of the Fourth age, *Gerontology*, 49, 123-135.

### 3 本研究の視角—長寿と人間発達を支える伝統と協働のダイナミズム

本研究は、従来の加齢を衰退・衰えと規定するネガティブな超高齢者論と対峙し、超高齢者の人間発達に焦点を当て、それを形成・発展させる奄美のコミュニティ要因に注目する。そこに機能している伝統と協働のダイナミズムを実証するものである。

つまり、奄美のコミュニティに注目すると、そのベースにある伝統文化を基軸にした長寿を支える地域経営の機能と内在する力が解読できるのである。

この試みは、今後進展する長寿・超高齢社会において、健康長寿と幸福な老いを実現するうえで、有用な示唆を与えるものと確信する。しかしながら、このような視点からの研究は見られない<sup>26</sup>。そのため、本研究では、老年学や心理学、社会学、経済学、経営学、民俗学、文化経済学などの様々な学際的分野の成果を統合化し、それら分野の成果を踏まえ、本研究の論点となる超高齢者の人間発達と地域コミュニティ特性へのアプローチを確定し、実証研究につなげていくこととする。

#### 3.1 人間発達へのアプローチ

##### 3.1.1 ジェロントロジー（老年学）からネオ・ジェロントロジーへの転換

長寿・超高齢社会における元気な高齢者／超高齢者の出現を受け、これまで加齢を一律に衰退・衰えととらえていたジェロントロジー（老年学）から、学際的で多様な高齢者像・人間発達の視野に立つ、新しい老年学ともいえるネオ・ジェロントロジーへの視点が注目されている。つまり、高齢者を虚弱で支えられる者として、福祉的分野を主に研究してきた老年学から、「<老い>の豊かさや価値についての歴史的・思想的・比較文化的分析、蓄積された経験が大きな資産となる暗黙知の伝承の民俗学的・文化人類学的考察」などを含んだ研究への必要性が提起されてきているのである<sup>27</sup>。

このような、老いの豊かさに光を当てる研究上の視野をもつことによって、超高齢者の生活基盤や医療を支えている社会保障制度の積極的側面もまた評価の対象となりうる。超高齢者は、経済的にも社会的にも、指導力や文化的な存在においても、寝たきりの方から現役で活躍する方々まで極めて多様で、次世代と共生している実態もある。

現代の年金・医療保険システムのもとでは、超高齢者の経済的基礎は現役世代からの経済的支援によって支えられているのも事実である。しかし、これまで、超高齢者が社会や地域の発展に寄与してきた存在者として、また、現在も地域の文化や生活の質にかかわる存在者として言及されてこなかった。つまり、福祉という領域からは、老いへの価値や超高齢者の尊厳、人が歳を重ねる経験や技、叡智、潜在能力を社会の

<sup>26</sup> 杉村和彦（2007）前掲書、39-55頁。

<sup>27</sup> 文部科学省（2014）『科研費説明資料 2-2 平成 26 年度「特設分野研究」』、57頁。

共有資産とする視点には注目されない。また、この結果は、現役世代との共生の現実に関する研究の不足が露呈するのである。

奄美の健康長寿者を生み出す地域経営や社会経済システムに注目すると、超高齢者の家計からは、現役世代が担う国民年金や医療保険制度、自治体の敬老慰労金などによって支えられていることがわかる。自給自足的経済などによって家計が支えられている側面もある。とはいえ、現金収入は家族や近隣との付き合いには欠かせないものであり、生活の質を確保する意味あいは大い。

このように、ネオ・ジェロントロジーの分野から老いの価値や超高齢者の潜在能力に光をあてることによって、経済のみならず文化をも視野に入り、健康長寿を実現する社会経済システムの考察が可能となる。

### 3.1.2 マクロな超高齢社会論からミクロな長寿・超高齢社会論<sup>28</sup>への転換

これまでの超高齢社会論においては、経済資本に限定された従来の大量データを集めたマクロ的な議論が主流であった。それに対し筆者は、地域という視点から、教育や文化を含む身近なデータを積み上げて、生活の全体像を把握する。微小で多様なものを集めて積み上げることで、従来は見ることのできなかつたもの、見落としていたものも見えてこよう。その方が事実を発見しうると判断した。

つまり、マクロな超高齢社会論においては、超高齢者は長い人生経験から形成された叡智やノウハウなどの潜在能力を持つ存在ではなく、単なる量として把握されていた。その結果、超高齢者一人ひとりの役割や機能、存在意義を主たる研究対象とはしていない。その理由は以下のとおりである。

第一にあげられるのは、超高齢者は所得を獲得する能力を欠いた存在、つまり、所得を獲得する能力をもつ人々にとっての負担、あるいは、コストとして把握する傾向である。この場合には、高齢化の進行は社会保険料、租税など、社会的負担の増として把握される<sup>29</sup>。これらの研究の視点は、人的能力を各人の稼得能力、所得獲得能力として把握している点に特徴がある。

したがって、高齢化は経済資本の減少、所得獲得能力の低下を意味し、超高齢者は（所得獲得能力の高い）現役世代からの世代間所得再分配によって支援される存在となる。この結果、超高齢者層全体がマイナスイメージで把握され、超高齢者の増加は社会的コストや社会保障費の増大として、人々の意識においては負のイメージが共有されていく。

<sup>28</sup> 本稿で通貫する長寿・超高齢社会論は、全人口に占める高齢者の割合を統計的に捉える超高齢社会論に対し、人類が実現した長寿時代の到来にも焦点を当てているため、長寿・超高齢社会論として、論を進めていく。

<sup>29</sup> 近藤誠（2013）「少子高齢化が日本経済に与える影響」『経済科学研究所紀要』43、17-50頁。

第二にあげられるのは、人的能力を経済資本として経済的価値を生む「元手」あるいは、「元本」として把握していることである。人的能力を経済資本としての把握に限定する学説は、J.M. ケインズによれば、J.ベンサム の学説に由来し、このような経済資本にすぐれた人間が生存競争の勝者として生き残る<sup>30</sup>。

しかし、人間を人的能力としての経済資本や稼得能力に限定せず、それらを獲得する前提条件ともいうべき、潜在的諸能力の獲得過程にまで視野を広げる必要がある。そうすれば、「稼ぐ」には職業能力が必要であること、職業能力を身につけるには、幼児期には家庭における人格形成教育、地域における社会教育や義務教育、後期中等教育、職業教育や高等教育などの学校教育の存在が浮かび上がってくる。

現代社会において、これらの教育システムは、その原点をイギリス工場法の教育条項の中にもっており、労働時間の短縮や社会保障制度、人間発達を保証している<sup>31</sup>。工場法に注目して論じると、労働時間と生活時間が区別され、自由な生活時間が保障され、都市を中心に、工場法の教育条項、保健条項などが教育制度、公衆衛生制度を生み出して、学習社会の人的能力形成と健康を支えてきた<sup>32</sup>。

本来は、労働者一人ひとりの発達や生きがい、生活の質をも取り扱わなければ稼得能力の形成の前提条件は解明できない<sup>33</sup>。だが、大量現象としての高齢化に焦点が当てられた結果、超高齢者の価値は負担感ばかりが強調されている。このようなマクロな視点では、超高齢者の教育機能や地域貢献を通じた家族や地域の発展、さらには、少子高齢化社会からの脱却という未来への道筋は見出されない。

### 3.1.3 超高齢者の潜在能力への視座

人間発達の経済学の「潜在能力」の視点は、超高齢者への新たな理解を示唆している。1980年代、A.センは、商品開発の経済学から人間発達の経済学へ、という経済学のパラダイム転換を提起した<sup>34</sup>。そこでセンは、人間の幸福な状態や福祉の水準は、人が達成に成功する「機能」（人がなしえること、なしうること）と、人がこれらの機能を達成する「潜在能力」に関心を寄せている。また、「貧困は単に所得が低いというよりも、むしろ基本的な潜在能力の剥奪である」と指摘する<sup>35</sup>。

<sup>30</sup> ケインズ（1971）「自由放任の終焉」、『世界の名著 57. ケインズ・ハロッド』（宮崎義一・伊東光晴編）中央公論社（1926）、133-158頁。

<sup>31</sup> 工場法はイギリスにその起源がある。日本においては1911（明治44）年に制定され、1916（大正5）年に施行された。終戦後、1947（昭和22）年に、労働基準法の制定により廃止されたが、工場法の中の教育条項はやがて義務教育法制へと発展した歴史を持つ。

<sup>32</sup> 十名直喜（2018）「日本の経営と品質管理」、『名古屋学院大学論集（社会科学篇）』、vol.55（1）、1-92頁。

<sup>33</sup> 金子勇（1990）「高齢化の新しい考え方；「生活の質」アプローチ」『季刊社会保障研究』、26-37頁。

<sup>34</sup> アマルティア、セン（1988）『福祉の経済学：財と潜在能力』鈴木興太郎訳、岩波書店、（*Commodities and Capabilities*, Elsevier Science Publishers B.V, 1985）。

<sup>35</sup> アマルティア、セン（2000）『自由と経済開発』（石塚雅彦訳）、日本経済新聞社、（*Development as*

このことを、超高齢者の現実に当てはめるならば、年金等の充実で生存の最低限度の所得は保障されているものの、社会的役割から離脱させられた高齢期／超高齢期を過ごす人々にとっては、自らの自己実現や生きがい創造の機会は少なくなる。そのような環境下にある彼ら／彼女らは、物質的には豊かな生活であったとしても、いわば潜在能力のはく奪状況として精神的には生きがいのある生活とはいえないだろう。現に、祭りや伝統行事が希薄になった都市部では、日常的なつながりや共同行事も薄れ、それに伴い地域の多様な職人能力も衰退している。超高齢者は、地域での社会参加や役割を發揮する機会もなくなる。都市部での孤独化や孤立が深刻化している要因でもある。

一方、文化経済学の視点から捉える超高齢者は、地域コミュニティにおける自然や伝統文化から学びつつ、これまでの経験、熟練した技やノウハウを蓄積し、目には見えない無形の文化資本<sup>36</sup>を体化した存在としてとらえる。実際、祭りや伝統行事が継承されているコミュニティでは、超高齢者は先代から引き継いだ習慣や祭りの精神、技、ノウハウを次世代に伝える機会と役割の場がある。

#### 3.1.4 超高齢者の幸福感への視座

幸福の基礎としての文化と経済の関係は、量産体制下では矛盾すると考えられてきた。しかし、両者が多品種少量生産システム時代や、祭り、民俗芸能、農林漁業や地場産業などの発展と相互補完的であるとの研究が進んできた<sup>37</sup>。文化経済学からは、心理学が発見した超越の境地を、幸福を実現する近道の発見と実践による文化資本の充実として、位置づけることができる<sup>38</sup>。そして、この道の生き方を構想する力量を身につけた人々として超高齢者が位置付けられる。

他方、超高齢者は文化資本を身につけているだけでなく、人生の各段階でそれぞれに自らの生き方を構想・創意工夫・ノウハウとして蓄積し、最終段階では最適なものを選択するという事実も重要な意味をもつ。ここでは、人生における構想力、あるいはノウハウともいべきものを経済学がどのように位置づけられるのか、という新しい問題が提起される。

経済学において、このようなノウハウを生産の基礎的要素として位置付けたのは、K. E. ホールディングであった。彼は、経済資源の3要素、ノウハウ・物質・エネルギーを最適に選択すれば最適なエネルギーによる資源（自然・人間・産業・生活など

---

*Freedom*, 1999) 99 頁。

<sup>36</sup> スロスビー, D (2002) 『文化経済学入門；創造性の探究から都市再生まで』中谷武雄・後藤和子監訳、日本経済新聞社 (*Economic and Culture*, Cambridge University)、78-102 頁。

<sup>37</sup> 池上惇 (2012) 『文化と固有価値のまちづくり；人間復興と地域再生のために』、岩波書店。

<sup>38</sup> 池上惇 (2017) 前掲書。

の諸資源)の有効活用が可能であることを論じている<sup>39</sup>。この視点は、超高齢者の幸福(健康)と人間発達を実現しうる構想力ともなる。

加えて、社会学者のトーンスタムは、加齢に伴う幸福感の増大をポジティブな発達と捉える老年的超越理論を提示した。超高齢期は、加齢に伴う精神的発達によって現役世代と異なる価値観や世界観を形成することなどから、高齢期よりも幸福感が高まることを実証している<sup>40</sup>。加えて、生涯発達心理学においてライフサイクルに第9段階の超高齢期を設定したJ・エリクソンは、第9段階の発達課題として老年的超越を位置付けている<sup>41</sup>。

同様に、超高齢期の適応的な発達が可能であることを示めすバルテスのSOC<sup>42</sup>理論からの示唆がある。この理論は、人は加齢に伴う機能低下や喪失に対し、元の状態に近づける方略として一連のプロセス(目標の選択、資源の最適化、補償)を発達させ、それまでの水準を維持しようとする、を明らかにしている。

これらの理論から、超高齢者は構想力(ノウハウといえる)によって、少ないエネルギーを最適化した行動を行っていることが明らかとなる。

## 3.2 地域コミュニティへのアプローチ

### 3.2.1 老いの価値への社会経済的視座

超高齢者が多数を占める今日の時代には、これまでの現役世代の価値観である経済的・物的な財や資本への貢献度だけではなく、老いの経験を無形資産(価値)や社会の共通資本として、社会経済的に考察するプロセスや老いの潜在能力を経済学的に考察することが求められている。

しかし、近代化や高度成長、都市化の進行、農村における稲作文化の衰退などによって地域固有の文化は弱体化し、無形資産の有用性については文化財保護などの対象とされているにもかかわらず、社会経済的には一瞥もされていない。また、従来の社会経済学においては、無形資産の研究は知的所有権や財産権を有する資産に限定される傾向があった<sup>43</sup>。そのため、自然資本と共生する文化資本としての無形資産の研究は、民俗学などで触れられてはいるものの研究の蓄積がない。

このようななかで本研究は、かつての日本の伝統的共同体に一般的にみられた、祭

<sup>39</sup> K.E.ポールドディング(1987)『社会進化の経済学』猪木武徳ら訳、HBJ出版局、26頁。

<sup>40</sup> トーンスタム,L(2017)『老年的超越:歳を重ねる幸福感の世界』富澤公子・タカハシマサミ訳、晃洋書房(Gerotranscendence: A Developmental Theory of positive Aging, Springer;2005)。

<sup>41</sup> エリクソン,E.H & Erikson, J.M(2001)『ライフサイクル、その完結<増補版>』村瀬孝雄・近藤邦夫訳、みすず書房、(The Life Cycle Completed; A Review (Expanded Edition), WW Norton & Company,1997)。

<sup>42</sup> SOC: selective optimization with compensation(補償を伴う選択的最適化理論)。

Baltes, P. B(1997) On the incomplete architecture of human ontogeny: Selection, optimization, and compensation as foundation of developmental theory. *American Psychologist*, 52, 366-380.

<sup>43</sup> 後藤小百合(2006)「知的財産会計の構築と制度化;主として特許権に関する会計と企業価値の創造」『高崎経済学論集』48(4)、199-212頁。

りや習慣、結いを媒介とした無形資産に注目する。これらは、互いの生命や生活を尊重しあう相互支援・互助の人間関係のなかで形成されていたものである。

さらに社会経済的視点からみると、個人は孤立した存在でなく、様々な経済・社会関係を築き、歴史的背景をもつ社会的存在であること。加えて、自然や風土と共生し、家族や社会集団、地域コミュニティと関わりながら暮らす生活のなかでは、超高齢者は知恵者としての役割があり、潜在能力を発揮する居場所があった。

例えば、『おいへのまなざし；日本近代は何を見失ったか』の著者の天野は、民俗学者宮本常一氏の『忘れられた日本人』のあとがき<sup>44</sup>に触発されて、この本を書いたと述べている<sup>45</sup>。その理由として、宮本の話には、「狭くて息苦しい、利害の衝突しがちな村共同体の中で、常に共生の可能性を求めてきた老人の『知』のありようが見てとれる」と記している。その根拠として、「老人の知が持つ有効性は、長年にわたる経験の中で蓄えられてきたことだけにあるのではない。それが世俗の秩序に拘束されない自由さを持っているからである。・・・そこにあるのは、衰退した老いの姿ではない。村の歴史の流れを見通し、共生への志をもった老いの姿である」<sup>46</sup>と論じる。

これは、遠い昔の日本の姿ではない。50年前の普通の老いの姿である。地域コミュニティでの役割やノウハウの発揮によって、重要な役割を果たしていたことがみえてくる。共同体の基盤が残る奄美の超高齢者の生き生きとした老いの姿を解明するうえで重要な視点となる。

### 3.2.2 文化資本と経済資本の再分配システムへの視座

超高齢者層の文化資本と次（現役）世代のもつ経済資本との相互連関・交流としての文化資本と経済資本の再分配システムは、以下のように考えられる。

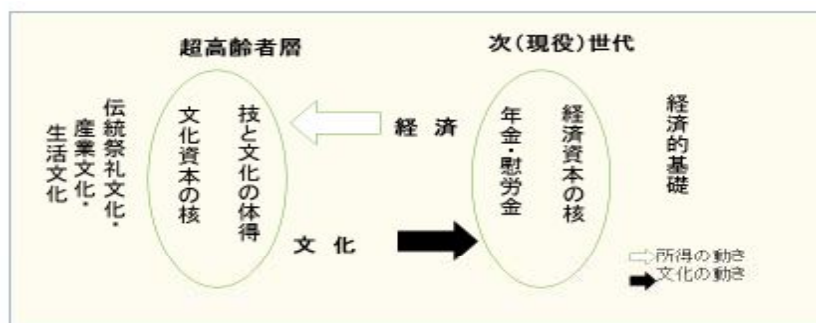
#### 図表 序-1 地域コミュニティにおける文化資本と経済資本の再分配システム

<sup>44</sup> 宮本常一（1984）『忘れられた日本人』のあとがきに、「いま老人になっている人々を単なる回顧でなく、現在につながる問題として老人たちの果たしてきた役割を考えてみたくなった」（305頁）と、その動機を記している。

<sup>45</sup> 天野正子（2006）『おいへのまなざし；日本近代は何を見失ったか』平凡社、24頁。

<sup>46</sup> 天野（2006）同書、20-21頁。





つまり、健康長寿を体現している超高齢者は、豊富な人生体験の中で、伝統祭礼文化・仕事・生活における知識・ノウハウ・職人の力量などを文化資本の核として蓄積している。そのような役割の場があるコミュニティでは、超高齢者は文化を再生産する担い手でもある。一方、超高齢者がこのような機能を発揮しうる経済的な基礎は、現在の社会保障制度における国民年金制度や長寿慰労金制度であり、ここには、次（現役）世代から超高齢者への所得の再分配が行われる。超高齢者は自己の文化資本を活かして、次（現役）世代との学びあい・育ちあいの交流の場を通じ、超高齢者と若い世代との文化の再分配システムが機能する。

奄美のシマにおいて、文化資本と経済資本の分配がどのように機能するのか、実証を通じ明らかにしていくこととする。

### 3.2.3 文化資本を生かした長寿地域の地域経営

地域の祭りや伝統行事が健康長寿と幸福な老いに与える影響については、筆者以外の先行研究は見当たらない<sup>47</sup>。しかし、超高齢者の人間発達とかかわる自然・社会の環境要因や地域・場における存在意義、主体的役割について研究の視野を広げていくと、超高齢者は自然環境を保全しつつ、人と人との心のつながりや、信頼関係を持続的に発展させる力量を身につけ、先覚の実践や知恵、徳などから学び、継承するなかで、個々人は多様で質の高い文化資本を体得していることがみえてくる。

さらに、これらの体得した力量を生かして、超高齢者は目に見える（目に見えない）文化資本を生み出すことができる。目に見える自然資本（美的景観や健康環境づくり）、目に見える文化資本（神舎仏閣、住まい、学校、文化財、建築物やまちなみづくり）、目に見える社会関係資本（公共の広場、公民館・公共施設など）として、集落の自治力によって保全・維持・発展されている。これらの資本は、長寿の地域要因や支援要因として浮かび上がってくる<sup>48</sup>。

<sup>47</sup> 富澤公子（2009b）「奄美群島超高齢者の日常からみる『老年的超越』形成意識」『老年社会科学』30、477-488頁。

<sup>48</sup> 富澤公子（2015）「遠野スタイル：超高齢者生き生き物語」遠野みらい創りカレッジ編『地域社会の未

長寿地域である奄美のシマでみてみると、その特徴は、日本の各地で廃れていった伝統的共同体の基盤があることである。自然環境に恵まれ、昔からの祭りや年中行事、民俗芸能などの伝統行事が継承されている。集落の環境整備などの年中行事や共同作業などの取り組みがある。相互扶助や結いの習慣のなかできずなやつながりが強固に残っている。そのようなコミュニティの基盤が地域要因や支援要因となって、自立し長生きを楽しんでいる超高齢者の実態が明らかにされている<sup>49</sup>。

柳田は、「祭りの最大の働きは共同の歓喜を与えることであり、それを次世代に伝える点にある」と指摘している<sup>50</sup>。祭りへの参加を通じて地域のきずなやつながりは強化される。さらに、自らの出自とアイデンティティを確認できる場ともなって、地域への愛着は強くなる。超高齢者は、祭りの伝承者として欠かせない存在であり、信頼の基盤の中で潜在能力をますます発揮させる。

長寿地域には、豊かな自然や新鮮な食べ物などの①自然資本、交流や馴染みの関係などの②社会関係資本、年中行事や伝統行事などの③文化資本など、経済資本に還元できない長寿を支える豊かな資源が存在している<sup>51</sup>。奄美のシマに着目し、文化資本が活かされた健康長寿の地域経営を考察する意味がここにある。

一方、都市部では、高度成長期の人口流入の中で宅地化が進行し、自然は減少し、伝統的な祭りなども衰退してきている。退職後の高齢者／超高齢者は、地域コミュニティの希薄化の中で孤立し、地域のきずなは断ち切れ、彼ら／彼女らの地域での役割や居場所はなくなってきている。

### 3.2.4 健康長寿のまちづくりへの視座

昨今、従来の医療や福祉行政の枠にとどまらない、都市政策としてのまちづくり、健康長寿のまちづくりに注目されてきている。国や自治体、先進企業では超高齢社会への挑戦として積極的に取り組みは始めている<sup>52</sup>。ここには、団塊世代が後期高齢者となる

“2025年問題”<sup>53</sup>に象徴される、介護問題への解決が急務だという危機意識が共有されている。加えて、健康長寿のまちづくりの推進には、健康寿命だけを取り上げて個人のもちベーションになりえないという認識がある。

---

来をひらく；遠野・京都二都をつなぐ物語』水曜社、88-99頁。富澤公子（2018c）「長寿地域における長寿の地域要因と支援要因の分析：京丹後市を事例」として『大阪ガスグループ福祉財団調査・研究報告集』Vol. 31、13-19頁。

<sup>49</sup> 富澤公子（2018b）「少子高齢化社会から長寿多子化社会へ；長寿で子宝の島奄美群島から発信する健康長寿と幸福な老いの実現」、『経済科学通信』、No. 145、53-59頁。

<sup>50</sup> 柳田国男（2004）『柳田国男全集＜第31巻＞』、筑摩書房、444-447頁。

<sup>51</sup> 富澤公子ら（2014）「健康長寿におけるコミュニティの役割：奄美群島の幸福な老い」、ユニバーサル財団「豊かな高齢社会の探求」、1-15頁。富澤公子ら（2016）「つながりが自立と健康長寿に与える影響：長寿地域京丹後市の超高齢者調査からの考察」『老年社会科学』、17頁。

<sup>52</sup> 辻哲夫（監）（2017）『健康長寿のまちづくり；超高齢社会への挑戦』、時評社。

<sup>53</sup> 2025年には、団塊の世代が一斉に75歳の後期高齢者になり、介護負担が増えるという認識である。

つまり、「人は長生きのために長生きするのではなく、家族と自分の関係や地域における自身の存在意義を背景として元気に活躍するのであって、そういう意味でコミュニティの有無は超高齢社会に大きな影響を及ぼす」という指摘である<sup>54</sup>。これまでの健康寿命重視という視点から、コミュニティの中で自分がどう生きるかという視点も重要であるということが、認識されるようになってきたのである。

今後、長寿・超高齢社会にふさわしい、健康長寿のまちづくりをすすめていくためには、地域コミュニティの再生、つながりやきずなの再生、超高齢者と次（現役）世代との世代間共生などの課題が出てくる。

なお、世代間共生の視点からは、超高齢者は若い世代の経済資本（年金などの社会保障費など）に支えられて、経験や叡智、ノウハウという、目にはみえない文化資本を地域で活かす存在でもある。この側面は、長寿地域を参考にすれば見えてくる。

地域固有の自然や文化資本を活かし、家族・近隣・地域・多世代がつながる。そのような地域コミュニティを創造していくことこそが、長寿時代にふさわしいと健康長寿のまちづくりの創造となるろう。

さらにすべての国民が健康長寿を共有するためには、長寿地域の農村と都市との交流も重要となる。健康長寿を実現する地域要因を豊かに内蔵している長寿地域の住民の経験と、地域のきずなが希薄になった都市の住民が、資源を交換・交流しあって、ともに健康長寿を実現するという新たな仕組みも必要となってくると考える。

### 3.2.5 奄美の伝統と協働のダイナミズムに注目して

本研究の視角として最後に繰り返すと、その地域に住む超高齢者の長寿への歩みや幸福感の醸成は、地域固有の自然や文化、習慣などのコミュニティ要因を含めて考察することによって、地域とつながる幸福感が解明される。つまり、奄美の長寿と人間発達を支えるのは、奄美にある伝統と協働のダイナミズムの存在である。

超高齢者は、地域の固有の歴史や文化、ノウハウを次世代へつなぐ主体的な自己の存在を確信することで、受動的な幸福感だけでなく、能動的で超越的な幸福感を持つように深化していくことが解き明かされるのである。

しかしながら、現状では、超高齢者の地域貢献や能動的な老いがもたらす健康長寿の効用や、それを支える地域コミュニティの役割に焦点をあてた研究は未開発であることを指摘しうる。本研究が伝統的共同体の残る長寿地域「奄美」のシマの文化資本・社会関係資本に注目し、超高齢者の長寿と幸福感を紐解く理由がここにある。

---

<sup>54</sup> 辻哲夫（監）（2017）前掲書、7頁。

## 4 実証方法

上記の論点を踏まえ、実証方法として、フィールド調査やインタビュー調査、アンケート調査の手法を用いる。

### 4.1 調査方法

- ①フィールド調査は、奄美のシマの生活空間や、祭りや伝統行事、信仰の実際をみるため、集落の墓地などのスピリチュアルな空間にも焦点を当てる。
- ②インタビュー調査は、祭りの担い手や民俗研究家、超高齢者、百寿者と同居する家族などを対象として実施する。
- ③アンケート調査は、超高齢者本人、集落区長を対象として実施する。

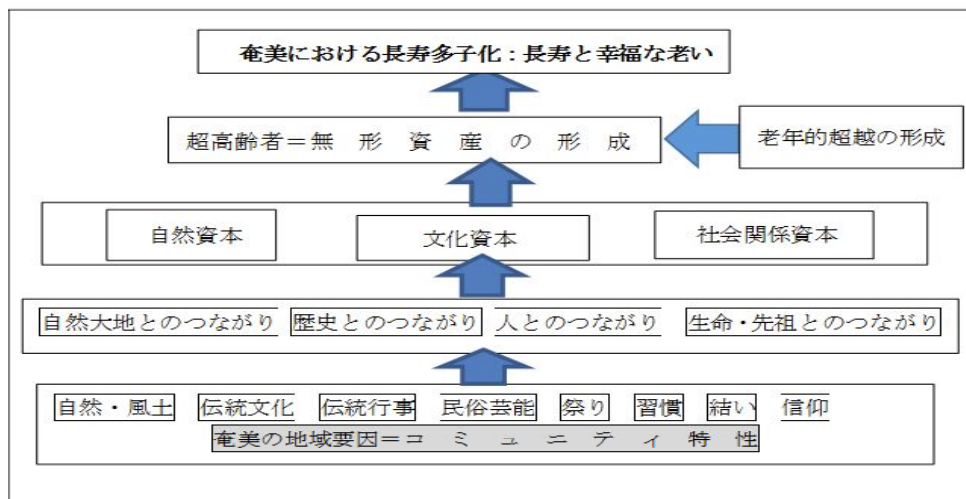
### 4.2 分析方法

- ① 超高齢者、百寿者家族の語りのデータは、質的分析法の一つである M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）で分析する。
- ② 超高齢者、集落区長の量的データは、社会調査ソフトである SPSS で分析する。

### 4.3 実証領域

本研究における奄美のコミュニティの機能は、図表序・2 にまとめられる。

図表 序・2 奄美における人間発達を支える地域コミュニティ



## 5 先行研究の検討と本研究の新規性

### 5.1 長寿の地域要因の実証

これまでの長寿研究は、主には長寿遺伝子や加齢プロセスの要因研究など、医学や

保健、食生活などの側面から行われてきた。そのために、長寿の地域要因を解読する試みはこれまでの長寿研究にはない。

本研究によって、健康長寿や幸福な老いの実現においては、地域コミュニティ特性の重要性が実証される。つまり、祭りや伝統行事が継承されている長寿地域では、超高齢者は地域での役割があり、それらが自身の存在意義や潜在能力を高め、長生きへの意欲と効用につながる。奄美における実証研究から、長寿は個人の努力とともに、それを支える地域コミュニティの重要性が明らかにされる。

## 5.2 長寿の「地域経営」モデルの提示

都市化や人口流動によって、多くの地域では伝統文化や敬老の習慣が廃れ、超高齢者の地域での地位や役割は低下し、人と人とのつながりやきずなが希薄化している。高齢者の孤立は深刻な社会問題である。

しかし、祭りや伝統行事、相互扶助や結い、敬老の習慣の残る長寿地域では、これらの文化資本を活かして地域経営がなされている。これらは、経営的視点からみると、長寿・超高齢社会の最大の課題である健康長寿を地域で実現するための、地域経営モデルとして解読することができる。

## 5.3 人間発達と潜在能力アプローチの有用性

超高齢期は、老年学では衰退・衰えの時期とされる。そうした見方に対し、本論文では独自の視点から超高齢者の人間発達や潜在能力に注目した。その結果、地域での祭りや年中・伝統行事が継承されている地域コミュニティでは、超高齢者は潜在能力を開花させる機会を得て、地域貢献している。そのことの有効性が実証される。つまり、超高齢者自身の幸福感や長生きへの志向につながり、加えて、そのような超高齢者の役割は、地域や人々にとっても大きなプラスになっていることが明らかにされる。

さらに、伝統や習慣を「文化資本」として把握する方向性は、従来から、文化経済学の学問分野で解明されてきたものであるが、この貴重な成果を超高齢者の幸福論において活用しうる可能性に道を拓くものとなる。

## 5.4 経済資本と文化資本の相互関連システムの解明

長寿・超高齢社会の進展に対し、社会保障費などの増大などネガティブな研究は巷にあふれている。むしろ求められているのは、超高齢者層の文化資本と次（現役）世代のもつ経済資本の相互関連・交流であり、本研究によって、その解読が可能となる。

地域コミュニティにおいて、健康長寿を体現している超高齢者は、豊富な人生経験の中で、祭礼・仕事・生活における知識・ノウハウ・職人の力量などを継承している。

それらは彼らの内に文化資本として蓄積され、現役世代との学びあい・育ちあいの場を通して、文化の再分配システムが機能する。

文化の再分配システムは、例えば、伝統を今に生かすヒントを得た次（現役）世代の所得を生み出す基礎となって、新たな経済資本を生み出し、創造的に発展していく可能性が生まれる。

一方、超高齢者がこのような機能を発揮しうる経済的な基礎は、現在の社会保障制度における国民年金制度や医療保険制度、教育や文化にある。次（現役）世代から超高齢者への所得の再分配が行われ、超高齢者にとっては衣食住、移動、交流などの機会を活かす経済力、活動力となる。経済資本と文化資本の相互関連機能によって、一方的でネガティブな超高齢者観を払しょくすることにつながる。

## 5.5 奄美の長寿多子化傾向の解説

奄美における長寿多子化の傾向や奄美の人々の幸福への価値観は、従来の経済学の「効用」を最大化して行動する物的資本の経済資本ではなく、奄美の固有価値を形成する自然資本、文化資本、社会関係資本の3つの資本から成り立っていることが明らかにされる。つまり、資本についてのブルデューの定義に従うと、「交換が成立するシステム内において社会的関係として機能する」のであり、それは「物質あるいは非物質といった区分はなく、特定の社会的な枠組みにおいて追求する値と希少性があることを示すものであれば、何であつても構わない」とされる<sup>55</sup>。

奄美では、長生きが貴ばれる習慣が超高齢者の潜在能力を引き出す。さらに、「子どもは地域の宝」という価値観が、親だけでなく親戚・近隣を含めた、地域での子育てを実現している。このような近隣の支援環境のなかで、超高齢者にとっても、子育て中の母親にとっても安心して暮らせる生活環境となって、奄美の長寿多子化傾向をもたらしている。それらは、奄美に固有な文化資本および社会関係資本として、自然資本と結びつき機能しているといえる。

このような長寿・超高齢社会研究における地域モデルの発見は、老年学や心理学などの長寿研究の枠を超え、学際的分野の多様な成果を基礎にすることで解明される。

## 6 本研究の構成

本論文の構成は序章・終章を含めて、全11章を3部から構成する。序章は、長寿・超高齢社会における人間発達の地域コミュニティ・アプローチとして、本研究全体を通観する部分として構成されている。

---

<sup>55</sup> Bourdieu, P. (1986): The (three) Forms of Capital, 46-58.

<https://faculty.georgetown.edu/irvinem/theory/Bourdieu-Forms-of-Capital.pdf>(2018/6/12 閲覧)。

第 1 部は、人間発達と地域コミュニティに関する理論編として、3 章から構成される。

第 1 章は、超高齢期の機能と適応に関する章で、本研究の対象者である超高齢者について老年学分野の先行研究をベースに、超高齢者の生物的・心理的・社会的特性を明らかにするとともに、精神的次元のスピリチュアリティや老年的超越に注目し、超高齢者の精神的適応につながる考察を行っている。

第 2 章は、超高齢期の精神的発達や人間発達に注目し、老年的超越理論から超高齢者の老いの成熟の多様な側面や、価値観や世界観の変容を経て幸福感の高まる精神的次元を明らかにしている。

第 3 章は、対象地の奄美における文化資本を活かした地域経営と社会経済システムをテーマに、奄美の長寿を実現している内部の諸要因を明らかにしている。特に、祭りや伝統行事を継承してきた伝統的共同体の機能に注目し、共同体の今日的意義、長寿を支える地域経営の意義、さらに、健康長寿のまちづくりへの可能性を探っている。

第 2 部は、奄美の歴史・文化と集落（シマ）のコミュニティに関し、文献調査やフィールド調査、インタビュー調査から明らかにするために、3 章から構成される。

第 4 章は、奄美の歴史と人々の寛容性（おおらかさ）をテーマに、奄美の地域特性と過酷な歴史に焦点を当てている。特に、これまで注目されてこなかった奄美の閉じられた（秘められた）歴史を紐解くことから、現在の長寿と子宝を実現している奄美の人々の寛容性（大らか）な精神性を明らかにしている。

第 5 章は、奄美の集落（シマ）の伝統文化と超高齢者の役割に焦点を当てている。暮らしの基盤にある祈りの空間や祭りや伝統行事が奄美の人々の精神的風土をどのように形作ってきたのか。それらは、長寿と幸福感にどのように関連しているのか。そのことを、文化資本を活かしたシマの地域経営という視点とそこに機能する社会経済システムに注目して論じている。

第 6 章は、長寿を支えるシマの現代版結いのコミュニティに焦点を当て、フィールド調査、インタビュー調査、アンケート調査を行っている。アンケート調査からは、超高齢者を支える家族、近隣、行政、報道機関、それぞれの役割が明らかにされている。他方で、超高齢者自身もシマに貢献し、双方向の機能が現代版結いとなって社会関係資本を豊かに形成し、長寿多子化と幸福な老いを実現していることが明らかにされる。

第 3 部は、超高齢者の老いと文化に関する実証研究の部で、インタビュー調査とアンケート調査をもとに、3 章から構成されている。

第 7 章は、超高齢者の老いと老年的超越に関する量的な実証研究である。得られたデータを SPSS で分析している。単純集計からは、超高齢者の前向きな生活実態や活動性、生活満足度や地域愛着度の高さが明らかにされた。また、老年的超越にかかる因子分析からは下位次元として、「宇宙的超越」、「自我超越」、「執着の超越」の 3 因子

が導き出された。「執着の超越」は北欧の研究結果と異なる次元で、日本人の心性の次元と考えられる。

第8章は、超高齢者の語りの文脈に密着し、そこからコア概念を生成していく質的手法の一つである M-GTA 法（修正版グラウンド・セオリー・アプローチ）で分析した。結果、日々の営みの次元の中心に、「目標は100歳」というコア概念が抽出された。老年的超越は、日々の営みの次元、形成基盤の次元、そして、精神世界につながる3層からなる老年的超越モデルが明らかにされている。

第9章は、現在でも在宅死が8割を超える与論島の実態と看取りの文化について、その要因と超高齢者の死生観や幸福感について、インタビューやフィールド調査から明らかにしている。

終章は、本研究から明らかにされた地域コミュニティにおける健康長寿と幸福な老いの課題と展望について考察している。以下、本論文の構成は図表序-3のようになる。

図表 序-3 本論文の構成

序章 長寿・超高齢社会における人間発達と地域コミュニティ・アプローチ
第1部 超高齢期の人間発達と地域コミュニティ 第1章 超高齢期の機能と適応 第2章 超高齢期の人間発達：老年的超越理論 第3章 奄美にみる長寿の地域経営と社会経済システム
第2部 奄美群島の歴史・文化とシマのコミュニティ 第4章 奄美の歴史と人々のおおらかさ 第5章 シマの豊かな伝統文化と超高齢者 第6章 長寿を支えるシマの現代版結いのかたち 第3部 超高齢者の老いと文化 第7章 奄美・超高齢者の老いと「老年的超越」 第8章 超高齢者の語りにみる幸福な老いと老年的超越の階層モデル 第9章 奄美・与論島における看取りの文化
終章 地域コミュニティにおける健康長寿と幸福な老いの課題と展望



## 第1部 超高齢期の人間発達と地域コミュニティ

人は誰でも幸福で生きがいに満ちた心豊かな生涯を過ごしたいと願っている。かつての人生50年の時代は、仕事に従事する「本生」に対し、引退後の生活は「余生」と呼ばれ、そう長くない隠居の期間を経て死を迎えた。しかし人生100年を迎えようとする時代には、現役で働いた期間と同じくらいの長い老いの時間が用意されている。したがって、今日の課題は、定年後の長期化した高齢期の生活において、死までの長い老いの期間にいかに対応して、幸福な老後を過ごすかにある。

第1部は、老年学や心理学、社会学の先行研究を踏まえ、本研究の対象者である超高齢期の理論的特性と人間発達、地域コミュニティに焦点をあてる。第2部以降での実証研究につなげる、奄美の超高齢者の長寿と幸福な老いをひも解く理論研究と位置づける。

## 第1章 超高齢期の機能と適応

### 1 はじめに

老年学は、人間の学である。老化を生物医学的、精神心理的、社会的に追及する包括的学問であり、人間の生き方、社会のあり方にも示唆を与える<sup>56</sup>。中でも、社会老年学に課せられた課題は幸福な老い（サクセスフル・エイジング）の実現のための必要条件を明らかにすることである<sup>57</sup>。

わが国の老年学の嚆矢は橘覚勝である。橘によると、高齢者に関する研究は19世紀に老衰（senectitude）の発見があり、やがて「人間を老いと死からまもる」という考察から老年学が誕生したとされる<sup>58</sup>。老年学は、高齢化が早く進んだアメリカにおいて研究が進められ、1944年にはアメリカ老年学会<sup>59</sup>が設立されている。橘は、老いや高齢期は老衰（senescence）を意味するネガティブな含意から理解するのではなく、エイジング（ageing；歳を重ねる）という中立的な概念からみていこうという機運が老年学を誕生させたと解説する。

ところで、長寿先進国と言われるわが国の高齢者一般に対する評価は高くない。この理由について鷺田は、急速な高齢化によって、＜老いの文化＞を作り上げる前に、介護問題、認知症への危機感など、長寿の陰の部分クローズアップされたことをあげる<sup>60</sup>。また、天野は、「人間が作り上げてきた文化や文明は長寿をもたらし、長寿を『老人問題』にしたてあげてきた」と批判する<sup>61</sup>。

わが国の高齢者観が否定的であることは国際比較からも明らかである<sup>62</sup>。特に、祖父母との交流がなく、「生身」の高齢者を知らない若い世代の高齢者像は、老化、ボケ、頑固などステレオタイプ化したイメージである。

若者が抱くこのような高齢者像は、マスコミが作り出したイメージと、高齢者対策の投影の結果でもある。天野は、高齢者問題を負担と犠牲としてみる若い世代の立場からは、そのようなマイナスイメージを発想しやすいと指摘する<sup>63</sup>。

一方で、このような高齢者観を生み出した一端には、社会老年学分野における研究不足が指摘される。つまり、柴田は、大多数の自立した高齢者の“ごく普通”の老いのパターン（正常老化）を明らかにする研究が少ないことや、“ごく普通”の老いに対す

<sup>56</sup> 小澤利男（2010）「人間の学としての老年学」日本老年医学雑誌 47（1）、17-23 頁。

<sup>57</sup> 佐藤眞一（2000）「心の加齢」（井上勝也・大川一郎監）『高齢者のこころ辞典』中央法規出版社、3 頁。

<sup>58</sup> 橘覚勝（1971）『老年学；その問題と考察』誠信書房、25 - 27 頁。

<sup>59</sup> アメリカ老年学会（GSA: the Gerontological Society of America）。

<sup>60</sup> 鷺田清一（2015）『老いの空白』弘文堂、3 頁。

<sup>61</sup> 天野正子（2006）『老いへのまなざし；日本近代は何を見失ったか』平凡社、11 頁。

<sup>62</sup> 古谷野亘（2003）「高齢期を見る目」古谷野亘・安藤孝敏編『老年学；シニアライフのゆくえ』ワールドプランニング、3-26 頁。

<sup>63</sup> 天野（2006）前掲書、94 頁。

る正しい情報を提供してこなかったことをあげる<sup>64</sup>。加齢に伴う機能低下の側面だけが強調され、老いの経験や叡智、潜在能力に光を当てた研究が多くならないと、若い世代にとっても老いる未来は絶望でしかないだろう。

## 2 加齢と人格発達

本研究が対象とする超高齢者<sup>65</sup>は、長寿化の中で人口の割合が増加している層である。しかし超高齢期は、機能低下や認知症のリスクが高まり、生物学的にも社会的にもネガティブな時期、つまり、長寿のジレンマの現れる時期と位置付けられる。そのため、心身機能の低下に研究の焦点が当てられ、超高齢期の心理適応に関する研究は少ない。さらに、超高齢者の幸福感に関する研究報告は少ない状況にある<sup>66</sup>。

本章では、ネガティブに捉えられがちな超高齢者について、近年の研究動向を踏まえ、加齢の影響と人格発達についてみていくことにする。

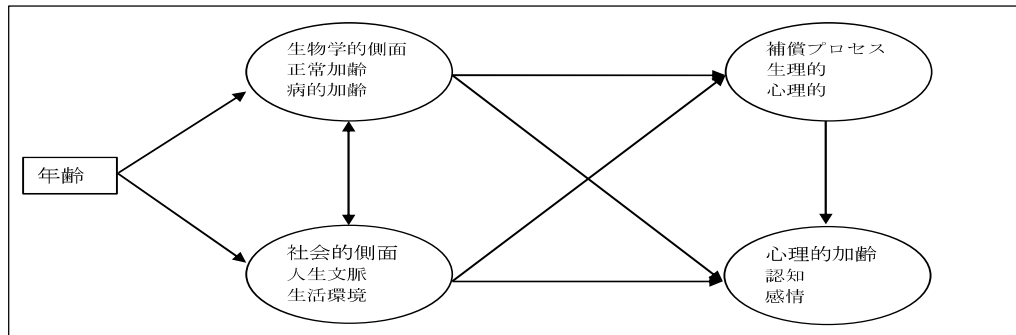
### 2.1 心の加齢

加齢に伴う負の影響の中でも、「こころ」の加齢の影響は大きい。権藤は、生物学的側面と社会的側面からなる「こころ」の加齢モデルを設定している（図表 1-1）。

生物学的側面からみた加齢には、正常加齢と病的加齢の 2 パターンがある。正常加齢（normal aging）は、疾病や環境に関係なく純粋に時間経過によって生じる生理的变化である。病的加齢（pathological aging）は、疾病を伴って生じる変化である。

認知機能の低下は、生物学的側面の加齢として強固に観察される現象であり、「こころ」の加齢に対し、負の影響を与える要因と指摘される<sup>67</sup>。

図表 1-1 生物学的・社会的側面からなる「こころ」の加齢モデル



権藤（2008）24 頁から筆者作成

<sup>64</sup> 柴田（2004）「社会老年学のあり方」『老年社会科学』26（3）、351-358 頁。

<sup>65</sup> 85 歳以上を超高齢者と区分する研究は、日本では老年精神医学雑誌のオールデストールド特集（2002）あたりから使用されている。

<sup>66</sup> 権藤恭之（2016）「超高齢期の心理特徴」Aging & Health, No79。

<sup>67</sup> 権藤恭之（2008）「生物学的加齢と心理学的加齢」（権藤恭之編）『朝倉心理学講座 15』朝倉書店、23-27 頁。

一方、社会的側面の加齢は、対人ネットワークや外出頻度、社会参加などの対人交流の減少に代表される。年齢が高くなるほど対人交流は減少することから、加齢に関連する現象とされている。社会的側面の加齢が「こころ」の加齢に与える影響には、直接的（配偶者との死別など）と間接的（趣味活動の中断による対人交流の減少など）なものがある。これらは、精神的健康度の悪化や認知機能の低下に影響する。

権藤は、ウイルソンらが行った高齢者追跡調査結果からの示唆として、本や新聞を読んだり博物館に行ったりするなど日常生活において知的活動が多いと、アルツハイマー症の発症リスクが低下することを紹介している<sup>68</sup>。

また、スターンの「use it or lose it」（使わなければ衰える）という概念モデルを紹介し、日常生活において認知機能をより多く使う生活が脳のネットワークの発達を促し、脳の予備力も高まることを指摘している<sup>69</sup>。

以上からは、加齢に伴う生物学的な機能低下である「正常老化」は避けられないこと、対人関係などが減少する社会的側面の加齢は、「こころ」の加齢に与える影響は小さくないことなどが確認される。

このことから、超高齢期には、①量より質の対人関係、親密な他者の存在、②周囲とのつながりを感じる環境、③趣味などの日常の楽しみを見つける暮らし、が重要となる。

いつまでも生き生きと活動する（心を加齢させない）要因として浮かび上がってくる。超高齢者への支援には、心に加齢の負荷要因を少なくする配慮や、さみしさや孤独を感じさせない環境づくりが重要となる。

## 2.2 SOC（補償を伴う選択的最適化）理論

一方で、人はそれらの喪失を甘んじて受け入れるだけではない。人は喪失に対し補償のプロセスを発達させ、加齢に伴う機能低下の影響を激弱化させようとする。バルテスが提唱したSOC（selective optimization with compensation：補償を伴う選択的最適化）理論がある<sup>70</sup>。

SOC理論は、超高齢者が心身機能の低下によってそれまでの水準を維持できなくなった場合の対処法として、適応的な発達が可能であることを示している。その具体例として、ピアニストのルービンシュタインの方略が引用されている（図表 1-2）。

図表 1-2 80歳のピアニスト Rubinstein へのインタビュー：SOC 理論の適応

質問: どうすれば、いつまでも素晴らしいピアニストでいられるのか？
回答 1: 演奏する曲のレパートリーを減らす（選択）
回答 2: 少ないレパートリーに絞って、その練習の機会を増やす（最適化）
回答 3: 指の動きのスピード低下を隠すためにテンポに変化をつける（補償）

<sup>68</sup> 権藤（2008）同書。

<sup>69</sup> 権藤（2008）同書。

<sup>70</sup> Baltes, P. B (1997) On the incomplete architecture of human ontogeny: Selection, optimization, and compensation as foundation of developmental theory. *American Psychologist*, 52, 366-380.

加齢をマイナスととらえず、創意工夫によっていつまでも人に感動させる曲を弾くことができる方略である。

### 2.3 超高齢期の機能特性

バルテスらの心身機能調査からは、超高齢期はさまざまな機能の喪失が特徴の年代と位置づけている。つまり、高齢期に比べて疾病数の増加、基本的 ADL（日常生活動作）の低下、要介護率の高さ、認知症の有病率などが増加する。加えて、正常老化の過程でも記憶力の低下、結晶性知能や意味記憶の低下、対人ネットワークの縮小が顕著となる<sup>71</sup>。このことからバルテスは、超高齢期は人間としての尊厳を保つことが困難な年代として、サクセスフル・エイジング（幸せな老い）には否定的である<sup>72</sup>。

日本における都市部在宅超高齢者の実態調査からも、超高齢者の 42%が何らかの介護が必要であること、介護を必要としない場合でも ADL の完全自立は 70%程度であるなど、脆弱者が増加している実態が明らかにされている<sup>73</sup>。これらから、超高齢期は機能低下が著しく、一様に依存・不活発の時期として捉えられている。

一方で、内閣府が毎年行っているエイジレス・ライフ実践事例では、年齢に捉われずに新たなことに挑戦し、生き生きと活動する超高齢者が紹介されている<sup>74</sup>。さらに、100 歳を超えても、現役で仕事や趣味に活躍する百寿者の姿など、スーパー老人の事例は枚挙にいとまがない<sup>75</sup>。生物学的な機能の喪失や衰退だけでは捉えられない元気な超高齢者が多く存在する時代でもある<sup>76</sup>。

加えて、近年の幸福感に関する超高齢者調査からは、高齢期には幸福感は少し下がるものの、超高齢期には身体機能の低下にかかわらず幸福感は高まる、エイジング・パラドックス現象が明らかにされている。この現象は筆者の奄美の高齢者と超高齢者の比較調査からも実証されている<sup>77</sup>。このような傾向は、欧米では早くから老年的超越（Tornstam,1989）や離脱理論の再解釈（Moody, 1995）という枠組みで論じられて

<sup>71</sup> Baltes, P. B., & Mayer, K. U. (Eds) (1999) *The Berlin Aging Study Aging from 70 to 100*. New York, Cambridge University, 259-281.

<sup>72</sup> Baltes, P.B. & Smith, J (2003) New frontier in the future of aging ; From Successful Aging of the young old to the dilemmas of the Fourth age, *Gerontology*, 49, 123-135.

<sup>73</sup> 権藤恭之・古名丈人・小林江里香ほか (2005b) 「都市部在宅超高齢者の心身機能の実態；板橋区超高齢者 悉皆訪問調査の結果から」『日本老年医学会雑誌』42, 199-208 頁。

<sup>74</sup> 内閣府 (2017) 『エイジレス・ライフ実践事例』(2018/6/20 閲覧)。

<sup>75</sup> 柴田 (2006)、前掲書。

<sup>76</sup> 京丹後市 (2014) 『今に生きる「京丹後」百寿人生のレシピ 2；百歳健康長寿の秘けつ集』。

<sup>77</sup> 富澤公子・Masami Takahashi (2010) 「奄美群島超高齢者の『老年的超越 (Gerotranscendence)』形成に関する検討；高齢期のライフサイクル第 8 段階と第 9 段階の比較」『立命館大学産業社会論集』、87-103 頁。

きたものである。

しかし、前述したように、わが国の超高齢者研究は医療・福祉・介護の側面からの研究が主として展開されてきたことから、超高齢者のポジティブな部分はあまり明らかにされていない状況にある。

## 2.4 超高齢期の認知機能

超高齢期の認知機能の傾向をみると、日本における認知症の有病率は、65~70歳では約3%であるが、85歳以上では30%になると推定されている<sup>78</sup>。90歳以上では約40%、100歳では50~100%と研究によって幅があるが、加齢に伴って、認知症の有病率や発症率は上昇する傾向が示されている<sup>79</sup>。

一方で、若年高齢者では行動的な認知症が観察される段階に達しても、超高齢者では行動的な認知症が現れない場合があることが指摘されている。超高齢期の認知機能の特徴は、認知症の発症やその様態が若年高齢者と異なるということである。

## 2.5 超高齢期の人格発達

下仲は超高齢期の人格発達と人格特性について、フィールドとミルサップ (Field D & Millsap RE, 1991) の人格変化の比較研究を紹介し、知能とエネルギーという特性は高齢期から超高齢期にかけて低下する。一方、調和性の人格は高齢期で上昇し、超高齢期で維持されることから、超高齢期における人格発達が示唆されたとする<sup>80</sup>。

同様の傾向は、下仲の人格特性の年齢差の研究<sup>81</sup>や、鈴木らの人生満足度の研究結果<sup>82</sup>からも支持されている。下仲は、調和性は心が広く、率直で明るいといった特徴や、あらゆるものを受容するといった特徴をもつ。これらは長い人生経験の中で育まれた社会化の成熟の成果とも解釈され、超高齢期の人々の穏やかな像が反映されていると論じている。

さらに下仲は、自己概念の年齢差分析から、高齢者群も超高齢者群も中立的で客観的な自己評価が多く述べられている点や、肯定的評価が否定的評価を上回っている点から、従来あった喪失感情が増すというステレオタイプを否定している。一方で、高齢期になっても人格は変わらないという研究結果も紹介している。

なお、百寿者は長寿の優等生として、これまで数多く長寿と性格との関連研究がなされてきた<sup>83</sup>。しかし、一致した百寿者の性格特性としては、開放性の高さのみがあ

<sup>78</sup> 大塚俊夫 (2001) 「日本における痴呆性老人数の将来推計」『日本精神病院協会雑誌』20 (8)、41-45 頁。

<sup>79</sup> 権藤恭之 (2002) 「長寿はしあわせか；東京百寿者調査からの知見」『行動科学』41 (1)、35-44 頁。

<sup>80</sup> 下仲順子 (2002) 「超高齢者の人格特徴」『老年精神医学雑誌』13(8)、912-920 頁。

<sup>81</sup> 下仲順子 (1997) 「人格と加齢」(下仲順子編)『老年心理学』培風館、62-76 頁。

<sup>82</sup> 鈴木瑞枝・金森雅夫・白木まさ子ほか (2003) 「85歳・90歳高齢者の人生満足感度の因子構造に関する研究」『老年精神医学雑誌』14 (8)、1017-1027 頁。

<sup>83</sup> 廣瀬信義・鈴木信 (1999) 「百寿者研究の現状と展望」『日本老年医学会雑誌』36 (4)、219-228 頁。

げられている<sup>84</sup>。

一方で、長寿にとっては弱点と考えられていた自信が強い、支配的、勝気、疑い深さが、いくつかの百寿者調査から確認されている。疑い深さは人生の前半では弱点となるが、逆に超高齢期では自分を保護する機能、人に騙されないことを防ぐなど、生き残りの勝者である百寿者の上手な適応様式と説明されている<sup>85</sup>。

超高齢者を対象とした調査が進むに従って、これまでステレオタイプで理解されていた超高齢期の人格特性が否定され、多様な超高齢期の人格特性が明らかにされてきている。

## 2.6 超高齢期の幸福感

超高齢期の特徴とされる身体機能の低下と心理的適応の関連を検討した結果からは、客観的な機能側面では加齢に伴う明確な低下が観察されたが、主観的な心理側面での加齢影響は弱かったことが報告されている<sup>86</sup>。つまり、超高齢期は、身体機能は低下するものの心理的側面の低下は少ないということである。

また、高齢者群と超高齢者群の違いから、客観的な機能側面が主観的心理面に与える影響を検討した結果では、超高齢者群は主観的健康観や主観的幸福感に客観的機能側面が与える影響は弱いことが明らかにされている<sup>87</sup>。つまり、超高齢者は身体機能の低下に煩わさることなく、自らの健康意識や幸福感を保っているということである。

権藤らは、超高齢期は日常生活機能や心理機能の低下が顕著になる一方で、それらに対する補償の機能が十分に働き、心理的適応が進むことが示唆されたとする。またこの傾向は、介護が必要な集団と介護が必要でない集団に分けても、主観的幸福感では両群での違いは確認されていないことを明らかにしている。

鈴木らは、85歳・90歳高齢者の人生満足度の因子構造を調べ、85歳から90歳に向けての人生満足度の大きな要因として楽天的気分が重要であること、また90歳の介護が必要な群においても、人生に対する積極的姿勢が伺えたと報告している<sup>88</sup>。

若本は、このような人生の後半の時期に well-being が高水準を保つという矛盾した心理様相を、Mroczek & Kolare (1989) によって命名された“The paradox of well-being (well-being の逆説)”現象として、紹介している<sup>89</sup>。

<sup>84</sup> 増井幸恵 (2008) 「性格」(権藤恭之編『高齢者心理学』朝倉書店、134-150頁)。

<sup>85</sup> 下仲順子 (2002) 前掲書。

<sup>86</sup> 権藤恭之・古名丈人・小林江里香ほか (2005a) 「超高齢期における身体機能の低下と心理的適応；板橋区超高齢者悉皆訪問調査の結果から」『老年社会科学』7、327-337頁。

<sup>87</sup> 権藤恭之・古名丈人・小林江里香ほか (2005b) 「都市部在宅超高齢者の心身機能の実態；板橋区超高齢者悉皆訪問調査の結果から」『日本老年医学会雑誌』42、199-208頁。

<sup>88</sup> 鈴木瑞枝・金森雅夫・白木まさ子ほか (2003) 「85歳・90歳高齢者の人生満足感度の因子構造に関する研究」『老年精神医学雑誌』14 (8)、1017-1027頁。

<sup>89</sup> 若本純子 (2010) 『老いと自己概念の媒介機能から捉えた中高年期の発達の機序』風間書房、3-12頁。

以上の先行研究の結果からは、超高齢期は生物学的、社会的加齢が同時に生じるのが特徴の時期であること。生物学的要因では超高齢期は身体機能の低下が認知機能の低下と強く相関することがあきらかにされた<sup>90</sup>。社会的要因では、日常生活場面での行動量の減少（日常的な仕事や家事労働の減少、配偶者や友人の死によるネットワークの縮小など）が認知機能に影響することなどが明らかにされた。一方で、それらの低下や喪失に関わらず、健康意識や幸福感は低下しないことが明らかにされている。

### 3 生涯発達からとらえた超高齢期

#### 3.1 生涯発達心理学

生涯発達心理学（life-span developmental psychology）は、人生を生涯という長い時間軸、つまり受精から死に至る人間の全生涯（老年期の衰退、変化も含む）にわたる発達変容を記述・説明する理論と位置付けられている<sup>91</sup>。「発達（developmental）」は、青年期の「成長（growth）、成熟（mature）」で終局するのではなく、発達は生涯プロセス（社会的知識、知恵、叡智等の特徴とその変化）とする見方である。

つまり、人生後半の暮らし方は、それぞれの人生経験や価値観を反映するものであり、その内容が生涯発達の結果と見なすことができよう。バルテス（Baltes）は、生涯発達心理学を特徴づける理論的観点について、7つの観点から理解することが重要とする。生涯発達を特徴づける観点とは、

- ①生涯発達：個体の発達は生涯にわたる過程であり、連続的（蓄積的）な過程と不連続（革新的）な過程の両方が機能していること。
- ②多方向性：個体の発達を構成する変化は多方向性を示すこと。
- ③獲得と喪失としての発達：発達の過程は量的増大という成長ではなく、全生涯を通じて、常に獲得(成長)と喪失(衰退)が結びついて起こる過程であること。
- ④可塑性：個人内での大きな可塑性が心理学的発達に見出され、その個人の発達の道筋はさまざまな形態をとり得ること。
- ⑤発達は歴史に埋め込まれていること：個体の発達は歴史的文化的な条件によって多様であり得ること。
- ⑥パラダイムとしての文脈性：個々の発達の道筋は発達要因の3つのシステムの間での相互作用の結果であること。その要因とは、年齢に伴うもの、歴史に伴うもの、そのような規準のないものである。
- ⑦学際的研究としての発達：心理学的発達は、人間の発達と関係する他の学問領域（例

<sup>90</sup> 権藤らはその背景要因のうち栄養状態が重要とみている。

<sup>91</sup> Baltes, P. B. (1993) 『生涯発達の心理学 1 巻, 認知・知能・知恵』 東洋・柏木恵子・高橋恵子編・監訳 新曜社 (Theoretical propositions of lifespan developmental psychology: On the dynamics between growth and decline, *Developmental Psychology*) 23, 611-626 頁。



えば、人類学、生物学、社会学) によって理解される必要があること。

一方、やまだは、喪失の発達の意義に着目し、人生前半の課題が「いかに獲得していくべきか」だとすれば、人生後半の課題は「いかに失っていくべきか」であると指摘している<sup>92</sup>。加えて、超高齢期は著しくなる心身機能の低下や社会的役割、親しい人の死などの喪失とともに、自らの死が身近になる時期となる。これらの喪失感が超高齢期の発達にどのように影響し、人格形成に関連するかの視点も重要と考えられる。

### 3.2 ライフサイクル論

E. エリクソン (Erikson, E. H) は、ライフサイクルを 8 つの段階に分類した自我発達の図式 (epigenetic chart) を提示している。各段階には、心理社会的課題として同調要素 (発達課題) と失調要素 (危機) があるが、それぞれの段階で重要なのは危機の比率であり、そのバランスが同調要素に傾いた時に生きて行く力 (strength) が生まれると説明する<sup>93</sup>。

エリクソンのライフサイクル論では、高齢期は最終段階の第 8 段階である。しかし、本研究が対象とする超高齢期は、E.エリクソンの死後、共同研究者の J.エリクソンが第 8 段階に追加した第 9 段階である<sup>94</sup>。

なお、ペック (Peck,1975) は、E.エリクソンの高齢期をさらに細かい時期に分けて、各時期の具体的な課題と危機を定義している。それによると、①自我の分化対仕事役割への没頭時期 (引退の危機)、②身体の超越対身体の没頭の時期 (身体的健康の危機)、③自我の超越対自我の没頭の時期 (死の危機) である。①は前期高齢期、②は後期高齢期を指すもので、③の時期が超高齢期の課題と理解できよう<sup>95</sup>。

老年の超越理論を提示したトーンスタムは、このペックの調査から、老年的超越が自然の加齢のプロセスであることを間接的に証拠としてあげている<sup>96</sup>。

生涯発達の視点は、人格発達がもたらす過程における超高齢者の内的世界を理解する物差しとなる。さらに超高齢者理解を進めるために、高齢期との発達課題の違いから明らかにしていくこととする。

<sup>92</sup> やまだようこ (2000) 「生涯発達心理学の課題と未来」小嶋秀夫・やまだようこ編『生涯発達心理学』放送大学教育振興会、203-224 頁。

<sup>93</sup> Erikson E.H., Erikson, J., M & Kivnick, H.,O (1990) 『老年期；生き生きとしたかかわりあい』朝長正徳・朝長梨枝子訳、みすず書房 (*Involvement in old age*,1986)。

<sup>94</sup> Erikson E. H & Erikson, J. M. (1997) 『ライフサイクル、その完結<増補版>』(村瀬孝雄・近藤邦夫訳、みすず書房、(*The Life Cycle Completed; A Review (Expanded Edition)*), WW Norton & Company)。

<sup>95</sup> Peck, R. E. (1975) *Psychological developments in the second half of life*. In: W.C. Sze (Ed.), *Human life cycle*, Jason Aronson.

<sup>96</sup> トーンスタム, L (2017) 『老年的超越：歳を重ねる幸福感の世界』(富澤公子・タカハシマサミ訳) 晃洋書房 (*Gerotranscendence ; A Developmental Theory of positive Aging*, Springer;2005)。

図表 1-3 心理社会的人生段階

IX	超高齢期								老年的超越
VIII	老年期							統合 対 絶望	
VII	成年期						生殖性 対 自己没入 世話		
VI	成年前期					親密性 対 孤独 愛			
V	思春期				アイデンティティ 対 混乱 忠誠				
IV	学童期			勤斂性 対 劣等感 才能					
III	遊戯期		自発性 対 罪悪感 決意						
II	児童初期	自律 対 恥と疑惑 意志							
I	乳児期	基本的信頼 対 基本的不信 希望							

第9段階はE. H. エリクソン (1990) 『老年期』、35 頁から筆者が加筆。

### 3.3 第9段階（超高齢期）の発達課題

J. エリクソンは、自らが93歳という超高齢期に達し、夫、E. エリクソンの死後、ライフサイクルに第9段階を設定するに至った。「第8段階で出没した絶望は第9の段階では切っても切れない道づれとなり・・・第9段階の老人は、叡智が要求するような良好な視力や鋭敏な聴覚を持っていないのが普通なのである」<sup>97</sup>。

しかし、「80歳代や90歳代には、多くの新たな困難や喪失体験、身近な人々の死に遭遇し、自分自身の死がそう遠くないことを感じるに至るが、これらの喪失を生き抜く確固とした足場がある。それは、人生の出発点で獲得した基本的信頼感という恵みが人には与えられているからである」と論じる。

そして、第9段階のさまざまな失調要素を甘受し、これを乗り越えるには「老年的超越」に向かう道に前進することと示唆する<sup>98</sup>。彼女は、老年的超越とは、「メタ的な見方への移行、つまり物質的・合理的な視点からより神秘的・超越的な視点への移行である」と、トーンスタムの定義を引用している<sup>99</sup>。

一方で、J. エリクソンは、「老年学者が『老年的超越』という用語を使う時、彼らは、記述しうることを可能な限り明確に明細化して述べることをしない。彼らは老人が老

<sup>97</sup> Erikson E (1997) 前掲書、162頁。

<sup>98</sup> 同書 164頁。

<sup>99</sup> 同書 181頁。

年期の危機に向き合う中で獲得し遺していくものに十分な考慮を払っていない。彼らはまた、(老人が与える) 新たな肯定的な精神的贈り物についても十分な探究を行っていない。多分彼らは若すぎるのだ」と、批評している<sup>100</sup>。

### 3.4 超高齢期のサクセスフル・エイジング

超高齢期においても、サクセスフル・エイジング (幸福な老い) は生活の質を高め良好な適応をしていく重要な課題となってくる。

鈴木はサクセスフル・エイジングとは、『歳をとるにつれてどうなるか』だけでなく、『歳をとることに對して自分はどうか』という視点から生涯発達にアプローチすることが重要と論じている。つまり、主体的に老いをとらえ、行動するということであろう。それゆえ、前述した補償を伴う選択的最適化 (SOC 理論) も「上手に歳をとる」ことの具体的な方略とみている<sup>101</sup>。

高齢期の適応に関するこれら理論は、結局未結着のままさまざまな研究が進展していくことになるが、これらの理論論争によってサクセスフル・エイジングの研究が刺激され活発化されることになる(佐藤, 2007)。

サクセスフル・エイジングは、高齢化の先進国アメリカで活発に議論されてきた。代表的な概念は、ロウとカーン (Rowe&Kahn) が示した 3 つの要素、すなわち、①病気や障害を最小にしている (長寿と関連)、②心身の機能が維持していること、③社会的・生産的活動の維持である<sup>102</sup>。

これは、心身共に健康で社会貢献することが望ましい老後の姿として、中年期の発達モデルである仕事 (work) に価値や生きがいの中心を置く人間観である。この考えは、欧米、特に米国では広く人々に受け入れられてきた。

しかし、この考えが超高齢期以降の人々にも適用できるのかという疑問がある。秋山は、successful aging = productive aging という画一的な考えでは、“自立して生産的”でない高齢者には失敗者という自覚をもたらすだろう、と指摘する<sup>103</sup>。つまり、自立的で生産的な側面を重視する概念では、超高齢期の人々はサクセスフル・エイジングの対象者から外れることになる。

一方、クローザーら (Crowther) は、ロウとカーンの提示した 3 つのサクセスフル・エイジングのモデルに対し、忘れられた 4 つめの要因として、スピリチュアリティ (Positive Spirituality) を提案する。その理由として、高齢者の健康促進に焦点を当てるとき、スピリチュアリティは健全な高齢者に積極的に受け入れられており重要な要

<sup>100</sup> Erikson (1997)、前掲書 187 頁。

<sup>101</sup> 鈴木忠 (2008) 『生涯発達のダイナミクス；知の多様性生き方の可塑性』、東京大学出版会、138-139 頁。

<sup>102</sup> Rowe, John W & Kahn Robert L (1998) *Successful Aging*. New York Pantheon Books.

<sup>103</sup> 秋山弘子 (2000) 「日本の老年社会科学から欧米へ向けての発信」『老年社会科学』22 (3)、338-342 頁。

因になると論じている<sup>104</sup>。

高齢期のサクセスフル・エイジングモデルを超高齢期に適応すると、超高齢者はアン・サクセスフルとして語られる存在となる。これに対し、トーンスタムは、これまでのサクセスフル・エイジングに別のとらえ方のあることを示す。超高齢期の人々の、加齢に伴うスピリチュアルな精神発達の側面や世界観の変容に注目して、「老年的超越」理論を提示していくのである。超高齢期の精神的次元の発達について、更に考察していく。

## 4 超高齢期における老いと死の受容

### 4.1 経験からくる老いの発達

生涯発達とは、自我発達を生涯にわたる過程とみなす立場である。この立場からは、超高齢期には加齢に伴う経験や心身変化に適応していく術を学んでいく過程となる。

デューイ (Dewey) の「連続の原理」では、現在の経験は過去の経験から生まれ、それが未来の経験へ流れていくとする。人は、経験の再構成を通じ成長していくと捉える<sup>105</sup>。森有正は、人間の経験について、「体験」と「経験」の2つからその違いを解説する。体験は「経験の中にある一部分が特に貴重なものとして固定し、その後のその人のすべての行動を支配するようになってくる」<sup>106</sup>。

しかし、本当の経験とは、「経験の内容が、絶えず新しいものによってこわされ、新しく成立し直されていく」と論じる。したがって経験とは、未来に向かって開かれるもので、経験の成熟は人間を内面から超えていくことを意味するものであると解説する。

デューイや森が指摘するように、固定化された経験などあり得ないだろう。人は経験を重ねて成長し発達していくのだから。そういう側面から見ると、超高齢者は経験の層を変容させながら、その学びを深め・蓄積する。そのことが潜在能力を開花させ、先駆的な価値観や世界観を形成していくと理解される。超高齢者は、若い世代にはない高い倫理性や利他性、深い文化的考察を高めていく存在と理解される。

### 4.2 超高齢期における老いの受容

超高齢期には、前述のとおり、身体機能の低下に連動して幸福感は低下しない。このことを、「老いの受容」の創面から紐解くこととする。臨床医の横内は、老いの受容について、「加齢によって生じる身体・生理・生活の全般的な機能低下を、老いに伴う生活機能障害としてやむを得ないと受容すること」と説明する。そして、超高齢者が

<sup>104</sup> Crowther R., Martha, Michael W. Parker, W. A. Achehbaum., et al (2002) : Rowe and Kahn's Model of Successful Aging Revisited ; Positive Spirituality –The Forgotten Factor. *The Gerontological Society of America*, 42, 613-620.

<sup>105</sup> デューイ, ジョン (2004) 『経験と教育』(市村尚久訳)、講談社、127頁。

<sup>106</sup> 森有正 (1970) 『生きることと考えること』講談社、94-96頁。

満足した生活を送るカギは「老いの受容」にあるとする。それは、自己実現に向かって生きてきた第一の人生から、他人の助けを借りながら淡々と暮らすという生き方への転換であるとみる。

なお、臨床医の立場からみて、「老いの受容」は手段的 ADL に援助が必要になった時期と関連すると述べる。したがって、老いを受容できた超高齢者は大筋で現状に満足し、非高齢者が想像するよりはるかに生き生きとした生活を送っていることを明らかにする。一方で横内は、「老いの受容」は個人差が大きく、ADL の低下とともにいつの間にか受容する場合と、老いが受容できない場合も少数ながら存在することを指摘する。しかしながら、欧米の自立を人生の目的とする生き方と異なって、日本の超高齢者は生きやすいのでないかと述べている<sup>107</sup>。

田中は、『老いの受容』とは、自分の現在、膨大な過去、切り詰められた未来のすべてを含めて『人生の全体を受け容れる』ことである」と述べている<sup>108</sup>。奈倉は、高齢期の精神機能の中には、身体機能の低下と連動して深まっていくものがあるとする。人は歳をとるにつれ結晶性知能や感性が豊かになるのは、死を見つめ、限りある命に気づくことで、ただ生きるということに飽きたらず、生きることを意味を探求する所ではないかと論じる<sup>109</sup>。

これらのことから、人は社会的心身的機能の両面で喪失感が増大する時期を生きるために、価値観を転換し心を変容していくとする発達の視点や、老いが導き手になって、見えなかったものや感じられなかったものを感じる感性が豊かになるという指摘は、超高齢者を理解する上で重要な示唆と言えよう。

次に、死の受容との関係から超高齢期の心理理解を深めることとする。

#### 4.3 超高齢期における死の受容

田中は、高齢期において人は死を「真に受け止める」ようになるという、ジャンケレヴィッチの言葉を紹介している。彼によれば、死を「真に受けとめる」とは3つの相からなる。1つ目は、抽象的な概念だった死が現実の出来事として当人に現われること。2つ目は、他人事であった死が自分自身の問題になること（第1人称の死）。3つ目は、身近な死に立ち向かわなければならなくなる。特に両親の死をきっかけに今度は私の番として死の接近を意識するようになる、と論じている<sup>110</sup>。

超高齢者は長い人生経験を通じ、さまざまな別れや喪失が繰り返され、それらが精神的基底にゆっくり蓄積されていく。それらの別れや喪失感は、ただ無意味な苦痛だ

<sup>107</sup> 横内正利（2001）『「顧客」としての高齢者ケア』日本放送協会、1-16頁。

<sup>108</sup> 田中每実（1994）「老いと死の受容と相互形成」（岡田渥美編『老いと死；人間形成論的考察』、玉川大学出版部）、319-341頁。

<sup>109</sup> 奈倉道隆（1999）「老いと宗教」『老年社会科学』21（3）、311-316頁。

<sup>110</sup> 田中（1994）前掲書。

けではない。デューイのいう新たな経験となって、内面世界にはこれまでとは異なる次元の豊かさとして形成される。そのことが、死という究極の別れへの穏やかな着地を可能にしていくのではないだろうか。田中の指す「人間としての成熟」の一つの達成が、死の受容であるのだろう。

一方、河野らの実証研究からは、60歳代と80歳代とでは死に対する態度が異なり、より高齢になるほど死の不安から解放されていくことを明らかにする。つまり、より高齢の方が現世からの回避として死を受容する傾向が示されたと解説する。また、信仰のある方が死の受容傾向が高いこと、子どもの数と死の恐怖と関連し、子どもがいないか少ないことが、死の恐怖を高めるという傾向を明らかにしている<sup>111</sup>。

この結果が示唆することは、自分の死後、安心してゆだねる存在の重要性である。超高齢者にとって死後を安心して任せられる存在がいることは、穏やかな超高齢期の生にとっても重要な要因なのであろう。

超高齢期における死は、キューブラ・ロス (Kübler-Ross) の例示する臨死患者のような、深刻な出来事が短時間に凝縮された「死にゆく過程」ではない<sup>112</sup>。穏やかに、緩やかに、引き伸ばされた死にゆく過程である。そして、老いが、「穏やかに緩慢に死にゆく過程」であれば、「老いの受容」の課題の中に、「死の受容」の課題も包摂されていくといえよう。超高齢期の精神的次元は、経験からくる老いの受容、そして死の受容がもたらす人間としての成熟的要素が発達する過程とも理解されよう。

#### 4.4 超高齢期のスピリチュアリティと幸福感

超高齢期の幸福感として、スピリチュアリティ<sup>113</sup>の発達との関連が議論されている。米国では、1970年代から高齢者の **spiritual well-being** の議論が盛んにされてきた。鶴若らは、高齢期の生きがいと **spiritual well-being** は近似した概念と捉えている<sup>114</sup>。

窪寺は、「スピリチュアリティとは人生の危機に直面して生きる拠り所が揺れ動き、あるいは見失われてしまったとき、その危機状態で生きる力や希望を見つけ出そうとして、自分の外の大きなものに新たな拠り所を求めようとする機能のことであり、また、危機の中で失われた生きる意味や目的を自己の内面に新たに見つけ出そうとする機能のことである」と論じている<sup>115</sup>。

窪寺の「スピリチュアリティは生得的なもので、生命が危機に直面した時に覚醒し

<sup>111</sup> 河野あゆみ・金川克子 (1998) 「在宅高齢者の主観的時間に関する研究；性、年齢、日常生活自立度との見当」『老年社会科学』20 (1)、25-31頁。

<sup>112</sup> キューブラー・ロス (2001) 『「死ぬ瞬間」と死後の生』(鈴木晶訳)、中公文庫。

<sup>113</sup> スピリチュアリティは、一般に、「霊性」、「精神性」などと訳されているが、現在わが国においてスピリチュアリティの明確な定義の共通理解はない(高橋ら, 2004)。

<sup>114</sup> 鶴若麻里 (2002) 『Spiritual Well-being』に関する研究の分析と動向；アメリカにおける高齢者の視座から』ヒューマンサイエンスリサーチ 11、80-98頁。

<sup>115</sup> 窪寺俊之 (2000) 『スピリチュアルケア入門』三輪書房、13頁。

力を発揮する」という視点は、老いと死を身近に感じている超高齢期の人々と近似する心性とみることができる。

高橋らは、終末期における心の働きと同様の考え方をしていくならば、『古い』の過程は身体的、心理・精神的、社会的に大きな変化を体験する過程であると捉える。高齢者が自らの死を含めた老いの過程の中で、いかに全体的な健康バランスを保ちながら自己を見失わずに自分自身であり得るかは、まさに高齢者一人ひとりがもつスピリチュアリティの状況に依存することが大きい、と論じている<sup>116</sup>。

スピリチュアリティを4つめのサクセスフル・エイジングの要因としたクローザーらも、高齢者にとってスピリチュアリティは健康や well-being を導く重要な構成要素と断言する。トーンスタムの「老年的超越」は、加齢の進む超高齢期とスピリチュアリティを関連させた理論であると位置されている<sup>117</sup>。かつて、世界保健機構（WHO）の執行理事会において、健康の定義の追加として、spiritual well-being を加えることが議論された経過がある<sup>118</sup>。

ミラー（Miller）は、人間は人格の次元においては生理的・情動的・認知的統合体であるとした<sup>119</sup>。人格は、社会的・文化的条件に規定されるが人格の深層には、魂やスピリットという霊性の次元が認められると論じ、自我（ego）、魂（soul）、スピリット（spirit）という3次元の人間モデルを提示している。

これを受けて中川は、身体（body）、精神（mind）、心（heart）、魂（soul）、スピリット（spirit）の5つの次元からなる人間モデルを提案している<sup>120</sup>。「身体・精神・心が個人の人格を構成するものであり、魂とスピリットが霊性の次元である。人格の精神は主として思考の働きに、心は感情の働きに関わる部分である。魂は個人の内奥部分であると同時にスピリットへとつながるところである。ここでいうスピリットは、人間と世界の無限な深みを意味している」と解説する。

ミラーや中川らの理論は、超高齢期の精神次元を理解するうえでの示唆を与えてくれるものである。しかしながら、生活基盤やコミュニティ環境が超高齢期の人格形成に及ぼす影響までは明らかにされていない。

<sup>116</sup> 高橋正実・井出訓（2004）「スピリチュアリティの意味；若・中・高齢者の3世代比較による霊性・精神性についての分析」『老年社会科学』26（3）、296-307頁。

<sup>117</sup> Ahmadi, F. (2000) : Reflections on Spiritual Maturity and Gerotranscendence; Dialogues with Two Sufis, *Journal of Religious Gerontology*, 11, 43-74.

<sup>118</sup> 1998年の世界保健機構（WHO）執行理事会において、「健康」の定義にスピリチュアリティを追加する改正案が提起された経過がある。総会の議案としては採択されたが、議題として検討されるに至っていない。湯浅泰雄（2007）「霊性問題の歴史と現在」（湯浅泰雄（監）『スピリチュアリティの心理学；心の時代の学問を求めて』せせらぎ出版）、11-50頁。

<sup>119</sup> ミラー（1996）『ホリスティック教育』（吉田敦彦・中川吉春・手塚郁恵訳）春秋社（*The Holistic Curriculum 2<sup>nd</sup> ed*）。

<sup>120</sup> 中川吉晴（2005）『ホリスティック臨床教育学；教育・心理療法・スピリチュアリティ』せせらぎ出版、19頁。

超高齢者は、生活環境を基軸に、加齢に伴う身体的次元、心理的次元、精神的次元を統合しながら、超高齢期に適応するための人格を深めていく。例えば、老年的超越の徴候の一つである、万物とつながる宇宙的次元の超越は、彼ら／彼女らにとって、過去の人々とのつながりや未来につながる生を洞察する中で、人生の神秘として、スピリチュアリティが深まっていく過程と考えられる。

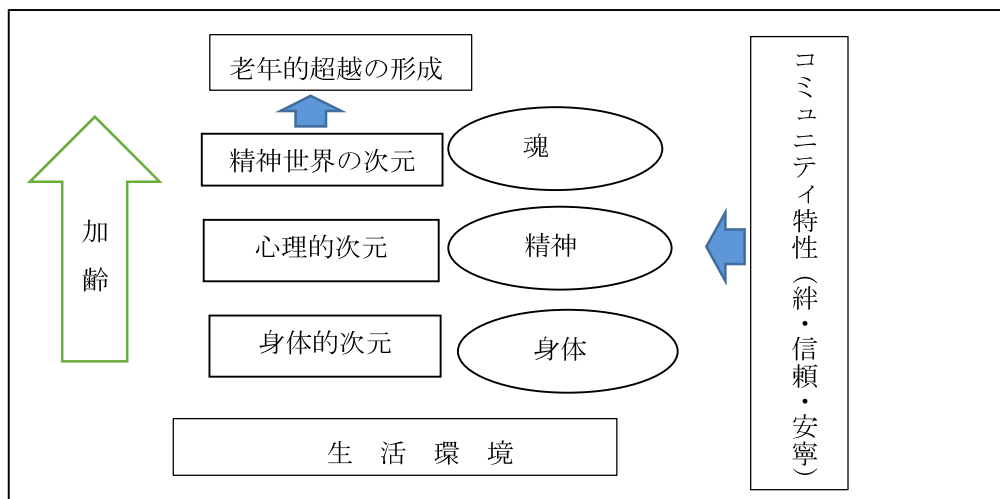
スピリチュアリティは、健康長寿と幸福な老いに関わる要因として、人間存在の根底にかかわって、生の意味や死を強く意識する超高齢期においてこそ、深く洞察されるべき課題であると考えられる。

## 5 おわりに

本章では、先行研究を踏まえ、超高齢期の生物的・心理的・社会的特性を明らかにしてきた。ここでの超高齢者の精神世界は図表 1-4 のように理解される。

つまり、加齢に伴う脆弱化する身体と向きいながら超高齢者は、身体次元では老いる身体を受容して生きる存在である。心理的次元においては、老いの心が周囲とのきずなや信頼を深め、安寧の世界観を構築しながら老年的超越が形成されていく。奄美の超高齢者の長寿と幸福な老いを理解していくうえで、コミュニティ特性と老年的超越の形成は重要な視点と考える。次章で、詳しくみていく。

図表 1-4 人格形成に伴う老年的超越の形成





## 第2章 超高齢期の人間発達—老年的超越理論

### 1 はじめに

本章では、超高齢期の人間発達を老年的超越理論から理解していく。近年の医学、心理学や社会学における研究からは、老いは一様に衰退でなく多様であること、主観的幸福感が高齢期には少し下がるものの超高齢期には高まることなどが明らかにされている。しかし、その要因の特定までには至っていない。本章ではその要因について、「老年的超越 (Gerotranscendence)」理論<sup>121</sup>を踏まえ明らかにしていく。

本章で取り上げる老年的超越理論は、従来の通説にはなかった、老いに伴う人間の精神発達に注目した理論である。大衆長寿化の中で増加している元気な超高齢者の多様な活躍や幸福感の源泉を理解する上で、注目される理論である。

筆者は、老年的超越理論は、特に超高齢期の心身の脆弱化に伴う機能低下や喪失を超えて老いに適応し、生きる技を獲得していく超高齢者の活動性や精神的次元、潜在能力を理解する上で、有効な理論と位置付けている。

#### 1.1 サクセスフル・エイジングの理論背景

かつて社会老年学では、退職後の望ましい生活に関し2大理論が議論されてきた経過がある。いずれも当時高齢化の先進国であったアメリカで議論された理論である。その一つの活動理論 (activity theory) は、引退後も引退前の活動水準を維持することが幸福に老いるための必要条件であるとする理論である<sup>122</sup>。この理論は、「活動度が大きければ大きいほど生活満足度は高い」とする、社会活動と高齢者の主観的幸福感の関係を追及したものである。

一方の離脱理論 (disengagement theory) は、老化とは個人が社会体制 (social system) や人間関係から徐々に減じて行く不可避な撤退 (withdrawal) として、離脱 (disengagement) の過程に注目する。社会は能力の減退した高齢者を排除することで均衡維持のメカニズムが作用し、個人は加齢に伴う思考の減少などのパーソナリティの変化を伴い、社会的離脱によって個人の幸福感も高くなるとする理論である<sup>123</sup>。

これに対し、アチェリー (Atchley) は、高齢期の適応に関して活動理論も離脱理論もともに適切ではなく、個人のパーソナリティの継続が重要とする連続性理論 (continuity theory) を主張した<sup>124</sup>。つまり、中年期までに形成した行動パターンを保ちつつ変化に対処していくのが高年期の望ましい適応様式とする。

<sup>121</sup> Gerotranscendence は、Tornstam, L (1987) によって提唱された理論で、ギリシャ語の老人 (Geront) と英語の超越 (Transcendence) を合わせた合成語である。

<sup>122</sup> Lemon, B. W., E Bengtson, V.L. & Peterson, J.A. (1972) An exploration of the activity theory of aging, *Journal of Gerontology*, 27:511-523.

<sup>123</sup> Cumming E, & Henry, W. E. (1961) *Growing old: The process of Disengagement*, Basic Books, New York.

<sup>124</sup> Atchley, R.C. (1989) A continuity theory of normal aging, *The Gerontologist*, 29,183-190 頁。

しかし、高齢期の適応に関するこれら理論は、結局未結着のまま、サクセスフル・エイジングのさまざまな研究が進展していくことになる<sup>125</sup>。

## 1.2 トーンスタムの異議申し立て

これら議論に対する異議申し立てとして、トーンスタム<sup>126</sup>は「老年的超越」理論を提示する。つまり、これまでの社会老年学におけるサクセスフル・エイジングは、白人中年世代がもつ西洋文化（western culture in the white middle-class）の継続と価値観である。しかし高齢期には、中年期の活動の継続と安定ではない、加齢に付随した内的スピリチュアルな発達がある。それらが叡智へ向かう成熟であり、この老年的超越傾向は、人に一般的に認められる傾向であることを論じているのである<sup>127</sup>。

トーンスタムがこの理論を提示した背景には、高齢者に対する一般的見方と社会老年学の実証データから得られたものとの間の齟齬（mismatch）をあげる。例えば、高齢期は惨めで、孤独の絶頂期で、退職の精神的なショックがあげられる。しかし、孤独は一般的なパターンであるより特殊なパターンであること。自身の実証研究から、孤独を感じる一番大きなグループは20-29歳であることを明らかにする。また、退職の精神的ショックは一般的でなく、むしろ少数派であることなどをあげる。

このような実証データにもかかわらず人々は、高齢期は惨めだと思っていることを指摘し、学者は自身の仮説の正しさを強調し事実を無視する傾向にあると非難する。これらの度重なった理論と実証データとの間の齟齬の要因として、中年期の価値観や活動パターンを高齢期に当てはめていることは、高齢期へ向かう見通しを誤って分析することになるという確信を導き出すのである<sup>128</sup>。

## 2 老年的超越理論の理論枠組み

### 2.1 加齢と老年的超越

トーンスタムが老年的超越理論の提示に至るには、かつて否定された離脱理論の新たな理解に到達したことにある<sup>129</sup>。彼は、西洋哲学から東洋哲学における禅僧の哲学的視座に目を向ける。禅僧の瞑想に励む生活は独自の解放された世界であり、禅では主体と客体の分離が意味のないものとして消し去られ、また過去、現在、未来は分離

<sup>125</sup> 古谷野旦（2003）「幸せな老いの研究」古谷野旦・安藤孝敏（編）『新社会老年学—シニアライフのゆくえ』ワールドプランニング、141-152頁。

<sup>126</sup> Tornstam, L. (1989) Gero-transcendence; A meta-theoretical reformulation of the disengagement theory, *Aging: Clinical and Experimental Research*, 1(1),55-63頁。

<sup>127</sup> Tornstam, L. (2017) 『老年的超越：歳を重ねる幸福感の世界』富澤公子・タカハシマサミ訳、晃洋書房(Gerotranscendence ; A Developmental Theory of positive Aging, Springer, 2005)。

<sup>128</sup> Tornstam (2005・富澤ら訳2017) 前掲書、35頁。

<sup>129</sup> 彼の最初の論文(1989)は、「Gero-transcendence ; A meta-theoretical reformulation of the disengagement theory」(離脱理論の再定義化)となっていることから伺える。

したものでなく、同時に存在していると考え<sup>130</sup>。

このような考え方は、ユングの「集合的無意識 (the collective unconscious)」のなかにも見いだされる。祖先の経験が子孫に反映され、受け継がれ、心の中に構造化される。そういう意味で、「集合的無意識」は幾つかの世代、個々人、場所とつながり、境界はないものであると考える<sup>131</sup>。

つまり、禪者が住む世界は西洋社会でいう離脱とは異なる世界で、西洋社会の思考法からは認識できない「超越」の世界である。加齢を意識することなく禪者の感覚へ近づく過程とみなせば、禪や超越のことについて何も知らないにもかかわらず、我々はある程度の超越段階へと到達することができる。そして我々の幾人かは、更に高次の段階へすすみ、現実についての新たな定義へ到達するとみなすことができると考える。

トーンスタムは、加齢の進行は基本的には老年的超越へと向かう過程とみなす。また、生活満足の問題は、中年期の物質主義的で合理的な観点から、加齢に伴う宇宙的でかつ超越的な観点へのメタ・パースペクティブな変化と捉える。しかし、さまざまな社会要因や危機によって促進されたり、妨害されたりする。トーンスタムはその妨害要因の一つに、「老年的超越」傾向にある人に対する世間の誤解を強調する<sup>132</sup>。

## 2.2 超越次元

トーンスタムは、インタビュー調査から得られたさまざまなデータをもとに、3つの次元から発達の兆候を示している。3つの次元とは、「宇宙的なつながり」の次元、「自己の次元」、「社会と個人の関係の次元」である。以下に、それぞれの兆候を見ていく。

### 2.2.1 「宇宙的なつながり」の次元

「宇宙的なつながり」の次元には、次のような5つの兆候が認められる。

- ①「時間と幼年期」の兆候。時間の定義の変化や幼年期への回帰、現在と過去の境界を超越し、時には新たな意味が付加されるなどである。
- ②「過去の世代とのつながり」の兆候。愛着の増加、認識の変化、つながりから生命の流れ（鎖）がより重要になる。
- ③「生と死」の兆候。死への恐怖が減少し、新たな生と死の理解に達する。
- ④「人生の神秘」の兆候。人生の神秘を受け入れる。

<sup>130</sup> トーンスタム (2017・富澤ら訳) 前掲書、39頁。

<sup>131</sup> ユング派のなかには瞑想によって、「集合的無意識」に到達できるとするものもあり、ここに東洋的哲学との関連性が見いだされ则认为。

<sup>132</sup> トーンスタム (2017・富澤ら訳) 前掲書、45頁。

- ⑤「悦び」の兆候。大きな出来事からささやかな経験へと、小さな世界を通して大きな世界を経験する悦びを感じるようになる。

### 2.2.2 「自己」次元

2つ目の次元は「自己の次元」である。5つの兆候が認められる。

- ①「自我対峙」の兆候。自分自身の隠れた善悪の両面を発見する。
- ②「自己中心性の減少」の兆候。自己中心性が取り払われる。
- ③「身体的超越の発達」の兆候。身体のケアは継続するが、個人はそれに悩まされることはない。
- ④「自己超越性」の兆候。利己主義から利他主義へ移行する。
- ⑤「自我統合」の兆候。ジグソーパズルのような人生の断面が、全体を形成することを認識する。

### 2.2.3 「社会と個人の関係性」の次元

3つ目の次元は、「社会と個人の関係性の次元」である。5つの兆候が認められる。

- ①「意味の変化と関係の重要性」の兆候。より選択的になり、表面的な関係に興味を示さなくなり、孤高の時間の必要性が増大する。
- ②「役割の遂行」の兆候。自己と役割の違いを理解し、時には役割の放棄をすることになる。結果、新しく居心地の良い役割の必要性を理解する。
- ③「解放された無邪気さ」の兆候。人生における無邪気さは成熟さを促進させる。社会の慣習を不要とする新しい超越への可能性である。
- ④「近代禁欲主義」の兆候。富の重荷を理解し、禁欲という自由を発達させる。
- ⑤「日常の叡智」の兆候。善悪の表面的な区別を嫌うようになり、判断やアドバイスをすることをやめる。善悪の二元性の超越と広い心や寛容が増加する。

以上のような兆候が老年的超越の発達によって見られると仮定し、トーンスタムはこれらの理論を量的実証研究から深めていく。

## 3 老年的超越理論の実証<sup>133</sup>

### 3.1 トーンスタムの実証研究

#### 3.1.1 調査の枠組み

トーンスタムは、1989年にインタビュー調査に基づく老年的超越の兆候を発表後、思弁的と受け取られかねない理論を検証するために、量的調査を実施する。1つは、1990年のデンマーク人（男女912人）を対象とした回顧的研究<sup>134</sup>である。年齢は74

<sup>133</sup> トーンスタム（2017・富澤ら訳）前掲書第4章（82-153頁）から抜粋。

<sup>134</sup> 回顧的研究とは、過去の事象について調査する研究（retrospective study）のことで、後ろ向き研究

歳から 100 歳である。2 つ目は、1995 年スウェーデン（男女 2,002）人を対象とした横断的研究である。この調査は年齢 20 歳から 85 歳を対象としている。3 つ目は、回顧的研究で、1990 年と同じ調査項目で行っている。対象は 65 歳から 104 歳のスウェーデン人（男女 1,771 人）である。

### 3.1.2 調査尺度

研究 1 と研究 3 の回顧的研究に用いられた尺度 1 は、次の 10 項目である。研究 2 に用いられたのは尺度 2 である。いずれも、回答は肯定か否定の 2 件法で行われている。

#### 尺度 1

##### <宇宙的な次元>

1. 50 歳の時の自分と比較すると、今の私は生と死の境界線が曖昧になったと感じる
2. 今の私は、個人の生とは永遠に続く生命に比べ、なんて取るに足りないものなのだろうと感じている
3. 50 歳の時の自分と比較すると今の私は、万物との相互の繋がりをいっそう強く感じている
4. 今の私は、物理的にどこか別の場所にいる人々に対しても、その存在を身近に感じるが多々ある
5. 今の私は、過去と現在の間隔にはないと感じている
6. 今の私は、過去と未来の両方の世代に対し、強い親近感をおぼえている

##### <自我の次元>

7. 今の私は、以前に比べてそれほど自分自身のことを重視しなくなった
8. 50 歳の時の自分と比較すると、今の私は物に対してあまり価値を見出さなくなった
9. 今の私は、うわべだけの人間関係にあまり興味がない
10. 50 歳の時の自分と比較すると、今の私は考えたり思案したりするなど、自分の内的な世界に喜びを感じる

#### 尺度 2

##### <宇宙的な超越>

1. 宇宙全体とのつながりを感じている
2. 自分は全ての生きているものの一部と感じる

---

と呼ばれているが、ここでは、回顧的研究と訳している。

3. 他の場所にいる人々の存在を強く感じることができる
4. 時折過去と現在に同時に生きているように感じる
5. 以前の世代との強いつながりを感じる

<一貫性>

6. 人生は混沌としており混乱しているように感じる
7. 人生は一貫しており、意味がある

<孤高>

8. 1人のほうが他者というよりもよい
9. 新しい人々との出会いを好む
10. 穏やかに思索することが人生にとって重要である

### 3.1.3 結果

#### ① 1990年の実証研究

尺度1を用いた探索的因子分析の結果からは、「宇宙的な超越」と「自我の超越」の2つの下位次元が抽出された。高い段階にある超越者は生活満足感と社会活動がともに高いこと、また、思索のための孤高も必要であるという結果を導きだす。

#### ② 1995年の実証研究

尺度2を用いた調査は、人生の危機（Life Crises）は発達のプロセスを触媒するという仮説に基づいて行われた。尺度2からは、3つの下位次元（「宇宙的な超越」、「一貫性」、「孤高」）が抽出されている。また、人生の危機は「宇宙的超越」の発達に貢献すること、危機を経験することで「孤独の欲求」が増大し、「内的一貫性」の感情が減少することを明らかにしている。

一方で、「一貫性」と「孤高」は、個々人が危機を経験するかしないかに関わらず、年齢の高い層では同じような状況を示すことを明らかにしている。

#### ③ 2001年の実証研究

尺度1を用いて行なわれ、対象者は65歳から104歳の回答者から得られたデータから論考されている。1995年の対象年齢が85歳までであったことから、この研究では高い年齢層に焦点が当てられている。

結果、老年的超越の次元として、前回と同じ「宇宙的な超越」、「一貫性」、「孤高」の3つの次元の発達的变化と、全般的に年齢の高い層での老年的超越の発達が深まることを明らかにしている。

またこの調査では、新たに社会の中に織り込まれた社会属性的因子（ジェンダーや結婚形態）と偶発的因子（病気や人生の危機）が老年的超越の発達にどのような影響を与えるかについて多くの因子で分析している。その結果は、「年齢、活動性、居住地」の3つのみに関連するという結果であった。

### 3.2 老年的超越とスピリチュアリティの関連

トーンスタムの研究では、老年的超越とスピリチュアリティとの関連を実証した記述はみられない<sup>135</sup>。しかし、老年的超越理論は高齢期のスピリチュアリティの発達と関連するとして一連の研究がある。アーマディ (Ahmadi, F.,) は、老年的超越の発達と宗教が与える影響について 2 つの仮説を立てて実証を試みている。一つは、個々人の考え方において神秘的な考え方の内面化 (the internalization of mystical-type ideas) が老年的超越的な人生観に関係する因子であるということ。二つは、近代社会の個人主義や世俗主義が老年的超越へと向かう発達を遅らせるということ<sup>136</sup>。

結果、老年的超越へ向かう発達において、文化の影響があるとする文化の普遍性と、個人主義の老年的超越への影響を指摘している。加えて、長生きによる経験が発達に必要であり、老いることは老年的超越へ到達する前段階として見逃してはならないことを明らかにしている。

ブラムら (Braam, et al) は、宇宙的な超越と人生の意味の枠組みとの関連を調べて、宇宙的超越と人生の意味の枠組みの間には明確な関係が観察されること。この関係には宗教的なかわりはなく、宇宙的超越次元は、女性や 75 歳以上の高齢者、未亡人の中でより強く見られたと論じている<sup>137</sup>。

## 4 超高齢期における老年的超越

### 4.1 第 9 段階 (超高齢期) と老年的超越

第 9 段階の課題を老年的超越と設定した J.エリクソンは、第 9 段階の適応として、第 8 段階の「統合」(それを導く力「叡智」)とは異なる「老年的超越」という概念を提示する<sup>138</sup>。彼女は、超高齢期は多くの新たな困難や喪失体験や自分自身の死がそう遠くないことを感じるに至る。

しかし、これらの喪失を生き抜く足場は人生の出発点で獲得した基本的信頼感という恵みが与えられていると論じる。そして、第 9 段階のさまざまな失調要素を甘受し、これを乗り越えるには「叡智」ではなく、「老年的超越」に向かう道に前進することである、と示唆するのである。

賢明な老人は、身を引いて、「隠遁と孤独の中で初めて自分のあり方についてゆっく

<sup>135</sup> Dalby, P. (2006) Is there a process of spiritual change or development associated with aging? ; A critical review of Research, *Aging and Mental Health*, 10, 4-12.

<sup>136</sup> Ahmadi, F. (2001) Gerotranscendence and Different Culture al Settings. *Aging and Society*, 21 (4), 395-415.

<sup>137</sup> Braam, A. W., Bramsen, I., van Tilburg, H. M., Van der Ploeg, H. M., & Deeg, D. J. H (2006): Cosmic transcendence and framework of meaning in life: Patterns among older adults in the Netherlands, *Journal of Gerontology: Social Sciences*, 61 (3), 121-128.

<sup>138</sup> Erikson E.H & Erikson, J. M. (1997) 前掲書。

りと考えることができる場所を見出すのであろう」と述べる。

一方、トーンスタムは、エリクソンは第 8 段階の叡智について明確に説明することなく、また第 9 段階の老年的超越が哲学的パラダイム・シフトであることを理解することなしに、老年的超越に近付いたと記述している。トーンスタムは、叡智は日々の生活過程で形成される哲学的な視座への移行と捉える。そこには物質的な執着から、より宇宙的な超越への移行があり、通常は満足感を伴い、この叡智が老年的超越に関連すると説明する。

さらに、トーンスタムは、エリクソンの発達モデルと同様、老年的超越は加齢に伴う発達の過程と見なしている。しかしながら、エリクソンの指す自我統合は、自分の生きてきた人生を基本的に受容する後ろ向きの統合のプロセスであること。一方、老年的超越は現実の再定義を含み、前向きの世界観であると論じている<sup>139</sup>。

#### 4.2 エリクソン仮説の実証

J.エリクソンは、第 9 段階の課題として老年的超越を実証研究から導いたものではないが、エリクソンの仮説を実証した研究結果がある。

ブラウンら (Brown & Lowis) は、第 8 段階の高齢者と第 9 段階の高齢者を比較した実証から、老年的超越は第 9 段階で有意に認められたとして、エリクソン仮説が支持されたことを明らかにしている<sup>140</sup>。

星野は、100 歳代の認知症女性へのナラティブ分析から、身体感覚の超越、他者とのかかわりの超越、人生観の利他性が見受けられたし、老年的超越性は老年後期の死への移行過程に適応する生涯発達途上に生じる現象と位置づけている<sup>141</sup>。

#### 4.3 老年的超越：超高齢期を測る理論的道具

トーンスタムは、老年的超越理論は、今までの社会老年学の理論では十分にカバーされていない個人の加齢のプロセスのある側面を理解するうえで有効であるとする。老年的超越理論は、現実の一部を理解するための理論的道具になりうると説明している<sup>142</sup>。老年的超越理論は、特に、第 9 段階に達した超高齢者の人々の精神性に寄りそうことのできる理論といえよう。

J.エリクソンが示唆するように、新たな肯定的な精神的贈り物、それは喪失からもたらされ、また、老いや死の受容との関連でもたらされるものかもしれない。老年的

<sup>139</sup> Torstam (2005・富澤ら訳 2017) 前掲書、194 頁。

<sup>140</sup> Brram A. W, Bramsen I, van Tilburg TG, et al. (2006) Cosmic transcendence and framework of meaning in life ; Patterns among older adults in the Netherlands, *The Journal of Gerontology Series Psychological Sciences Social Science* ,61B(3), 121-128.

<sup>141</sup> 星野和美 (2006) 「老年後期の心理社会的発達としての老年的超越性 ; 高齢期のナラティブによる検討」『人文論集・静岡大学人文科学部』、5、35-42 頁。

<sup>142</sup> トーンスタム (2017・富澤ら訳) 前掲書、5 頁。



超越理論は、超高齢期の幸福感の高まりや精神次元での潜在能力を洞察するうえで、魅力的な理論と筆者は考える。

#### 4.4 老年的超越：ケアの場での看護スタッフの見方

入居者の老年的超越行動の“兆候”について、介護施設での看護スタッフは、どのように解釈するかという実証がなされている<sup>143</sup>。

老年的超越行動の兆候は、例えば、時間や空間の定義、身体の超越、自我の統合や解放された無邪気さといったことが含まれるが、このような行動に気付いていたとき、スタッフがそれらをどのように解釈しているかを聞き出している。

看護教育を受けてきたスタッフの一般的な解釈からは、これまで慣れ親しんでいる病理学の知識が頻繁に引き合いに出され、認知症と間違えられることが多々あるということであった。スタッフは、老年的超越行動は叡智や成熟へ向かうポジティブな発達の一部というよりも、むしろ認知症や鬱、薬の服用の症状であるのではないかという理解であった。しかし、老年的超越行動は、認知症や鬱、薬を服用していない高齢者によくみられるのである。

スタッフが気付いた様々な老年的超越行動の程度は、全スタッフが気付くものから数人のスタッフが気付くものまで、幅広く分散している。以下は、入居者の徴候とそれに対するスタッフの解釈と老年的超越理論からの理解を示してみる<sup>144</sup>。

##### ① 時間の超越

入居者が時々、過去と現在の時間の境界が消え去ったかのように行動することを語った。学生時代の話をもろで昨日のように、何年か前に亡くなった親戚をまだ生きているように。

⇒スタッフは、これらは認知症、混乱状態と解釈したが、老年的超越理論では、時間の超越は健全な高齢者にもみられる、発達の現象と理解する。

##### ② 孤高への欲求の増加

入居者は多くの人との表面的な交際よりも1対1のコミュニケーションにこだわり、孤高の欲求が高まる行動を語った。

⇒スタッフは、これらの行動は引きこもりや、一緒にいるエネルギーがなくなったからと解釈した。しかし、老年的超越理論では、これら孤高を求める傾向は、社会との関係性が再定義された結果とみる。孤高への高まりはウエルビーイングにとって重要なことと見なされる。

##### ③ 小さな出来事の悦びに気づく

入居者が、ささやかことに喜びを見出す傾向を多くのスタッフが語っている。

<sup>143</sup> スウェーデンの高齢者用サービスハウスで働いている看護師や介護士へのインタビュー調査。

<sup>144</sup> トーンスタム（2017・富澤ら訳）第5章（154-183頁）「実践での老年的超越」の一部である。

⇒スタッフはこれらを、社会的欲求が満たされていないことや、意図しない孤立や孤独の兆候と解釈した。しかし、老年的超越理論では、超越した個人は、人生の悦びに対する見方が目を見張るような出来事から、自然体験やごくありふれたものに変わる結果と解釈できる。

#### ④ 幼年時代への回帰

入居者が、自分の幼年期について喜んで語っていることを多くのスタッフが認めている。

⇒スタッフはこれらを高齢者が多少脚色をしたり、現在の辛い思いを避けるためには過去を容認することが必要だからと語る。しかし、老年的超越理論では、これまでの人生で蓄積された経験に基づいて幼年時代を回帰し、再解釈するという徴候であると解釈する。

#### ⑤ 過去の世代とのつながり

入居者が、過去の世代や未来の世代との親近感が増えることについて、全てのスタッフはこの傾向に気づいていた。

⇒スタッフは、こういう行動を肯定的に捉え、活動理論と関連して理解されていた。過去の世代や未来の世代との親近感が増えることは、老年的超越の発達の特徴の一つである。

#### ⑥ 自我の統合

入居者が、人生について考えたり語ったりすることはスタッフ全員が共通の現象として語っている。

⇒スタッフはこの兆候はエリクソン理論と一致すると確信している。老年的超越理論では、回想の必要性の増大と関連して、人生を語るのはポジティブに生きてきた人生を受容したということであると解釈する。

#### ⑦ 近代的禁欲主義

多くのスタッフは、高齢者が物質的ものへの関心が低くなったと語る。

⇒スタッフは、これらの行動をネガティブに理解し、人付き合いの減少や社会との距離を置く行動と解釈している。老年的超越理論では、高齢者の価値観は物質的でないものをより優先する傾向になると解釈する。

#### ⑧ 自己超越

入居中の高齢者の利他的な自己超越に気付いたスタッフもいた。

⇒この兆候に対し、スタッフは、利他的行動の多くは病気、諦めの兆候と解釈していた。老年的超越理論では、利己主義から利他主義への移行は老年的超越の特徴である。

#### ⑨ 死への恐怖の減少

多くのスタッフは高齢者が死を怖がらないと思っている。しかし現実には、少数

のスタッフのみが報告していた。

⇒スタッフは、歳をとるにつれて近づいてくるからと受け取っているが、老年的超越理論は、死を受け入れているのはポジティブな発達の側面と解釈する。

#### ⑩ 自己対峙

スタッフは自己対峙というよりも高齢者の多くは頑なさを表していると見ていた。

⇒老年的超越の理論によれば、自分自身の新たな一面を発見する自己対峙は、老年的超越の発達の一部といえる。

#### ⑪ 身体の超越

高齢者の身体的超越に気付いていたという報告は、ほとんどなかった。一方で、多くのスタッフは、身体に対する強迫観念の事例を多く観察していた。

⇒スタッフの誰一人として、身体的超越を発達面からは解釈していなかったことは注目される。身体的超越は、老年的超越理論では、“ノーマル”な老年的超越の一つの兆候として分類される。

#### ⑫ 日常の叡智

入居者の日常の叡智を見出したスタッフも数名いたが、スタッフはほとんどの高齢者を批判的に見ていた。

⇒日常の叡智は、決して批判的になるのではなく、寛容な傾向である。老年的超越理論においては、日常の叡智は老年的超越の発達の一部である。

### 4.5 老年的超越の実証上の課題

次に、日本で老年的超越理論の実証研究をする際の課題についていくつか述べる。

#### ① 尺度の課題

年齢の上の方で老年的超越が高まるという示唆は、超高齢期の内的世界を紐解くうえで有効な概念と受け取れる。しかし、トーンスタムの尺度は思索的で、そのまま日本語に訳することは誤解が生じるおそれがある。したがって日本で超高齢期の人を対象とする場合、超高齢者の日常において理解されやすい項目の尺度を作ることが課題となる。

#### ② 対象者の課題

トーンスタムは年齢との関係（年齢の上の方での老年的超越が高いこと）を明らかにしているが、それを最終段階である超高齢期との発達課題とは見ていない。対象者を85歳以上の超高齢者とすることによって、J.エリクソンが第9段階の超高齢者の発達課題と位置づけた仮説を実証することができ、また、同じ尺度で高齢期と比較することで、年代の違いが明らかとなり、それぞれの高齢期の課題を理解するうえで有効な方法となる。

#### ③ 超越次元

老年的超越は文化に普遍的であると論じられる視点からは、北欧での「老年的超越」の2つの次元が日本においてはどのようにあらわれるか、また、国内の異なる地域でどのような老年的超越の形成が明らかにされるのかが課題となる。

以上の問題意識を持って、第7章において、老年的超越の量的研究、第8章において質的研究を行っていく。

## 5 おわりに

老年的超越理論は、長い人生の過程で形成されていく経験や叡智、スピリチュアリティなどの潜在能力に光を当てている。これらは超高齢者のポジティブな心性としての「老いの成熟」の多様な側面であることを明らかにした理論と評価できる。

加齢に伴って超越傾向が高まることは、古代のライフサイクルにも多くの記述がある。タルムードの「箴言（しんげん）」には、長寿者が到達する特別の力として畏敬の念が示され、孔子の「論語」にも70歳を一つの完成像として示されている。インドのヒンデュー教においても、理想的人生の理想的な過ごし方として「四住期」というライフサイクルでは、後半の段階は自然成長的な超越として示されている<sup>145</sup>。

したがって、老年的超越という概念は、特別新しい概念ではないであろう。しかしそのような長寿者の持つ特別の力の存在は、これまで科学的には解明されてこなかった分野である。

これに対しトーンスタムは、インタビュー調査から得た老年的超越傾向の確信を基に、数量的な尺度を用いて、科学的に実証した。彼は社会老年学者の立場から老年的超越という概念を提示し、特別の修行者でなくても一般の高齢者にも、加齢に伴って超越傾向がみられることを明らかにした。

この理論によって、超高齢期には老いに伴う喪失感を超えた新たな精神的次元の発達と、若い時期とは異なる価値観や世界観の変容を経て到達する新たな幸福感の形成が理解されるのである。加えて、超高齢者のライフスタイルは一様でないことも理解され、超高齢者の多様な理解や精神的な安寧に資する道を開いたといえる。

加えて、本稿ではあまり触れられなかったが、老年的超越理論は介護の現場においても有効な手法となっている。従来引き込みりと誤解された高齢者の中には、積極的に孤独を好む高齢者であることが、正しく理解できることになる。

トーンスタムのケアの現場でも明らかにされたが、筆者のインタビューでも、デイサービスの既存のプログラムに興味・関心がないためにデイサービスにいかないという男性超高齢者が割合に多かった。この場合、単に人と接するのが苦手だとか、引きこもりで消極的という理解が一般的であるが、自分の内的世界を楽しみ、一人で過

---

<sup>145</sup> 河合隼雄（2009）『生と死の接点』岩波書店、12-30頁。

すことに喜びを見出している場合が多い。

老年的超越理論は、このような超高齢者の行動傾向を正しい理解につなげる理論であり、超高齢者の多様な世界観や価値観を認め、発見でき、処遇に生かすヒントがある。トーンスタムらはスウェーデンの施設で老年的超越理論を介護職員に教授し、介護現場での処遇に生かしている。

大方の人にとって、超高齢期というライスステージが用意された今、ポジティブな老いの次元に注目し、価値観や世界観の変容を経て幸福感が深まることが理解されると、衰退だけでない老いの未来に希望が持てる。老年的超越理論は人生後半の発達に伴う幸福感を紐解く理論として有効である。

また一方、超高齢者の潜在能力に注視したとき、超高齢者は過去の世代から未来へ世代をつなぎ、地域の伝統文化を若い世代に引き渡しする存在でもある。長い年月の中で技や文化、習慣や信仰を体化した超高齢者の存在は、地域の無形の資本としてみることができる。老年的超越理論はそのような無形の財としての超高齢者理解にも資する理論でもある。

本研究において、日本の超高齢者が理解しやすい老年的超越尺度から老いの成熟を実証したいと考える。第 3 部からの実証研究において、日本における老年的超越について、量的・質的両面から 3 つの実証研究を実施し、超高齢期の老年的超越形成を明らかにしていく。

### 第3章 奄美にみる長寿の地域経営と社会経済システム

#### 1 はじめに

##### 1.1 「奄美」のコミュニティへのまなざし

現在、多くの地域コミュニティは、人間関係における“つながり”や“きずな”を失って人々が孤立し、地域の持続的な発展がますます困難になっている。特に、若さや経済的合理性を重んじる都市部では、地域固有の文化の崩壊、近隣との交流の希薄化などによって、高齢者／超高齢者は地域での居場所を失っている。彼ら/彼女らの潜在能力は評価されず、地域固有の歴史や文化、技やノウハウなどを次世代に伝承する術がない。

しかし、日本の地域コミュニティの実態をより詳しく研究すれば、多くの困難に直面しながらも、祭りや伝統文化が継承され、相互扶助、結いの機能の発揮など、“つながり”や“きずな”の強固なコミュニティを発見することができる。その典型例として、奄美のコミュニティに注目したい。

奄美における持続的発展の鍵となるのは、「健康長寿を実現しうる地域経営」と呼ぶにふさわしいコミュニティであり、そこに根つき機能している社会経済的システムである。ここでは、健康長寿を体現した超高齢者たちが、彼ら/彼女らの人生において体得してきた祭礼・仕事・生活などにおける知識・ノウハウ・職人の力量などが、目には見えない無形の文化資本となって蓄積されている。彼ら/彼女らはシマの文化を再生産する担い手となって、次（現役）世代との学びあい・育ちあいによって文化資本が継承され、地域の創造的発展に寄与する姿をみることができる。

##### 1.2 本章の目的

本章では、奄美のシマにおいて、健康長寿を実現しているコミュニティ内部の諸要因を明らかにしていく。これらの要因を解明するうえで欠くことのできないのは、地域コミュニティにおける長寿社会基盤と、年金などの社会保障制度と関連する社会経済システムに注目することである。さらには、これら2つの接点にある固有の自然や文化資源に光を当てると、地域の自立的発展につなげる「地域経営」という視点と、それらを長寿・超高齢社会にどのようにマネジメントしていくかという大きな研究課題が浮かび上がってくる。このような意味で、地域コミュニティと社会経済システム両者の解明の糸口ともなる「文化資本を活かした地域経営」に注目し、総合的に検討する。

さらに進んで、奄美のシマの「文化資本を活かした地域経営」やマネジメント力を、人生100時代に向けた「健康長寿のまちづくり」へのモデルとしての可能性についても検討するものである。

### 1.3 「文化資本を活かした地域経営」とは何か

近年、地域経済の疲弊やグローバル化の進行による国内産業の空洞化、国家財政のひっ迫化を背景として、地域再生、地域活性化、地域づくりといった、地域に企業経営的手法を導入する「地域経営」への関心が高まっている。これらは、国、都道府県、市町村がそれぞれの危機意識を背景に、これまでの、公共財やサービスをパターンリズム（父子主義・干渉主義）的に上から下へ一方的に供給するのではなく、国が地方の自治体に独立採算経営を指導し、多様な主体が連携して地域全体を「経営」していくという潮流である。

つまり、人口減少対策と地域活性化が結びついた地方創生の議論を踏まえ<sup>146</sup>、これまでの地域活性化政策に見られた国土開発的な地域開発、地域振興でなく、個々の地域が個性（地域力）を発揮してこそ、日本全体の持続的発展が保証されるというマクロな視点がある<sup>147</sup>。

そのような流れの中で、本章で検討する「地域経営」は、自治体を単位とする地域経営ではなく、集落を単位とする地域コミュニティである。長寿時代の国民的課題である「健康長寿」をそれぞれの地域コミュニティで実現するための、「文化資本を活かした地域経営」とそのありかたである。本章での、「文化資本を活かした地域経営」とは、地域の全構成員（子どもからお年寄り）が主軸であり、地域コミュニティにおいて産・官・学とのコラボレーションによって、「各自が風土・仕事・暮らし（生命と生活）の中で体得した文化資本を活かしあい健康長寿を実現する地域の経営」という意味である。

さらに、長寿地域を「文化資本を活かした地域経営」として注目する視野の先には、経営学の対象の広がりがある。これまで、「企業経営を主な研究対象としてきた経営学は、20世紀の末葉から研究対象の拡大を図り、行政のほかに、NPO、さらに地域などの経営（マネジメント）をも取り扱い始めている」<sup>148</sup>という認識である。このような研究対象のひろがり、これまでの企業経営中心に発展してきた経営学の知見や考え方を、今日的な課題解決に役立てようという胎動でもあると捉えられる。本研究において長寿地域の地域要因や支援要因を明らかにするためには、経営学の知見や成果を取り込むことで、これまで見えなかったものがみえてくると思考している。

本章では、長生きを支援する奄美のシマの地域経営、マネジメント力に光をあてる。

<sup>146</sup> 中川雅之（2015）「特集『地域創生』にあたって」『日本不動産学会誌』No.29（2）、27頁。

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jares/29/2/29\\_27/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jares/29/2/29_27/_pdf)（2019/3/10閲覧）。

<sup>147</sup> 内閣府経済社会総合研究所（2009）「地域経営の観点からの地方創生に関する調査研究報告書」

<http://www.esri.go.jp/jp/prj/hou/hou041/hou041.pdf>（2019/3/10閲覧）。

<sup>148</sup> 斎藤毅憲（2007）「地域経営論教育の発展」[www.soka.ac.jp/files/ja/20170420\\_204117.pdf](http://www.soka.ac.jp/files/ja/20170420_204117.pdf)（2018/6/20閲覧）。

奄美のシマにおける自治力（区長を中心とした自治能力の高さ）、教育力（伝統を基盤とした次世代への文化・ノウハウの伝授力）、経済力（現物経済の機能）を含む地域力の諸要因を、長寿を支えている地域経営として考察する。

加えて、奄美の地域経営、マネジメント力の企業の「健康経営」<sup>149</sup>への波及、さらに、「健康長寿のまちづくり」への視点も考慮に入れながら検討する。

## 2 奄美のシマにみる「地域経営」

### 2.1 社会経済システムへの新たな視座

社会経済システムは、人々の日々の生活をより良くするために機能するシステムとして、これまでは市場経済システムを中心に機能してきた。しかし、近年のグローバル化や地球環境問題などによる世界的潮流の変化、加えて、国内的には少子高齢化や価値観の多様化などの構造変化の進行により、従来の政府や市場メカニズムだけでは対応できない社会的課題が噴出してきている。

これらを背景に政府は、日本の社会経済システムの変革・活性化を促すために、「新しい社会経済システムの構築に向けたNPO、企業、政府が協働を行うための提言」などをまとめ、新しいシステムによる価値の創出とその供給のためのあり方などが議論されるに至っている<sup>150</sup>。このような機運の中で、今後は、NPO、ボランティア、社会企業家などの協働による構造改革や新たな価値創造への取り組みが期待されている。

本章では、社会経済システムを長寿・超高齢社会の到来に対応し、人々の健康長寿と幸せな老いを実現するために機能するシステムとしてとらえる。そこから、奄美のシマにみられる文化資本を活かした地域経営を明らかにしようとしている。

### 2.2 奄美のシマの資本と超高齢者

奄美の産業は、サトウキビを主軸とした第3次産業の比率が高く、郡民所得は県民所得の87.5%、国民所得の72.9%と低い<sup>151</sup>。しかし、豊かな自然の恩恵を受け野菜や果物や魚介類が豊富で、近隣との野菜やおかずなどの交換が日常的に行われ、現金は少なくとも生活できる環境がある。経済資本では測れない奄美の資本の豊かさがある。それら資本は、人々が自然や歴史から学び、先祖とつながって蓄積してきた賜物でもある。

奄美の超高齢者は、辛酸な歴史や自然の脅威に晒され、過酷なサトウキビ労働に耐

<sup>149</sup> 田中滋ら（2010）『会社と社会を幸せにする健康経営』、勁草書房。

<sup>150</sup> 地球産業文化研究所（2003）『新しい社会経済システム構築に向けたNPO、企業、政府が協働を行うために提案』[http://www.ggispri.jp/newsletter/200302-3\(2019/2/12 閲覧\)](http://www.ggispri.jp/newsletter/200302-3(2019/2/12%20閲覧))。

<sup>151</sup> 鹿児島県大島支庁（2017）『平成27年度奄美群島の概要』<http://www.pref.kagoshima.jp/>（2018/5/28 閲覧）。



え<sup>152</sup>、祭りや伝統行事を継承し、シマの文化と人々の結束を高めてきた。奄美に伝わる島唄や八月踊りはそのような歴史から生まれた労働歌であり、恋愛歌であり、親孝行の歌でもある<sup>153</sup>。奄美の人々にとって祭りや伝統行事は、労働を再生するエネルギー源として必要なものであることを歴史から学んできたからである<sup>154</sup>。

そして今日、若い頃の過酷な労働は超高齢期でも働ける丈夫な体をつくり、働くことに楽しみを見出す趣味ともなっている。加えて、シマの祭りや伝統行事などでの役割があり、今でも地域貢献できる生活に自身の存在意義を感じている。

加えて、超高齢者の潜在能力に注目すると、彼ら/彼女らは地域の無形の文化資本として、シマの伝統文化を後世に伝え、大島紬などの伝統産業を興隆させ、地域振興に寄与してきた。そのような地道な努力が実って、長寿の時代に、健康長寿と幸せな老いを実現している。奄美の固有の自然資本、文化資本、社会関係資本の存在が、超高齢者の長寿要因と関連する要因として浮かび上がってくる。

### 2.3 奄美のシマに機能する社会保障

一方で、そのような文化資本を内蔵し超高齢者を支える暮らしのベースには、全国的システムである人権保障や社会保障制度がある。奄美のほとんどの超高齢者は、少額の年金を基礎とする生活である。しかし、超高齢期でも自らの働きで得られる現金収入の場がある。そこには、年金額の少ない超高齢者への行政や集落の人々などの配慮がある。

収穫した野菜は、行政が設置した無人市や手作りの店で販売することができる。集落によっては、収穫した野菜を若い世代が中央市場に持っていくシステムを作っている。加えて、行政からの長生きを支援する祝い金・年金制度がある。敬老祝い金制度は奄美の殆どの市町村で制度化されている。

シマの超高齢者が祭りや伝統文化にかかわる余力ができたのは、社会保障制度による年金や健康保険により健康が支えられることも大きい。さらに、超高齢者は年金を現金収入の基礎としながら、自治体が給付する敬老祝い金などと併せて、衣食住、移動、交流の機会などを活かす経済力を保持するようになった。敬老祝い金制度は、超高齢者にとっては長生きが評価されることであり、また、日ごろお世話になっている子や孫にプレゼントできる資金ともなる。

超高齢者は、自立・自給・贈与経済をも生かし、老いと関係する経験や叡智、超越

<sup>152</sup> 立松和平 (2006)『立松和平 日本を歩く第6巻：沖縄・奄美を歩く』勉誠出版、288頁。彼は「これまでいろんな仕事をしてきたが、砂糖キビ刈りほど難儀な仕事を知らない」と述べている。

<sup>153</sup> 中原ゆかり (2007)『奄美のシマの歌』弘文堂、20-24頁。

<sup>154</sup> 桜井徳一郎 (1984)「結集の原点：ハレとケとケガレの相関桜井徳一郎編『ハレ・ケ・ケガレ 共同討議』青土社、219-235頁。

等の潜在能力を持続・創造する人々として、シマにおける文化資本と経済資本の再分配システムが機能している。奄美における社会保障システムは、長寿者を支えるとともに、世代間の共生をも実現している。

## 2.4 社会保障システムにおける都市と農村の相互連関

### 2.4.1 社会保障制度の都市から農村への波及

社会保障制度は、地域における基本的人権の保障基盤として機能し、個人の自立をも可能としてきた。さらに、旧共同体の負の遺産を克服し、市民の経済的な自立を確保しながら、文化資本を身につけた超高齢者層の教師的位置を支え、他方で、次世代と学びあい・育ちあう協働の関係をも生み出してきた。奄美においては、個の自立を損ないがちな共同体の欠点を克服し、個と共同のバランスを確立させてきたといえる。

この視点から見ると、農村部における個の自立を支えた要因として、都市における工場法体系や労働法、社会保障体系は貴重な貢献を行ったといえる。このような都市の労働者が勝ち取った成果によって、伝統的共同体の持つ文化や技の継承や創造的発展の可能性が拡充してきたのである。

つまり、奄美のシマにおいても都市からの影響を受け、社会保障システムによって、次（現役）世代から超高齢者層への所得再分配が行われ、これに自給自足経済が付加されて、超高齢者層の貨幣資産＋現物資産、すなわち、経済資本が形成される。

この経済資本を基礎に、超高齢者層は伝統祭礼文化、産業文化、生活文化とかわる。そして、これまで蓄積してきた、自己の文化資本を活かして、次（現役）世代との学びあい・育ちあいの場を生み出し、文化の再分配システムを機能させる。文化の再分配システムが教養や職業能力の形成につながり、現役世代の所得を生み出す基礎、つまり、稼得能力としての経済資本を生み出す。

さらにこれらの成果は、農村と都市のコミュニティの再生ともつながっていく。都市における工場法を出発点とする人権・学習システムや社会保障システムが、農村における社会教育システムや学校教育に波及し、義務教育の基礎の上に、地域コミュニティや伝統の技と文化の持続的発展が実現してきた。義務教育課程での伝統芸能などの学習も行われてきた。都市から入ってきた制度が農村の伝統芸能や文化を支えたのである。

これらの歴史を振り返ると、今後は、逆に、農村のコミュニティのきずなや持続的発展のモデルが、伝統文化が廃れ、つながりが希薄になった都市のコミュニティの再生や持続・発展にどのようにつなげていくかが課題となってくる。

## 2.4.2 農村から学ぶ都市のコミュニティ再生

しかしながら、今日、ファイナンシャル・ジェロントロジー<sup>155</sup>や金融ジェロントロジー<sup>156</sup>の研究の視点から見えてくるのは、農村にあるつながりやきずなを活かした超高齢者の安心・安全ではない。これらの議論では、超高齢者は、脆弱な消費者・経済障害者として、どう守るか、健康寿命と資産寿命をいかに伸ばすか、などの個人的課題としてのみ議論される傾向がある。

確かに、貨幣経済が普及し経済資本のみに関心が集まる都市の生活では、ファイナンシャル・ジェロントロジーや金融ジェロントロジーから学ぶことは重要ではあろう。しかし、健康寿命と資産寿命だけでは超高齢期の生活の質や生きがいを高めることはできない。

超高齢者は社会的弱者として守られる視点も重要であるが、同時に、超高齢者の主体的な生き方やいきがいを支援するという視点も重要である。そのような視点を農村コミュニティから学び、その成果を都市が取り入れるという交流・学習システムも必要な時代ではないだろうか。

つまり、自立しつつ、学びあって成長してゆく超高齢者の増大こそ、健康寿命の延伸につながり、医療費の削減にもつながり、現代的課題解決にもつながる。都市における生活文化を基軸としたコミュニティの再生こそ、超高齢者の自立と生きる目標につながるだろう。都市にも、地域の伝統文化や祭りがあり、再生すべき貴重な生活習慣があるのだから。

## 3 長寿地域の共同体コミュニティ

### 3.1 奄美のシマにおける文化資本を活かした地域経営

奄美の人々は、シマと呼ばれる集落に一群になって居住している。シマは、かつての日本の伝統的共同体の基盤が形成されている。集落の自治が機能し、祭りや伝統行事が継承され、祭りの担い手として年長者の役割や居場所がある。(都市部ではネガティブな高齢者観が蔓延しているが、)奄美では、先祖や年長者を敬う習慣や目上の人には尊敬語が使われるなど、超高齢者の地位が高い。これらは、シマの人々による、シマの超高齢者の長生きを支援する、シマのマネジメントが機能しているとみることができる。

自治力でみると、シマは、みんなで選んだ区長を中心とした民主的自治が機能している。シマでは、祀りごとや行事の日程をはじめ、決め事は全員の参加で話し合わせ、

<sup>155</sup> 駒村康平 (2018)『超長寿社会における社会経済システムの課題を学ぶ ～ソーシャル FP ネットワーク主催 公開セミナー』<http://www.social-fp.net/posts/4434162/> (2018/9/20 閲覧)。

<sup>156</sup> 清家篤 (2017) 金融ジェロントロジー『「健康寿命」と「資産寿命」をいかにのばすか』、東洋経済新報社。rcfg.keio.ac.jp/publications/books/768(2018.10.5)。

その結果が行政に報告されている<sup>157</sup>。

シマの中心には、人々が一堂に会することのできる会議室と厨房設備を備えた集会所<sup>158</sup>がある。その横に土俵がある。奄美のシマには、集会所と土俵はセットである。集会所は、集落の人々が集い、学びあい・育ちあいの場として身近な存在であり、学習や情報を共有する場となっている。加えて、土俵は集落の象徴である。豊年祭や敬老行事では相撲大会が行われ、夜には土俵の周りで奄美の伝統的民謡の島唄<sup>159</sup>や八月踊りが盛大に行われる。

このような祭りや伝統行事、習慣や信仰が継承されている奄美のシマでは、100歳を超えても一人暮らしができる環境がある。日々の暮らしは自然の営みとともにあり、流れる生活時間もスローである。これらは、超高齢期でも自分のペースで安心して暮らすことができる環境となっている。加えて、生まれ育った馴染みの関係の中で、隣人との濃密な交流があり、住民同士のきずなは強く、頂いたり、差し上げたり、相互扶助、結いの習慣が機能している。

奄美の超高齢者は、シマに伝わる儀式や踊りの所作、習慣、農作業のノウハウなどを次世代に伝える役割を担っている。超高齢者になっても、培った経験やノウハウ、叡智などの潜在能力を発揮する場や役割、居場所がある。それゆえ、奄美では年齢が重視され、長寿者の地位は高く、会合や敬老会でも上席が用意されている<sup>160</sup>。一方で、元気な活躍を身近に見ている若い世代は、年長者を敬い、尊敬の言葉で労るなど、敬老意識も高い。

祭りの儀式や伝統行事によって、人々のつながりやきずなが強固になっている一方で、個の自立を尊重する習慣がある。例えば、人々は条件が許せば、可能な限り子供と独立した生活を望む。奄美では、独立・対等の精神が旺盛である。この傾向は、一重一瓶慣行<sup>161</sup>にもみられる。この慣行は、宴会などへの参加の際には、自分の料理とお酒も持って参加するという形式で、奄美独特の習慣である。奄美には、もともと本家分家の制度や身分の上下関係がなく、人々は対等・平等意識、食べ物の公平な分配など、大らかに暮らしてきた。

つまり、奄美のシマでは、区長を中心とした自治能力の高さ、伝統を基盤とした次世代への文化・ノウハウの伝授・教育力、現物経済の機能が長寿を支える要因となって、文化資本を生かした地域経営が機能しているといえる。

---

<sup>157</sup> 祭りの日程が集中したとしても行政は介入できない。

<sup>158</sup> 集会所は、公民館や生活館など、補助制度によって名称が異なるが、奄美の各集落には土俵とともに、必ず1カ所ある。

<sup>159</sup> 島唄は、それぞれのシマの唄である。8886調の短詩形歌詞を三味線を伴奏に歌う唄。小川学夫「奄美の島唄を通してみた生きた文化の伝承」、『想林』第4号、41-52頁。

<sup>160</sup> 町長でも会合の席は年齢順となる。

<sup>161</sup> 石川雅信（1993）『奄美の家族と『一重一瓶』』村武精一・大胡欣一編『社会人類学からみた日本』河出書房新社、142-154頁。

### 3.2 長寿地域の共同体機能と超高齢者の役割

長寿地域である奄美や京丹後市、遠野市に共通するのは、伝統的共同体コミュニティを基盤に祭りや伝統行事、年中行事が継承され、相互扶助の結いの習慣が機能し、人々のつながりやきずなが強いことである。京丹後市においても<sup>162</sup>、遠野市においても<sup>163</sup>超高齢者には祭りや儀式を次世代に伝統を引き渡す役割が機能している。

長寿地域の超高齢者は支えられる側だけでなく、生活の技やノウハウ、潜在能力を開花させ地域に貢献しているのである。そのような、きずなのあるコミュニティ環境の下で、超高齢者は生きる目標がある。自立した生活を営む中で、長生きを楽しんでいる実態がある。

このような奄美や京丹後市で機能している超高齢者と地域のコミュニティの関係性は、かつての日本各地の共同体で普遍的にみられたものである<sup>164</sup>。しかし、近代化の中で封建制度の負の部分として切り捨てられていった。加えて、経済の高度成長の過程で、都市への人口集中に伴い、農村の崩壊、稲作文化の衰退などの中で、地域固有の自然や祭り・伝統などは見捨てられていったものである。

しかし、近年、高度成長の負の部分がクローズアップされてきている。日本の各地では、地域固有の自然や文化、祭りが失われ、人と人のつながりが希薄化し、社会的孤立が問題化している。激しい生存競争の中で長時間労働や過重労働などから、自由時間も失われている。家族内のふれあいや対話も少なくなり、子どもの養育・教育環境は劣化している。コミュニティのきずなが失われ、世代を超えて、ストレスフルな生活が蔓延している。(被災地をはじめとして、)きずなの再生が課題となってきている。

### 3.3 長寿時代における共同体への関心

そのような潮流の中で、人と人とのつながりやきずなの再生・復活、持続可能な社会への構築など、全国的に生きる場の再創造として、地域コミュニティを捉えなおす動きが出ている<sup>165</sup>。拡大成長路線ではない新たな定常型社会のコミュニティづくりの提案<sup>166</sup>、里山に新たな事業可能性を提案する動き<sup>167</sup>など、超高齢社会の進展の中で、地域再生に向けた地域経営のあり方にシフトした議論や模索がでてきている。併せて、こ

<sup>162</sup> 富澤公子 (2018c) 「長寿地域における長寿の地域要因と支援要因の分析；京丹後市を事例として」『大阪ガスグループ福祉財団調査・研究報告集』Vol.31、13-19 頁。

<sup>163</sup> 富澤公子 (2015) 「遠野スタイル；超高齢者生き生き物語」遠野みらい創りカレッジ編『地域社会の未来をひらく；遠野・京都二都をつなぐ物語』水曜社、88-99 頁。

<sup>164</sup> 天野 (2006) 前掲書。

<sup>165</sup> 内山節 (2010) 『共同体の基礎理論；自然と人間の基層から』農文協。

<sup>166</sup> 広井良典 (2009) 『コミュニティを問い直す；繋がり、都市、日本社会の未来』筑摩書房。

<sup>167</sup> 藻谷浩介 (2013) 『里山資本主義；日本経済は「安心の原理で動く」』角川書店。

れまで否定的にみられてきた集落共同体のポジティブな側面に注目する動きが出てきている<sup>168</sup>。

一方、長寿化の中で、元気な超高齢者の増大が顕著である。祭りや伝統行事が継承されている長寿地域の共同体では多世代が交流するコミュニティの場あり、そこでは、若い世代は負担感の増大というネガティブな視線はない。超高齢者に対し、先覚者、教師として位置付け、自分たち自身の老いのポジティブな将来像を彼ら/彼女らの姿にみている。このような地域コミュニティ環境の創出こそ、長寿時代の世代間の共生と、社会の持続的な発展を生み出す源となるであろう。

以下では、かつての地域コミュニティがもっていた機能を改めて見つめ直し、超高齢時代の地域コミュニティのあり方に焦点を当てていくことにする。

## 4 コミュニティ・集落・共同体の再考

### 4.1 コミュニティの概念

「共同体」を意味する英語は、コミュニティ (Community)<sup>169</sup> である。社会学小事典 (有斐閣) では、「コミュニティの社会学的含意は、一定地域の住民が、その地域の風土的個性を背景に、その地域の共同社会に対し特定の帰属意識を持ち、自身の政治的自立性と文化的独自性を追求すること」に示されるとする。加えて、「コミュニティの規定自体が多義的で、そのことがコミュニティ概念の曖昧さにつながっている」と指摘している。

コミュニティという概念は、マッキーヴァ (R. H. MacIver)<sup>170</sup> が社会学の中で初めて用いたものである。彼は、アソシエーション (association) という社会集団概念 (ある共通の関心、あるいは目的を追求するために組織された集団や社会) に対比する形で用いた。彼は、「コミュニティは、村や町や国とか、広い範囲の共同体のいずれかの領域を指すのに用いようと思う」とした。多義的な概念とされるコミュニティの中で、「地域性」が看過できない重要な要素と位置づけている。

加えて、「コミュニティは有機的な統一体でなく、精神的統一体である。コミュニティは社会的存在の共同目的と相互依存目的に依拠している。単一ではなく複数の心の連合である」と解説する<sup>171</sup>。

のちに、ヒラリー (G. A. Hillery) は、コミュニティの定義を詳しく分析し、94 ある定義の中で、「領域 (aria)」、「共通のきずな (communities)」、「社会的相互作用 (social

<sup>168</sup> 内山 (2009) 前掲書。

<sup>169</sup> ドイツ語の共同体を意味する語はゲマインシャフト (Gemeinschaft) で、地縁、血縁、友情などにより自然発生した有機的な社会集団のこと。ドイツの社会学者フェルディナント・テンニースがゲゼルシャフト (Gesellschaft: 機能体組織や利益社会) の対概念として提唱したものである。

<sup>170</sup> マッキーヴァ, R.H. (2009) 『コミュニティの社会学的研究; 社会生活の性質と基本法則に関する一試案』中久雄・松原通晴監訳、ミネルヴァ書房。

<sup>171</sup> マッキーヴァ, R.H. (2009) 同書、101 頁。

interaction)」の3つが最低限の共通項で、「領域」、「共通のきずな」、「社会的相互作用」の順番で重要性が増す、とまとめている<sup>172</sup>。

広井は、経済が成熟化し、人と人のあり方が流動化・多様化するこれからの日本社会の課題を考える中心には、コミュニティというテーマがあると指摘する。広井のコミュニティの定義は、「人間が、それに対し何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助(支え合い)の意識が動いているような集団」としている<sup>173</sup>。

一方で、今日のコミュニティは、人口減少などの経済構造の変化、価値観の多様化などによって、人々の生活を安定させてきた様々な仕組みが機能不全を起こしている感がある。安心して暮らせるコミュニティの場の確保は、長寿・超高齢社会においてこそ最優先されるべき課題でもある。広井の指すコミュニティへの帰属意識や連帯、きずなの再生への希求は、これからのコミュニティに課された課題として浮かび上がってくる。

次に、人間と自然が共生していたかつての日本の共同体のコミュニティについて、再考してみよう。

#### 4.2 日本の集落共同体の成立史

日本の集落は、かつて、部落共同体、村落共同体、小地域共同体などと称されてきたものである。奄美では、集落のことをシマと呼んでいるが、シマと称される奄美の社会集団は、農村社会学者の鈴木栄太郎が地域区分したなかの、最小の集団である「字」にあたる<sup>174</sup>。

日本の集落は、変化の激しい日本の自然の中で、日本固有の<自然と人間との共同体>として生み出されてきたものである。集落は人間が自然の中で生きていくための最小限必要な地域的集団の単位であり、家集団の能力では不足なために、20~30戸が同じ地域に寄り合って創ったグループである<sup>175</sup>。

集落はそれ自身、歴史と伝統を持った完全な民間組織であった。ある家が屋根の葺き替えとなると、自分の鍬と刈った藁を持って集まる。祝言や葬式となると手伝い、晴れ着を着て参列する。田植えや稲刈りも同様であった。江戸時代に村役人や5人組制度ができて、こうしたルールは乱されなかった。明治以降も、上から町村役場や地方議会、隣組、町内会がつくられても、それとは一応独立した二重の組織として、

<sup>172</sup> 鈴木弘(1978)「ヒラリー/コミュニティの定義」『都市の社会学<増補>』303-321頁(Hillary. G. A (1955) Definition of community; Areas of agreement, *Rural Sociology*, 20 (2) 、111-123頁)、誠信書房。

<sup>173</sup> 広井良典(2009)『コミュニティを問い直す:繋がり、都市、日本社会の未来』筑摩書房、9-11頁。

<sup>174</sup> 鈴木は農村の社会集団を、第1(字)、第2(村落)、第3(村、町)の地区に分けられた3層と見ている。鈴木栄太郎(1970)『鈴木栄太郎著作集第4農村社会の研究』未来社、48頁。

<sup>175</sup> 色川大吉(1974)「近代日本の共同体」、鶴見和子・一井三郎編『思想の冒険』筑摩書房、236頁。

ひっそりと生き続けてきたのである<sup>176</sup>。

薩摩藩の厳しい支配下にあった奄美のシマにおいても、役人は血縁共同体としての強い紐帯を弱めることはできなかつたと記されている<sup>177</sup>。

そうした基底を形成する集落には、もともと「行政権」が割り込む余地はなく、理念上は各人が生産者であると同時に消費者であり、一人が全員のために、全員が一人のために働くという人間疎外のないタンジブルな(実態がある)世界として形成されていた。しかしこの共同体は、いつのまにか行政の末端組織である村落自治体や村機関と混同され、村役人の支配によって容易に変えうるものと誤解されていたのは、共同体が民俗学の世界とされ歴史研究の対象とされなかつたことにあるとされる<sup>178</sup>。

#### 4.3 日本の集落共同体の特徴

日本の集落共同体の特徴は、①自然と人間の共同体であること、②生の世界と死の世界が統合され、自然信仰と神仏信仰が一体化された共同体であるという点にある<sup>179</sup>。この点は、自然環境に左右されない風土から、人間との契約で成り立つ欧米の共同体とはっきり違う点であることが指摘されている<sup>180</sup>。

このような日本の共同体の特徴について、内山は、「進歩よりも永遠の循環を大事にする精神があり、合理的な理解よりも非合理的な諒解に納得する精神的基底が形成されている」とする<sup>181</sup>。そしてこの合意は、日本独自の自然と人間の間の矛盾（洪水の被害と反面作物が育つ）などに見られ、日本人はこのような矛盾を受け入れ、現実生活する知恵を身に着けていたと解説する。

内山の指摘する自然と人間の間の矛盾は、奄美のシマの生活にも見ることができる。台風の常襲地である奄美では、台風によって収穫直前のサトウキビがたびたび被害にあう。しかし、台風がもたらす雨は作物の実りにとっては欠くことのできない恵みの雨でもある。自然の豊かさと脅威に、共存しながらの生活がある。

このように、日本の集落の自治は、自然への畏敬の念を毎年の儀式を通して再認識するとともに自然に神の世界を見出し、神に祈りをささげることによって、自然を自分たちの世界に取り込んできた。日本の共同体は自然への信仰を抜きにしては語れない理由である。

柳田民俗学では、こうして死後自然となった人々を『祖霊』『ご先祖様』と呼んで敬った。ご先祖様は、山々の自然の世界と一体となって、田植えや稲刈りを見届けて帰

<sup>176</sup> 色川（1974）前掲書、237頁。

<sup>177</sup> 名越護（2006）『奄美の債務奴隷ヤンチュ』南方新社、281頁。

<sup>178</sup> 色川（1974）前掲書、237頁。

<sup>179</sup> 内山節（2010）『共同体の基礎理論：自然と人間の基層から』、農文協、16頁。

<sup>180</sup> 和辻哲郎（1979）『風土—人間学的考察』岩波書店、17-18頁。

<sup>181</sup> 内山節（2010）前掲書、農文協、40-43頁。



っていくと解説している<sup>182</sup>。ここには、生の世界だけでなく死の世界をも含めて展開し、それをつないでいるものは自然という認識がある。

#### 4.4 日本の風土と集落共同体

日本の共同体は、和辻が『風土；人間学的考察』の中で述べているように、風土によって規定された人間の存在構造の基盤である<sup>183</sup>。人間の存在とは、「ある風土下におけるある時の断面の人間存在に他ならない」とする。人間は、歴史と風土の二重構造に強く規制されている。そこには、「歴史と離れた風土もなく、風土を離れた歴史もない」として捉えられる<sup>184</sup>。

和辻は、日本を含む東アジアの属する「モンスーン型」の風土は、暑熱と湿気とが結合し、しばしば大雨・暴風・日照りなどの荒々しい力となって人間に襲いかかる。このような風土下では、人間は対抗することを断念させられ、忍従的にならしめられ、自然に対し受容的とならしめられる、と解釈する。日本の共同体にある強い結集の風土は、「モンスーン型」のなせる業として、「砂漠型」や「牧草型」の欧米の風土から現れる戦闘性や合理性とは異なることを指摘している。

一方、色川は、「日本の共同体は、数世紀にわたる底辺人民の叡智の結晶を宿し、おびただしい失敗の経験や惨苦の犠牲を通して考えぬかれ、創りあげられてきた、極めてダイナミズムに富む結衆の様式である」と論じている<sup>185</sup>。

奄美のシマの人々は、豊かな実りを与えてくれる自然が、時には凶暴な自然に変身するという環境をも受け入れ、シマの共同体にこそ自分たちの生きる「小宇宙」があると信じてきた。そして、人々は、自然の猛威や抑圧された歴史を内蔵する風土に規制されながらも、人間の共同体としての生と死を継承し、結いの力、伝統の力で、今日のシマにおける伝統文化を基軸とした生活を創りあげてきたことが了解されるのである。

## 5 共同体への新たな視座と再評価

### 5.1 共同体の捉えなおし

近代化の過程では、日本の共同体は人間が自然に緊縛され、土地に隷属されている前近代的な自然への隷属として描かれてきた<sup>186</sup>。共同体社会は欧米の市民社会に比して、「遅れた資本主義」として捉えられた。近代化はプラスであり、近代化は束縛から解放され、自由に生き生きとした個人となって、豊かな生活がもたらされると考え

<sup>182</sup> 柳田國男（1978）『先祖の話』『新編柳田國男集 5 日本の祭り/先祖の話』筑摩書房。

<sup>183</sup> 和辻哲郎（1979）『風土—人間学的考察』岩波書店、17-18頁。

<sup>184</sup> 安田喜憲（2011）『日本文化の風土』朝倉書店。

<sup>185</sup> 色川大吉（1974）「近代日本の共同体」『思想の冒険』筑摩書房、240頁。

<sup>186</sup> 大塚久雄（1955）『共同体の基礎理論』岩波書店、17-42頁。

られてきた<sup>187</sup>。

人々は近代化の過程や高度成長経済の発展の中で、自由で豊かな生活、利便性の高い暮らしを実現し謳歌してきた。このような潮流の中で、共同体は弱体化し、各地の伝統行事や祭りは廃れて、祭りを司ってきた長老の役割は消失し、超高齢者は経験や生活の技や叡智、潜在能力を発揮する場がなくなっていった。

一方で、経済の高度成長に伴って人々の所得は大きく増大し、経済的豊かの象徴としての強大な消費市場が生まれ、大量生産大量消費型の使い捨て文化が生活スタイルとして定着していった。農村から都市への人口移動の加速、農山村の過疎化、大都市の人口集中が進んでいった。

奄美においても、働き口を本土・都会へと求め、若者の人口流出が進み、相対的には、伝統行事の担い手や祭りも少なくなった。しかし、本土ほどの衰退ではなく、人と人とのつながりが弱体化するものではなかった。そこには、大企業の進出はなく、また、互助扶助の暮らしが必須となる離島ゆえの地理的条件もプラスになっていると考えられる<sup>188</sup>。

## 5.2 都会の荒廃と高齢者の地位の低下

しかし今日、気が付くと、個人がバラバラになって、人々は孤立、孤独、不安、空虚感、ストレスの高い生活に充満されている。都市での人口や生活の集中・進展に伴い、高度成長の負の部分も見えてきた。大気汚染や水質汚濁、工場公害などによる環境の悪化、人体への影響、近隣とのつながりも希薄化していった。経済的豊かさを手に入れ、「公」より「私」生活を重視してきた代償として、人と人とのふれあいの希薄化、物足りなさなど、こころの喪失を感じ始めている<sup>189</sup>。

退職後の高齢者は、地域や近隣との対話やつながりのない生活、地域や家庭での役割喪失などによって、社会的孤独が課題となっている。年金制度と引き換えに働く場を追われ、経済的には困窮しないものの、高齢者の地位は非生産的・依存的存在と位置付けられている。核家族化の影響や住宅事情から高齢者との同居も少なくなり、身近に高齢者と接触する機会のない若者の高齢者評価は低下している<sup>190</sup>。

人間と自然の関係が大きく変化した現代社会の行き詰まり感は、都市では砂漠化社会と評されるようなストレスフルな生活、不安感、行き詰まり感の蔓延となっている。一方、地球規模での環境問題や資源枯渇の問題が提起される。明治以降、そして第2次大戦後の日本が国を挙げて経済成長・拡大路線を走り続けてきた結果でもある。

<sup>187</sup> 内山（2010）前掲書。

<sup>188</sup> 生活物資の大半を移入に頼る島民の生活では、台風などで孤立すると助け合わないと生きていけないのである。

<sup>189</sup> 暉峻淑子（1989）『豊かさとは何か』、岩波書店。

<sup>190</sup> 天野正子（2006）『老いへのまなざしー日本近代は何を見失ったか』平凡社。

このような経済体制下で、つながりやきずなが失われたコミュニティでは、子どもの健全育成にも影響がある。いじめや不登校、非行は、学校だけの問題でなく、地域や家庭の問題が影を落としていることが多い<sup>191</sup>。高齢者だけでなく、若者にとっても生きづらい時代になっている。人々は、成長経済システムがもたらした負の部分に気づき始めている。内山は、次のように記している。

「資本主義の駒として人間が使われるばかりで、孤独、孤立、不安、行き詰まりという言葉のほうが、個人の社会にふさわしいことが明らかになってきた。代わって、関係性、共同性、結びつき、利他、コミュニティ、そして、「共同体」が未来へ向かった言葉として使われるようになった。農村＝遅れた社会という観念も消え、むしろ都会の荒廃のほうが話題になってきた」<sup>192</sup>。

### 5.3 共同体の評価：否定から肯定へ

人々の意識と社会は今、大きな転換期にある。そのような中で、共同体への評価も否定から肯定へと大きく変わってきている。ローカルな人と人とのつながりやきずななどの関係性を見直し、持続可能社会の構築など、生きる場の再創造として共同体を捉えなおす動きがある<sup>193</sup>。国を挙げての経済成長から、生活の場でつながる幸福感やコミュニティづくりへの提案がされている<sup>194</sup>。例えば、里山資本主義では、役に立たない「高齢者」から生きる名人としての「光齢者」に光が当たり、お金ではない大きな力となって、里山を活性化させている<sup>195</sup>。

長寿・超高齢社会の進展の中で、経済資本に頼らない地域のあり方への議論や共同体のポジティブな側面に注目する動きが出ている。このような動きの中で、奄美のシマに注目する意義は大きい。

例えば、今日の社会では、長寿を喜ぶよりも少子高齢化への危機感が大きい。しかし、奄美は、「長寿で子宝」の島として注目される。その理由には、百寿者率の高さと合計特殊出生率の高さがある。出生率では、伊仙町の 2.8 人をトップに全国市町村の上位を奄美の市町村が占めている。この「長寿」で「多子化」傾向は、奄美の島々の全域に共通してみられる傾向である。

鹿児島県はその要因として、①奄美における伝統的共同体を基盤とする祭りや伝統行事の多さ、②相互扶助や結いの習慣、「子は宝」という価値観、③ふれあい豊かなコ

<sup>191</sup> 森田洋司（2010）『いじめとは何か；教室の問題、社会の問題』中央新書、121 頁。

<sup>192</sup> 内山（2011）前掲書、2 頁。

<sup>193</sup> 内山、同書。

<sup>194</sup> 広井良典（2013）『人口減少社会という希望：コミュニティ経済の生成と地球倫理』朝日新聞出版、9 -14 頁。

<sup>195</sup> 藻谷浩介（2013）『里山資本主義：日本経済は「安心の原理で動く」』角川書店、58 頁。

コミュニティが機能していることをあげている<sup>196</sup>。奄美では、長寿者にとっても、子育て世代にとっても、安心して住みよいコミュニティを作り上げてきた。その結果、長寿・多子化ともいえる新たなコミュニティモデルを作り上げているのである。

#### 5.4 協働の持つ力

奄美は、GDP（国内総生産）の経済的指標では低位に属する地域である。しかし、経済的には豊かさではないものの、超高齢者の暮らしの満足感が高い<sup>197</sup>。この要因には、新鮮な果物や野菜、海の幸を交換し合う関係性の中で現物経済が機能していることがある。これらは、市場経済にはない地域の協働の持つ力でもある。

加えて、奄美には、自分たちの環境は自分たちで管理するという自治意識（道路の管理や清掃、結いの労働、危機管理）が強い。都会では何を買うにもお金が必要となるが、奄美では、自らの労働や気持ちの交換で成り立っている経済がある。労働奉仕でも、ボランティアという概念ではなく、共同体の当たり前の行為として成り立っている。

これらは、地域の経営という視点から見れば、自分たちの主体的な取り組みで自分たちの地域環境を保全・創造するというまちづくりを目指した地域経営といえる。このように、奄美では、経済資本を使わなくても労働力が創出できる社会経済システムが機能している。地域経営の原点にある「経営者は住民」という基盤は、奄美のシマには既にあるということである。

さらに近年、長寿・超高齢社会での地域コミュニティのありかたとして、健康長寿のまちづくりが模索されてきている。奄美のシマの実態から、健康長寿のまちづくりへの課題を若干検討してみたい。

## 6 地域創生と健康長寿のまちづくり

### 6.1 地域創生から地域経営へ

今日、地域に軸足が移行した地方創生、地域づくりの議論が盛んである。しかし鹿野は、地方創生という漠然とした捉え方でなく、地域という顔が見えるコミュニティの再生、そこから地域が自立していく地域経営という視点の重要性を論じている。鹿野は次のように指摘する<sup>198</sup>。

「地方活性化の議論には、総論あって各論なしで、それぞれの地域の人の顔が見えない空虚な議論に終始している。地域の創生、地域の活性化には、中央主導の施策ではなく、地域の自立、人々が自らの暮らしを営む地域の視点から構築

<sup>196</sup> 鹿児島県（2004）『平成16年あまみ長寿・子宝調査概要報告書』。

<sup>197</sup> 富澤公子（2009a）「ライフサイクル第9段階の適応としての「老年的超越」；奄美群島超高齢者の実態調査からの考察」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』（2）、327-335頁。

<sup>198</sup> 寺田篤志・平塚伸治・鹿野和彦（2015）『「地方創生」から「地域経営」へ；まちづくりに求められる思考のデザイン』仕事と暮らしの研究所、11頁。

されていくべきではないだろうか」。

「消滅するのは『自治体』であり、『民』ではない。地域には確かに危機がある。集落の規模が小さい、高齢化率が高い、消滅の可能性のある集落ではなく、『触れ合う機会がなくなった社会』が危機なのである」。

鹿野は、地方創生という漠然としたとらえ方でなく、地域という顔が見えるコミュニティの再生、そこから地域が自立していく地域経営という視点の重要性を論じる。

そして、鹿野の「触れ合う機会がなくなった社会こそが危機なのである」という指摘は、地域活性化の議論において、重要な指摘であると考えられる。

一方で、日本政策投資銀行チームが調査・研究を行った、地域振興プロジェクト『実践！地域再生の形成戦略；全国 62 のケースに学ぶ“地域経営”』では、従来型の地域開発から地域経営の時代としての成功事例が紹介されている。

ここには、地域の中でどれだけの人が行動し、どれだけ価値を生み出すことができるのかという、経営的発想が背景にある<sup>199</sup>。

鹿野氏や日本政策投資銀行チームに共通する重要な指摘にある触れ合いの重要性、顔が見える関係性などは、既に、奄美のシマには形成されているものである。コミュニティの基盤にある強固なつながり、老若男女がともに自立し役割を持って、顔が見えるコミュニティは、新たな地域経営の評価要因として、奄美がモデルとなりうる可能性がある。

## 6.2 奄美における地域経営、健康経営の可能性

近年、長寿時代を背景に、ESG 投資<sup>200</sup>の視点から企業の「健康経営」への取り組みに関心が高まっている<sup>201</sup>。2006年に国連は、投資家のとるべき行動として責任投資原則を打ちだし、ESGに配慮している企業を重視・選別して投資を行うことを提唱したのが契機とされる。「健康」は大きな項目である。これを受け、通商産業省でも「健康経営銘柄」制度などを作り、機関投資家に対し健康経営を推進している企業への働きかけを重視している<sup>202</sup>。

「健康経営」とは、企業が従業員の健康を配慮することによって、経営面でもプラスとなるという経営戦略で、従来の従業員への健康管理を単にコストと考えずに、生産性や創造性を改善する手段と捉える。したがって、健康経営は企業イメージの向上、リスク管理の観点からも重要性を増している。

<sup>199</sup> 寺田篤志・平塚伸治・鹿野和彦（2015）前掲書、11頁。

<sup>200</sup> ESGとは、環境（environment）、社会（social）、企業統治（governance）の略である。

<sup>201</sup> 尾崎弘之（2017）「健康経営と企業価値の向上」『関西福祉科学大学 EAP 研究所紀要』、11。

<sup>202</sup> 経済産業省商務・サービスグループヘルスケア産業課

[http://www.meti.go.jp/policy/mono\\_info\\_service/healthcare/downloadfiles/award\\_meigara\\_presentation.pdf2018/11/1](http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/healthcare/downloadfiles/award_meigara_presentation.pdf2018/11/1) 閲覧）。

この背景には、長時間労働などの労働環境の悪化によるストレス、うつや自殺、生活習慣病の増加、若年退職者の増加がある。このような労働環境の悪化は、仕事の効率や発想力も低下し、加えて、企業にとっても優秀な人材の確保からもマイナスである。本来、仕事は、経済力の確保だけでなく、生きがいや幸福感などの人生の質にもかかわるものである。

生涯を通じ健康で生き生きと働き続けることは、長寿の時代に生きる国民共通の課題でもある。加えて、従業員の健康への積極的な取り組みや働く環境に配慮することは、企業にとっても重要なステーク・ホルダーへの投資として、大きなプラスとなることである。

従業員の健康寿命の延伸の視点からは、奄美は、都会にはない、豊かな「自然資本」、祭りなど共同の歓喜をもたらす「文化資本」、触れ合いやきずななどの「社会関係資本」が豊かにある。これらを活用した、健康回復の地として健康経営を支援するという地域経営も、奄美のシマでは可能性があることであろう。

都会でのストレスを抱えた従業員を年のうち数か月、奄美で居住し、体もこころも健康を回復し、人間性と発想力を豊かにして都会に帰っていく。開放的な奄美の風土やシマの人々の大らかさ、伝統行事や祭りを楽しむ生活スタイルから、学ぶべきことは大いにあるであろう。

奄美の生活を体験することによって、企業の従業員にとっても生き方の多様性への示唆ともなる。また一方、奄美の人々にとっても、都会の風を受け入れることは大きな刺激となり、お互いの学びの場にもなる。

また、Uターン、Iターンをはじめ、二地域居住、そして、高齢期の一時期を奄美で暮らすという選択も一度しかない人生を豊かにするになろう。あるいは、ドイツなどで行われているクラインガルテン（滞在型市民農園）の日本版を、シマの人々の手で運営する地域経営の方策も考えられる。長い生涯の一時期、と私生活では経験できないう奄美の伝統文化に触れる生活をする 것도視野に入ってくる。

単なる滞在型の観光型でなく一定期間貸与された居住地の祭りや伝統行事と一緒に体験する。退職後の新たな故郷として、奄美の自然、文化、人との交流を、人生の一幕に取り入れるのもよいのではないだろうか。

以上からは、奄美のシマが蓄積してきた祭りやきずな、結いの習慣などの地域資源は、健康長寿時代の到来の中では、現役世代も退職世代も、そして、都市の住民にとっても心を豊かにする資源となろう。それらを提供することも、奄美の文化資本を活かした地域経営の大きな可能性もひろがってみえてくる。奄美のシマの人々が守り継承してきた生活文化は、本当の豊かさとは何かを示してくれるはずである。

## 7 おわりにー長寿・超高齢社会におけるコミュニティと地域経営への視座

本章では、奄美の長寿を支えるシマについて、実証を通じて明らかにする前に、共同体、地域コミュニティ、地域経営、社会経済システムなどに注目して論じてきた。今日の共同体コミュニティには、地域の歴史と先人の英知が蓄積している。

21世紀の今日、共同体コミュニティは、否定されるべきものではなく、現在の混迷からの脱却のための組織（資本主義化・近代化・私事化からの解放の拠点）として新たな評価がされるようになってきた<sup>203</sup>。岩本は、歴史的な視点からの、「ムラが持っていた個人の人格の成長に対する否定的作用は重視する」も、他方では「共同体が持っていた人間生活に欠くことができない再評価」として、「それを現代社会、あるいは将来社会への導きの手がかりとすることはできないのか」という問題を提起している<sup>204</sup>。この視点は、40年以上も前に提示されたものであるが<sup>205</sup>、今日においても新しい。「地域創生、まちづくり」は古くて、新しい課題である。

一方、奄美では、祭りや伝統・年中行事の継承を通じ、その時々新しい風にゆっくり反応しながら、集落の区長を先頭に人々が個性を発揮できる環境を脈々として作り上げてきた。その成果が現れたものである。そこには、地域の一人ひとりの顔が見えている。

したがって、きずなの再生としての「まちづくり」には、地域の歴史を踏まえ、祭りや伝統行事を、長寿者を含めた地域の構成員の力で再生していくという視点が重要視されるのである。内山は、「近代都市ではコミュニティ＝共同体は生まれにくい。変化していく速度が速いからである」とする。逆に、「農山村社会は、社会の基本的な部分が変わらないか、ゆっくりとしか変化しないときに力が蓄積される」と論じる<sup>206</sup>。

奄美には、ゆっくりとした生活リズムが流れている。これは、時間だけが忙しく過ぎる都会にはない、自然の流れとともにある生活スタイルである。人間の心の波長にあっているのかもしれない。その結果として、長生きが幸せな島・シマを形成しているようである。それは奄美にとどまらず、日本の各地域にも、長寿時代における地域経営のあり方への貴重な示唆を投げかけている。

第2部では、そのような奄美のシマの事例から、共同体の中での超高齢者の居場所、主体的な生き方、それを支えるシマのコミュニティの実際に光を当て、文化資本を活かした地域経営とそこに機能する社会経済システムに焦点をあて、論じていく。

<sup>203</sup> 岩本由輝（1978）『柳田国男の共同体論：共同体をめぐる思想状況』お茶の水書房 183頁。

<sup>204</sup> しかし、鶴見和子は柳田の描く共同体の中に、地縁、血縁のほかにも、個人が選んで取り結ぶ無数の人間観をあげ、共同体は個人の自立を助ける側面を強調している。筆者の奄美の調査でも結いの事例でみられる。

<sup>205</sup> 岩本（1978）前掲書、386頁。

<sup>206</sup> 内山（2011）前掲書、117頁。

## 第2部 奄美群島の歴史・文化とシマ（集落）のコミュニティ

第2部では、従来のGDP(国内総生産)の経済指標では低位に属する奄美群島の島々において、百寿者率<sup>207</sup>の高さ、出生率<sup>208</sup>の高さを実現し、「長寿で子宝の島」と称されている奄美群島(以下、「奄美」と略)の超高齢者の健康長寿と長生きの喜びを解明する。ここでは、現在につながるシマの結いや分かち合いの伝統、互いの人格を尊重しあう習慣に注目する。また、このような人格の相互尊重や成果の分かち合いの習慣を持つ、「個を尊重しあう伝統的共同体」ともいべき奄美のシマのコミュニティにも注目する。

現在の奄美の超高齢者を、仕事や生活、祭りや生活空間、年中行事、信仰、習慣などにまで立ち入って研究すると、そこには奄美が辿ってきた特異な歴史や固有の地理的条件が観えてくる。

奄美は、本土の歴史区分とは異なって、常に外部権力から抑圧されてきた。海上交通の要衝として重要な拠点にありながら、道之島として従属支配、砂糖島として搾取された過酷な歴史が明らかとなる。

このような特異な歴史を紐解くならば、日常の暮らしの中からも、シマ<sup>209</sup>の人々のご苦勞と抑圧からの解放における喜びの貴重な経験を認識することができる。歴史と地理(場)における、それらの文脈を踏まえつつ、現在の仕事、生活、祭りなどから「大らかな精神性」を見直すならば、今日の奄美における超高齢者の長寿と幸福な老いの客観的要因をも明らかにできると判断した。

これらを検討することが、次章以下の実証研究における奄美の長寿の環境要因を解明する理論的根拠を提示してくれると考える。

---

<sup>207</sup> 百寿者率は人口10万当たりの100歳以上の人口の割合をさし、長寿地域の指標として用いられる。

<sup>208</sup> 出生率は合計特殊出生率をさし、一人の女性が人生の間で産む子どもの数をさす。

<sup>209</sup> 奄美では、集落のことをシマと呼んでいるが、一部、沖永良部島では、宇と呼ばれている。



## 第4章 奄美群島の歴史と人々の精神性

### 1 はじめに

本章では、奄美の人々の苦労や歓びの歴史を紐解きつつ、歴史に翻弄されながらも、現代につながる仕事や生活、祭りや伝統行事などを伝えてきた奄美のコミュニティに注目する。そしてそれらは、奄美の人々をたくましく育て上げ、奄美のシマという場において超高齢者に体化され、人格として形成され、知恵やノウハウとして蓄積されていることにも注目する。さらに、奄美の超高齢者の超越的思考あるいは“精神的大らかさ”ともいうべきものに昇華されている実態にも注目して論じていく。

奄美の人々の歴史に寄り添い、奄美の人々が歴史から形成してきた大らかな精神性、—それは本土では消えつつある—に密着し、今の奄美が、「長寿と子宝」の島として脚光を浴びている要因、超高齢者の長寿と幸福感の要因を探っていく。

そして、超越や大らかさの背景にある、超高齢者の仕事や生活、祭りや習慣などにまで視野を広げると、その精神性をその客観的要因まで立ち入って研究することができる。加えて、奄美のシマに脈々と受け継がれている仕事や生活の技や文化、祭りや年中行事、習慣、価値観、文化性、自然への敬虔など、文化資産の存在が明らかにされる。それらを通じ、加齢に伴う身体機能の低下にかかわらず、超高齢者が健康長寿や満足感を維持している背景要因が明らかになると考える。

超高齢者の幸福感の醸成に関わる文化資産を民俗学的視点からも学びつつ、掘り下げることで、奄美の集落に残る祭りや伝統行事などの文化資本の役割や結の習慣などが、現在まで継承されている背景が解説可能となる。そしてそれらが、奄美の社会関係資本を豊かにし、実質所得だけでは測れない幸福度を高める要因として機能していることが考察される。超高齢者の超越の背景にあるものへも研究可能となる。

### 2 奄美の地域特性

奄美の地域特性について、奄美群島の概要（2017）<sup>210</sup>を踏まえて考察する。

#### 2.1 自然環境・人口

##### 2.1.1 位置

奄美は、鹿児島県大島郡に属する。北方は北緯 28 度 32 分、南方は北緯 27 度 1 分、東方は東経 130 度 2 分及び北方は東経 128 度 23 分の海域に飛び石状に連なった島嶼である。鹿児島市から航路距離で 377km～592km に位置し、離島の中でも特に本土から遠隔の地にある。群都機能のある奄美大島は、佐渡島に次ぐ第 2 の広さを有して

<sup>210</sup> 鹿児島県大島支庁(2017)『奄美群島の概要』。

いる。

有人島には奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、喜界島、徳之島、沖永良部島及び与論島の8島がある。総面積は約1200km<sup>2</sup>である。

### 2.1.2 人口・世帯数

市町村数は2006年の合併を経て現在は1市9町2村。人口は110,147人(2017)である。人口の39.2%が奄美市に住んでいる。人口の増減率は、平成22年から～27年の5年間で7.3%減(県平均3.4%)

で、県平均より減少率は3.9ポイント高い状況にある。

出所：「奄美群島の概要 2014」

図表 3-1 奄美群島の位置



世帯数は、49,517世帯(平成27国調)で、1世帯当たりの世帯人員は2.2人(全国2.38人)である。高齢化率は31.3%(全国26.7%)と高いが、町村によって高齢化率は40%台もある。これらを全国と比較すると、世帯人員では0.17ポイント少なく、高齢化率は3.6ポイント高い状況にある。

### 2.1.3 地形と気候

地形上では大きく二分され、奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、徳之島の5島は、主として古成層と火成岩からなる急峻な山陸性の地形であり、喜界島、沖永良部島及び与論島の3島は、琉球石灰岩(サンゴ礁)で低平な段丘状の地形である。

気候は亜熱帯・海洋性に属し、温かい黒潮は豊かな珊瑚礁の海を育み、魚や貝藻類の宝庫となっている。年間平均気温は摂氏21度前後で、鹿児島と比べると3.0℃高く、冬でも7~8℃で推移している。降水量は東京の約2倍で約3,000mm。四季を通じ温暖多雨である。

### 2.1.4 自然環境

亜熱帯の温暖多雨な自然環境の中で、多くの森は太古の姿で保存されている。なかでも、奄美大島にある金作原(キンサクバル)原生林は最も原生的な森林の一つとされる。日本を代表する亜熱帯広葉林として樹齢130年といわれる天然林のイタジイ(オキナワジイ)・イジュ・タブノキを主要樹林に、珍しいシダ類も多く、シダ・ヒカゲヘゴは高さ10メートルを超えるものもある。

イタジイは奄美の人々の暮らしに昔から関わって、炭焼き用や線路の枕木に使用さ

れたり、実は煮たり炒って食用にされてきた。また、奄美のいたるところで見られるソテツも奄美の人々の暮らしに深く結びつき、飢饉の時は種子や幹からでんぷんを取って食用になっている<sup>211</sup>。しかし、毒抜きが十分でないと命を落とすことにもなる。

また、貴重な天然記念物の野鳥類は 291 種類に及ぶなど、人も動物も豊かな奄美の森から恩恵を受けてきた。天然記念物のアマミノクロウサギは奄美大島と徳之島に生息している、生きた化石とも称される夜行性のウサギである<sup>212</sup>。

### 2.1.5 自然の脅威

奄美には、豊かな水、海、山、川、森、美しく貴重な大自然が島のいたるところにある。このような太古の自然が保全されてきた要因には、自然と共生した奄美の人々の暮らしがある。奄美の人々は自然に感謝し、自然の生態系を大事にし、自然との一体感をもった生活が営まれてきた<sup>213</sup>。

一方で、美しい自然や豊かな自然の恩恵の一方で自然の脅威がある。台風の常襲地域である。1981 年から 2010 年の 30 年間に 767 個の台風が発生し、そのうち奄美市の 500km 以内に接近した台風は全体の 2 割を占め、年平均 5.2 個が接近している。基幹産業のさとうきびは収穫直前に被害を受ける。特に近年はさとうきびだけでなく、家の半壊・倒壊などの被害も多く発生している。

加えて、珊瑚礁で出来た沖永良部島、与論島、喜界島を除いた 5 島には、人の生命を脅かす毒蛇（ハブ）が生息している。現在でも年間 50 人近い咬傷患者が発生している。このように、奄美の暮らしには自然の豊かな恵みの反面、自然の暴挙や日常の暮らしの中に、死の危険が潜んでいる。近年では、ハブを退治するためにマングースが導入されたが、逆にマングース<sup>214</sup>による生態系への被害や農業被害など大きな問題となっている。

### 2.1.6 産業と就業

奄美の農業は、サトウキビを基幹作目に、野菜、花き、畜産、果樹などの農業が営まれている。近年は、たんかん、マンゴー、パッションフルーツ、プラムなど温暖な気候のもとでの果物栽培も盛んになっている。

奄美の伝統産業は大島紬で、我が国の染色織物で最も古い伝統を持つといわれ、今

<sup>211</sup> ホライズン編集室（2000）『生命めぐる島奄美；もりと海と人と』南日本新聞社、27 頁。

<sup>212</sup> 現在、奄美群島を含む琉球諸島は多様で固有性の高い亜熱帯生態系やサンゴ礁生態系などの価値を有してとして、世界自然遺産登録を目指している。

<sup>213</sup> 藺博明（2004）『いま奄美は：日本復帰後の開発と自然・社会環境の変容』（松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰 50 年：ヤマトとナハのはざままで』至文堂、101-110 頁。

<sup>214</sup> マングースは、はじめに沖縄でハブ対策として 1910 年に導入され、奄美には 1949 年に放獣された。しかし、マングースは基本的に昼行性で、ハブは夜行性であるためあまり効果はなく、逆に繁殖力も強く、1990 年代から養鶏や野菜、果物栽培への被害が大きくなったため、マングース捕獲が実施された。現在は、生息数の減少によって捕獲事業は終了している（奄美群島の概要 2017）。

日では文化財的貴重な織物である。高度成長期には奄美の基幹産業としての地位を築いたが昭和 47 年をピークに大幅な減産となっている。

大島紬に代わって伸びてきているのが、黒糖焼酎である。昭和 28 年に、奄美の日本復帰に伴い、唯一奄美だけに黒糖焼酎の生産が認められたものである。焼酎ブームに乗って需要が拡大したが、現在はピーク時を下回っている。

奄美の就業構造をみると、第 1 次産業 15%（全国 4.2%<sup>215</sup>）、第 2 次産業 14%（全国 25.2%）、第 3 次産業 71%（全国 70.6%）と農業従事者の割合が高く、第 2 次産業の比率は低い状況にある。

### 2.1.7 人々の暮らし

奄美の人々の郡民所得は 2,090 千円で、県民所得との差は 87.5%、国民所得との差は 72.9%と低い状況にある。

客観的データでは所得は低いですが、精神的には大らかに暮らしている状況が読み取れる。その背景には、現金が少なくても暮らせる生活がある。

畑や海の幸が豊富で、自給自足的生活を可能にし、近隣の交流は濃密で、農産物やおかずのやりとりなどが日常的にある。馴染みのコミュニティに支えられ、生活満足度（93.4%）や地域愛着度（93.7%）の高い暮らしが実現している。超高齢者の一人暮らしは 39.4%と高く、畑作に従事するなど活動的で、心身機能の低下が特徴とされる超高齢期においても自立<sup>216</sup>した生活が営まれている<sup>217</sup>。

このような満足感の高い背景には、生まれ育った地域（居住年数中央値 80 年）であることから、昔からの変わらない近隣関係やなど馴染みでつながりのある人々との生活がある。現金収入は少ないものの野菜やくだもの、魚や海草、貝などが身近に豊富にあり、収穫したものを近隣で分かち合う結いの習慣がある。

自給自足的な生活やおかずや収穫した野菜を分け合う習慣は、GDP（国内総生産）の経済指標にはカウントされないが、現金収入が少なくても生活満足感を高める一因と考えられる（第 6 章で詳細する）。

### 2.1.8 人々の団結

人間が自然の猛威や脅威に立ち向かう術は、自然との共生と人々の連帯であることを奄美は日常の中で体得している。奄美の人々の自然に対する敬いの心が多くの動植

<sup>215</sup> 厚生労働省(2013)『労働白書；産業構造・職業構造の変化』  
[https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/13/dl/13-1-4\\_02.pdf](https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/13/dl/13-1-4_02.pdf).

<sup>216</sup> 超高齢者は若者の自立とは異なることから、自律を用いる。

<sup>217</sup> 富澤公子 (2009a)「ライフサイクル第 9 段階の適応としての「老年的超越」；奄美群島超高齢者の実態調査からの考察」、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』2, 327-335 頁。

物を現在まで残存させている要因である。

一方で、奄美の人々の暮らしには、台風の到来による自然災害、農業被害、住居の損壊、物資不足、そして、生命の危険をもたらすハブの危機が潜んでいる。

後述するが、薩摩藩の支配下での圧制という社会的要因とともに、自然災害や生命の危機に対し、シマの人々は団結して対峙し、相互扶助や結いの精神で困難に抗してきた歴史がある。これらは形を変えて、現在に続く営みでもある。シマの人々には、災害・困難に対処するための生活の知恵やノウハウ、結いの習慣が先祖から受け継がれている。超高齢者は、それらを体化した存在であり、シマの知恵者として暮らしの中心に息づいている。

## 2.2 奄美の島の構成

奄美の島と島ごとの特色をみると次のとおりである。

### 2.2.1 奄美大島

奄美群島の最大の島で、加計呂麻島、請島、与路島を合わせた面積は 712.35 km<sup>2</sup>（全群島面積の 57.9%）、人口は 61,242 人（群島総人口の 54.3%）を占め、奄美市、大和村、宇検村、瀬戸内町、龍郷町の 1 市 2 町 2 村からなる。郡都的機能を持ち、奄美市名瀬地区には鹿児島県大島支庁をはじめ、国や県の出先機関が集中し、商業、運輸業、製造業、建設業の中心となっている。

### 2.2.2 喜界島

奄美大島の東側に位置し、鹿児島本土に近い島で、周囲 50.0 km、面積 56.76 km<sup>2</sup>、人口 8,169 人。1 島 1 町で構成されている。平坦地が多く、サンゴ礁の隆起した新世代の島尻層で、耕地（耕地面積 40%）に恵まれ、さとうきびを中心に花卉、野菜、肉用牛との複合経営が営まれている。日本最高長寿者田畑ナビさんが存命している島である（2017 年 9 月逝去）。

### 2.2.3 徳之島

奄美大島の南西部に位置し、名瀬港から航路距離で 109 km、周囲 89.1 km、面積 247.85 km<sup>2</sup>の島で、人口は 24,377 人、3 町（徳之島町、天城町、伊仙町）で構成されている。耕地面積は群島最大で、さとうきびを主体に野菜、肉用牛との複合経営である。3 町ともに合計特殊出生率が全国市町村の上位である。闘牛の島としても知られている。

### 2.2.4 沖永良部島

徳之島南西部に位置し、名瀬港から航路距離で 163 km、周囲 55.8 km、面積 93.67 km<sup>2</sup>の島で、人口は 13,064 人。2 町（和泊町、知名町）で構成されている。産業はさと

うきびを中心に、きく、ソリダコ、ゆりなどの花卉栽培やばれいしょを中心に生産性の高い農業に取り組んでいる。花の島として有名で、エラブユリは世界に輸出されている<sup>218</sup>。

### 2.2.5 与論島

沖永良部島の南西部に位置し、名瀬港から航路距離 209 kmで、沖縄に最も近い島である。周囲 23.7 km、面積 20.56 km<sup>2</sup>の円形の小島で、人口は 5,339 人。1 町で構成されている。観光は海洋性の一大レクリエーション基地として全国に知られている。農業はさとうきびを主体に肉用牛、野菜との複合経営である。

## 2.3 奄美の経済

奄美は沖縄と同様、終戦後米軍の信託統治下に置かれた。しかし沖縄よりも早く、8年間の軍政下を経て、1953年12月に日本復帰を果たした。日本復帰時のエンゲル係数は 82.6%という辛酸な貧困状態にあった。

経済的遅れを取り戻すために、1954年に「経済格差の是正」を掲げた「奄美群島復興措置法」が制定された。5年ごとに法律の一部を改正しながら、現在に至っている。この50年間で交通基盤、産業基盤、社会資本、産業振興、教育環境等の整備はされたものの、過疎化・高齢化、伝統的な基幹産業の衰退等で、「本土との経済格差」はむしろ拡大の方向にあるとも指摘されている<sup>219</sup>。

その要因には、奄美は第1次産業の比率が高いことで、郡民所得も低い水準で推移している。加えて、離島ゆえに生活物資の多くを移入に依存するために、消費者物価は全体に高い(鹿児島地域の1.21倍)状況にある。現金収入が低く物価が高いという、経済的には厳しい条件下にある。

このような状況下で、生活保護率<sup>220</sup>は非保護世帯及び人員共に高率で、群島平均は48.4%である。これは、国の約2.9倍、県の約2.5倍となっている。その要因について鹿児島県は、経済的基盤の弱さからくる人口流出と、県の中でも進行の速い高齢化等の社会的要因、郡民所得が国民所得・県民所得と比べ、低位にあることなどの経済的要因を挙げている<sup>221</sup>。しかしその状況は、島や市町村によって異なっている。奄美大島<sup>222</sup>では63.0%、徳之島では41.0%と高い。一方で、喜界島は22.8%、沖永良部

<sup>218</sup> その要因には流島された西郷隆盛が座敷牢から若者たちに学問や政治、道徳や倫理観を教え、それが島の人々の自立へとつながる勤勉性、儉約性、貯蓄性の気風を培ったとされる。金山智子(2011)「離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達:沖永良部編」、『ジャーナル・オブ・グローバル・スタディーズ』8号、7-23頁。

<sup>219</sup> 皆村武一(2003)『戦後奄美経済社会論; 開発と自立のジレンマ』、日本経済評論社、255-269頁。

<sup>220</sup> 生活保護率は千分率。

<sup>221</sup> 鹿児島県大島支庁(2017)『奄美群島の概要』、245頁。

<sup>222</sup> 奄美大島には加計呂麻島、請島、与路島を含む。

19.7%、与論島 17.1%で、この 3 島は比較的低位である。これらの島は農業基盤産業や加えて与論島は観光産業の基盤があり、所得水準も高いことに加え、町村部の集落では、できるだけ経済的困難者を出さないような相互扶助の精神があげられる<sup>223</sup>。

## 2.4 シマの暮らしと伝統行事

奄美のシマ<sup>224</sup>は、周囲の海や山と共存した生活を営み、人々は集落の中心に一群になって暮らしている。前面の海で魚介類を採取し川で水浴びし、背後の山野で田畑を開墾する。シマは交通機関が発達する以前は、険しい山に囲まれ隣のシマとの交流はなかった。閉ざされた空間の中で、シマはそれぞれが独立し、「ことばが違い、歳時習俗が違い、極端に言えば、人々の歩き方まで違うように見える」のである<sup>225</sup>。

旧藩時代の圧政治下でも、シマの秩序はシマの自治によって守られてきた。今でもシマの運営や決め事は、住民が決めた区長を中心に、全員参加の住民自治が機能している。それゆえ、奄美の人々にとって自分の生まれ育ったシマは、出自を確認できる唯一の場所である。いうならば生の原点としての意味を持っている。「奄美の人にとってのふるさとといえば、それは一つの島でなく、島のほんの一部を占めるシマなのである」<sup>226</sup>。

シマの景観は、暮らしと祈りの空間（カミ山、カミ道、ミヤア/広場、墓所、ジョグチ/集落の出入り口など）を配している。カミや祖霊と共に暮らし、守護されているありようが繰り返されている。月 2 回（旧暦 1 日と 15 日）の墓参りが一般的で、日常の中で使われる「トウトガナシ」という先祖の神に感謝する言葉はその象徴である<sup>227</sup>。

人々は、海の向こうに、五穀豊穡をもたらすネリヤカナヤ（カミの国）があると信じ、海や山、シマの入り口にある岩には神（立神）が宿る、アニミズム（自然崇拜）の世界が色濃く残っている。シマの造形は人々の精神世界が反映し文化的景観を形成しているといえる。奄美の人々は、シマ／島が世界であり宇宙である、という原型的な世界認識を持っているのである<sup>228</sup>。

シマの生活には旧暦（太陰歴）が使われ、祭りなどの「ハレ」と日常の「ケ」が、1 年の生活リズムの中で繰り返されている。そのようにして、人々が築きあげ継承してきた伝統文化や習慣が根付いている。近年、伝統行事は日・祝に移行する傾向にあるものの、厳格に旧暦のその日に行なうシマもある。シマ毎に伝統の継承の形や強弱に

<sup>223</sup> 郡都機能のある奄美大島で高い理由について、奄美市勤務の H 氏は、都市部は現金収入生活が主であることや高齢者の単身世帯が多いことをあげ、また、一族助け合いが弱いことや世間体を気にしないなどをあげる（2018 年 8 月 20 日聞き取り）。

<sup>224</sup> シマの単位は、いわゆる大字や小字をさす。

<sup>225</sup> 山下欣一（1998）「奄美の精神世界」（西田テル子著『聖なる島：西田テル子写真集』星企画、25 頁）。

<sup>226</sup> シマを出た人が組織する郷友会もシマごとに組織され、アイデンティティを確認する場となっている。

<sup>227</sup> 奄美は旧暦による月 2 回（1 日、15 日）のお墓参りの習慣は潮の満ち引きと関係し、休日。

<sup>228</sup> 喜山荘一（2009）『奄美自立論』南方新社、262 頁。

差異がみられるものの、これらの伝統行事は奄美全土に残っている<sup>229</sup>。

奄美独特のシマ口（方言）で歌われる島唄<sup>230</sup>や八月踊り<sup>231</sup>は、祭りを通じて高齢者から若者、子どもへと継承されていく。シマ唄はシマの先祖が残してくれた宝として継承することを通じ、人々の紐帯は強まり、シマ社会を強固に維持する機能となっているようだ。行事の際には高齢者は特別な席が設けられ、長寿を尊ぶ敬老意識が日常的にも強い<sup>232</sup>。

## 2.5 精神文化・習慣

奄美の人々の精神文化を理解するうえで重要なものに、ノロ（祝女）とユタの存在がある。ノロは各シマで祭りを司る女性神官のことである。琉球王朝時代に王府から辞令書（インバン）で任命され、政治的・宗教的権威を持つ公的存在であった。一方、ユタはノロと異なり個人的事情から神を拜むようになった人で、突然、何らかの霊的に憑かれた状態（カンガカリ）となる巫病<sup>かびよう</sup>を経て、次第に霊的能力を備えるようになる。

個人の過福吉凶を占ったり、死者の意思を遺族に伝えたりする民間のシャーマンの機能の霊能者である。奄美の人々は教養の如何に拘わらず生活の実感として、ユタの存在を理解しているとされる<sup>233</sup>。

奄美独特の習慣に、「一重一瓶」という慣習がある。宴の際にはそれぞれが食べるお重とお酒を持参する習慣である。奄美には封建制度がなかったことから、本家・分家という意識は薄い。それぞれが対等・平等に参加する。

この対等・平等の習慣は、現在の奄美の人の生活全般に見ることができ、奄美の人々の考え方を現しているとされる。今では参加は会費制になって、婦人会が食事を担当したりしている。奄美では新生活運動が提唱した冠婚葬祭の簡素化など負担感のない集まりが習慣として各島各シマに根付いている。

## 2.6 長寿・子宝

奄美の特徴は100歳以上の長寿者の多さである。かつては、泉重千代さんや本郷かまとさん、田島ナビさんなどの世界最高長寿者を輩出した島である。百歳以上の百寿者は190名である。長寿地域の目安となる百寿者率（人口10万人当たりの100歳以上の割合）は133.55人となる。百寿者率は、全国1位の島根県（97.54人）の約1.7

<sup>229</sup> 筆者が行った区長への長寿の要因調査（2017年7月実施）からも明らかにされている。

<sup>230</sup> 島唄は、それぞれのシマの歌で、シマ社会を組織する装置である。中原ゆかり（2007）『奄美のシマの歌』、2頁。

<sup>231</sup> 八月踊りは、旧暦八月、年に1度のシマの祭りで、シマの人の全員が参加して三味線の伴奏で盛大に歌い踊る。同上12頁。

<sup>232</sup> 会合の際は年齢順で、町長さんも例外ではなく自分の年の順番に並ぶ習慣がある。

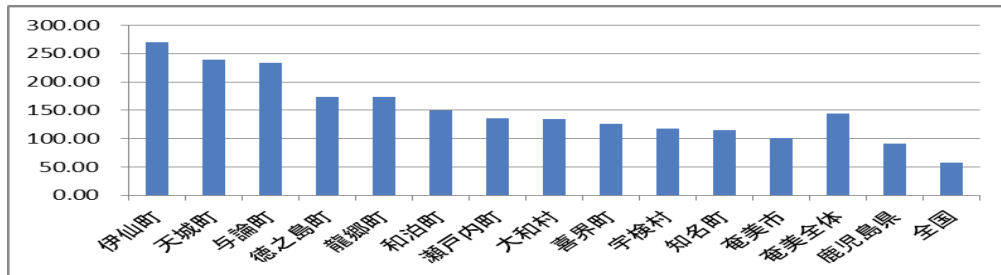
<sup>233</sup> 山下成一（1998）「奄美のユタ」（西田テル子著『聖なる島：西田テル子写真集』、星企画）42-54頁。



倍、全国平均（(53.43人)の2.7倍を超える長寿の地域である<sup>234</sup>。

奄美の百寿者率は、8つの有人島の12市町村ともに高い。その状況は、図表4-2のとおりである。中でも伊仙町と天城町、与論町の百寿者率は200人を超え、顕著に高い長寿地域を形成している。

図表 4-2 百寿者率



南海日日新聞（2017/9/10 付け）から筆者が作成。

長寿地域を形成する奄美には、伝統的に長寿者を大切にする行事が多く残っている。奄美全土で年の初めにその年の干支の人を祝う「年の祝い」がある。また、100歳を願う「年の祝い歌」をはじめ、島唄には長生きを祝う歌があり、長寿者を敬う習慣や長生きを願う習慣がある。与論島では「長寿は幸せ（ドゥクサドフー）」という言葉がある。そして、先祖へお祈りする際には、「子や孫が120歳まで生きられますように」と祈る言葉が使われている。長寿者が大切にされる風土の中で、健康な超高齢者は100歳を目標に生きている<sup>235</sup>。

### 2.6.1 長寿要因

鹿児島県では、奄美の長寿の要因として、①居住環境として、海の近くに住み、海や浜に出かけるなど、海洋の大気に多くふれていること。②生活習慣として、食事面では、毎日朝食を食べよく身体を動かし、適度な睡眠時間をとっていること。飲酒は毎日ではなく、たばこは吸わない。食事は奄美の海の魚介、海藻類、果物など、新鮮でミネラル豊富な食材を多くとっていること。③ライフスタイル及び生きがい・幸福感では、自分の子どもや孫の世話や成長、伝統文化の伝承や仲間とのつきあいなどを生きがいとしていること。④精神的風土として、友達と交流し、助け合いながら楽しく生活することや、人の役に立つことを人生の希望にしていること、などをあげている<sup>236</sup>。

<sup>234</sup> 厚生労働省（2017）「Press Release 百歳高齢者の対象者は32,097人」（平成29年9月15日付）

<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304250-Roukenkyoku-Koureishashienka/0000177627.pdf>

<sup>235</sup> 富澤公子（2017）「目標は100歳と語る奄美の超高齢者の物語」『国際文化政策』別冊特別号、No.5。

<sup>236</sup> 鹿児島県（2004）『あまみ長寿・子宝調査概要報告書』。

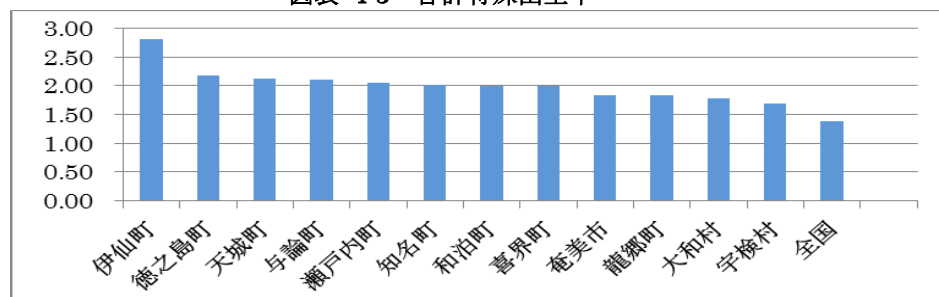
同様の結果は、筆者の超高齢者調査からも明らかにされている。本研究では、このようなポジティブなライフスタイルを実現している背景にある地域コミュニティ要因をさらに掘り下げようとしている。

## 2.6.2 子宝要因

一方で奄美は、合計特殊出生率も高い。厚労省の2008年～2012年の人口動態保健所・市町村別では、全国市町村第1位の伊仙町(2.81)、をはじめ、2位徳之島(2.18)、3位天城町(2.12)など、上記30位内に奄美の8つの町村が占めている。

子宝要因としては、鹿児島県の調査では、①子は宝という価値観を持っていること(親や地域に子は宝という価値観、子どもは多いほど良い、家族観は夫婦単位より大きなイメージがある)、②共助のしくみ(地域で子育てがなされていること、子どもの世話を生きがいとする高齢者が多いこと、食生活改善指導員や民生委員、児童委員の活動が盛ん)③出産・育児に対する公的サービスの利用が多い(出産・保育所の設置が多くサービスを利用しやすい)④地域に対する満足感と郷土文化への誇りがあって、このような地域で子どもを育てたいということが子宝につながっているとみられている。

図表 4-3 合計特殊出生率



出所：鹿児島県（2004）から筆者が作成

## 2.6.3 「長寿・子宝プロジェクト」の推進

鹿児島県では、これら奄美の「長寿」と「子宝」を「まちづくり」や「産業の振興」、「観光の振興」に活用するために、2006年から10年間、奄美の市町村と一体となった「長寿・子宝プロジェクト」を推進してきた<sup>237</sup>。この成果は、第5章でふれる「奄美の結い」に繋がっていると考えられる。

鹿児島県は、「長寿」の要因として、①居住環境、②食事・運動、③ライフスタイル及び生きがい・幸福、④精神的風土感などの4つの要因を挙げている。これらは、

<sup>237</sup> 鹿児島県ホームページ「奄美長寿子宝フェスタ in 徳之島(2013)」『奄美群島における長寿子宝要因』。

奄美の固有の自然資本の豊かさ、風習や生活習慣、先祖崇拝や信仰、祭りなどの文化資本の豊かさ、これらを支える社会関係資本の豊かさを示すものでもある。これらが、奄美の長寿で子宝の島を形成する源となっていると考えられる。

#### 2.6.4 課題は男性の平均寿命

一方で課題もある。女性の平均余命は全国平均よりも高いが、市町村によって差がある。また、男性の平均寿命は全国平均を下回っていることが指摘されている。疫学研究のデータでは、奄美の男性は喫煙者の割合は全国平均よりやや低いものの、飲酒者の割合が高く、また飲酒量も多いことが明らかにされている<sup>238</sup>。

奄美の100歳以上の割合においても女性が93%（全国88%）を占め、男性は全国平均より低い割合である。一方で女性の飲酒は少ない。今後においては、男性の飲酒への健康管理意識が奄美の長寿を伸ばす要因であることが浮かび上がってくる。

以上、奄美群島の自然環境、気候、人口、シマの暮らし、精神文化・習慣から、長寿・子宝軸へとつながる奄美の地域特性をみてきた。

次節では、これらを内蔵する奄美の地域特性から、今日の奄美の長寿要因を解明する上で大きな示唆となる奄美の歴史を辿ることとする。

### 3 奄美の歴史

#### 3.1 歴史の持つ意味

柳田は、史学のもつ意味について、次のように述べている<sup>239</sup>。

「史学は古いことを穿鑿する技術ではけっしてない。人が自己を見出すための学問であったのだ。・・・現在のこの生活苦、もしくはこうした争い、また闘わねばならぬことになった成行を知るには、我々のもつところの最も大なる約束、すなわちこの国土、この集団と自分自身との関係を、十分に会得する必要がある。それを解明する鍵というものは、史学以外には求められないのであった」。

柳田が、「人が自己を見出すための学問としての歴史学」というとき、それは、各地で現実に生きている人々が、今の生活における苦勞や歎きなどの原因を“過去の成りゆき”の研究によって知ることを意味する。したがって、奄美の“過去の成りゆき”の文脈を解明することこそ、現在の奄美のシマと人々の長寿と幸せな老いを理解する鍵だと考える。

#### 3.2 奄美へのまなざし：島尾敏雄の視点

はじめに、奄美の歴史の全体理解として、作家島尾敏雄<sup>240</sup>の「島にて」<sup>241</sup>の語りを

<sup>238</sup> 鹿児島県大島支庁（2017）『奄美群島の概要』。

<sup>239</sup> 柳田國男（1976）『青年と学問』、岩波書店、16頁。

<sup>240</sup> 島尾敏雄は20年間奄美に在住した作家である。代表作に「死の棘」。ヤポネシアという語はメラネシ

借りようと思う。

「わが日本は、…（アジア大陸の）はじっこに、ふりおとされまいとしてしがみついている。…大海原のまっただ中にほうりだされしないで、大陸のそばにくっついていられるのは、たぶん、上と下（つまり北と南）の部分に、支え綱の役割をした弓なりに、点々とつらなる島々の帯があるからにちがいない。…その中の南の部分にあたる弓なりにそりかえった列島の（それを琉球列島もしくは南西諸島と呼んでいるが）北の部分にあたる、われわれが奄美群島と呼んでいる地帯の島々…その大洋のただ中にも人間生活のひとつのタイプがあることを理解したいと思う。つまり、よく目をこらして見ると、けしつぶほどの小さな島々が、孤独を紛らそうとより添うように、いくつかのグループをつくってかたまりあっているのを見つけることができるはずである」（同書、20—22頁）。

島尾は、日本列島を大陸にしがみつこうとしている姿ではなく、太平洋の中でゆったりと手足を伸ばしているもう一つの姿としてとらえ、その連なりをメラネシア、ミクロネシアに名添え、ヤポネシアと名づけている。そして、本土ではあまり知られていない奄美の歴史に触れる。

「琉球列島は、日本本土にとって長いあいだ忘れられた島々であった。この島々の事情は伝わらず、無視と誤解の中で処遇され、本土にとっては余分な、厄介者とみなされてきた。…しかし果たしてそうなのだろうか。まえに書いた比喻を使うなら、この琉球列島のつなぎとめの花かぎりの弧がなかったなら、日本本土は大陸の遠心運動にふりまわされて…崩壊していただろう。…この列島は先史の時代から、日本本土への文化的、政治的な影響を石伝いに運ぶ海上の道であった。…にもかかわらず、本土はこの島々の役割を見抜き評価することができなかつた…」（同書、p23-24頁）。

「この島の置かれた悲しい歴史の根に横たわっているひとつの宿命は、それはこの島々に砂糖黍が栽培でき、そして砂糖ができるということだ。…薩摩藩主の島津は、…この島々に砂糖のできることを知ってどれほど喜んだことだろう。奄美の悲劇的な運命はそのとき方向を定めたといっている。…薩摩藩は2世紀以上も奄美を砂糖島としてとじこめ、しかもいろいろな方法を講じて一片の砂糖をも島の中

---

ア、ミクロネシアに名添え名づけられた。「琉球弧」とともに南西諸島住民及びその子孫の間に広く受け容れられ、近世から近代、現代の歴史にかけて非収奪・非抑圧の歴史を表現する際のキーワードとして多用されている。

<sup>241</sup> 島尾敏雄（1966）『島にて』冬樹社、20-32頁。

に留めおかず藩の倉庫に収容し、…島の人々は自分で作った砂糖を、ひとかけらも法にふれずに食べることはできず、それを敢えてすれば屈辱的な処罰を受けなければならなかった…」(同書、28頁)。

「また薩摩藩は、島々の生活・風俗のはしばしまで本土と差別化して取り扱った。結髪のかたちや衣服、…苗字があたえられる場合も…一字だけで表すことを強いられた。さらに、その時代全体を通じて、藩は島々に武士階級を正式には認めようとしなかったのである(つまり奄美の島々は封建制を完全には経験しないことになった)…奄美の人々は、長いあいだ自分たちの島が値打ちのない島だと思い込むことになってきた。…しかし、明治維新…(薩摩)藩の経済を支えていたものが、奄美が島々を挙げてゆがんだ砂糖島にさせられた犠牲の上になっていること知る者は少ない」(同書、28-30頁)。

島尾が明らかにする奄美の人々が辿った悲惨な歴史は、本土の人々にはあまり知られていない史実である。しかし、日本の近代化の中で薩摩藩が演じた役割の大きさを考えるとき、その成果は奄美の人々の大きな犠牲の上に成り立っていたことが理解できる。後世の奄美の人は言う、「もしも奄美がなかったなら、薩摩は植民地を持つことができず、従って、明治維新を起こすことなど、到底、おぼつかなかっただろう。いやその前に、奄美がなかったら、南北200キロの「道之島」が存在しなかったら、大和勢力も沖縄島とは無縁だったかもしれない。そう考えれば、奄美は、日本の多様性と近代化の無言の立役者なのです」<sup>242</sup>と。

### 3.3 奄美の近世までの精神史

はじめに、奄美の歴史について昇曙夢の「大奄美史」<sup>243</sup>から紹介する。奄美の名称は、古くは阿麻弥(古事記)、又は海見(日本書紀)<sup>244</sup>とも書く。阿麻弥の名は南島の祖先神で開闢の女神と伝えられる阿麻弥姑(あまみこ)からでている。

<sup>242</sup> 喜山荘一(2009)『奄美自立論』南方新社、195頁。

<sup>243</sup> 昇曙夢(1949)『大奄美史』奄美社、22頁。昇曙夢は、加計呂麻島出身で奄美が生んだ大ロシア文者である。学生時代から奄美の郷土史の資料蒐集を続け、その成果として歴史書『大奄美史』を刊行する。大奄美史の序では、「奄美に生を享けた一人として、日本本土においてとうに消滅した古代の風習や言語、民俗が多分に残り、日本上代文化の宝庫的貴重な存在であるが、この文化史意義が認識されながらも閉ざされていることを遺憾として、郷土史、大奄美史を刊行する」とある。

さらにその目的として3つ、「①郷土史以上に文化史的意義を解明する、②奄美の宝石のごとく散在する豊富な文化財を、広く方言・宗教・土俗・宗教・歌謡・伝説にわたって蒐集し、その民俗学的意義を解明すること、③わが奄美同胞が歴史的なものを有しながら、全然それを知らずともしない無関心な態度に鑑み、30万同胞の郷土認識を高めることに努める一方、余りにも圧迫された過去の悲惨な思い出と、今では潜在意識とまでなっている暗い心理より島民を解放して、明るい希望の生活に向け直したい一心からである」と述べている。大奄美誌、1-3頁。

<sup>244</sup> 奄美(海見)の地名がはじめて日本の史書に登場するのは、日本書紀に斉明天皇3年(657年)である。

奄美の歴史は原始から幕末までを、「奄美世」「按司世」「那覇世」「大和世」の4つに区分される<sup>245</sup>。奄美が辿った歴史は我々が知っている日本の歴史の流れとも沖縄諸島の流れとも異なっている。

### 3.3.1 奄美世（アマムユ）

「奄美世（アマムユ）」は、奄美の文化の始まりとされ、奄美が唯一誰にも占領されなかった時代とされる。考古学的にみると、旧石器時代 25,000 年～30,000 年前のものとして推定される打製石器等の出土品が発見され、天城遺跡は約 3 万年前、南東諸島では最古の遺跡とされている<sup>246</sup>。

島内の各地から、縄文前期、縄文中期、縄文後期とする土器が出土しており、奄美は孤島ではなく、古くから独自の文化の形成や他地域との交流があった<sup>247</sup>ことが示唆されている。

### 3.3.2 按司世（アジユ）

「按司世（アジユ）」は、8、9 世紀ごろ島の有力者按司（アジ）によって支配割拠された階級社会の時代とされ、沖縄同様にグスク（城）が成立していた。しかし、沖縄の主流が城郭だけであったのに対し、奄美のグスクは拝所・墓所・集落・館の性格を有し、シマ単位に作られ、集落住民の共有施設の性格が強かったとされる。按司（アジ）は島の有力者となり、海上運輸と流通に深くかかわって勢力を広げていく<sup>248</sup>。

この頃、奄美のサンゴ礁は夜光貝の宝庫で、酒杯や螺鈿などの工芸品として珍重された。按司のオナリ（姉妹）はノロ（女性神官）となり、祭司長となって支配を強化する役割を担っていた。11、12 世紀以降、徳之島産のカムィ焼（類須恵器）は奄美から琉球に広がり、12 世紀には奄美産の夜光貝の螺旋が中尊寺金色堂で見られるなど、11、12 世紀の奄美の産出物は島外にも流通している。

13 世紀の初頭から 14 世紀にかけての奄美は、鎌倉幕府の得宗領<sup>249</sup>とされていた。15 世紀には、奄美を挟んで琉球王国と日本勢の往来が盛んとなり、15 世紀の半ば以

---

天武天皇 11 年（682 年）には朝貢した「阿麻弥人」に禄が与えられた記述や、続日本書記には遣唐使の往来に便宜を供していた記述が登場する<sup>244</sup>（日本歴史地名大系第 4 巻鹿児島編、1999 年）。

<sup>245</sup> 改訂名瀬市誌の歴史区分による。

<sup>246</sup> 奄美大島笠利町の喜子川遺跡や徳之島伊仙町の天城遺跡から。

<sup>247</sup> 縄文前期約 6700 年～6000 年前の瓜形文土器が出土し、縄文中期約 5000～4000 年では九州系の春日式土器や瀬戸内系の里木式系の土器が出土している。縄文後期では主に南九州を分布圏とする市来式土器が宇宿貝塚（笠利）、面縄貝塚（伊仙）、神野貝塚（知名）などで見られ、古くから奄美全島の交流と大陸や九州などとの交流を物語っている。

<sup>248</sup> この頃のグスク跡は、龍郷町や与論島などのグスク跡が確認されている。

<sup>249</sup> 得宗領（とくそうりょう）は、鎌倉時代北條氏が執権となる者が代々世襲した領地とされ、1306 年得宗悲観千籠時家は嫡男貞泰に「きかいしま、大しま」、二男経家に「えらふのしま」、女子ひめくまに「とくのしま」を譲ったとされる（日本歴史地名大体系第 4 巻鹿児島県の地名）、67 頁。

降奄美をめぐって琉球王国勢と日本勢が合戦し、琉球王朝勢が勝利を収めることになる。

### 3.3.3 那覇世（ナハユ）

奄美大島は 1440 年前後、喜界島は 1461 年、徳之島以南はそれ以前に琉球王朝の支配下に入っており、14 世紀からの 2 世紀の間、奄美は琉球王朝の統治下に入る。この時代は「那覇世（ナハヨ）」と呼ばれている。

奄美は琉球王国の地方行政機関に組み込まれ、間切<sup>250</sup>（地方行政単位）され、間切り役人は王の公文書により任命された。ノロは祀りを司る女性神職として、辞令書で任命され、最も古い辞令書は 1529 年とされる<sup>251</sup>。ノロ制度を有効に使った神権国家として、ノロは冒険航海者の男たちの守護者としての強力な霊力が要請され、奄美のオナリ神信仰<sup>252</sup>と海神信仰が強化されていく。

### 3.3.4 大和世（ヤマトユ）

島尾の記述にあるように、薩摩藩に支配された「大和世（ヤマトユ）」と呼ばれる時代は、奄美の人々にとって最も悲惨な世である。この時代は薩摩藩による支配が確立し、奄美は道之島として琉球への水の供給や明の密貿易を含む海上利権など、次第に砂糖島として植民地化されていく。この時代は 16 世紀から 19 世紀後半まで 2 世紀半にわたって続く。

### 3.3.5 砂糖島としての植民地

薩摩藩は、当初（1633 年）は年貢上納体制で、水田の管理や田地開発などに力を注いでいた<sup>253</sup>。しかし、次第に黒糖生産量は増えていき、1745（延享 2）年には貢米はすべて黒糖で上納するいわゆる「換糖上納制」となり、砂糖生産が中心となってくる。奄美全域で稲作は禁止され水田や畑は全て黍畑に変えられ、藩の財政確保を目的にサトウキビの単作化が進み、奄美は完全な植民地となっていく。「すべては薩摩藩の借金返済と財政力強化のためで、黒糖収奪は搾取以外の何物でもなかった」と指摘される<sup>254</sup>。

加えて薩摩藩は砂糖増産のために奄美古来の習俗・信仰を廃止し、鹿児島的封建社会への編成替がされ、奄美の習慣であった遊日を禁止していく。遊日とは島内の男女

<sup>250</sup> 間切（まぎり）は、沖縄における琉球王国時代の行政区分のひとつで、市町村に該当する。

<sup>251</sup> 永山修一（2004）「古代・中世併用期の奄美」（松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰 50 年；ヤマトとナハのはざままで』至文堂）、52-62 頁。現在奄美にはノロに関する辞令書は 28 通が知られている。

<sup>252</sup> 南西諸島で、姉妹に兄弟を守護する霊力があるとする信仰。

<sup>253</sup> 弓削正巳（2004）「近世の奄美について」（松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰 50 年；ヤマトとナハのはざままで』至文堂）、43 頁。

<sup>254</sup> 稲野慎（2008）『揺れる奄美、その光と陰』南方新社、127 頁。

が仕事を休んで遊ぶ<sup>255</sup>休暇のことで、正月元旦、3月3日、八月節句など、当時は年間35日に及ぶとされていた。厳しい農作業の間の束の間の楽しみも薩摩藩の封建社会の論理で剥奪されていくこととなる。

一方で、奄美が「薩摩」へ同化することを許さず、貨幣や往来も禁止し、衣服や身なりは琉球風で、姓を許された一部の支配層も一字姓<sup>256</sup>に限定された。宗教上ではユタは弾圧されたが、ノロは否定されず政策的統治の目的で温存されている<sup>257</sup>。

### 3.4 近代の精神史

#### 3.4.1 「黒糖地獄」とヤンチュ（家人）

薩摩藩の奄美の人々への厳しい抑圧、過酷な労働環境など強権的でゆとりを欠いた島政の展開と関連して、奄美では災害や飢饉が多発した。この時期の飢饉について、「徳之島前録帳」の記録には、宝暦5年（1755年）の餓死者3,000人を超し、同12、13年の飢饉、明和3（1766）年の凶作、同7年の害虫発生、安永元年の熱行流行による1,700人余の死亡、同6年台風・高波の被害による飢餓など、列挙にいとまがないほどの記録がある<sup>258</sup>。

この頃の奄美は「黒糖地獄」と呼ばれ、島民にとって重くつらい時代であった。年貢が払えず借財を抱えた者は債務奴隷として豪族に身を売り、この隷属者は「家人（ヤンチュ）」と呼ばれた。家人（ヤンチュ）は奄美独特の階層制度である。一度ヤンチュになると終身ヤンチュとなり、その子どもも終身ヤンチュの身分から逃れることはできないとされていた。幕末の頃には、総人口に占めるヤンチュの割合は、奄美大島で2割から3割、あるいは3割から4割であったといわれている<sup>259</sup>。奄美に伝わる島唄は、彼らが仕事を終わった後に口ずさんだものが始まりとされている。

薩摩藩は、奄美から絞り取った黒糖によって借金を次々返済し、1848年には250万両の金がたまり、実に収益の97%が奄美の黒糖で占められていたことが明らかにされている<sup>260</sup>。本土では名君とされた島津<sup>なりあきら</sup>齊彬は、黒糖の惣買入制を1853年には沖永良部島まで広げ、奄美での搾取を強めていく<sup>261</sup>。

<sup>255</sup> 奄美のシマの遊びは、人々が集まって歌を歌い、語らい、時には踊りを楽しむことを指す。中原ゆかり（2007）『奄美のシマの歌』6頁。

<sup>256</sup> 一字姓は奄美独特のもので、元（はじめ）、中（あたり）など多く見られるが、韓国や中国人と間違えられるとして、現在は二文字姓が多くなっている。

<sup>257</sup> 高須由美子（2003）「奄美諸島のノロ（女性祭司）関係文書」『史資料ハブ地域文化研究』（2）、148-158頁。

<sup>258</sup> 松下志朗（1983）『近世奄美の支配と社会』第一書房、110-121頁。

<sup>259</sup> 前利潔（2004）「近代の奄美」（松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰50年：ヤマトとナハのはざままで』至文堂）、33-34頁。

<sup>260</sup> 稲野（2008）前掲書、260頁。

<sup>261</sup> 齊彬は、日本本土、薩摩藩の視点では名君であっても、奄美群島から見ると、「抑圧者」の一人といえる。稲野（2008）前掲書、130頁。



### 3.4.2 奄美と西郷隆盛

ここで、奄美と西郷隆盛との関連に触れる。奄美の近代にはたびたび西郷隆盛が登場する。西郷隆盛は島津斉彬に仕えるが、1856年大老井伊直弼との政争に敗れ、奄美大島へ島流しになる。そこで、奄美大島の龍郷町の豪族の娘愛加那と結婚し、3年間を過ごす。

二人の間には菊次郎<sup>262</sup>と菊草<sup>263</sup>という一男一女が生まれている。西郷は1862年に許されて帰藩し、二人の子どもは西郷家に引き取られるが、愛加那は島妻<sup>264</sup>制度により島に一人残ることになる。愛加那は二人の子どもから引き離され、終生、子どもと暮らすことはできなくなったという悲劇の物語がある。

一方、帰藩した西郷隆盛は、島津久光の逆鱗に触れて半年後再度、今度は沖永良部島に流され、そこで1年7ヶ月の牢生活を送る。沖永良部島の牢生活では、人々に学問を教え、自身も座右の銘となる「言志録」などを読みふけるなど、「人間的に深みを増した」と言われている。座敷牢から地元の若者に学問を教え、西郷の教えは島の教育、文化に大きな影響を与えたとされる<sup>265</sup>。

今日、沖永良部の特産物である百合はエラブユリとして世界各国に輸出され、東部地区（和泊町）で多くの篤農家を輩出している。その要因には流島された西郷隆盛が座敷牢から若者たちに学問や政治、道徳や倫理観を教え、それが島の人々の自立へとつながる勤勉性、儉約性、貯蓄性の気風を培ったとされる<sup>266</sup>。

西郷は沖永良部島から薩摩藩に帰藩が許され、その直後、廃藩置県により薩摩藩は鹿児島県と改められる。しかし、鹿児島県は明治の新政府が出した黒糖の自由売買を認めた通達を奄美の人々には伝えず、奄美の人々は新政府になっても安値で黒糖を買い上げられ、一方、高値で生活物資を買わされる状態が続いていた。西郷はそうした支配構造にも関与した人物とされている<sup>267</sup>。

### 3.4.3 奄美の人々の抵抗史

薩摩藩は260年の間、奄美の人々を権力で威圧し、搾取し、黍作1本を強制してきた。厳しい藩政のもとで、前述したように、徳之島では3,000人に上る餓死者が出るなど悲惨な状況が続く。しかしながら、これに抗し、人々は立ち上がっている。

三木は、著書「近世島民の自給的生業と島津藩政」の中で、「特筆、大書すべきは他

<sup>262</sup> 菊太郎は後の京都市長になる人物である。

<sup>263</sup> のちに、菊子に改名。

<sup>264</sup> 島妻とは、当時薩摩藩の藩法で島に滞在中だけ妻となる制度である。

<sup>265</sup> 沖永良部和泊町のホームページは、西郷隆盛の教えが島の教育、文化に大きな影響を与えた。

ことが紹介されている。沖永良部島には、当時の座敷牢で教える西郷の姿が復元されている。

<sup>266</sup> 金山智子（2011）「離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達：沖永良部編」『ジャーナル・オブ・グローバル・スタディズ』8号、7-23頁。

<sup>267</sup> 稲野慎（2008）『揺れる奄美、その光と陰』南方新社、13頁。

の地域には見られないような薩摩藩への抵抗運動が具体的な形をとって現れたことである」と記している<sup>268</sup>。

奄美の人々の我慢の限界を超えた、抵抗の歴史が浮かび上がってくる。これらの抵抗の歴史を見ていこう。

1734年には、奄美大島において代官排斥運動が起こり、つづいて30年代後半では、徳之島の伊仙町検福での越訴、島民逃散が起こっている。これらは、「自給的生産体制が藩権力によって破壊され、黍作一本への島民の根強い反対の気持ちが示されたもの」とされ、19世紀の農民闘争への導火線とみられている。

19世紀になると、薩摩藩の権力によって、露骨極まりない搾取体制に移行させられ、「惣買入」という制度が実施される。これは、島民に黍の一定量の耕作を強制し、一定量以上の砂糖を製造させたうえで、一切の売買や消費を禁じる内容であった。

奄美の実情を一切無視して、藩庫を潤すための財政改革の一環として、実施されたものである。

このような藩権力の一方的な強権発動に対し、1816年には徳之島の母間で一揆が勃発している。続いて、1833年には、奄美大島の猿化の一揆、1864年には徳之島の犬田布の一揆があげられる。これらに対し島民は決起し、薩摩藩は未曾有の島民の攻撃を受けることとなる。

これらの島民の行動は、島民が主体性を失ったのではないことを示すものと評されている。例えば、島民は黍の強制に逆らって密かに水田地や畑を維持する努力を捨てていなかったことや、彼らは実力を行使して闘うことを辞さなかったことなどをあげている<sup>269</sup>。

#### 3.4.4 母間騒動にみる受け継がれるアイデンティティ

前述した1816年の徳之島の母間の一揆は、「母間騒動」とも言われ、その内容は、母間村の人々が隣の轟木村に持っていた田地に対し、島役人が不当に高い供出米（村への臨時の負担米）を要求した。このことに対し、当時の母間の本掟（区長）は、筋を通して抗議談判する。だが聞き入れられずに、同年5月に亀津の代官所に直訴するも「筋違いの訴え」として、即日入牢させられることになる。

これに激昂した母間村の人々630人は、6月9日、鉄砲・竹やり・魚突きなどを持って代官所を襲って本掟（区長）を救出する。翌10日夜、本掟を先頭に、村人15人が鹿児島島の藩庁に直訴すべく板付け舟で出帆し、重罪覚悟の決死行に出る。しかし、その裁定は、入牢3年が下り、6人は無罪で帰島。8人は遠島、残る1人は獄死した

<sup>268</sup> 三木（1974）「近世島民の自給的生業と島津藩政」長澤和俊編『奄美文化誌』西日本新聞社、53頁。

<sup>269</sup> 三木（1974）同書、54頁。

とされている<sup>270</sup>。

しかしながら、この事件を後世の人は忘れてはいなかった。この事件は、1816（文化13）年に「公権力の不条理」に抵抗して村人が蜂起した歴史的事件として、200年後、徳之島町母間地区の住民組織「母間校区振興会」によって、「母間騒動の記念碑」が建てられた<sup>271</sup>。

除幕式であいさつした地元の会長（76）は、地元史観も交え、「不正を正す大義のために闘った先人たちを称えるのが目的。我々のアイデンティティの源の『母間正直・母間魂』は15人の烈士からきていることを知って欲しい」と述べた。母間小学校校長も、「児童ら学校に息づく母間正直・母間魂の精神を今後も受け継ぎたい」と述べている。

悲惨な過去の歴史の真実は、未来の人々によって勇敢な行動を抱える行動として称えられ、受け継がれ、未来に向かって地元の生きる指針となっているのである。

### 3.5 明治の精神史

#### 3.5.1 明治以降のヤンチュ（家人）解放運動

明治2（1869）年になっても、同4年（1871）年の廃藩置県後においても、奄美では一切の改正布達などが遅れて公布され、久しく新政の恩恵を受けができなかった。これは鹿児島県が中央政府の命令を隠して島民に示さず、奄美を以前と同じように扱い、奄美の人々に新制度の権利を与えることはなかったからとされる<sup>272</sup>。

これに抗して、明治の前半期、長らく苦しめられていた束縛からの解放を求めた社会運動が奄美で起きる。それは、「全島沸騰」するほどの盛り上がり方で、一種の世直しの「勝手（自由）世騒動」と名付けられている<sup>273</sup>。

この運動の一つは、家人（ヤンチュ）解放運動<sup>274</sup>である。1871（明治4）年に奴隷解放令が出されたものの、奄美ではその後も旧態以前の状態が続いていた。奄美では明治11年から解放運動が起こり、家人の完全な開放は明治の末期である。

#### 3.5.2 黒糖勝手（自由）売買運動

もう一つは、黒糖勝手（自由）売買運動である。明治政府は、1873（明治6）年に黒糖の自由売買を認める「勝手売買」の通達を出している。しかし、鹿児島県は藩政時代と同様に奄美の黒糖は鹿児島県が独占する仕組みを作っていた。

<sup>270</sup> 奄美新聞（2014/12/22 付け）。

<sup>271</sup> 記念碑は国の事業費の一部や町補助、出身者の基金などを活用。

<sup>272</sup> 昇曙夢（1949）前掲書、421頁。

<sup>273</sup> 原井一郎（2005）『苦い砂糖：丸田南里と奄美解放運動』高城書房、14頁。

<sup>274</sup> 家人（ヤンチュ）は年貢が払えずに身売りした一種の債務奴隷で、奄美独特の階層である。

このような藩政時代の支配意識に抗し戦ったのは、名瀬出身の丸田南里<sup>275</sup>である。彼は、1875（明治8）年に、西洋の進んだ経済事情を見聞して10年ぶりに帰郷する。しかし、目のあたりにしたのは封建の世と変わらない重税にあえぐ哀れな同胞の姿だった。丸田は、県の保護下にある鹿児島商人を中心とする大島商会の砂糖売買独占に反対して、黒糖勝手売買運動（勝手世騒動）を起こし、奄美の解放に貢献する。

### 3.4.3 独立経済とソテツ地獄

黒糖勝手（自由）売買運動、公的自由売買、そして、1888（明治21）年からは鹿児島県は、「新たな島差別」というべき「独立経済<sup>276</sup>（奄美独立予算）」施策を昭和15年までの53年間にわたってとり続けることになる<sup>277</sup>。

独立経済は「島差別」＝「切り捨て」の論理とされる。この政策は、鹿児島は内地の産業基盤整備を最重要視し、奄美の産業基盤整備を無視するという内容であった<sup>278</sup>。

つまり、鹿児島本土での公共事業や産業基盤の整備に莫大な資金を必要とし、よけいな大島の産業基盤の整備にまで手が回らないという理由で、奄美は自給自足的な小規模財政運営を強いられる。結果、本土と奄美の経済格差は更に広がっていくこととなる。

1901（明治34）年に成立した砂糖消費税法<sup>279</sup>によって、奄美の貧困化はさらに進み、島民は身近にあるソテツの実を唯一の食料として、その日その日の飢えをしのぐほかない状況にあった。この状態は、大正末期から昭和初期にかけて「ソテツ地獄」と称され、東北地方以上の疲弊を余儀なくされた<sup>280</sup>。ソテツの実には毒があり、食し方を間違えると悲惨な死亡事故につながる。死者を出した悲劇が報道されている。

このような状況の中で島民は立ち上がり、砂糖消費税全廃の懇願は昭和3年になって実ることとなる。しかし、経済不況脱出の効果までは至らず、この状況を見かねた国と県は昭和4年度から「大島郡振興計画」を策定する。産業振興をベースに教育・衛生・交通運輸・土木などあらゆる分野の救済政策が10カ年計画で打ち出されるが、

<sup>275</sup> 丸田（1851－1886）は明治時代の社会運動家。幕末に長崎の商人グラバーに誘われ、イギリスに密航し、明治8年、郷里の奄美大島に帰る。県の保護下にある大島商会の砂糖売買独占に反対して砂糖勝手売買運動をおこし（勝手世騒動）、奄美の解放に貢献した（明治19年4月19日死去。36歳）。

<sup>276</sup> その根拠として、昭和18年刊行の鹿児島県史によると、県庁と隔たった距離、風土、人情、生業等、内地と異なり、地方財政上においても利害が異なることから、地方税規則第9条に分別するとある。鹿児島県史第4巻、616頁。

<sup>277</sup> 西村富明（1993）『奄美群島の近現代史』海風社、16頁。

<sup>278</sup> 例えば、内地予算は明治21年～昭和15年で20倍に伸びているが、奄美の予算は11倍しか伸びていない（日本歴史地名大体系第4巻鹿児島県の地名）、72頁。

<sup>279</sup> 日清戦争後の財政需要への対応として1901（明治34）年3月公布。黒糖100斤につき1円を課税。

<sup>280</sup> 西村は、名瀬市誌の大正・昭和の経済構造で、「ソテツ地獄」にまったく言及していないことに触れ、その理由について、①日本資本主義発達史の流れの中で奄美経済をとらえるという発想ができなかったこと、②奄美の民衆のための歴史研究としての欠落していることを指摘している。西村（1993）前掲書、45頁。

予算の実現率は低く、同 15 年には振興計画の終了とともに救済策は途中で終了することとなる。そして、日本は戦時下に入っていく。

明治の新政府になっても、そして、新たに大正、昭和と年号は変わっても、奄美の人々にとって、不条理にも困難な時代は続いていくのである。

### 3.6 奄美の近世と人々の抵抗

奄美の近世の歴史を象徴的に映し出すひとつとして、奄美でのカトリック教会の多さが指摘される。

黒糖の自由売買も認められず不当な圧力を受けていた奄美の人々に、新しい理念・考え方の必要性を痛感した奄美出身の検事の岡程良は、「万民平等」という西洋思想を奄美の人々の精神的支柱として広げようと、本土のキリスト教各派に布教を要請する。仏教などの影響もなかったことから、キリスト教は砂に雨水がしみこむように、奄美の人々はカトリックに関心を寄せ、1923 年には信者数 4 千人にもものぼっていた<sup>281</sup>。

一方で、大正から昭和にかけて軍部は、西洋思想への警戒からカトリック弾圧を行う。抵抗する信者に対し、軍部に加担して嫌がらせや激しい排撃運動を行う住民たちの様子は、『悲しみのマリアの島』<sup>282</sup>に描かれている。

このような軍部に加担した住民について稲野は、その背後に過剰なまでに「日本人」になろうとした意識が働いたのではないかとみる。「悲しみのマリアの島」の著者は、「純粋日本」としての自信喪失とその裏返しの「日本人化」への近代奄美人の葛藤とみる。

「日本人」になることに必死だった人々の思いは、奄美独特の一字姓を二字姓に改姓する動きにも表れている。1923 年の関東大震災をきっかけに東京の奄美出身の青年を中心に改姓運動が始まった。一字姓では朝鮮人や中国人に間違えられるという理由もあった<sup>283</sup>。

他方で、近世社会を通じ、島民が主体性を失ったのは誤りであったとされている<sup>284</sup>。その根拠に、富山県の米騒動が口火となった全国的な暴動の勃発は南九州ではただ 1 ケ所、奄美大島の住用村で起こったこと。また、徳之島の松原鉦山で賃金ストライキが発生していること。あるいは、大正 13 年には、アナキスト大杉栄の 1 周忌が奄美大島の瀬戸内町古仁屋で行われ、地元の若者らによって記念碑の建立がされたことなど、

<sup>281</sup> 西村（1993）前掲書、154 頁。これは奄美大島北部でほぼ 10 人に 1 人とされる。

<sup>282</sup> 小坂井澄（1984）『悲しみのマリアの島；ある昭和史の受難』集英社。

<sup>283</sup> 前利潔（2004）「近代の奄美」（松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰 50 年：ヤマトとナハのはざままで』至文堂、32-42 頁。「日本人化」は後年日本復帰の際の陳情嘆願書に、奄美は琉球列島とは別個ものであることを「証明」することで、日本復帰の正当性を訴えたことにも表れていると指摘している。41 頁。

<sup>284</sup> 長澤和俊（1974）『奄美文化誌』西日本新聞社、62 頁。

があげられる。

交通機関の未発達時代に、鹿児島県本土では全くみられないにもかかわらず、このような一揆が奄美で次々に勃発していた。これらの行動に対し長澤は、直情径行でしかも時代を敏感に反映する奄美人の特色をよく示していると述している。

### 3.7 占領下の精神史

#### 3.7.1 復帰運動に示した人々の団結

昭和 16 (1941) 年、世界大戦に突入り奄美は海上交通の要地となっていた。

1946 (昭和 21) 年 2 月 2 日の行政分離宣言<sup>285</sup>によって、昭和 21 年から同 28 年 12 月まで 8 年間、米軍による直接占領下になる。この間、奄美の人々は、米軍政府による低賃金政策<sup>286</sup>などにより厳しい統治生活を強いられ、困窮を極める。特に教育面は悲惨な状況で、これに抗し奄美島民は団結する。

昭和 26 (1951) 年には、奄美大島日本復帰協議会 (会長泉芳朗) が結成され、奄美の全市町村で実施された満 14 歳以上の住民による復帰祈願署名者は 139,348 人 (拒否者 56 人) に達する。署名率は 99.8%<sup>287</sup>を記録し、いかに奄美の人々が祖国日本への領土復帰を熱望しているかが実証されるものであった。この署名の推進には高校生が大きな力を発揮した。授業後、積極的に署名活動に参加し、主体的に復帰運動の一翼を担ったのである<sup>288</sup>。

復帰協主催の「群民大会」は悲願達成まで 27 回開催され、日本復帰の歌も作られ、祖国復帰祈願への民衆の思いが託されていく。併せて島外の出身者を中心にした郷友会組織のある東京、関西、鹿児島でも復帰運動が展開され、奄美内外で復帰運動が盛り上がっていく。

図表 4-4 高校用テキスト



出所：大島高校同窓会発行

図表 4-5 復帰運動の様子を紹介する記事

1951 年 8 月 1 日には、復帰協の泉芳朗会長自らが身をもって復帰切望を示したい



<sup>285</sup> 奄美では二・二宣言と呼んでいる。

<sup>286</sup> 当時の日本人の 1 日の賃金は 60 円に対し、奄美では軍政府命令で 1 日 10 円の賃金が指示された。前掲書、75 頁。

<sup>287</sup> ただし、56 人の署名拒否者もいたとの記録がある。西村 (1993) 前掲書、75 頁。

<sup>288</sup> 安陵会 (2014) 『奄美の復帰運動は高校生も主役だった』。

と、120 時間の断食祈願に突入する。

このことは全島民の  
共感を呼び、全島各地で、断食祈願が行われた。

出所：南海日日新聞

このような全島一丸となった祖国復帰運動の結果、1953 年 8 月 8 日、アメリカのダレス国務長官が奄美群島を日本に返還することを発表した。1953 年 12 月 25 日、午前零時を期して、奄美の島々は日本に復帰した。島民の非暴力民俗運動の勝利の象徴とされている。

奄美の人々の喜びは、「各家々で日の丸の旗をかかげた。奄美の人々は「ダレス声明」を心から喜び、日の丸の旗と提灯行列が町や村を埋め、万歳の声が高らかにわきおこった」と報道されている<sup>289</sup>。

こうして、奄美は沖縄より 19 年早く念願の日本復帰を果たすことになった。

1952（昭和 27）年 9 月 30 日の新聞では、復帰後は「奄美県」の可能性も報じられたが、日本返還で奄美が選んだのは、長年苦渋を強いられた鹿児島県への復帰であった。

占領下での奄美の人々の極貧生活は、日本復帰直後のエンゲル係数は 82.7%ということにも表れている。日本経済が伸長著しいなか、奄美群民一人当たりの所得は全国平均の 47.5%、県平均の 79.2%という状況であった。食べるものにも事欠く中で、支え合いの中で耐え忍んできたという歴史がある<sup>290</sup>。

奄美の人々は、本土復帰の日を忘れてはいない。復帰運動は語り継がれ、毎年記念する集会がもたれている。2013 年は復帰 60 年の記念の年で、全島挙げて、復帰の記念行事が行われた。南海日日新聞の社説には次のように書かれていた。

「復帰運動が繰り返し語られるのは、自立的、創造的、主体的、奄美同胞の今日的で普遍的な響きを伴っているからにほかならない。復帰の扉は、私たちが関心と理解を持って臨めば 60 年後の今も、明日も常に開かれている。」<sup>291</sup>

本研究が対象とする 85 歳以上の超高齢者は、青・壮年期を米軍の直轄下で辛酸な生活苦を体験したコホート世代でもある。

### 3.7.2 奄美ルネッサンス

一方で、日本本土から行政分離された 8 年間、奄美はかつてないほどのエネルギーが島に湧き出した時代でもあった。この時代は、「あかつち文化」あるいは「奄美ルネッサンス」と呼ばれ、復帰運動は文化興しや自分興しを土台に発展し、奄美の人々が一番エ

<sup>289</sup> 林蘇喜男（2004）「奄美ルネッサンス」松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰 50 年；ヤマトとナハのはざままで』至文堂、86 頁。

<sup>290</sup> 藪博明（2004）「いま奄美は；日本復帰後の開発と自然・社会環境の変容」（松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰 50 年；ヤマトとナハのはざままで』至文堂）、101-110 頁。

<sup>291</sup> 南海日日新聞（2013 年 11 月 8 日）。

エネルギーを持った時代とも言われている<sup>292</sup>。

本土との文化・娯楽が隔絶され、閉塞された社会状況の中で、1946年には同人誌「あかつち」、奄美青年団の機関紙「奄美青年」、1947年には文化雑誌「自由」、1951年には名瀬市婦人会文化部の機関紙「婦人会報」など、次々に発刊され、島民にとって、文学や社会科学、経済等の勉学の機会の方が実現した。

### 3.7.3 復帰下での新聞社の創設

占領下で、言論統制や食糧難、物不足など、困難の中で、奄美では2つの新聞社が創設されている。1つは、南海日日新聞社で、1946（昭和21）年に、「南の海の日輪たらんと志を掲げ、郷土の文化の向上に力を尽くす」を掲げて創設された。もう一つは、奄美タイムス（現奄美新聞社、旧大島新聞）である。

奄美の地元報道機関として、「南海日日新聞」、「奄美タイムス（現奄美新聞）」の2社は、文化を断ち切られた人々にむさぼり読まれ、祖国の実情を知る唯一の光とされた。また、両新聞社が主催する芸能祭や音楽コンクール、「奄美文化協会」などの劇団も誕生した。

本土からの物資が途絶え経済的には苦しい占領下であったが、文化は人々に癒しと励ましを分かち与え、復帰運動の原動力を担ったとされる<sup>293</sup>。

### 3.7.4 復帰運動に貢献した地域婦人会

地域婦人会もまた本土復帰運動に積極的に関わってきた。地域婦人会の地域社会に果たした役割は大きい。彼女らは、復帰後もシマの生活改善運動にかかわり、シマの伝統行事から、高齢化、過疎化問題、環境問題、子育て問題など地域全般の問題とつながって活躍し、地域社会に不可欠な位置を占めてきた。地域婦人会はシマごとに組織され、地域での「母親」的役割として家庭とシマをつなぐ重要な接点となっていた<sup>294</sup>。

一方で、奄美には、女性神官である「ノロ」信仰や「ヲナリ」<sup>295</sup>神信仰がある。女性は霊的な力をもつとされ、女性の信仰上の地位は高く、男性より優位に位置づけられてきた。しかし薩摩藩の支配下に置かれ、現実世界では女性の地位は低いが、奄美の女性は「とにかく働き者」である。

<sup>292</sup> 名瀬市誌編集委員会（1983）『名瀬市誌』。あかつちは奄美独特の赤い土質からきている。

<sup>293</sup> 林蘇喜男（2004）「奄美ルネッサンス」（松本泰丈・田端千秋編、『奄美復帰50年；ヤマトとナハのはざままで』）至文堂、88-90頁。

<sup>294</sup> 李慶芝（2015）「島嶼における地域婦人会の変遷と現状：奄美大島大和村の事例を中心に」『鹿児島大学リポジトリ』博士論文。

<sup>295</sup> 「ヲナリ」は、男性から見た姉妹のことで、ヲナリから見た兄弟は「エナリ」で、お互いに対して神となり敬愛しあうが、「ヲナリ神」は「エナリ」に対し特別の諸語能力を持つとされる。奄美には琉球文化の影響を受けた信仰的基層がある。



家事、育児はもちろん、農業、サトウキビ、酪農や果樹に従事し、そして大島紬<sup>296</sup>の織り子として、一家の生活を支えてきた。奄美の女性の生活について描写している長田須磨の『奄美女性誌』では、奄美の女性にとって、「機織は遊びであり、仕事であり、生活の一部であった」と記されている<sup>297</sup>。

筆者の調査した奄美の超高齢の女性たちもほとんどが大島紬に従事し、機織りしながら苦勞して子育てをした話をしてくれる。その頃を思い出す彼女らの表情は誇らしげである。奄美の100歳以上の百寿者（146人中男性は8人）で、94.2%は女性である。彼女たちは若い頃の過酷で厳しい生活の中で丈夫な体を作り、今日の長寿を得て暮らしている。

### 3.7.5 占領下の教育

占領下の奄美でも終戦とともに児童・生徒の通学が開始されたが、学用品や教科書が不足がちで、劣悪な教育環境にあった。貧しいゆえに父母の仕事を手伝わないと食べていけないこともあって、13%の子どもが義務教育を受けられない無就学の状態であった。

このような状況を見かね、1948年には2人の小学校教諭が本土の教科教材収集のために辞表を出して密航し、約3か月後に二人は目的を果たし帰島する。しかし、教職には戻れなかった<sup>298</sup>。また高校を卒業しても上級学校に行くことができない状況にもあった。復帰運動は、このような窮状のなか、学校の先生も一丸となって取り組んでいく。高校生も授業の合間に署名活動に取り組んだ<sup>299</sup>。

特に奄美の人々にとっての教育は、歴史的に蓄積された貧困を脱却する最も確実な方法として認識されている。「最高最大の成功を収めることの最良の方法は教育を受け学問に励むことであるから、貧しいときは何より教育を受けるのが良い」に代表される。少しでも進学の可能性があれば、家庭を挙げてその子の進学に奉仕する姿勢が共通してある。高校を卒業しても島外の上級学校に進学できない占領下では、親にとっても子どもにとっても、未来が描けない閉ざされた状況にあったのである。

それゆえに、奄美の全市町村で実施された14歳以上<sup>300</sup>の署名率がわずか2か月で約14万人と、対象者の99.8%の署名が集まった。まさに祖国復帰は、全島民の悲願であった。奄美の人々の一致団結した熱い思い、願いが詰まった歴史的署名である。

<sup>296</sup> 大島紬は2つのブームがあった。1つは大正初めの頃の好景気、2つ目は1950年代の高度成長期で、熟練した織り子は市長以上の収入を得た。

<sup>297</sup> 長田須磨（1978）『奄美女性誌』農山漁村文化協会、15頁。

<sup>298</sup> 永田浩三（2015）『奄美の奇跡；祖国復帰の若者たちの無血革命』WAVE出版。.

<sup>299</sup> 安陵会（2014）『奄美の復帰運動は高校生も主役だった』。

<sup>300</sup> 奄美では14歳、今の中学二年生になると、今でも一人前とみなされる「立志式」が行われている。

### 3.8 復帰後・戦後の暮らし

#### 3.8.1 奄振：奄美振興措置法と奄美の人々

復帰当時の奄美は、甚大な戦災とそれに引き続く行政分離、政情不安にさらされていた。復帰の翌年 1954 年 6 月から国の支援による振興開発事業として、「奄美群島振興特別措置法」（5 年の時限立法「奄振」と略）が制定され、「急速な復興」「民意の安定」「産業・生活基盤の整備」「本土なみ」「格差是正」を目標に「基盤整備」中心の公共事業がすすめられた。以降、名称を変えながら延長を繰り返している。しかしながら、「奄振」事業は「本土なみ」を掲げて進行するが、本土に目を向けるのに夢中で地元の良いさを失った、奄美群島挙げての開発事業であるという指摘がある（実に、全計画の 95%が産業・社会基盤の整備であった）。復帰後半世紀の間に、奄振事業によって奄美の自然は深刻なダメージを受け、無駄な公共事業の予算は本土に流出し、結果、奄美は利権で食い物にされる島になったと嘆かれている<sup>301</sup>。

一方で、奄美群島振興開発アンケート調査の結果では、奄美群島のイメージについて地元住民の約 6 割が「（10 年前と比べて）良くなっている」と回答している。群島外に転出予定の高校生等の 75%は将来島で暮らすことを希望しており、その割合は 5 年前より 10 ポイント程度増加している。これまでの振興開発の成果に対する一定の評価の反映という見方もある<sup>302</sup>。

高校卒業後は、島に大学や就職先がないことで島を出ざるを得ないが、将来島で暮らすことを望む背景には、ハード整備はもちろん、幼い頃から親しんできた祭りや伝統行事、温かい人々に包まれた伝統的コミュニティにも魅力を感じている結果ではないかと思考する。

#### 3.8.2 終戦後の暮らしのエネルギー

奄美の人々は終戦後もまた、アメリカ軍の統治という外部権力によって翻弄され、辛酸な生活、希望をもたらす教育を受ける機会も閉ざされていた。しかし、人々は孤立した環境の中でも、創意工夫し独自の文化を花開かせている。

奄美の人々の、抑圧された状態の中でも楽しみを見つけ、みんなで享受するというエネルギーは、ユングの分析心理学という集合的無意識<sup>303</sup>のなせる技とも理解できる。過去から積み上げられた生きる技が次の世代に伝わっていく。人々は祖国復帰という一致団結した民族運動で、祖国復帰を果たしたエネルギーは、奄美ゆえの力、奄美の歴史から形成された生きる技と理解できる。

<sup>301</sup> 菌（2004）前掲書、105 頁。

<sup>302</sup> 奄美群島の概要（2013）、78 頁。

<sup>303</sup> 集合的無意識（Collective unconscious）は、ユングの分析心理学の中心概念で、人間の無意識の深層に存在する本能的傾向や祖先の経験した行動様式や考え方が個人の経験を越えて受け継がれる先天的な構造領域である。普遍的無意識とも呼ぶ。

一方で、本土復帰後も、奄美の実質的生活水準と本土との格差は大きく、人々の暮らしはあまり改善されなかった。復帰した時（昭和 28 年）の郡民所得は対国民所得の 28.3%で、10年後の 38 年は 40.9%、昭和 46 年でも 49.6%と本土の半分以下である<sup>304</sup>。本土並みを目指して奄美復興・振興開発事業が展開していくが、本来の「開発」は、人間の福祉の実現のためで、産業・経済の開発・進行はあくまでもその手段とされながら、開発が目的化していく。多くの自然が失われていく<sup>305</sup>。一方で、現在でも、所得格差は解消されていない。

#### 4 奄美の「一重一瓶」習慣に見る独立・対等

奄美の人々は、どのような知恵を出しあって暮らしてきたのか。奄美独特の「一重一瓶」の習慣に、奄美の人々の生きるノウハウを見ることができる。

奄美の人々の価値観は、各世帯の独立性、対等性、主体性のみならず、集落内の生活の多くの側面に一貫してみられる。このような奄美の暮らし方、土地所有、労働組織形態には一つの価値体系のもとに統合されている<sup>306</sup>。この価値体系は「一重一瓶」とよばれている。

##### 4.1 「一重一瓶」習慣

「一重一瓶」の習慣とは、さまざまな行事や寄り合いで宴が催される場合には、各自が自前の酒と肴を持参する。このような宴に参加する様式を「一重一瓶」と呼び、奄美に一般的に見られる宴の習慣である。一重は重箱に入れた料理、一瓶は焼酎をいれたビンをさす。この習慣は、本家が主催して分家が参集するといった上下的、主従的価値観と異なり、参加する人の独立性、対等性を象徴するものとみることができる。

現在においても、高齢化が進み宴の様式は変化しているが、集落から均等に集められる区費や 1 回の参加費（500 円や 1000 円程度）集まる機会が多くある。集めたお金で婦人会が公民館で食事を用意する。集落での結婚式や成人式に大勢の人が集まるのも、このような負担感のない「一重一瓶」の習慣にあるようである。

##### 4.2 世帯構成に見る独立・対等

奄美の独立性、対等性は世帯構成にも表れている。日本復帰後の昭和 30～31 年に始めて行われた九学会調査<sup>307</sup>は奄美の社会人類学的研究の嚆矢とされるが、その調査

<sup>304</sup> 村山家國（1974）「奄美の社会と経済」長澤和俊編『奄美文化誌』、69-70 頁。

<sup>305</sup> 藺博明（2004）「いま奄美は；日本復帰後の開発と自然・社会環境の変容」松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰 50 年；ヤマトとナハのはざままで』至文堂、101-110 頁。

<sup>306</sup> 石川雅信（1993）「奄美の家族と『一重一瓶』」（村武精一・大胡欣一編『社会人類学からみた日本』河出書房新社、142-154 頁。

<sup>307</sup> 九学会とは、日本社会学会、日本民族学会、日本地理学会、日本民俗学会、日本言語学会、日本宗教

でも、奄美は従来の日本農村の類型（「同族型」と「組型」）のいずれにも属さない社会であることということが明らかにされた。

例えば、土地所有においても階層的な所有は行われず、平均的に細分化されていること、共同労働の組織はハロウジと呼ばれる双性親族の範囲内をベースに、友人関係や近隣関係を含めそのつど当事者の主体的選択によって形成されるなど、個々の世帯・個人の独立対等性が指摘されている<sup>308</sup>。

また、世帯規模においても、一般的に農業世帯の比率が50%を超える地域では、直系家族を主とする家族形態が多く見られる。一方、総世帯数に占める農業世帯数が10%以下の地域では、核家族を主とする家族形態が圧倒的に多いとされる。ところが奄美は例外的で、奄美の総世帯は75%が農業に従事しているのにもかかわらず、家族形態だけは直系家族は著しく少なく、核家族にみられる、縮小指向型に近い傾向にあったことが指摘されている。

この傾向は、昭和50年代の大和村集落の調査からも、87世帯中75世帯（86.2%）は一代又は二世代の小家族であったことが明らかにされている。また、単身世帯20世帯のうち19世帯は60歳以上の高齢者世帯で、そのうち7人は集落内に別世帯を構える子がいるが、積極的に同居しようとする意図は何えなかったと記述されている<sup>309</sup>。

奄美では、「親子の同居・別居は制度化されたものでなく、様々な条件の中で主体的選択により小家族形態になっている。ただし、世帯が独立的であることが孤立でもなく、近隣に住む子どもや親族、友人の世帯との対等性に基づく互助的連帯がある。現在でも条件が許せば親子は独立して別居志向が強い。

親子は独立して、別居形態が多いことは、筆者の奄美の超高齢者調査からも明らかにされている。超高齢期でも一人暮らしが多い。しかし、近くに子や孫が住んでいる。日常的な接触は濃密である実態が明らかにされている<sup>310</sup>。

#### 4.3 家意識の強弱

奄美の家族は、伝統的に双性家族的<sup>311</sup>傾向が強いとされ、相続財産や名声などの先祖の偉業に価値を置く家族連続性に対する志向は弱い。奄美では祖先祭儀の実行が大切とされ、親の後を取る人（ウヤワズレといわれる）は、親の地位財産の相続継承と

---

学会、日本心理学会及び東洋音楽学会の9学会で構成され連合して奄美の学術総合調査が行われた。第1回は1955年～57年（昭和30年～32年）、第2回は1976年～80年（昭和51～57年）である。

<sup>308</sup> 同族型社会でもなく、「組型」という水平的連携と共生が顕著な地縁型でもなく、奄美は地縁を契機とした連携と共生が薄弱であり、奄美の地縁集団の特質は個々の家の独立性であるとする。石川（1993）前掲書、145頁。

<sup>309</sup> 石川（1993）前掲書、147頁。

<sup>310</sup> 富澤公子（2009a）「ライフサイクル第9段階の適応としての『老年的超越』；奄美群島超高齢者の実態調査からの考察」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』2、327-335頁。

<sup>311</sup> 双系家族とは、父方の先祖の祭祀を基本としながら妻＝母方の先祖の祭祀も行うことをさす。

いう意味でなく、親の面倒をみる人、親の死後墓や位牌を祀る人の意味で使われ、子どものうち、最も向いている者になる。

奄美における家族連続性は、祖先祭祀の側面で強調され、位牌祭祀における三十三回忌の弔いあげで、死者の霊は一般的祖霊（カミ）となり個性は喪失する。一方、三十三回忌の祭祀を受けられなかった場合は、霊は行き場がなくなって集落の中を飛びまわるとされる。

したがって奄美の人々は、自らの死後誰に霊を拜んでもらうかが重大な関心事となる。奄美では、自己に隣接する一世代上と一世代下位にわたる連続性への志向は強いものがある<sup>312</sup>。第9章の与論の事例で紹介する。

#### 4.4 暮らしの中の祈り

奄美では、先祖との距離が精神的にも物理的にも近い。先祖の墓は、海の向こうのネリヤ・カナヤの神の国に向かって建てられている。奄美の人々は生活の中に、ヤハウガナシ（自分の先祖の神様）に感謝するという意識があり、墓はそれぞれの自宅から距離的に近いところにある。先祖や神は精神的にも距離的にも近い存在である。

毎朝夕2回、先祖をはじめとした神様にお祈りをし、また、月2回、旧暦の1日と15日はお墓参りの習慣がある。亡くなった人の月の命日も大切にされる。こうした日常的な祭祀を経て、三十三回忌以降は祖霊（カミ）となる。

例えば、筆者の調べたところでは、奄美の先祖崇拜は次のようになる。島によって、若干異なるが、先祖・神への祈りは濃密である。

図表 4-6 奄美の先祖崇拜の様子

島・市町村	先祖崇拜の様子
奄美市	朝晩仏壇の祈り、毎月1日、15日墓参り。
徳之島	朝晩仏壇の祈り、毎月1日、15日墓参り。
宇検村(阿室)	朝晩先祖の神(仏壇)の祈りとして、屋敷の火の神、水の神、大工の神に祈る。毎月1日、15日は墓参り。
沖永良部	朝晩神棚に祈る。毎月1日、15日は墓参り。
与論島	朝晩神棚の鏡(先祖の神)に祈る。屋敷の火の神、水の神、福の神、海の神に祈る。お墓に行くのは特別の時。

出所：筆者作成

なお、奄美の宗教法人総数は74である。その内訳をみると、神道系31、仏教系6、キリスト系12、諸教系（その他）25で、仏教系寺院が極端に少ない<sup>313</sup>。奄美の宗教の特徴は、本土と異なって神道、キリスト教系が多く、仏教は極端に少ないことである。人々は先祖信仰を中心に墓地を構成し、各家の墓地内には仏教形式の大和墓と十

<sup>312</sup> 石川（1993）前掲書、149頁。

<sup>313</sup> 奄美群島の概要（2017）、前掲書。

字架が違和感なく混在している。信仰に対しても個人の自由が認められている。信仰に対しても奄美の人の大らかさがある。

写真は、徳之島母間花時木名（ケドキナ）集落。奄美はクリスチヤンの多い島である。

一方、与論島や沖永良部島は神道である。仏教特有の仏壇や戒名、位牌はなく、床の間には神道形式の神殿がある。その中心部に先祖代々伝わる鏡がある。

与論島や沖永良部島は神道であるが、ローソクと線香もある。神仏混合の形式がみられる。

図表 4-7 徳之島母間の墓地



出所：筆者撮影

図表 4-8 与論島の神殿



出所：筆者撮影

図表 4-9 沖永良部の神殿



出所：筆者撮影

## 5 おわりに

### 5.1 歴史から培われたアイデンティティ

本章では、これまであまり注目されてこなかった奄美の、閉じられた（秘められた）その歴史を紐解くことから、奄美の人々のアイデンティティの源が明らかにされた。

奄美の歴史はあまりに悲しい。奄美の位置するヤマト（本土）とナハ（沖縄）に挟まれ、地理的・宿命的な環境ゆえに、常に外部権力に侵略され、翻弄され、搾取されてきた。人々は過酷な労働、自然災害、飢饉や飢えなど、食べ物にも事欠く辛酸な生活を強いられてきた。

一方で、奄美の人々は権力に抗し戦う術を蓄えてきた。人々は単に忍従するのではなく、圧政に対し団結して戦う抵抗の歴史が浮かび上がってきた。奄美の後世の人は、社会正義のために立ち上がりながらも権力に倒れた人々の悲惨な歴史を忘れてはいない。

先人たちの勇敢な行動は、伝統や歴史を受け継がれるコミュニティの中で、シマの人々に語り継がれている。それらは、人々のアイデンティティとなって、未来に向かって人々の生きる指針となっている。

## 5.2 歴史からつながる精神性と生活文化

一方、奄美の文化に注目すると、文化は奄美の人々の悲惨な生活の精神的癒しとなって立ち現れている。植木<sup>314</sup>は、文化について、「人間の生きる喜びを支え、人生に生きる意味を与えてくれる源泉」であり、「文化は社会の人々の“きずな”である」と評価している。まさに、文化は、奄美の人々のきずなそのものである。

今日、経済的豊かさの割には幸福感が高まらないという社会意識の中で、地域固有の自然や文化、コミュニティのつながりなどを再評価・取り戻す機運がでている<sup>29</sup>。

島尾敏雄は、「奄美の島々に伝承された生活文化は、本土のそれと別個のものでなく、その孤独な環境のせいで急激な変化を伴った展開にさらされなかったため、むしろ日本の古い生活文化の痕跡をより多く残していることが認められている。これらは、かつての日本に普遍的にみられたものである」と論じている。

奄美の生活文化は、脈々と波打ち、祭りや伝統行事がコミュニティの喜びごととして継承されている。奄美の過去の歴史を振り返ると、超高齢者は奄美の過酷な歴史の生き証人であり、次の世代のために復帰を実現し、生活環境を整えてきた。

このようなコミュニティのつながりの中で、歴史を拓いてきた超高齢者のエネルギーとなって、奄美の長寿が実現しているように思われる。

次章では、奄美群島の各シマで継承されている伝統行事を取り上げ、超高齢者の健康長寿と幸福感との関連を検討してみることにする。

---

<sup>314</sup> 植木浩 (1998)「文化の意義と文化政策の役割」池上惇・植木浩・福原義春編『文化経済学』有斐閣、214 頁。

## 第5章 シマの豊かな伝統文化と超高齢者

### 1 はじめに

#### 1.1 奄美のシマに注目する

本章では、奄美の超高齢者の長寿と幸福度の源泉を明らかにするために、超高齢者の人間発達や潜在能力を媒介するシマの豊かな自然資本、文化資本、社会関係資本に焦点を当てる。これらの資本を内蔵する奄美のシマに着目すると、以下のことが見えてくる。

つまり、超高齢者は、過去の過酷な歴史に培われた生きる技やノウハウを蓄積し、「トウトウカナシ」という感謝の言葉に見られるシマの象徴的文化や文化資本を体化した存在とみることができるということである。

例えば、民俗芸能、島唄や八月踊りはシマロ（方言）で唄われ、超高齢者はその名人であり、多様なテンポで踊られる八月踊りの達人である<sup>315</sup>。若い世代は、島唄や八月踊りを自在にこなす超高齢者の所作や技を真似しながら、伝統文化や伝統行事が引き継がれていく。

奄美のシマの事例を考察すれば、地域のコミュニティ特性が長寿と幸福度に関連する要因として導き出されるのである。

翻ると、本土では高度成長経済の進展の中で、伝統的コミュニティは弱体化し、地域の祭りは消え、祭りを司ってきた老人は、経験や技・叡智などを蓄積しながら自らの潜在能力を発揮する場がなくなっている。生産性や効率性を重視する経済社会では、超高齢者は、非生産的、依存的存在として、身体機能の低下や介護の視点から語られる。

一方で、シマロや伝統文化が引き継がれている奄美のコミュニティでは超高齢者には求められる役割があり、潜在能力を発揮する人間発達の間がある。シマでは行事や会合の際には年長者は上座に座らされる。年齢が序列を決める。町長でも例外はない。このような人格の相互尊重や成果の分かち合いの習慣を持つ、“個を尊重しあう”奄美のコミュニティに注目する。

#### 1.2 奄美のシマの資本（自然・文化・社会関係）を幸福研究に生かす

これらの子細に観察することで、奄美の集落に脈々と受け継がれている仕事や生活の技やノウハウ、祭りや年中行事、習慣、価値観、文化性、長寿者や自然への敬愛などの文化資源の存在が明らかにされる。そして、加齢に伴う身体機能の低下に関わらず超高齢者が健康長寿や満足感を維持している背景要因が明らかとなる。

---

<sup>315</sup> 中原ゆかり（2007）『奄美のシマの歌』弘文堂、120-121頁。



これら超高齢者の幸福感の醸成に関わる文化資産を民俗学的視点からも学びつつ、掘り下げる。そのことによって、奄美のシマに残る祭りや伝統行事などの文化資本の役割や結いの習慣が明らかにされる。それらは、奄美の社会関係資本を豊かにし、実質所得だけでは測れない幸福度を高めると要因として機能することが考察可能となる。

これらの研究成果が、社会学や心理学、老年学における先の知見と総合化されるならば、GDPの経済指標では測れない、高齢化や過疎地が進む地域における超高齢者の幸福研究に新たな展望が拓かれうると考える。奄美の超高齢者と集落における自然資本、文化資本、社会関係資本の形成に着目する意義がここにあると考える。

ここでは、奄美の共同体コミュニティを社会学の視点にとどまらず、人間存在の場の重層的要素として、風土や民俗的視点を加えた広い概念からも捉える。そこで、奄美のコミュニティを、「風土や伝統文化、習慣、信仰から形成された帰属意識と自己了解、相互尊重や成果の分かち合いの基盤をもつ個を尊重し合う伝統的コミュニティ」と定義する。

上記の定義を踏まえ、まず、奄美のシマの構造と機能を考察していくこととする。

## 2 奄美のシマに残る祈りと生活空間

### 2.1 奄美のシマの形状

『名瀬市誌』（現奄美市）によると、奄美の古代シマの構造には4つの基本的道具立てがあるとされている。

第1は、モリ、オデ（御岳）、ウガン（拝ん山）、オボツ山、カグラ山などの呼称をもつ『聖林』で、そこは神が下りると信じられている神聖な場所である。第2に、キユッキョ（清い川）、カンギョ（神ん川）、ミゾリ（身そぎ、水ごりの転）、ヤンゴ（屋ん川）などの呼称を異にする『清めの泉』である。第3に、シマを貫く『神ん道』である。これの上端は聖なる林に発し、海浜に出て海のかなたのネリヤに通じることになる。シマを訪れる海神、天上神を送迎する『神聖な通り路』である。第4に、『祭り庭』で、海神のための浜ウドン（御殿）のあるウドン浜やシマの中にあるミャーという広場等からなり、トネヤ、アシャゲという聖屋がある<sup>316</sup>。シマは、聖林の麓の里から時代とともに海岸の方（金久：かねく）に発展する。・・・日本で最も濃厚に海神信仰の保たれている地方」である<sup>317</sup>。

以上の奄美の古代シマの痕跡は、今も奄美のシマに多く残っている。シマの山寄りには神聖なカミ山があり、女性神官ノロ<sup>318</sup>によって迎えられた神々はカミ山に降り、

<sup>316</sup> トネヤ、アシャゲは祭りの際の神聖な建物。

<sup>317</sup> 『名瀬市誌』（1968）、122-123頁。

<sup>318</sup> 琉球王朝時代に辞令書で任命された女性神職ノロが祭事や農耕儀礼を司る行事がシマに伝わっている。

そこからカミが通るカミ道があり、ミヤーと呼ばれるシマの中心祭事を行う広場に通じる。カミ山から垂直軸にカミ道、ミヤーという広場に達し、さらに海辺に至り、五穀豊穡をもたらす神の国ネリヤ・カナヤに通じる。

中心の広場には、四本柱で吹き抜けになった祭場（アシャゲ）がある。広場の一番近くにシマの神祭を担当するノロの屋敷がある。また、トネヤという神祭りの際に祭場になる建物がある。ノロの屋敷やトネヤが廃れたシマでも祭りの際の祈禱場としての役割を持つ家がある<sup>319</sup>。今日では、奄美の多くのシマでは、祭事の際に会場となる広場に、公民館と土俵が移設されている。土俵は神聖な場所として大切にされ、豊年祭での豊年相撲、敬老行事で相撲が行われている。八月踊りは土俵を囲んで踊られる。

奄美の居住空間には、自然とともに生きてきた共同体の蓄積してきたノウハウが有形、無形の資産となって息づいている。自然への祈りの空間はシマの造形となって文化的景観を形成している。その姿が色濃く残る奄美大島宇検村阿室集落。まず、カミ山の特徴は頂上に傘の形状になった琉球松の植生である。遠くからでもよくわかる。

図表 5-1 カミ山



出所：筆者撮影

図表 5-2 アシャゲ(祠)



出所：筆者撮影

図表 5-4 カミ道

図表 5-3 トネヤ(祭場)とノロの屋敷



出所：筆者撮影

図表 5-5 魔よけの石



<sup>319</sup> 奄美大島（大和村、宇検村、奄美市小宿など）の事例。



出所：筆者撮影

出所：筆者撮影

## 2.2 奄美のシマと暮らし

奄美の 8 つの有人島には約 300 ものシマ<sup>320</sup>が点在する。多くのシマは前面を海に、三方は険峽な山が迫っている。そのため、シマは閉ざされ、交通機関が発達していなかった昔は隣のシマとの交流はなく、人々はシマの中で生まれ、結婚し、一生をシマの中で過ごすのが一般的であった<sup>321</sup>。

人々の生活はシマ単位に営まれ、その生活には自然の生態系を持続させる知恵、自給体制、地縁・血縁で深く結びついた伝統的共同体（ゲマインシャフト集団）の要素が色濃く残っている。

隣のシマは、昔は交流がなかったためにシマ毎に言葉や習俗や異なり、島口（方言）も異なり、シマ歌やリズムも異なる八月踊りが生まれた。奄美の人々にとって、シマは自分の出自を確認できる唯一の場所であり、生の原点でもある<sup>322</sup>。それゆえ、奄美の人にとってのふるさととは、「島のほんの一点を占めるシマなのである」<sup>323</sup>

過去の歴史からも示されるように、奄美の人々は外部権力による支配・収奪・抑圧を受け、貧窮の極にあっても自然に対する畏怖と畏敬を忘れることはなく、自然の循環を大切に、豊かな自然を守ってきた。そこには、人間は自然に生かされているという認識から、森・川・海との一体感を持った生活が営まれ、そのことが独自の豊かな文化を創り伝えてきた。

奄美の人々は、シマを離れた後にも、自分のシマに対する思いは熱い。シマを出て他所で暮らす出身者の組織である郷友会<sup>324</sup>（ごうゆうかい）は、シマ単位に結集されている。高齢化や過疎化の進むふるさとのシマへの伝統行事の参加・担い手だけでなく、共同墓地・記念碑の建立の際の寄付など、何かある時には大きな力となって働いている。現代版の結い・知識結いが機能しているといえよう。

<sup>320</sup> シマは縄張りを示す。現在の大字を指す。さらに大きなシマは小字単位に分かれたシマもあり、約 1,000 のシマが存在するのではないかとされている。

<sup>321</sup> 奄美のシマの単位は、現在では車で走れば 2、3 分で通り過ぎることができるほどの存在にすぎない。

<sup>322</sup> 例えば徳之島の母間集落には 3 つのシマに分かれ、出身地を言う場合母間だけでは通じない。

<sup>323</sup> 山下欣一（1998）「奄美の精神世界」西田テル子著『聖なる島：西田テル子写真集』星企画、24-27 頁。

<sup>324</sup> 奄美では「ごうゆうかい」と呼び、沖縄では同じ字を書いて「きょうゆうかい」と呼ぶ。

## 2.3 人々の精神性

過去の歴史に示されるように、奄美の人々は外からの支配・収奪・差別を受け貧窮の極にあっても自然に対する畏怖と畏敬を忘れることはなく、自然の循環を大切に、豊かな自然を守ってきた。そこには、人間は自然に生かされているという認識から、森・川・海との一体感を持った生活が継続され、そのことが独自の豊かな文化を創り伝えきた。

人々は月や太陽までを含めた宇宙観を持ち、特に水の立体的な循環を大事にしてきた<sup>325</sup>。奄美のユタ神の親ユタである巫世知照信氏は、「石から砂の浜までぜ〜ぶ水がなくちゃいかん」、「神に頭を下げるのを忘れても、水や太陽に頭を下げることを忘れるなっちゅうのが奄美」と繰り返し語っている。そのことを表す言葉に、「水や山おかげ、人（チュ）や世間おかげ」ということわざが奄美にあることが紹介されている。

シマの人々は、奄美の厳しい自然、社会制度のもとで、互いに助け合うノウハウを蓄積し、祈りとともにある居住空間を大切につくりあげてきた。

## 2.4 暮らしの祈り

近年、高齢化と過疎化の中で先祖のお墓を守る取り組みとして、合同墓に移行する動きがある。将来、お参りに来なくなったお墓をどうするかへの危機感が人々の中に共有されている。

先例を作ったのが宇検村（屋鈍）の共同墓である。シマの人々の共同墓への移行の意思は強く、まだ新しいお墓も壊され、旧墓地の跡地に建てられた。お墓の前の広場は海の見える場所でもあり、シマの催しなどが行われるような空間になっている。集落の人は、「死んでも誰かがお参りしてくれるので安心」という。

奄美の居住空間には、自然とともに生きてきた共同体の意思が強固に構築しており、暮らし環境の変化に対応した人々の知恵やノウハウが有形、無形の資産となって息づいている。

図表 5-6 屋鈍集落の共同墓の外観



出所：筆者撮影

図表 5-7 共同墓の内部



出所：筆者撮影

<sup>325</sup> 菌（2004）前掲書、103頁。

## 2.5 ネリヤ・カナヤと聖なる水

奄美の人々の精神性は、海の向こうの五穀豊穡をもたらす幸せな国ネリヤ・カナヤへの信仰に象徴される。そこは死者の魂の行く国であり、人々に富をもたらす国でもある。奄美では、伝統行事の中に祖霊祭と豊年祭が一体化している。

例えば、徳之島町の井之川集落の伝統行事である「夏目踊り」では、朝、親族一同で先祖のお墓参りをしたあと、夜更けから集落全体を1軒1軒練り歩き、太鼓を叩いて歌って踊り、海の向こうのネリヤ・カナヤの国の神様に豊穡祈願をする。

龍郷町の秋名集落で行われる「平瀬マンカイ」の伝統行事は、東シナ海に面した海で、ネリヤ・カナヤの国から稲霊を招く行事である。共に、国の重要無形民俗文化財に指定されている。

また、「聖なる水」は、今でも奄美の集落の女性達に大切にされている。女性たちは、生まれた時にそれぞれのシマの聖なる泉から汲まれた水を大切にする。

これは女性の生理に根差した健康祈願でもあるとされる。コップの水のなかに3つの石を入れて、その水を大切にする。その水は、昔は、毎日泉まで汲みに行っていた。現在では水道水に変わり、泉の水と交換するのは1カ月毎と語ってくれた<sup>326</sup>。

毎年12月の末になると、女性たちは健康を祈願するためにそれぞれの集落の泉の水場に祈りに行く。

図表 5-11 聖なる水 大和村大和浜集落



出所：筆者撮影

図表 5-12 聖なる水場 宇検村阿室集落



出所：筆者撮影

## 2.6 ハレとケ

奄美のシマの暮らしには、祭りなどの非日常行事「ハレ」と、日常生活の「ケ」が1年の生活リズムの中で繰り返され、生活を楽しむ工夫され、伝統文化として息付いている。ハレは晴れ着などの時のハレで、非日常の特別の時を意味し、ケは、日常や普段を意味する。祭りや年中行事は、ハレであり、日常生活と区分される<sup>327</sup>。

こうしたハレとケの概念に対立するものとしてケガレがある。ケが農業を可能にす

<sup>326</sup> この例は、宇検村阿室集落女性 Yさんから聞き取り（2011年2月7日）、また、龍郷町の秋名の集落のkさんも語ってくれた（2013年1月5日）。

<sup>327</sup> 谷口貢・松崎憲三（2006）『民俗学講義：生活文化へのアプローチ』八千代出版。

るエネルギーととらえ、そのエネルギーが枯渇する状態をケガレだとする。ケガレを回復するのがハレの儀式であり、ケからケガレへ、ケガレからハレへ、ハレからケと  
いうように循環する。祭りや年中行事は、日常生活のエネルギーが減少した状態を、  
活力が充満した状態に回復するために執行されるとものと解釈されている<sup>328</sup>。

また、ハレとケは、欧米のように聖俗二元論で明確に区別して捉えられるものでもない。ケの空間がハレの空間に転換するなど、特定の空間を互いにすみ分けながら、  
イレカワリの原理で、ハレのなかにケ、ケの中にハレが内在する。奄美のカミ道がそ  
うである。

薩摩藩の圧政と抑圧された生活の中で、奄美の人々にとっては祭りや年中行事は、  
厳しい農作業にとって欠かせないエネルギーの源である。それはまた、集落のきずな  
や結いの習慣を作り、共同生活に基盤を強固にし、永続化する源でもある。まさに、  
奄美には昔の人の生活の知恵がノウハウとして積み上げられている。

## 2.7 奄美のノロとユタ

奄美の人々の精神文化を理解する上で、ノロとユタの存在が指摘される。ノロは琉  
球王朝時代には王府から辞令書（インバン）で任命され、奄美の各集落で神々や先祖  
などを祀る女性神官として、政治的・宗教的権威を持ってきた。しかしノロは世襲制  
のため高齢化で減少し<sup>329</sup>、現在では奄美でのノロの神祭は姿を消し一部の地域で残っ  
ているのみである<sup>330</sup>。一方ユタは、ノロと異なり個人的事情から神を拜む人になる。

例えば、突然、何らかの霊的存在に憑かれた状態（カンガカリ）となる巫病（ふび  
ょう）を経て、次第に霊的能力を備えるようになる。ユタは女性が多いが男性のユタ  
もいる。個人の禍福吉凶を占ったり、死者の意思を遺族に伝えたりする、民間のシャ  
ーマンの機能を持つ霊能者である。

過去の歴史からは、ユタも度々弾圧にあってきた。山下は奄美のシャマニズムの冒  
頭で、「奄美のユタの歴史は悲しい。それは偏見と侮蔑と、はたまた、シマの人々の熱  
烈な信仰と支持の狭間で、穏便な存在を取りながら、ひそやかに受け継がれた歴史が  
ある。奄美の人々は教養の如何に拘わらず、生活の実感としてユタの存在を理解して  
いる。それは、深くシマの人々の精神生活を基底する存在だからである」と記してい  
る<sup>331</sup>。

<sup>328</sup> 桜井徳一郎（1984）「結集の原点；ハレとケとケガレの相関」『ハレ・ケ・ケガレ 共同討議』青土社、219-235頁。

<sup>329</sup> ノロの継承は血縁的で生涯独身であったことから叔母から姪へと継承される。

<sup>330</sup> 筆者の調べでは、奄美大島西南部の大和村大棚集落では豊年祭のノロ祭事を確認することができた（2012年11月）。

<sup>331</sup> 山下欣一（1998）「奄美のユタ」西田テル子『聖なる島；西田テル子写真集』星企画、42-54頁。

## 2.8 超高齢者とスピリチュアリティ

奄美の島独特のゆったりとした時間の流れは、超高齢者のスローな暮らしと適合している。過ぎてきた過去、これからいく世界が、現在の暮らしの中で、ゆっくりと確認できる。このようなゆったりした時の流れが、濃密なスピリチュアリティを生む基盤になって、超高齢者の大らかな精神性に結びついているのかもしれない。

稲野は、奄美のシマを小宇宙と表現し、奄美の人々の生活にはスピリチュアな精神世界があるという。それは、「奄美の風土や日常生活に根ざした精神的な宇宙のようなもので、死に対する恐怖から解放し、精神的・肉体的な安定をもたらす効果がある」と指摘する。そして、「有」でも「無」でもない、「空間」も「時間」もない、「自愛に満ちた絶対的なもの」に溶け込むような深遠な意識の状態をスピリチュアリティと指すと論じている<sup>332</sup>。

奄美のスピリチュアリティは、「歴史・風土・習慣、日常生活の中に織り込まれた一体感、または人々の精神世界、超越観を軸とした生き方」から醸成されたものといえよう。

超高齢者の幸福感を紐解くと、自然と一体化した暮らし、過ぎてきた過去、死へと導かれる世界が自然との営みと一体化し、現在の暮らしに濃密なスピリチュアリティを生む基盤、それは、超高齢者の精神性と結びついているのかもしれない。

## 3 シマにおける祭りや年中行事の実際

奄美の伝統行事は、農耕文化を中心とした収穫・豊年祭、長寿や歳を祝う行事、盆の祖霊行事、そして毎日の祈り、習慣などの伝統文化が継承され、シマ毎に少しずつ形を変えながら現在も行われている。

伝統行事の際歌われる島唄は、歴史でみたように多くのヤンチュがいた時代の、厳しい仕事の後に歌った唄や慰みことから始まったとされる<sup>333</sup>。島唄や八月踊りは、地域や家族のさまざまな集まりの機会に、高齢者から若者、子どもへと継承されている。加えて、シマの行事の際には、高齢者は特別な席と食事でもてなされ、長寿者を尊ぶ敬老意識が日常的に強く残っている地域である。

なお、奄美の伝わる民俗行事は稲作と連動した伝統行事に数多くみられるが、現在の基幹作物であるサトウキビにかかわる民俗行事がほとんどみられない。このことについて、幕藩時代からの歴史的な問題と関係するのではないかという見方もある。

### 3.1 シマの文化資本：伝統行事の実際

<sup>332</sup> 稲野慎（2008）『揺れる奄美、その光と陰』、南方新社。

<sup>333</sup> 松元幸一郎（2004）『奄美の島歌;その美と真実』松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰 50年；ヤマトとナハのはざままで』至文堂、137-1頁。

過去の歴史が語るように、奄美は薩摩藩の圧政と抑圧の中で、人々は日ごろの厳しい農作業に欠かせないエネルギーの源を年中行事に見出し、生きるエネルギーと蓄えてきた。また、慢性的に欠乏する食料難の暮らしは、シマの人々が共同で生きていくための食料を分け合い飢えをしのぐための結いの習慣を構築してきた。

人々は生き延びる知恵を、先祖とつながる暮らしとして結集していった。まさに伝統行事は、先代の人の生活や知恵やノウハウが詰まった集落の文化資本として積み上げられ、各シマでは住民の手で大切に継承され、生活に根づいている。奄美は伝統行事など無形の文化資本の宝庫である。

一般に、所定の祭日に行われる儀式は年中行事と呼ばれる。行事は祖霊祭祀、農耕儀式、跋浄（ふつじょう）の3つの区分から成り立つが、跋浄は、この2つの行事に先立って行われるものである。大きくは祖霊祭祀、農耕儀式の2つに分けられる<sup>334</sup>。

祖霊祭祀は正月と盆に代表され、農耕儀式は、春先に里に下って農耕を守り続け、秋の終わりに山に帰る田の神を稲作の折り目の時期に待って祈るものとされる。

しかし奄美の伝統行事の特徴は、お正月と盆を主軸にした行事と、三八月（ミハチガツ）と呼ばれる農耕行事に関連した行事の2つに分けられ、いずれも祖霊祭祀と農耕儀式が一体となっている。以下、筆者が取材した行事を中心に記述する。

## 3.2 年齢に関する伝統行事

### 3.2.1 子どもの成長を祝う「七草」の行事

1月7日は七草粥の日である。この日奄美の各集落では、数え7歳になった子どもを祝う「七草」の行事がある。七草の日に、7歳になった子どもが親類7軒を回って、七草粥をもらいに行く。上の兄弟・姉妹は粥を入れる鍋を持つ役として付き添い、頂いた粥は持ち帰って、家では親戚が集まって盛大なお祝いをする。七草粥を食べることで、神の子から人間の子になるとされている。

この習慣は「七つまでは神のうち」、七つまでは産神様が守ってくれるとされるもの。以前は、子どもは亡くなりやすかったので、死んでも人間の死とみなさなかつた。一種の緩衝地帯<sup>335</sup>を設けて、悲しみを軽減する知恵とされる<sup>336</sup>。七草の行事は、今でも奄美では広く行われている<sup>337</sup>。下の写真は龍郷町秋名集落での様子である。

図表 5-13 親らと集落を回る様子

図表 5-14 頂いた七草粥

<sup>334</sup> 宮家準（1974）『日本宗教の構造』慶應通信。

<sup>335</sup> 悲しみを軽減する働きとされる。

<sup>336</sup> 大藤ゆき（1982）『子どもの民俗学』草戸文化。

<sup>337</sup> 2013年1月7日の七草の取材。





出所：筆者撮影



出所：筆者撮影

図表 5-15 親戚に挨拶する様子

図表 5-16 回る様子

図表 5-17 粥の中身



出所：筆者撮影



出所：筆者撮影

粥を頂いた7歳の子は、「バツケイ、バツケイ、ナナツニナリョータ、ナンカンドスヲ、モラットーレ（おばさん、おばさん、7つになったので、七草粥をもらいに来ました）と、あいさつする。

### 3.2.2 シマの成人式

奄美では行政の主催する成人式とは別に、シマでも人々が集まって成人のお祝いをする。かつての小・中学校の先生たちも教え子の成人とあつて参加する。

奄美での宴は、昔からの「一重一瓶」慣行によっている。今は会費制で行われ、多額の金品のお祝いはしない。それぞれが対等・平等に参加する。この集落では参加費1,000円が徴収され、婦人会が会費で食事づくりをしていた。

「単独だとそれぞれにお金があるけど、合同だから1,000円で皆なのお祝いができる」と参加者は話していた。現金収入が少ない地域の生活の知恵でもある。

秋名の集落の成人式では、「今年の成人の子の親は接待係、来年成人の子の親は受付を担当する」というルールを決められていた<sup>338</sup>。宴は島唄で始まり、最後は八月踊りで盛り上がる。会費で作った婦人会の作った手料理が並ぶ。成人式の着物はこの地の伝統大島紬が多い。

#### ① 龍郷町（秋名集落）の成人式

<sup>338</sup> 秋名の集落区長の話（2013年1月5日）。

図表 5-14 踊りがある



出所：筆者撮影

図表 5-15 本人も出演



出所：筆者撮影

図表 5-16 集落の参加者



出所：筆者撮影

## ② 龍郷町（円集落）

図表 5-17 両親もお祝い



出所：筆者撮影

図表 5-18 集落の参加者



出所：筆者撮影

図表 5-19 お年寄りも見守る



出所：筆者撮影

### 3.2.3 年の祝い

「年の祝い」は、その年と同じ干支に生まれた人のお祝いで、正月最初のその干支の日に祝う。最近では正月2日か5日に祝うところが多い。「年の祝い」<sup>339</sup>は、数え年13歳から始まって12年ごとにやってくる。特に盛大に行われるのは、61歳、73歳、85歳、88歳の米寿のお祝いである。徳之島では、61歳以上は「成長祝い（フデュウエ）」と呼んで盛大にする。

戦前は、年の祝いは各個人で行っていた。年祝いの床飾りには鶴、亀、笹、本土の松竹梅、鶴亀が出される。鶴は大根で作り、尾は大根葉、亀はソテツの幹を削ると亀甲の模様が出てくる甲羅に見立て、頭は里芋、尾はゆずり葉と身近な材料で作って

<sup>339</sup> 61歳のお祝い：田畑千秋（1992）『奄美の暮らしと儀式』第一書房。

1 番 この屋敷の内には、長寿のお祝い、上には鶴が舞って、下には亀が遊ぶ。

2 番 61歳は若年のお祝い。73歳を願って85歳を願おう。

3 番 今日の誇らしさは、いつもよりも勝っている。いつも今日の如くあってほしい

73歳のお祝い：

1 番 同じ（この屋敷の内には、長寿のお祝い、上に鶴が舞って、下には亀が遊ぶ）

2 番 73歳までは中年のお祝い。85歳をかけて百歳を願おう。

3 番 同じ

85歳のお祝い：

1、3番は同じ

2 番 85歳の年は命を願ってあげましょう。88歳を願って百歳を願おうという歌詞がある。

た。

一方、沖縄は奄美と違って 88 歳の米寿の祝いからが長寿の祝いとされている<sup>340</sup>。年の祝いは、集落合同で行われている。年の祝いの祝い歌には、61 歳は若年のお祝い、73 歳は中年のお祝い、85 歳は百歳を願おうという歌がある。特に 88 歳のお祝いは旧暦の 8 月 8 日に行われ、長寿にあやかってその人の髪を数本、5 センチほどに切り、祝いの盃とともに参列者全員に白い紙に入れて分ける習慣がある。

#### <小宿集落の事例>

調査に行った 2013 年の干支は巳年で、最初の干支の日が 1 月 3 日ということで、年の祝いは 1 月 3 日に行われていた。住民約 600 人のうち約 1/3 に当たる 200 人が参加していた。この集落では、61 歳以上の干支の人が招待される。その年の招待者の人数が多いほどお祝いにかけつける家族が増え、参加者は多くなる仕組みである。ここでも参加費は会費制で、婦人会の作った料理が出されていた。「一重一瓶」慣行がここでもみられた。この日だけは小学校の講堂でもお酒が許される。三々五々、交流が始まる。

図表 5-20 招待者 図表 5-21 年の祝い 図表 5-22 料理 図表 5-23 交流の様子



出所：筆者撮影

出所：筆者撮影

出所：筆者撮影

出所：筆者撮影

図表 5-24 招待者家族の余興の様子



出所：筆者撮影

図 5-25 最年長 100 歳の参加者

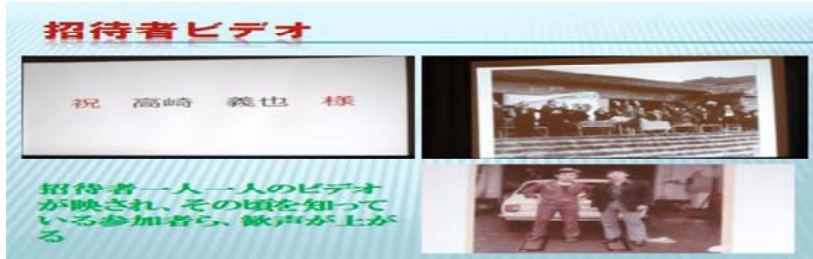


出所：筆者撮影

<sup>340</sup> 沖縄の「年祝い」は長寿の祝いとして、数え歳 88 歳のトーチカ、97 歳のカジマヤーが盛大に行われる。天野正子（2006）『老いへのまなざしー日本近代は何を見失ったか』平凡社、194 頁。

島唄や八月踊りが披露されていた。この会場の参加者で最年長は100歳。「一人暮らしで自転車に乗って名瀬まで買い物に行くよ」と色んな人が教えてくれた。集落に元気な百歳がいることを誇りに思っていることが理解できた。

図表 5-26 招待者側の若い頃の写真



出所：筆者撮影

この子宿集落では、年の祝いの担当はシマを4つのブロックに分けて、担当制で行われている。毎年、それぞれが趣向を凝らす。今年は、招待者の若い頃のビデオが映され、その頃を知っている参加者らから歓声が上がっていた。

### 3.3 旧暦8月の祖霊祭

旧暦8月の最初の丙（ひのえ）の日をアラセチ（新節）とよび、ここから奄美では、お正月の行事に次ぐ、三八月（ミハツガツ）の伝統行事が始まる。アラセツは火の神を祀り、火事がないように祈願する。前日はツカリ日で、各家で高祖ガナシ（先祖）にお供えするごちそうを作る。アラセツから7日目の壬（みずのえ）に来るのがシバサシ（柴挿し）で、畑の神の祀りで、家の屋根・屋敷・田畑に柴（トウズキ）を立てて悪神を払う土の神の祭りがある。アラセチからシバサシの間、夜は八月踊りを踊る。シバサシの後の最初の甲子（きのえね）日がドゥンガ（先祖祭）で、早朝墓参りをする。アラセツ、シバサシ、ドゥンガンが三八月の行事である。甲子（きのえね）で終わる。これらの伝統行事は集落で形は多少異なり、また、近年は簡略化されながらも、奄美の人々の暮らしに息づいている。

#### 3.3.1 アラセツ行事（秋名集落）

##### ① ツカリ（祭りの前日）

図表 5-27 N宅のツカリの様子



図表 5-28 S宅のツカリ様子



出所：筆者撮影

出所：筆者撮影

龍郷町秋名のシマには、アラセツの日に、ショチョガマと平瀬マンカイが行われる。秋名のアラセツ行事として、国の無重要形民俗文化財に指定されている歴史のある祭である。祭りの前日、各家では高祖ガナシ（先祖）へ備える料理を作る。外からやってくる先祖をもてなすため、「逆膳」を用意する。料理はその家の女性から女性へ代々伝わって、5つ膳、2つ膳など、それぞれの家で異なっている。

材料は畑で採れるものが中心で、大根、小芋、筍、厚揚げ、昆布、そして、煮た魚（深海魚）を載せる。「アラセツ、マッテ、オアスリョウタ」（アラセツの祭りです。どうぞ、召し上がってください）と、声を出している<sup>341</sup>

## ②ショチョガマ祭り

ショチョウガマの祭りは、旧暦8月の最初の丙（ひのえ）の日の明け方に行われる。かつて、秋名集落は奄美随一の田園地帯であった。田んぼを見降ろす山の中腹に、ショチョガマと呼ばれるカヤや稲わらを敷いた片屋根を前日に作ることから始まる。

祭りの日の早朝、男たちは、ショチョガマの上で太鼓を打ち鳴らし、シマの人々に祭りを呼びかける。この1年間に生まれた男の子も屋根に乗せ、健康祈願をする。成人男性や男の子が太鼓に合わせて豊年の歌を歌い、豊作をもたらすとされる稲霊を招く。

午前6時半ごろ、太陽が山の頂に上ると同時に屋根をゆすり始め、倒す。倒れた屋根の上で、人々は輪になって豊作を祈る八月踊りを踊る。

ショチョウガマが倒れた合図で、各家では先祖の食事を片づける。ショチョウガマは毎年新しく作られ、そして壊される。ショチョウガマ作りは、たくさんの工程があり大変手間がかかる仕事であるが、その作業は分担しながら、高齢者が若い人に技を引き継ぐ場となり継承されている。

図表 5-29 ショチョウガマの様子



出所：筆者撮影

図表 5-30 八月踊りの様子



出所：筆者撮影

<sup>341</sup> 秋名集落Sさん（85歳）への聞き取り。

## ② 平瀬マンカイ

その日の夕方（午後4時頃）、満潮にあわせ、シナ海に面した秋名の海岸に立つ二つの岩で行われる。ショチョウガマは田や山の神々への豊作祈願であり、男の祭りである。一方、平瀬マンカイは、海の彼方のネリヤの国から稲霊を招き神々へ豊作祈願する、女の祭りである。

マンカイは「招く」から来ている。左手の神平瀬はノロに扮した女性5人が上がり、右手のメラベ平瀬には、ノロを補佐する男性3人、女性4人が上がり、太鼓を打ち鳴らし、双方が歌の掛け合いをする。神平瀬では合掌し神事を唱え、ネリヤの神に対する礼拝で祭りは終了する。

図表 5-31 ノロの女性達の様子



出所：筆者撮影

図表 5-32 ノロを補佐する人達の様子



出所：筆者撮影

図表 5-33 祭り後の宴の様子



出所：筆者撮影

図表 5-33 語らいの様子



出所：筆者撮影

図表 5-34 お重の中身



出所：筆者撮影

その後、浜に下りて八月踊りを行う。行事が終わると、その場で、それぞれの家で準備したお重を囲み、親戚・知人が車座になって頂く。一重一瓶の習わしである。この日に合わせ集落に住んでいない人も帰郷し、浜は賑やかになる。

この祭りは、今から450年前琉球の時代に、この地域で行われていた稲作祭儀が伝承されてきたもので、一時途絶えたものの地元の人々が力を合わせ昭和35年に復活再現し、保存会が設立され、昭和60年に国の重要無形民俗文化財に指定されている。

### 3.3.2 八月踊り

図表 5-35 笠利 1 区の集落



図表 5-36 笠利 2 区の集落



図表 5-37 須賀の集落



落

出所：筆者撮影

出所：筆者撮影

出所：筆者撮影

アラセツ、シバサシの間、各シマでは、八月踊りが開催される。集落によっては簡素化されてきているが、奄美に笠利の集落では、アラセツの前日（ツカリ）から始まり 3 日間踊り、3 日間休んで、また 3 日間踊る。

写真は笠利町の 3 集落の八月踊りの状況である。笠利 1 区（約 100 人）のアラセツの日の踊りは、前日が踊り初めで、公民館で行われる。2 日目、3 日目の踊りは、毎ブロックに分けて、各家の庭で踊る。

歌詞はシマ口（方言）で唄われるので、超高齢者の出番である。男女相互の掛け合い唄で、シマ口の分からない人たちのために、歌詞の持ち人が 2 人いた。そして、その年初盆を迎えた家には、必ず訪問して踊る。そのお家では、ミキ（神酒）を振るのが習慣となっている。集落の殆どの人が参加し、最高齢は 100 歳であった。

1 区の隣の笠利 2 区は大所帯（約 150 人）であった。公民館の前の道路に大きな輪がいくつもできて、踊っていた。写真は午後 10 時過ぎの様子。12 時近くまで踊るようである。

一方、須賀の集落は 40 人程度の小規模の踊りであった。写真は午後 10 時半ごろである。奄美の人々にとって、三<sup>み</sup>八<sup>はち</sup>月の八月踊りは集落ごとに形は異なりながら、シマの 1 大イベントとして、盛大に行われている。

また、この祭りの場は、お金に余裕のある人は花代（寄付のお金）を持ち寄る。花（現金）が竹串に刺されていた。祭りの間には花代の披露があり、名前を呼ばれた人は前に出て踊る。

八月踊りの場は、年間の集落の公民館の活動資金を得る場でもあるようである。自前で祭りを行っている気概を感じさせた。花代の寄付は各集落行事の際の付き物のようである。大和村の湯湾釜集落のキトバレ（祈祷払い）の祭りでは、祭りを復活させた青年団の 1 年間の活動費を捻出する場となっていた。

### 3.4 旧暦 9 月の大和村の豊年祭

奄美の各島、各シマの広場には公民館の横に土俵があり、集落の人たちが大切に守っている。目に観える形の文化財である。大和村の各集落の豊年祭は、毎年旧暦の9月9日前後に行われ、豊作をもたらす自然や神に日ごろの感謝の祈りから行事は始まる。まず、シマの聖なる水辺で土俵を清める水を汲みに行く。

大和村大棚集落の豊年祭は、朝まだ日が明けない頃に、男性二人が集落の聖なる水場から水を汲みに行くことから始まる。その水は豊年相撲が始まる前に、祭りを司る女性神官ノロによって土俵を清めていく。ノロのいない津名久集落では、まず、力士たちが揃って聖なる水場まで行って水を汲みいく。その場所で、奉納相撲を行い、それを土俵まで運んでいく。

図表 5-37 大和村大棚集落の豊年祭



出所：筆者撮影

図表 5-38 大和村津名久集落の豊年祭



出所：筆者撮影

男性は力士となって相撲をとり、女性は土俵の周りで八月踊りを踊って豊作を祝う。ここの豊年祭でも、高齢者は常に行事の主賓として扱われ、お食事と特別の席が設けられていた。高齢者を上座に据え、集落の人々による様々な催しが行われる。この祭は、集落を支えてきた長寿者たちを敬い、日頃の感謝を伝える場でもある。夜には、土俵を囲んで八月踊りが始まる。

図表 5-39 津名久集落の相撲 図表 5-40 津名久集落の演技 図表 5-41 大棚集落の招待者



出所：筆者撮影



出所：筆者撮影

出所：筆者撮

#### 4 伝統行事を支える人々

国の重要無形民俗文化財に指定されている秋名アラセツ行事（ショチョガマと平瀬マンカイ）を継承している秋名アラセツ行事保存会の会長他4名の方々に、シマの歴史やお祭りの取り組み、日常生活などについて話を伺った。

聞き取りは、2013年1月5日午前中、参加者は、会長Aさん70歳代後半、Bさん



70歳代前半（男性）、Cさん70歳代前半（女性）、Dさん70歳後半（女性）、Eさん80歳後半（女性）の5人で、いずれも祭りの中心メンバーである。

#### 4.1 祭りのこと

##### ① ショチョガマと平瀬マンカイのいわれ

Aさん：「ショチョガマが残っているのは、稲作の田んぼがあるからね。ここ秋名は、昔、奄美一の稲作地帯だった」

Aさん：「ショチョガマは、むかし、集落に3つあって、里と幾里とアガレ。向かい合って立って、先にどこが倒れるか、競争した。今残っているのは我々の幾里だけです」

Cさん：「ショチョガマには、おんなはのってはいけないという決まりがあります。女は生理があるから、穢れているって。釣り竿なども、女がまたがったら、ダメとかありますよ」

Dさん：「鹿児島では、風呂も女が最後。女が大事なのに」

Bさん：「豊作を招く行事が2つあって、朝、潮が引く頃の行事がショチョガマで、夕方、潮が満ちるときが、平瀬マンカイ」

Aさん：「ショチョガマは、山の神様に祈るよ。田袋(田んぼ)にむかって、田んぼが見下ろせる場所で、行いますよ」。

Aさん：「平瀬マンカイは、この辺はノロが親分だから、祀りをつかさどるのはノロです。ノロの男兄弟のグジが変わって行く。今は、わたしがグジ役をしています」

Aさん：「昔は、一晩、踊り明かして、夜明けに、ショチョウガマ潰して、2、3軒で飲んで、酔っ払って寝て。夕方、平瀬マンカイに行った。今は勤め人が多いから、無理はできんけどね」

Eさん：「平瀬マンカイは稲作文化。豊作になったお礼と、来年豊作をしてくださいとのお願いする。珊瑚礁に新米をサンドイッチにしてお供えます。1年の行事は、ノロさんが仕切っていた。ノロの親は沖縄の県知事のようなもの。お礼は、ネリヤの国に対するお礼ですよ。ネリヤの国でお米を作りよった。ネズミの国だったんだろや」。

80代後半のEさんのネズミの話は、柳田国男の『海上の道』の「鼠の浄土」のなか  
に、「奄美大島の農民たちが、是ほどにもひどい毎年の害に苦しみながら、なお鼠に対  
し尊敬の意を失わず…」の記述がある（170頁）。先代から続くネズミへの思いが今も  
生きている。そんな感慨に浸る話であった。

##### ② ショチョガマの準備

A さん：「ショチョガマづくりの作業をする人で、最高の年齢は 90 歳。作業人夫。裏方。祭りには参加していないけど。人出がたくさんいるから、青年団、老人会が手伝ってやっている。おのずと、どの作業をするか決まる。先輩がその場で教えるよ。やりながら、覚えていくもの」。

B さん：「準備は、祭りの前の日の日曜日にする」。

A さん：「(最後には小屋が崩れないといけないから、そのような工夫があるのですか) いや、屋根に 25 人も上ると、崩れるけど、もったいぶって、状況を見ている。途中で歌を歌ったりして、やって、見ている人にも、楽しませんと」。

A さん：「一度崩れないときがあって、大変な年があった。もう、学校に行く時間なのに、崩れない。その時はね、最後は柱を切ったね。そういうことはめったにないけど」。

皆さんの語りからは、祭りは集落みんなの参加で成り立つもので、年配者から若年者層に、集落の技やノウハウが伝わっていく。やるほうも見るほうも楽しむ。まさしく柳田国男のいう祭りの機能「共同の歓喜と次世代に伝える」ことであることが語られた。

### ③ 祭りはヤンチュの楽しみだった

A さん：「昔、豪族がいたね。古仁屋の林家、ここは伊藤家、笠利からいらしていた。皆、米を収穫して一旦は納めるけど、無くなると前借りをする。借りた人は、米が納められないと、人夫にでた。それがヤンチュ（家人）」。

A さん：「昔は、親の葬式は豪勢にしたから、悔みが出るとその賄いが大変。親戚はよるこんでいたけど、米が食べられるから。葬式の費用を借りたけど、返せるはずがないから、人夫（ヤンチュ）になって、向こうで働かないといけない。長男とかが行くけど。借りて 1 年、人夫になる。その途中で、悔みが 2、3 回続くと、もう、何年も、人夫を続けることになる」。

A さん：「屋敷には、ヤンチュが入る門があった。祭りごとは、ヤンチュの思いつきではじまった。365 日買われているけど、その日は、踊ってよいという休む日を決めた。ヤンチュウの楽しみとして、お祭りを作ったと言われている」。

A さんの話からは地域の歴史が生き生きと語られ、生きた民俗の世界が現実として伝わってくる。親から子へと語り継がれる歴史には愛着がある。

### ④ 三八月・八月踊りのこと

A さん：「旧暦の八月に入って、丙（ヒノエ）が祭り日、シバサシ、ドンガは、根切るで、最後の子（ネ）の日にする。ことの始まりは、ひのえ（丙）で、終りは、ね（子）で切る。農業は旧暦でないとできないよ。海の潮もあわないし」。

C さん：「毎月旧暦の 1、15 日は大潮。大潮のときは、漁船を持っている人は海に行かない。だけど、リーフができて、1 キロほどの近海まで歩いて行ける。潮にのって、近くに獲物がくるの。歩いて、魚取れるよ。潮に乗って獲物がやってくる。ウニや貝、たくさん取れて楽しいよ」。

E さん：「(八月踊り) もう何十年も、ここで生まれて、じっちゃん、ぼっちゃんがやっているの、引き継いでいる。絶えさせることはできないよ」。

D さん：「行事があるから、踊りを教えたりする。種おろし(秋の農耕まつり)や、お祭りをとおしてね。踊りは、数多く、場数を踏まないと上手く踊れないよ。こうして、生に伝授する。身体で、自然に。年齢を超えて集まるから、コミュニケーションの場になっている。ぼっちゃんがしよったから。自然に習うよね」。

B さん：「お袋が機織りしていて、小さい時は機の下にいたから、歌は耳に残っている。おじさんが歌って聞かせてくれて、頭に残っている。一遍で習うのは、おおまちがい」。

A さん：「子ども達には、小さい時から祭りごとを伝承している。30 代や 40 代は忙しいけど、60 歳代になると帰ってくるだろうと思っている」。

参加者全員がそれぞれに祭りの話をしてくれた。共通の話題があると、性別や年代は関係なく、会話は自然に出てくるものだと感じた。そして、踊りが長年の積み重ねであることに誇りをもっていること、祭りを伝授された次世代はきっと帰ってくれるという、未来へつなぐ行動であることを感じた。

#### ⑤ 七草の祝い

C さん：「七草のお祝いは、秋名は夕がた行う。名瀬の方は、朝だから、早く炊いて、待っていた。七草は、神様の子から人間の仲間に、大人と同じになること。学校に入る年だから。これまで神社に預けていて、7 つになったら貰い受ける儀式だから、昔は、武運崎までもらい受けに行ったの。昔、武運崎の上に神社があったよ」。

C さんの話は、まさしく生きた民俗の世界である。奄美の子どもは周囲の大人の温かい見守りの中で成長している。

#### 4.2 長寿のこと

D さん：「それは、精神的にくよくよしないこと。食べ物は野菜を作って食べること。農作業は運動になっていると思う」。

C さん：「食べ物あるし、年中行事のときは、みんな決まったものを食べる。1 月 11

日は魂入れの日で、紅白のちいさな餅を福木に挿す。そのためにお餅をつくる。鏡開きは14日。15日は小正月がある。18日は、豚の酢漬け、みんな食べる。塩をして保存したものをみんな食べるの。田植えの時まで残っていて、田植えは忙しいから簡単に食べれるように、それを加工して、賄いして、食べられるようにする。もろもろの行事があるたびに隣同士にあげあう。七草粥(ナンカンドゥス)、あそこの家は豚があったわ、なかったわとか、あるよ」。

Aさん：「年の祝いは、昔は、大根で鶴。ソテツで亀甲にして、亀。人参と大根で飾る。88歳では、豊を裏返しして、仮の葬式をしていた。今はせんね。祝い節は、あさばな節。集落で音がちがうけどあさばな節ね。今日の良き日に、祝いするという内容。100歳まで長生きしてほしい。親に対しての尊敬がある。親があつて子どもがあるから。生んでくれた親を、100歳まで長生きしてもらおう、親孝行の気持ちの歌ですよ。親の寝顔をみていたら、皺だらけだけど、幸せ、という歌詞があるよ」。

Cさん：「ここは、薬草が何十種類もある。薬草は採らないけどね、はまな、つるな、自然に生えている。食べられるものがいっぱいあるね。七草も、あしたば、はんだま、も。はんだまは、裏が紫色。長寿の食べ物といわれている。つるのように挿したら、どこでも、はえるよ」。

長寿は、奄美の豊かな自然と食べ物、そして、子の親を思う気持ちであることを語ってくれた。島唄に親孝行の歌がある、奄美ならでわであろう。

#### 4.3 海の神様と大工の神様への祈り

Aさん：「海の神様と大工の神様へのお祈りは旧暦の正月の2日にする。上戸の神は海の神様のこと。大工道具は大事なもの。巻尺は墨や紐でしるしをつける大事なもの。間違っただけをしないというので、この辺では、きちんとする人のことを、大工の神様という。大工の神様は、高い所で祀るものよ」。

Cさん：「火の神、水の神は、自分たちの生まれた日に拝みにいく。石とお酒を持って、拝んでいる。その時には、年と名前を言っておがむ。2カ月に1回は、私と私に関わるみんなが無事でいれますようにと祈るよ」。

Dさん：「拝む時は気をつけないと、草の生えているところには、コジャラゴという、まむしでなく、姫ハブがいる。毒は、小さくても普通のハブと一緒にだからね」。

Cさん：「ここでは、海のは誰でも採っていいからね。この辺の人は、海に入る時と出るときは、拝んでいるよ。浜おれの3月3日は、海のものを食べないと、ふくろうになると言われている。行けない人には、お裾分けするわけ」。

奄美の人々の神様への感謝の思いが語られた。生活のすべての場面に神様がいる。日々の所作の中で、それらは祈りの行動となっている。奄美大島の西の端大和村で聞いた女性の泉への祈願は、東の端の龍郷町でも同じように行なれていた。

#### 4.4 若い頃の機織りの話

##### ① Eさん（女性）85歳の話

この地域は、大島紬が盛んに織られ、その中でも難しいと言われている秋名柄（バラ）を織っていた。昔は機織りを織るときは、綺麗にお化粧して、白い割烹着を着て、やっていたよ。汚さんように、身だしなみ大事にしていた。そういうふうにして紬を仕上げていた。

この辺でも、あちこちに工場があったよ。遅くまで、やっていた。夕ご飯食べてから、また、物差しを持って、ランプ下げて、機織りしていた。何度もランプのホヤを磨きながらやっていた。その頃、みんな紬を織っていたね。

子どもは機のなかでいてね。子どもが退屈になると、機の中から足踏みを押えて、織らさせてくれんわけ。

その頃は羽振り良かったね。みんな、家を新築した。男は土方で、村々が栄えた。高校に行かなくて、シマに残って機織りした。足が機に届かん時からやっていたの。機を織らん人は出稼ぎに行って、お盆しか帰ってこないね。

##### ② Dさん（女性）79歳の話

旦那は出稼ぎで、2人の子は一人で育てた。60歳くらいまでは機織っていた。平成の初めまでね。機があるからやっていたけど。今やっている人、秋名で、5、6人かな。秋名バラはむずかしくてね。横と縦の糸あわせて、絞めるの。

織は、スタートが大事。段々、絞め機の技術がよくなった。織りの半分は柄。柄はひっぱりすぎてもだめ。秋名バラは他の地域の人には織りきらん。織りきらん。むずかしいから、秋名の人しか、できん。

Eさん、Dさんからは、大島紬が全盛だった頃、集落の女性はその中心の働き手として、集落を支えてきた。大島紬でもさらに難しいとされる秋名バナを織っていたという誇りが今もある。そして、機を織るときの神聖な気持ちが伝わってくる話である。

#### 4.5 Uさんが語った民話

平瀬マンカイでノロ役をしているEさんは、メンバーの中で一番の高齢で85歳。民話をたくさん知っていた。Eさんには、1月5日（午後）と1月6日（午後）の2回、お話を伺った。

##### ① 秋名に伝わる民話

「お爺さんが物知りだね。いろんな話を小さい頃、聞かせよったから、記憶にあるわけ」といい、息子さんも、テレビがない時代、寝つくまでお母さんやおじいちゃんの民話を聞いて育って、一冊の絵本を出版されている。「島クダマルとコウジン様」というタイトルの本である。

その内容は、「奄美を作った神様の島クダマルが、ネリヤ・カナヤの国から遣わされたコウジン様という神様に、色々な島づくりのアドバイスをしてもらいながら、奄美の島を作っていく話。その中で、ネリヤの国はネズミが稲を実らせている豊かな国で、ネズミに田の作り方を教えてもらう代わりに、ネズミを大事にするよう約束をする。だから、元々、ネズミが持ってきたお米だから、遠慮なくお食べと言っている」と言うお話した。

## ② 神様の由来

「立神様は、島クダマルが創ったよ。昔、村は台風が来て流され、島クダマルが心配して泣いていたら、コウジン様がやってきて、『どうしていいか自分が教えてあげるから』といったので、島クダマルが、『どうしたら人が安心して住めるか』と尋ねると、『岬の先端に石を置いたら、島が流されん』と。島クダマルは、岬の先に石を置いたら、島が流れんようになった。それが、立神様。シマクダマルがおいた立神様がそこら中に、あるよ」。

## ③ サンヤの神様

「サンヤの神様は、力持ちの神様で、その石を運んできたかもしれないよ。『よいとこまかせ』は、3 いとこ、ゆいいとこ（こども、まご、ひまご、そのつぎ。4 いとこ）までは、サンヤの神様が力をくれると。『サンヤがゆいいとこ』、『サンヤがゆいいとこ』といえ、軽く乗せてくれるわけ。」

E さんの話しを聞いていたCさん（70歳後半）が、突然声を発した。

「平瀬マンカイの行事の時、『サンヤのマータイ』と歌をうたうけど、歌いながら、『サンヤのマータイ』の意味が分からなかった。それ、サンヤの神様のことね」。

祭りの歌の意味が伝わった感動の瞬間に、筆者は臨席していた。伝統はこのように、コミュニケーションの中で受け継がれていくものだろうと思った。

## ④ コウジン様

「ネリヤの神様の国は、ネズミの国。海の向こうに、ネズミの国があるわけ。想像できんけど、コメの始まりのところ。だから、高倉<sup>342</sup>にネズミが米を食べても怒ってはいけないの」<sup>343</sup>。

この話に関連してAさんが話し出した。

<sup>342</sup> 高倉は穀倉で主として穀物を貯蔵。集落が火事等の災害に見舞われても食料を確保する。

<sup>343</sup> 柳田国男（1978）「海上の道」に、奄美の人がネズミを大事にする話が出てくる。

「昔から、たんぼの隅にわぎとねずみのために植えておくね。意味は知らなかったけど。でも、畔道壊して、ネズミ捕りしたね、棒持って。ネズミを退治しないと、ハブがネズミ狙ってくるからね。今は、役場にハブを持っていくと、1匹4千円で引き取ってくれる。昔は組毎にハブを取る割り当てがあったね。昔は、田んぼの至るところに、石積んで、山になつとるところにハブがいた。田んぼを耕すと、石がでてくるから、石塚のようになって、雑草がはえて、ハブのすみかになっている」。

⑤ 正月 16 日に山に行ったらいかん理由

「正月の 16 日には、山に行ったらいかんといわれている。山の神様が武運崎で会合するって。1 年の会合があって、えらい神様が集まって会合するから、その日は、親神さんがいないから、小さい子どもの神様は自由に遊べるわけ。自由に遊べるから、悪さするわけ。山の木を倒したりするとか。悪いことがあるから、怪我したりするから、山に行ったらいかん。相撲をとったり、口笛ふいたりする。その日は自由に遊ぶから、悪さするわけ。帰る道がわからなくて、明るく日、みんなで探したら、食べ物はミミズが出てきたり、赤土が出てきたりしたって。」

この話に B さんがしゃべりだす。

「ほんとに、やまで、よいしょ、よいしょ、相撲までするって。口笛吹いたり、聞いたって言うよ」。

C さんは、「そういえば、知らないで、彰子姐さんが山に木を取りに行ったら、風が無いのに、木が揺れて、なんだろうと怖くなって木を取らずに帰ってきたって。帰ったら、あんた、今日は何の日か知っているかと大人に言われたって。」

A さんは、「今でも、盆の 16 日、正月の 16 日は、山に行かんよ」。

C さんは、「でも、行ったら行かん理由、初めて聞いたね」。

みんなは口々に、その日は、親神様がなくて、子ども神様がいたずらするんだってことねと了解した様子。ここにも、コミュニケーションの中でこそ、地域の文化は世代から世代に伝わることを知らされた。柳田国男の「鼠の浄土」がここでは生き生き語られた。

## 5 おわりに

### 5.1 奄美のシマのコミュニティ特性

奄美の人々の語りには、暮らしの中に先祖から続く、生きた民俗の世界があることを伝えてくれる。ここには、一人ひとりに出番やいきがい、使命感を果たす場が、コミュニティの力量としてある。この力量は、単なる文化的伝統の継承というだけでなく、人々が学びあって、成長しあう場としての意味を持っている。

奄美のコミュニティには、シマの祭りや祖霊行事が年中行事として定着し、伝統文化として息づいている。柳宗悦は、「伝統とは長い時代を通し、吾々の先祖が、さまざまな経験によって積み重ねられてきた文化の脈を指すのであります」と述べている。植木浩は、「文化は、人間に生きる喜びを与え、人生に意味を与えてくれる源泉である」と記している<sup>344</sup>。

奄美のコミュニティ特性とは、シマでの暮らしの中から継承されてきた伝統行事や祖霊行事などの伝統的文化や習慣を指し、これらは住民の生きる喜びの源泉となり、人々の総有の文化ストックとして機能しているものといえよう。

## 5.2 奄美の伝統行事と超高齢者の暮らし

奄美の人々の暮らしには、大きな災禍をもたらす自然の営みに対し非力な人間が、毎年の約束事を果たすことで、災難を回避し自然の加護を受けることができるという確信・願いの源がある。そのような営みを継続することによって先祖とつながり、人と人がつながっていく、そんな営みがあるようにみえる。

約束事とは、旧暦に基づいて行われる各シマに伝わる伝統文化、年中行事、祖霊行事などである。各シマに伝わる島唄や八月踊りは、シマ毎に島口（方言）が異なっており、文字のない時代のなごりもあって、歌詞や曲調が微妙に異なりながらも歌い、踊り継がれている。

島唄や八月踊りの中心には超高齢者がいる。超高齢者は島口（方言）で唄い継がれている島唄の解説者であり、若い世代は超高齢者の踊りの所作を見ながら踊る。テンポの多様な歌と踊りを見事に先導している。

超高齢者は伝統の技やノウハウを身体に体化した存在として、敬われている。口承文化の担い手が超高齢者であることが確認される。

加えて、奄美の歴史や伝統文化から蓄積されたコミュニティの絆は、日常の暮らしにおいても現代版の結いの形態の中で超高齢者はシマを構成する一員としての役割がある。奄美の文化が見直される中で、シマ口を知っている超高齢者は地域文化を伝承する大切な集落の公共財となっている。

## 5.3 目にみえる文化資本、目にみえない文化資本

過去を辿れば、奄美の歴史は悲惨で悲しい。外部の権力による圧政・抑圧され、働けど働けど飢餓、貧困に苦しめられてきた。しかし人々は、そのような生活の中でも、祈りを大切し、神のご加護を信じ、神聖なカミ山、カミ道、アシャゲなどの祈り場を居住空間のなかに大切に守ってきた。集落の集う広場の公民館と土俵は、「目に見える

<sup>344</sup> 植木浩(1994)「文化政策の展開」池上惇・植木浩・福原義春編『文化経済学』有斐閣、214頁。



文化資本」ある。奄美固有の文化資本として、苦しさや貧しさを生き抜く人々の共通の資産となって、シマの人々の困難を支え、喜びごとを共有し、絆を強くする暮らしに貢献してきたといえる。

加えて、祭りや年中行事などの「目にみえない文化資本」は、単調なシマの生活の「ハレ」の場となり、労働のエネルギーを再生する歓びの場となり、「ケ」の日常を無事に送る役割を担い、神や先祖への感謝の気持ちと結びつき、シマの人々と暮らしの安寧を祈る習慣を強固にしてきた。

これら文化資本の蓄積は、現在の奄美の人々の生活に生き続けている。そして、現代版結いの形として、引き継がれている。伝統文化を基盤とした、奄美における「有形の見える文化資本」と「無形の見えない文化資本」は、ともに厳しい生活を生きぬく生活の知恵、ノウハウとして機能し、そして、人々の生活の中に結いの習慣を強固にしていることが洞察された。

## 第6章 長寿を支えるシマの現代版結いのかたち

### 1 はじめに

奄美の超高齢者は、厳しい自然や社会的歴史的に抑圧された暮らしの営みの中で、自然への畏敬や先祖への感謝を忘れず、仕事の技を磨き、ノウハウを共有し、支えあい、相互扶助を基盤に結いの力でシマの暮らしを守ってきた。それらは、シマの自然資本や文化資本、社会関係資本として蓄積されて、集落の人々のアイデンティティを強固にしてきた。

劣悪なシマの環境のなかを生き延び長寿を全うしている超高齢者は、若い世代に安心感を与える存在でもある。超高齢者にとっても、長生きが喜ばれ、敬愛されるシマの習慣の中で、集落に引き継がれてきた暮らしの様々な技やノウハウ、そして、祭りや伝統行事を次世代に伝え、つなぐという大きな役割を担ってきた。そのことが生き生きとした暮らしに繋がって、長寿と幸福感の源を形成しているようだ。

本章では、奄美のシマに残る現代版結いともいえる実態に注目して、祭の関係者や民俗研究者などの語りや集落区長へのアンケート調査からその実態を考察する。

#### 1.1 「結い」の発生史

「結い」は、結合という古い言葉で、日本の地域共同体（集落）で行われていた、ほぼ同等の労働力の相互給付によって成立する共同作業をさす<sup>345</sup>。

日本の共同体は、人間が自然の中で生きていくための最小限必要な地域的集団の単位として、家集団の能力では不足なために、20～30戸の家が同じ地域に寄り合って創ったグループで構成される。ある家が屋根の葺き替えとなると、自分の鍬と刈った藁を持って集まる。祝言や葬式となると手伝い、晴れ着を着て参列する。田植えや稲刈りも同様であった。

「数世紀にわたる底辺人民の叡智の結晶を宿し、おびただしい失敗の経験や惨苦の犠牲を通して考え抜かれ、創りあげられてきた、極めてダイナミズムに富む結衆の様式」である<sup>346</sup>。

「結い」は、共同体で個人の能力を超えて生きていくための、生活維持の制度であるが、一方で、「結い」は厳密には農業上の共同作業に限られた言葉ではなく、広い意味で使われ、集落でのお互いの生存、家の生存を守るための家々間の共同関係を結ぶことをが長い時代を通して行われてきた。共同で行うことを「ユイデスル」、「ユイニ

<sup>345</sup> 有賀喜左衛門（1968）「ユイの意味とその変化」『有賀喜左衛門全集V村の生活組織』未来社。

<sup>346</sup> 色川大吉（1974）「近代日本の共同体」（鶴見和子・一井三郎編）『思想の冒険』筑摩書房、235-276頁。

スル」などと使われていることや、農作業の区切りに温泉、風呂で按摩をしあうことを、「ユイアンマ」などと、使用していたことにも表れている<sup>347</sup>。

## 1.2 「知識結い」の発生史

一方、集落内という範囲を超えて、「知識結い」という概念がある。知識結いの「知識」とは、『呂氏春秋』や『莊子』、『文選』に、「知人・友人」という意味で用いられているのが原義とされる。それが、仏典監訳の際に使用され、「僧尼にとっての知人であり、時には安居でもてなしたり、時には草庵の材料を提供してくれる者」の意味が付加された。

この「知識」が団体を結成することを「知識結い」といい、それによって、造寺、造像、建築、義橋の事業がなされていた。「知識結い」は、僧侶行基の実践を通じて世に出たものとされる<sup>348</sup>。民間の「知識」の結集として、材木知識、役夫知識、金知識が集められ、造営事業に直接労働力として参加することを、「知識結い」と呼ばれたものである<sup>349</sup>。

奈良時代の大仏造営は古代最大の国家プロジェクトとして、聖武天皇は行基を登用し「知識」による事業として行われている。聖武天皇が「知識結い」の手法を取り入れたのは、河内の知識寺で、民間人が自発的に資材や労働を出し合って建てた寺の仏像の立派さ、仏像を作りえた民間の富や技術、人民の結合力の素晴らしさが天皇の心を捉えたことがある。そこで、当時、国家組織では手が付けられなかった荒廃した地域再生の国家的大事業として、民間の力で「知識結い」という文化事業を起こし成し遂げたとされている<sup>350</sup>。このように、労働の相互信頼としての結いは、日本的な過酷な自然環境の中でお互いに生きる叡智として支配下の中でも脈々と続いてきた。

日本における「結い」や「知識結い」は、日本の文化的伝統から生まれた生活の知恵と生活技術、豊かな精神世界が伝統文化を生かす力量となって形成された。このような中から、財務能力や地域発展の構想力、技術力が職人能力として、一人ひとりに蓄積された結果と理解されるのである。

残念なことながら、このような「知識結い」の伝統は、多くの地域で失われ、過疎、離村、荒廃の状況が生まれた。しかし、奄美のシマでは結いや知識結いが機能している。奄美の結いの実際においては、労働の質を問うことはなく、借りた時間の合計を返す仕組みがとられている<sup>351</sup>。無理なく継続できる奄美の人々の叡智であろう。

<sup>347</sup> 有賀（1968）、前掲書。

<sup>348</sup> 井上薫（1959）『行基』、吉川公文館。

<sup>349</sup> 若井敏秋（2004）「行基と知識結」速見侑編『民衆の導者行基』吉川公文館、109-136頁。

<sup>350</sup> 井上（1959）、前掲書。

<sup>351</sup> H氏聞き取り（2015年9月15日 15:00～18:00）。

## 2 奄美大島の風土とシマの現在版結い

奄美大島には、郡都機能を持つ奄美市がある。奄美のなかでも、都市化が進む地域であるが、奄美市を抱える奄美大島のシマにおいても、日常の暮らしの場で、人々が工夫した様々な現代版の結いや知識結いが機能している。

### 2.1 奄美の風土・大らかさ

まずは、奄美大島に住む内閣府地域振興伝道師でもある H 氏の語りから奄美の特徴とその実態を見ていく。

#### ① 大らか・曖昧さ

「ここ奄美は、長寿率、子宝率が高い地域です。経済満足度でなく、生活満足度が高い。奄美の宗教はお天道様と結びついて、生きる哲学となっているので、みんな穏やかで、大らかに暮らしている。数値で示せない、数値にできないファジーの世界から成り立っている。例えば、奄美の発音には、アとイのなかに、濁音がある。数字の 1 と 2 の中にもある。そういう、あいまいなものがある。黒砂糖の作り方も数値化して作れるものではない。大島紬の泥染め、伝統食の鶏飯などもそうです。マニュアル化・レシピ化されない奥深さが息づいているの」。

#### ② おしゃべり好きのコミュニティ

「みんなおしゃべりするのが好き。都会の中の週刊誌的な情報全部が日常化している。情報が生活に根付いて、犯罪の防止にもなっている面もある。若年高齢者は、月 1 回のクラス会や学年の同窓会が盛んで、忙しい。いつも、違うレストランに行っておしゃべりしている。シマのお年寄りも、浜や涼しいところでおしゃべりしている。いつも同じような行動パターンだから、ここは、連絡し合わなくても会えるところよ」。

#### ③ ボランティアという言葉はなかった

「ここには、もともとボランティアという言葉はなかったけれど、高校生や専門学校の人が、本土に就職するときにボランティア歴が必要になったりする。それで、最近はその言葉を使うけれど、あまり意識はしてない。奄美には、もともと、お年寄りに対するときは丁寧な言葉を使う習慣がある。例えば、アリガタサマリョウタ（ありがとうございました）という言葉がある。敬老お祝い金制度も市町村にあって、高齢者のゆしみになっている。奄美市は 3,000 円。龍郷町は 5,000 円とか、現金で受け取れるよ」。

H 氏からは、郡都機能があり都市化が進む奄美市においても、人々のおおらかさ＝あいまいさ、が語られた。その根っこには、お天道様、生きる哲学、固有の発音、黒砂糖の作り方、人々の行動様式にあるようだ。それが、奄美の固有の価値観を形作っている。特に、情報の伝わり方がおしゃべりという対面型である点は、都市部で暮ら

すものにとってはなんとも異次元な世界であった。

## 2.2 宇検村・阿室の集落の語り<sup>352</sup>。

老人会長の N さんの語りからは、シマで伝承されてきた伝統文化や結いの習慣は、シマの人々の日常生活の中で楽しみ事と繋がって根付いることで、継続していることが明らかにされた。

「このシマには、『あそび』『なぐさめ』『ゆらう』という言葉がある。『あそび』は厳しい農作業で余裕がない時代に、節目に集まって遊んだものです。『ハブのあそび』や『虫遊び』、『ねずみのあそび』などあった。『ハブのあそび』は祈祷のあそびで、トネヤ（神屋）に集まる。『あそび』と名づけられたものは、厳しい農作業からひと時身体を休める、そのための習慣だった。

『なぐさみ』は行事や催しのことで、豊年祭や敬老会をさす。『ゆらう』は集まることで、現在でも 2 ヶ月に 1 回、墓の掃除、新年会（歳の祭り）、敬老会、忘年会がある。その時は、三味線、シマ歌、踊りで楽しむ。

『むかり』といって、リーダーが集まりましようと言うと、自然に集まる。そのような雰囲気があります。だから、若い高齢者が 1 人暮らしの高齢者宅へ見回るのも特別なことではなく、自然に行っている」。

N さんの語りからは、孤独を感じない生活は日常的なつながりの中にあること、仲間と集うことに楽しみを見出していることを伺うことができた。柳田国男<sup>353</sup>が、奄美大島には「鼠の遊び」があることを書いているが、奄美の人々は、“あそび”と称して、厳しい農作業を工夫する叡智を蓄えてきたことが理解された。

## 2.3 笠利の八月踊りの語り<sup>354</sup>

町村合併により今は奄美市に編入されている笠利町に住む N さんの語り。

「私のお母さんは 88 歳です。長崎で原爆にあって、それを今でもシマ口で歌って伝えています。お母さんは 8 人の子供を産んで、次女を除いて、7 人が笠利に住んでます。孫 28 人か 29 人。曾孫は 33 人か 34 人。もうすぐ、母からすると、嫁さんや婿さんも入ると、家族に 100 人目が生まれる予定です（N さんは子ども 4 人、孫 8 人）。

明日からの八月踊りは夜 20:00 から始まります。人の一生、生まれてから結婚までを歌いながら踊るのです。男女別々に分かれて歌う掛け合いの歌で、シマ口ができない人のために、今は、歌詞を書いためぐりを持つ役の人がいます。シマは 2 つに分か

<sup>352</sup> 宇検村阿室集落における結い。老人会長 N さん聞き取り（2011 年 10 月 12 日 14:00~16:00）。

<sup>353</sup> 柳田国男（1978）「鼠の浄土」『海上の道』岩波書店。

<sup>354</sup> N さん聞き取り（2015 年 9 月 16 日 16:00~17:00）。

れ、笠利1区は100人、笠利2区は150人。全体の7~8割は祭りに参加しています。少し前、歌者で、襖が破れるぐらい響く人がいたんです。その人はカミ高い人だったですよ。八月踊りには100歳ばっちゃんも来るよ。初盆の家庭は、赤飯(カシキ)と、神酒ミキを備えます。アラセツは、厄払い。島唄は、八八八六調の三十音階です。アラセツには、高祖かなし(先祖の神様)に、『アラセツ、マッテ、オスリョウタ(アラセツなので食事を召し上がってください)』とってお供えします」。

Nさんからお誘いを受けて、笠利の八月踊りを見に行かせてもらった。集落のすべての老若男女が集まっていて、すごい熱気であった。車いすで手だけで踊りに参加する人や、幼児は抱かれながら音楽に合わせて手真似していた。踊れない高齢者は椅子などに座って観覧していた。その様子を見るとネックレスしたり、盛装していた。集落のみんなのハレの日であること、楽しみごとであることがよく分かった<sup>355</sup>。

#### 2.4 自宅で島唄サロン<sup>356</sup>を主宰するHさんの語り

Hさんは、龍郷町赤尾木の集落で島唄サロンと地域での見守り隊を作って活動しています。クヌイ(幸せ者)のたくさんのグループをつくりたいと思って、得意な三味線やりハビリ体操を数人でやっているのです。お声がかかれば、喜んでいきます。

サロンでは、毎月200円積み立てて、5,000円になったら。カラオケに行くことにしています。頼母子講もありますよ。月1万円で、16か月は掛けないといけないけどね。グランドゴルフの町の大会が、年に7,8回はあります。5時以降小学校を使うことができるので、練習はたっぷりできるのです。

以上の語りには、伝統行事や文化の継承と実践を通じ、超高齢者は尊敬されるとともに、超高齢者も自らの潜在能力を開花させる工夫が長生きへの意欲につながるものが伺えた。

#### 2.5 高齢者/超高齢者を支える結い

奄美大島における、高齢者/超高齢者を支える結いには次のようなものがある<sup>357</sup>。

- ① 無人市(各集落)は公設民営で、高齢者/超高齢者の生きがいと現金収入の獲得に貢献している。
- ② 高齢者/超高齢者の作った野菜の市場への送達システム(大和村)では、村の若い世代によって、高齢者が作った野菜や果物を週1回奄美市の青果市場に送達するシス

<sup>355</sup> この様子は、3.3.2(115頁)の写真で紹介している。

<sup>356</sup> 龍郷町赤尾木のHさん聞き取り(2015年9月17日20:00~22:00)。

<sup>357</sup> H氏の新聞収集による情報。

テムを確立している。流通手段のない高齢者／超高齢者にとって、現金収入を得る機会となり、さらに良いものを作ろうという励みになっている。最近、役場が集荷施設を各集落に作り、市場に出している。

- ③ ウニ剥きとウニ獲り作業の分担（名瀬根瀬部）では、世代間でウニの作業を分担し、ウニ採りは若い世代、根気のいるウニムキ作業は高齢者らとそれぞれ分担し、現金収入は分配し、生きがいの場になっている。
- ④ 野菜の保存食づくり（名瀬根瀬部）では、一人暮らしをする在宅の高齢者の家庭を回り、半年分の保存食づくりを若い世代のお母さん方とおしゃべりを楽しみながら結い作業をしている。若い世代との交流の中で、超高齢者のノウハウが活かされている。
- ⑤ ふぬいの里（龍郷町のグループホーム）の夕食作りでは、入居者同士で夕食作りをしている。それぞれが得意を發揮して、できることは自分たちですするという自律の姿勢を支援している。
- ⑥ 母さんの店（各市町村1か所）は公設民営が多く、高齢者／超高齢者が自分たちの作った野菜や手作りのおかずや漬物などを国道沿いのお店で販売している。野菜作りが得意な人、料理が得意な人が集まって、生きがいつくりと現金収入につながっている。
- ⑦ 共同納骨堂の建設（宇検村の7つの集落）では、高齢化や過疎化で先祖のお墓の世話ができなくなることを恐れ、シマの人が共同で利用する納骨堂の建設が進んでいる。この資金の調達、シマの出身者でつくる郷友会組織からも多額の寄付金が贈られて行われている。お墓もシマに守られている事例である。シマの人も、誰かがお参りに来てくれるから安心と語ってくれた。
- ⑧ 奄美全島を挙げて行っている観光事業として、夏版・冬版の「あまみシマ博覧会」（シマ博）を行っている。奄美の伝統物産や祭りなど、観光客に伝統文化を味わってもらおう企画満載である。そこでも超高齢者が活躍している。これまで培ってきた技が活かされている。

奄美の超高齢者を支える結いの事例は、超高齢者の自立を支える結いとして機能し、超高齢者が生涯現役で働くことの幸せや生きがいをシマの総意が支えている。

## 2.6 長寿を支える結いの風土

長寿を支える結いの事例の語りである<sup>358</sup>。

---

<sup>358</sup> H氏聞き取り（2015年9月15日15:00～18:00）。

- ① 奄美は、自動車のもみじマークの比率が高い島といわれている。交通量が少なく、みんながゆっくりのスピードで走るの、高齢者にとっても安心して運転できる環境がある。
- ② 奄美では、死ぬまで働くのが当たり前の精神風土がある。伝統の大島紬や特産のサトウキビに従事してきた超高齢者には、年齢に合わせた仕事がある。
- ③ 奄美では、自立意識が高い。市町村が指導した体操教室は、その後シマの人の手で自主講座として継続している。
- ④ 奄美には、今でも民間・民俗療法が息づいている。薬草が多く、古くからの民間療法がある。超高齢者は語り部の役割をしている。
- ⑤ 奄美には、超高齢者にとって精神的安寧の世界がある。先祖信仰やユタ神（シャーマン）の存在が人々にとっての精神的安寧につながっている。

長寿を支える結いの事例には、超高齢者は単に支えられる存在だけではなく、持てる潜在能力を発揮し、地域貢献できる役割の場も創造している。超高齢者の自立意識を自然な形で支援していることが伺える。

## 2.7 子どもを支える結いの風土

子どもを支える結いの事例の語りである<sup>359</sup>。

- ① PTA や地域の人々の教育環境への情熱がある。PTA は、小・中・高校ともシマの人全員加入で、地域の人々も地域 PTA で支えている。
- ② 小・中学校の運動会には、親だけでなく親戚、シマの人々がこぞって参観し出場・応援する。シマの大きなイベントである。当日は朝からゴザを敷き、みんなで運動会料理を食べながら、応援する。PTA や集落民参加のプログラムもあり、共に運動会を盛り上げている
- ③ シマの全戸に、教師が家庭訪問している。シマの成人式に恩師として参加する。豊年相撲などにも、教師もシマの一員として参加する。
- ④ シマの人が支援する子ども育成会は、子どものムチモレ踊り、子どもの稲擦り踊り（9～10月）を指導し、小さいときから伝統行事の楽しさを体験させている。
- ⑤ 入学式（小1）、卒業式（中3）の夜にはお祝い回りがある。シマの人、職場の人、親戚の人、同好会の人たちがお祝いにつける。特に、高校が近くにないシマでは、中学の卒業後は親元を離れるために盛大に行われる。（ある超高齢者が、「ここでは、一緒に過ごすことができるのは中学までよ」と語ってくれた）

<sup>359</sup> 同じく H 氏へ聞き取り（2015年9月15日16:00~19:00）。



- ⑥ 徳之島の徳之島町では、町の若い職員などが、シマ単位に小中学生の学習を支援する「学士村塾」が開催されている。地域の教育熱は非常に高い。
- ⑦ シマの人々は伝統的に上級学校に行かせることに熱心である。親は貧しい生活の中でも子どもの教育を優先し、生活を切り詰めている。また、経済的理由で上級学校に行けない場合でも、貧しい子どもたちを支援する篤志家の奨学金の制度が古くからある。

これらの事例からは、シマの子ども達は周囲の大人の暖かい支援の中でシマの子どもとしてシマの文化を学び、育っていく。シマの人々は子ども達の成長をシマの喜びごととして、お祝いも共有しあい、子どもが育ちやすい環境を作っていることが伺える。

## 2.8 郷友会による知識結いの実際

郷友会は奄美の出身者で構成される組織で、東京、関西を中心に、戦前から全国に組織されている。会の結成は古く、戦後間もない時期が多い。「戦後の荒廃した中で、数少ない同郷出身者が身を寄せ合い、郷里に思いをはせ、生活のための情報交換、親睦と連帯感、相互共助を目的に発足」したケースが多い<sup>360</sup>。

奄美の郷友会は、全島レベル、市町村レベル、集落レベル、シマ単位に組織されているが、主はシマ単位に組織され、シマへの帰属意識が強いことが特徴とされる。

郷友会人口は、1世、2世を含めると関西が30万人、東京が20万人を超えるといわれ、奄美の第2の人口として、今日の奄美の発展に大きな役割を果たしている<sup>361</sup>。各郷友会はそれぞれの地で、シマの文化を引き継いだ文化イベントや島唄大会、運動会などのイベントを積極的に展開している。

また、各シマで行われる豊年祭や豊年相撲大会などへの参加もある。田島の調査によると、郷里に対する支援では、①小学校の記念行事に対する寄付（具体的には図書館・体育館の建設、ピアノ、視聴覚備品など）、②神社の改築・修繕、③公民館・集会所の建設、修繕、④老人クラブに対する寄付、⑤生活会館・福祉会館等の建設時の寄付などがある。また、慰霊碑の建設、災害見舞などに対しても寄付が贈られている。

加えて、郷里に対する協力形態として、過疎化の中で廃止の危機に追い込まれている郷里の郵便局への貯金運動や年賀状購入運動などがある。

特に、阪神淡路大震災時には、奄美出身者が多い神戸市長田区をはじめとした被災者へ、全国の郷友会団体や奄美の人たちから一早い支援がなされ、被災者の生活復興

<sup>360</sup> 田島康弘（1995）「奄美大島名瀬市における郷友会の実態」、鹿児島大学教育学部研究紀要・人文・社会科学編』、11-30頁。

<sup>361</sup> H氏の話。

に果たした役割は大きい。

地元、南海日日新聞が発行する「月刊奄美」は、島の情報誌として、多くの奄美出身者・郷友会員に愛読されている。このように、全国各地の郷友会は高齢化が進むシマの経済面や伝統文化の継続に欠かせない機能を果たしている。いわば、現代版の結いや知識結いの実践組織となっている。

このような、現代版の奄美の結いや知識結いの実際は、超高齢者の自立と生きがいを支援する役割を果たし、一方で、子どもの養育環境に対する暖かいまなざしが寄せられている。このようなシマのコミュニティが、長寿・多子化を実現しているひとつの要因として見えてくるのである。

### 3 徳之島における結いと超高齢者の役割

次に、徳之島における結いや知識結いの状況や超高齢者の状況について、徳之島の図書館長 I さんの語りを紹介する<sup>362</sup>。

#### 3.1 シマロ（方言）の見直しと超高齢者の活躍

##### ① 方言の見直し

奄美は、都会からは取り残され、奄美の方言は恥ずかしいものとして戦後は廃れていた。しかし、1980年代になって、島の学識者などの有志の提案で、自分たちの誇りとしてシマの中で、伝えていきましょうという取り組みが起ったのです<sup>363</sup>。シマの生活は、旧暦から新暦になったけど、伝統行事でも旧暦でできる部分は取り入れようということにもなりました。

そういう取り組みの中で、これまで田舎歌と思っていた島唄が、全国の民謡大会で優勝者が出て、全国に認められるようになって、みんなが勇気づけられました。

老人クラブでも何かできることは伝承しようということになって。そのようになったのは、年金が支給されるようになって、余裕が出たからでもあります。それまでは働くだけで、精いっぱい余裕などなかったのです。

##### ② 教育熱心なシマ

この島には、ヤンシキ・シキバンという言葉がある。親はおかゆをすすっても、子どもの教育費を工面する風土が、今でも全域に残っています。教育熱心の地域で、人口比にしたらこの地域は毎年東大入学率全国一です。今でも、学士村塾という、土曜日に、集落単位に、役場の若い人が学習を教える制度があります。

特にこの図書館のある亀津地域は、亀津断髪といって、明治の初め、率先して髪を切って新しい時代に備えたこともあり、教育熱心で、進取の気性がある地域といわれ

<sup>362</sup> 図書館長 I さん聞き取り（2015年9月13日9時半～12時）。

<sup>363</sup> 平成19年度から2月18日を大島地区の方言の日が設定され、方言マップは学校等を中心に配布されるなど、社会教育の一環として、島唄、島口の伝承が行われている（奄美群島の概要2017、385頁）

ています。公民館講座も盛んで、最高 94 歳の方が参加しています。

短歌や習字、囲碁など、いろいろあります。児童委員なども積極的で、子どものいる家庭と常に接しています。

### ③ 超高齢者の気概と敬愛の風土

徳之島への基地移転反対には、超高齢者が率先して参加しました。手作りのプラカードや旗を掲げたりして、また、率先してマイクを握っていました。この方々は、米軍統治下で食糧難を経験し、返還運動を経験した人達だからです。それは、知識としてではなく、体に染みついているようです。

この辺では、88 歳にあやかりたいと、88 歳の方の白い髪を取って、正月に分ける習慣があります。長寿は氏族の誇りなのです。昔は長生きできなかったからです。こんな事例がある。84 歳で入院して、退院したら、踊りがリハビリになったという人がいました。歌って踊っていると、ストレスがたまらない。地域のつながりにもなっています。

ここは連帯があって、ここは、極楽浄土です。祭りのある生活は人の絆を強めます。祭りはなくなるとはいけないと思います。昭和 42 年ごろは、シマロはためにもならないと言われたのですが、高齢者の歌をテープにとって保存していてよかったです。今では、シマロの復活に取り組む貴重な資料となっています。

I さんの語りからは、基地反対の際の率先した超高齢者の行動は、まさしく地域の教師的役割を果たしていることが伺えた。これらが可能になったのは、高齢者を敬愛する習慣と、年金の支給によって生活に余裕ができたことが大きい。徳之島が健康長寿の島であることを改めて理解した。

## 3.2 夏目踊りにみるシマの利他性<sup>364</sup>

次に、奄美の民俗研究家の M さんの語りである。徳之島町の井之川集落に伝わる夏目踊りは、国の無形文化財に指定されている。この集落に住む郷土史研究家の M さん（63 歳）は、次のように話した。

### ① 夏目踊りのこと

「踊りは集落総出で夜更けから集落全体を練り歩き、それは夜を徹して行われ、翌朝になることもある。太鼓を叩いて歌って踊って、海の向こうのネリヤ・カナヤの神に豊穡の祈願をする。夏目踊りの踊り手の最高は 90 歳代。来年は踊れるどうか分からないからと、毎年参加しています。100 歳の人でも踊りが来る深夜 2 時頃まで起きて待っていてくれ、杖をつきながら迎えてくれる。シマの生活にとって、歌と踊りは生

<sup>364</sup> Mさんへの聞き取り（2015年9月13日14時～15時）。

活の一部になっている。歌うことによって人は励まされ、精神が鼓舞される。歌と踊りは長寿に関係すると思う」

#### ② 踊りは楽しみこと

「集落の冠婚葬祭には歌と踊りは付き物。飲んだり食べたりしながら歌い、踊る。葬儀の際には死者を送る歌がこの集落には残っていて今でも歌われている。しかし、転作によって稲穂が消えて行事も消えた。この行事が残っているのはこの集落だけ。」

ここでも、伝統行事は集落の人々全員の楽しみこととして根付いている実態があった。

#### ③ 祭りの外部評価からの自信

「平成元年ごろ、夏目踊りを東京で披露してほしいということで踊ったら、1,500人が集まってくれました。そこで、専門家の先生に高く評価されました。そのことで、それまではつまらないと思っていたシマの伝統行事に対するシマの人の価値の再認識になりました」

#### ④ シマの子どもの生き方

「ここには、自然と共に生活がありますから、悪いことをして、人間にはばれなくても、悪いことをしたら、お天道様にばれる。道を堂々と歩く生き方をしなさいと小さい頃から言われて育つのです」

#### ⑤ 高齢者を大事にする風土

「お年寄りを大事にすれば、自分も大事にされ、子や孫も大事にされる。お年寄りには生き神様だからです。昔は長生きの人はいなかったから、88歳はお祝いを盛大にする習慣があります」

#### ⑥ 利他の心

「ここには、「チュウノコシヤ」という言葉があります。他人のことをすることが自分のためになる。悪いことをすると自分だけでなく、子や孫に悪いことが起きる。良いことをすれば、子や孫もよくなる。幸せが順番にやってくると信じていますので、悪いことをする人はいません」

#### ⑦ シマ歌のこと

「シマに伝わっている口承文化が、心を育てています。語る中で、歌うことで、田の神様を喜ばせるのです。そのことが豊作につながる。島唄には、恋の歌もたくさんありますよ」

#### ⑧ 稲霊・言霊のこと

「稲は魂を持っている作物です。魂を持っている作物は稲だけです。だから、餅には魂があるのです。ここでは、めでたい時、葬式の時、仏様に備えます。その時には、声をかけます（無言では通じないから。言葉に霊力があるから。ユレユレ、言霊の世界がありますよ）」

(奄美) 大島は裏声の世界です。それは言霊の世界です。島唄には、逆歌、この世にはありえないようなことをうたう歌もありますよ。集団の歌、お正月の歌、歌うことで心は癒されます。

これらの語りからは、祭りや島唄が人々を元気にし、長寿を実現していることがわかる。筆者らは、祭りの練習を見学に行く機会があった。夕方、おかずを持ちあい、食べて、飲んで、談笑した後に練習が始まった。太鼓や踊りは、最初はゆっくり。そして、だんだんとテンポが速くなり<sup>365</sup>、会場の公民館は陶酔していきような熱気に包まれていく。人々が一体となって共通の目的で行う祭りは精神的なストレスの解消となり、集落の結束の源にもなり、多くの効用をもたらすことを実感した。

### 3.3 「浜踊り」<sup>366</sup>の伝承を通じた多世代交流<sup>367</sup>

次に、徳之島文化協会の K さんの語りを紹介する。

#### ① 保存会のこと

「亀津の浜踊り保存会を主宰しています。島唄、民謡が廃れていた時に、奄美の歌者が島唄をうたって日本一になった。ここでも、昭和 40 年代、シマの結束として浜踊りを義父が結成した。しかし、一時廃れてかけてなくなる恐れがでてきたので、公民館で伝承することにしました。伝承の地に記念碑を建てています。今は亀津南区の公民館で毎週水曜日に踊りの練習をしています。常時 40 人くらいが集まって、若い人は 30 歳代から 90 歳代までいます。91 歳や 92 歳はバリバリですよ。80 代は 10 人で内の 9 人は女性です。女性のパワーがすごいのです」

#### ② 文化に関して

「鹿児島は男尊女卑の地域ですが、文化に関しては男女同等です。歌遊びには恋の歌

もあります。踊りは、男性が中の輪で、女性は外側の輪で踊る。浜踊りは 12 曲を 7 曲にして、公民館の壁に歌詞を張り付けて練習しています。この歌は、種をまいて、収穫までを歌う構成の内容です。歌うこと踊ることは、健康増進につながると思います。ときには仲間内で、口げんかすることもあります。コミュニケーションが大事ですし、大きな声が出ると、生きがい、張合いになる。若い人との交じわりの中にもあるし、踊りを伝承するという、目的意識があるのです」

#### ③ シマ口・方言について

<sup>365</sup> ゆっくりしたテンポ早まっていく奏法ヲ「アラシヤゲ」という。中原ゆかり『奄美の「シマの歌」、p106。

<sup>366</sup> 奄美大島の八月踊りに対し、徳之島は浜下りの期間の 8 月 15 日前後に踊られるので、七月踊りとも浜踊りも、夏目踊りも呼称する。小野 (1982)『奄美民族文化の研究』。

<sup>367</sup> Kさん聞き取り (2015 年 9 月 13 日 15:00~16:00)。

最近は方言を使いましょうということが提唱されています。島口大会では、高校生では、①勉強できる子、②スポーツができる子、そして、③島口、島唄ができる子という基準の、3つ目の評価につながるのです。昭和40～50年代から、方言を使いましょうという運動が提唱されて、文化協会では民謡や島口を使うようにしています」

以上の語りをまとめると、徳之島の人々の語りには、かつて田舎歌と卑下していた島唄が外部から評価され、そのことが、シマの人々の自信になったこと。それが契機となってシマ口、島唄が復活し、シマのコミュニティも強固になっていったことが伺えた。

また、歌や踊りは健康に良いという、伝統文化を共有することの悦びが同様に語られた。コミュニティのなかに伝わる歌や踊りのあることは、人々を生き生きさせ、同じ時間を共有することで連帯感が生まれる。そのようなコミュニティでは、年齢に関係ない交流があり、高齢期の孤独やさみしさのない世界が形成されている実態があった。

#### 4 区長を対象とした調査からみるシマの紐帯と超高齢者の役割

ここでは、インタビューから語られた奄美のシマの実態について、奄美の全集落の区長を対象としたアンケート調査<sup>368</sup>から、その一端をみていくこととする。奄美のシマの資本（自然・文化・社会関係）の豊かさの要因が、量的調査からも裏付けられた。

##### 4.1 奄美のシマの紐帯の強さ

シマの自然環境や結いの習慣、人々のつながり・絆など12項目を集落の「紐帯」の指標として、4件法で回答を求めた<sup>369</sup>。図表6-1はその統計量である。なお、統計量の平均値は各項目の回答（かなりあてはまる4点、比較的あてはまる3点、あまりあてはまらない2点、まったくあてはまらない1点）の平均の値である<sup>370</sup>。

図表6-1 紐帯12項目の統計量

<sup>368</sup> 本調査は奄美群島全の市町村（1市9町2村）から集落の区長名簿の協力を得て、全集落（373）の区長を対象に郵送によるアンケート調査（回収率は56.03%）を実施した。調査期間は2017年5月26日～6月20日である。

<sup>369</sup> ここでの紐帯はF.H.ギディンズが用いた社会的紐帯（social bond）をさし、ここでは集落内の成員に共通する結合の度合いを測っている。

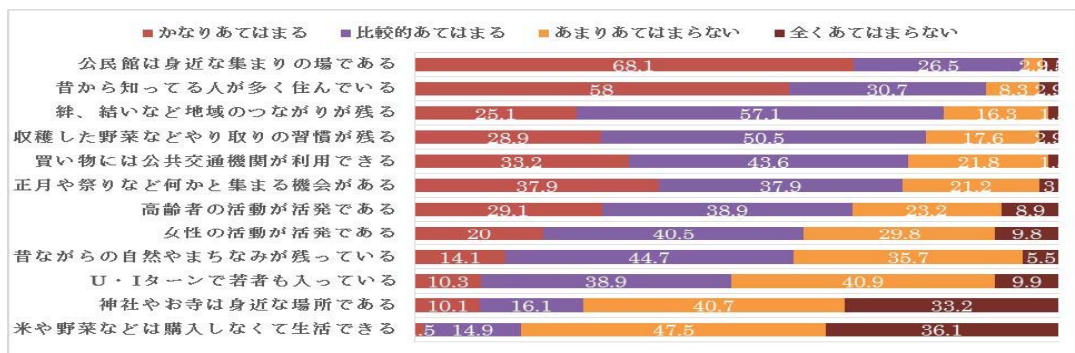
<sup>370</sup> 以下、各統計量とも同じである。-

項目	度数	平均値	標準偏差
昔ながらの自然町並み	199	2.67	0.784
お米や野菜など購入しなくてよい	202	1.82	0.734
地域のつながりが残る	203	3.06	0.687
やり取りの習慣が残る	204	3.05	0.764
昔から知っている人が多い	205	3.44	0.769
U・Iターンの増加	203	2.50	0.811
公共交通機関が利用可能	202	3.08	0.778
公民館など集まりの場	204	3.60	0.669
神社やお寺は身近な場所	199	2.03	0.948
何かと集まる機会が多い	203	3.11	0.837
女性の活動が活発	205	2.71	0.898
高齢者の活動が活発	203	2.88	0.931

図表 6-2 は、当てはまる（かなり・比較的）の回答の高い順に示したものである。上位には、「公民館は身近な集まりの場である」94.6%で、ほとんどの集落が当てはまるとしている。次いで、「昔から知っている人が多い」88.7%、「地域のつながりが残る」82.2%、「収穫した野菜などのやり取りの習慣が残る」79.4%であった。集落内の交流やつながり、やりとり、相互扶助、結いの習慣などの回答が8割を超える状況にあった。区長の回答からも奄美の集落内の紐帯の強さが示された。

特に、ほとんどの集落が「公民館が身近な場である」と回答していることは、人々の集まりの頻度が高いことで、集落内の話し合いなどの自治や、新しい情報や知識、学びなど、集落内の情報の共有が集落の紐帯を強固にしているとみることができる。

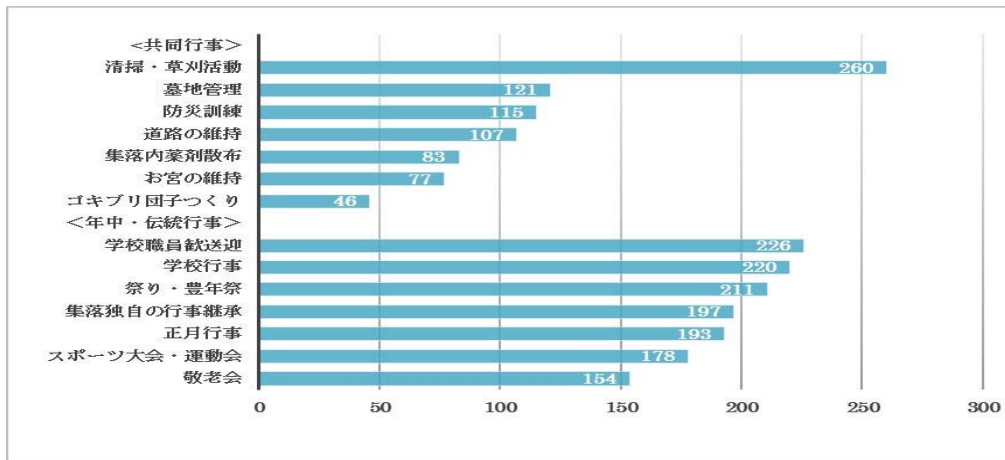
図表 6-2 集落の紐帯（全体）



#### 4.2 集落の共同・年中・伝統行事の多さ

共同行事の多い順では、清掃・草刈が250件とトップで、次いで墓地管理121件、防火訓練115件、道路の維持107件となっている。多くの集落で環境保全の取り組みや自治防災活動などの自主活動が行われている。地域の自治力を示す指標となる。

図表 6-3 集落の年中行事



また、学校関連行事がトップを占め、学校職員の歓送迎 226 件、文化祭などの学校行事が 220 件と多く、次いで祭り・豊年祭 211 件、集落独自の行事の継承 197 件、正月行事 193 件、スポーツ大会・運動会 178 件、敬老会 154 件と続いている。

この結果は、集落と学校とのかかわりの強さ、祭りや集落独自行事、運動会などが頻度高く行われていることが明らかにされた。集落では、共同作業や年中・伝統行事などを通じて集落内の活動は活発であり、何かと集まる機会が多い状況にあることが伺えた。

#### 4.3 伝統と習慣の継承の強さ

冠婚葬祭に参加するなどの伝統と習慣の継承 7 項目で尋ねた。その統計量は図表 6-3 である。

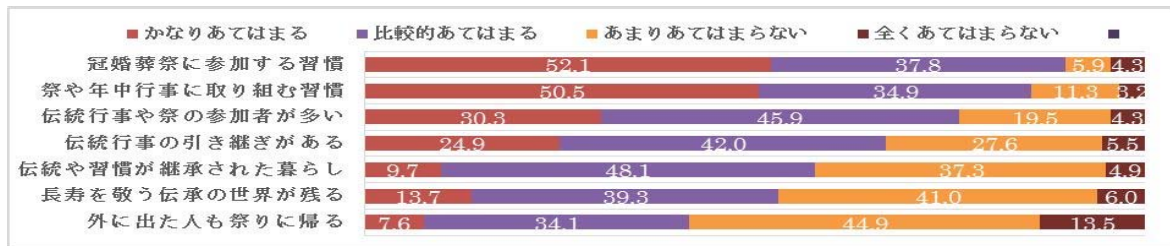
図表 6-4 統計量

項目	度数	平均値	標準偏差
伝統や習慣など引き継がれた暮らしが残る	181	2.86	0.855
冠婚葬祭に参加する習慣が残る	188	3.38	0.781
伝統行事の若い世代への引き継ぎがある	185	2.63	0.727
長寿を敬う言葉伝承の世界が残る	183	2.61	0.797
祭りや年中行事を取り組む習慣が残る	186	3.33	0.802
伝統行事や祭運動会の参加者が多い	185	3.02	0.821
外に出た人も集落の祭に帰る	185	2.36	0.809

図表 6-5 は、当てはまる（かなり・比較的）の回答の高い順に示したものである。上位は「冠婚葬祭に参加する習慣（89.9%）」、「伝統行事や祭り・運動会の参加者が多い」（86.2%）」、「祭り・伝統行事を取り組む習慣」（85.4%）」の 3 項目で、80%を超えている。次いで、「伝統や習慣の引き継がれた暮らし」（66.9%）」などで、集落における伝統行事と習慣の継承は高い状況が伺えた。

図表 6-5 伝統と習慣の継承状況

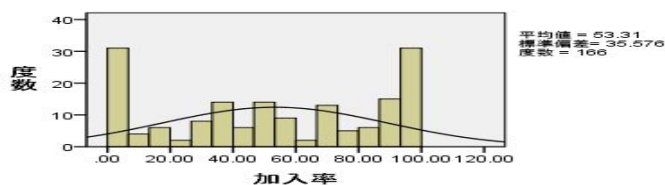




#### 4.4 老人クラブ加入率の高さ

集落の高齢者の老人クラブ加入率は、老人クラブのない（0%）集落と全員が加入している（100%）の集落がともに同じ程度で存在している。全体の平均の老人クラブ加入率は53.3%で、中央値は50%であった（図表6-6）。老人クラブの加入率は、全国的には年々減少し20%を下回っているが、奄美では高い状況にあった。

図表6-6 老人クラブ加入率の状況



#### 4.5 社会関係資本の豊かさ

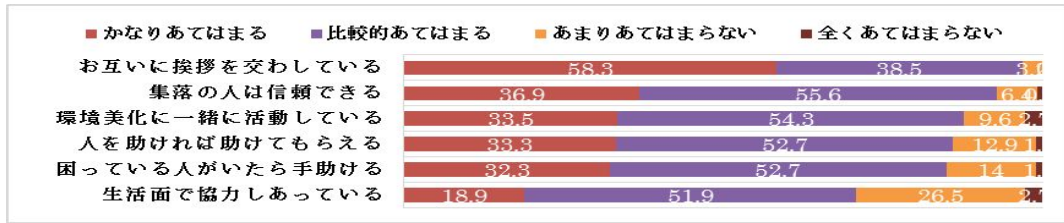
社会関係資本は、信頼、互助、地域力を示す次の6項目で尋ねた。その統計量は図表6-7のとおりである。

図表6-7の統計量

項目	度数	平均値	標準偏差
集落の人の信頼	187	3.28	0.631
助ければその人から助けられる	186	3.18	0.689
困っている人がいたら手助けをする	186	3.16	0.694
一緒に活動をしている	188	3.19	0.711
ご近所と生活面で協力しあっている	185	2.87	0.740
集落でお互いに気軽に挨拶を交わす	187	3.55	0.560

図表6-8は、社会関係資本の回答の上位から示したもので、「挨拶を交わす」（96.8%）、「集落の人は信頼できる」（92.5%）、「一緒に活動している」（87.8%）、「助ければその人から助けられる」（86.0%）、「困った人には手助けする」（85.0%）で、いずれも80%を超え高い状況にあった

図表 6-8 社会関係資本



#### 4.6 集落高齢者への評価の高さ

高齢者評価を 5 項目で尋ねた。その統計量は図表 6-9 のとおりである。

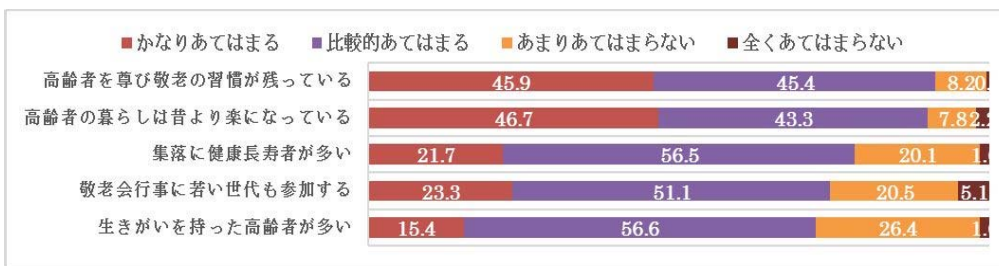
図表 6-9 統計量

項目	度数	平均値	標準偏差
長寿者を尊ぶ敬老の習慣が残る	183	3.37	0.657
生きがいを持った長寿者が多い	182	2.86	0.682
集落に健康長寿者が多い	184	2.98	0.697
集落高齢者の暮らしは楽になっている	90	3.34	0.721
敬老会行事は若い世代も参加している	176	2.93	0.800

図表 6-10 は、集落の高齢者評価の上位から示したものである。上位には、「長寿を喜ぶ習慣がある」(91.3%)、「集落の高齢者の生活は楽になっている」(90.0%) の 2 項目で 9 割を超えている。次いで、「集落に健康長寿者が多い」(78.2%)、「敬老会行事は若い人も参加している」(74.4%)、「生きがいを持った高齢者が多い」(72.0%) の順位で、いずれも 70% を超え、高齢者評価は高い状況にあった。

この結果は、インタビューで語られた、敬老意識の習慣と健康長寿者の多さと同様の結果であった。

図表 6-10 集落高齢者の評価



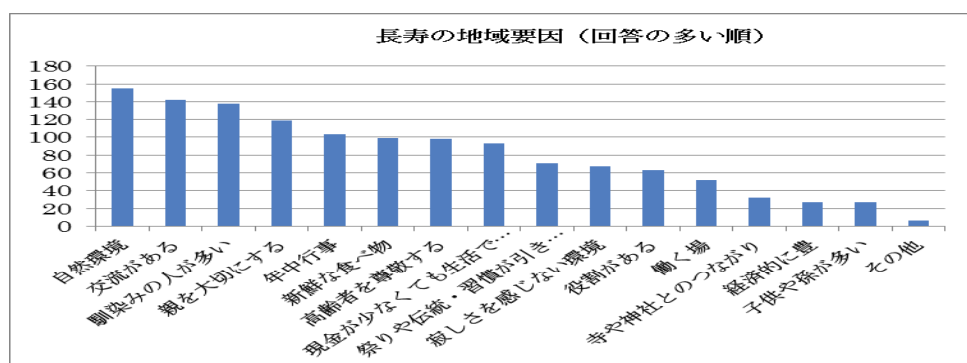
#### 4.7 長寿の地域要因：経済資本ではない奄美の豊かさ

健康長寿の地域要因について尋ねると、「自然環境がよい」(154 件) がトップで、次いで「近隣などとの交流がある」(142 件)、「馴染みの人がいる」(137 件)、「親を大切にする」(119 件)、「年中行事の機会が多い」(103 件)、「新鮮な食べ物がある」(99

件)、「高齢者を尊敬する習慣がある」(97 件)、「現金の少ない暮らしができる」(92 件)、「伝統習慣が引き継がれている」(71 件)と続いていた。

奄美の集落の長寿の地域要因は、第 1 に、自然資本(自然・食べ物)、第 2 に、社会関係資本(交流・馴染みの人)、第 3 に、文化資本(祭り・伝統行事・習慣)であることが伺えた。奄美の長寿要因には、経済資本で測れない豊かさがみられた。

図表 6-11 健康長寿の地域要因



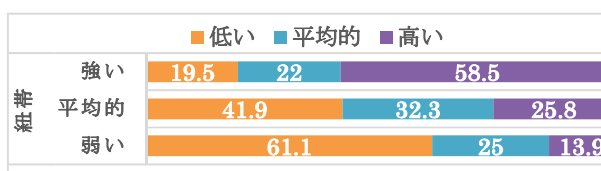
#### 4.8 高齢者と関連する項目の統計的検定

区長調査の回答から、高齢者と関連する項目の  $\chi^2$  検定したところ、統計的に有意な関連が示された結果は次のとおりである。

##### ① 集落の紐帯と高齢者評価

集落の紐帯と高齢者評価は統計的に有意に関連しており、紐帯の強い集落の高齢者評価は高く(58.5%)、紐帯の弱い集落の高齢者評価は低い(61.1%) ( $p < 0.001$ )

図表 6-12 集落の紐帯と高齢者評価

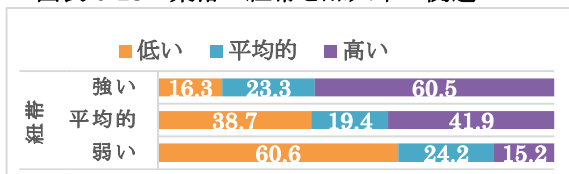


$\chi^2$  値: 21.182, df: 4, p 値: 0.001

##### ② 集落の紐帯と老人クラブ加入率

集落の紐帯と老人クラブ加入率の高さとは統計的に有意に関連しており、紐帯の強い集落の加入率は高く(60.5%)、紐帯の弱い集落の加入率は低い(60.6%) ( $p < 0.001$ )

図表 6-13 集落の紐帯と加入率の関連



$\chi^2$  値: 19.649, df: 4, p 値: 0.001

##### ③ 健康長寿者と伝統と習慣の継承

健康長寿者が多いことと伝統と習慣の継承は統計的に有意に関連しており、健康長寿者が「かなり当ては

図表 6-14 健康長寿と伝統と習慣の継承の関連



まる」集落の伝統と習慣の継承は多い(81.3%) (p<0.001)

×<sup>2</sup>値：37.986, df：6, p値：0.001

④ 老人クラブ加入率と敬老会に若い人の参加と老人クラブ加入率の高さと、「敬老会に若い人も参加する人が多い」は統計的に有意に関連している (p<0.001)。

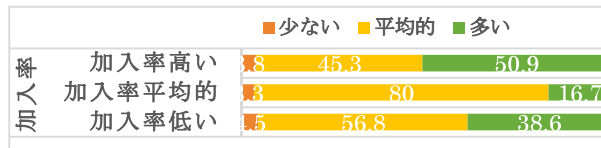
図表 6-15 加入率と敬老会参加



×<sup>2</sup>値：13.192, df：6, p値：0.05

⑤ 老人クラブ加入率と社会関係資本  
老人クラブ加入率の高さと「社会関係資本」の多さは統計的に有意に関連している (p<0.05)。

図表 6-16 加入率と社会関係資本



×<sup>2</sup>値：9.484, df：4, p値：0.05

以上の区長調査の結果からは、インタビュー調査と同様に、集落の紐帯の強さ、集落行事の多さ、伝統行事の継承、社会関係資本の豊かさ、高齢者評価の高さなどが明らかにされた。特に、健康長寿者や老人クラブ加入率が、集落の紐帯や伝統と習慣の継承、社会関係資本と関連するという結果は、超高齢者は集落でポジティブな存在であることを明らかにした結果と受けとめられる。

## 5 シマのコミュニティを支える行政・報道機関

### 5.1 地元新聞社の役割

奄美の伝統文化の継承を後押ししている地域メディアの存在は大きい。奄美には、人口規模の割には新聞社が2社ある。これは奄美群島の歩んだ歴史と強く関係がある<sup>371</sup>。敗戦で米軍統治下の時代に、孤島になった奄美には日本復帰協議会が結成され、復帰運動が激しくなった。この時代に、精神的・経済的に苦しい状況の中で、文化・芸能はむしろ盛んになり、日本復帰までの間に、日刊紙や雑誌が創刊され、小説、詩、短歌、俳句が盛んになり、新しい民謡も生まれている。

南海日日新聞は、「奄美の歴史に学び、島の自然、文化を大事にし、島の人たちと苦楽を共にしつつ、時には毅然とした論陣を張る」を基本姿勢に生まれた。現在の発行部数は23,875部(2014年5月)である<sup>372</sup>。奄美の世帯数は51,543世帯(22年国調)であるので、半数以上の世帯が購読者である。このほかに、南海日日新聞社は、[月刊奄美]を発行し、本土にいる50万人ともいわれる奄美出身者と本土を結ぶ役割をしている。

<sup>371</sup> 金山智子 (2010)「離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達:奄美大島編」『ジャーナル・オブ・グローバル・スタディーズ』3号、1-20頁。

<sup>372</sup> 南海日日新聞社ホームページより。

奄美新聞は、「郷土と共に歩み、明日の奄美を築くため、産業経済の発展、福祉の増進、自然保護、教育振興、伝統文化の振興」を掲げている。南海日日新聞と差別化を図り、奄美全島の各種イベントや人の紹介など身近な話題に力を入れている。発行部数は11,000部である。南海日日新聞社の半分程度の発行部数であるが、身近な記事は奄美の世帯の2割に読まれている。

日本復帰後に、標準語推進運動や新生活運動によって奄美の方言や伝統文化が薄れかけた時期があるが、1980年後半から文化継承活動が始まり、その文化支援に、地元紙は貢献してきた。現在でも、地元の伝統行事に関する記事は多く、「島唄大会」などもきめ細かく主催し、全国の大会で優勝者を出している。

## 5.2 地域メディアの支援

奄美大島を例にとると、前述した地元紙の南海日日新聞、奄美新聞のほかに、地域メディアとして、ケーブルテレビ2社「奄美テレビ放送」(奄美市を中心としたエリア)と「瀬戸内ケーブルテレビ」(加計呂麻島、請島、与路島を含む人口1万人の瀬戸内町エリア)がある。コミュニティFMラジオとしては、あまみエフエム、ラジオサポータ(龍郷町)、NPO法人エフエムうけん、エフエムせとうちの4局がある。標準語化が進む奄美で、島唄やシマロが聴け、町やシマの八月踊りの行事などの身近な情報を提供する役割を担っている。

過疎化や高齢化が進み一人暮らしの高齢者が多い瀬戸内町では、大半の時間を地元のシマの情報や番組を放送していて、一日中島唄を聞いている高齢者も多い。「ケーブルテレビで島唄を聞いて思い出しているから安心と、離れた家族からも感謝されている」と、瀬戸内ケーブルテレビ会社代表の話が紹介されている<sup>373</sup>。

これらの地域メディアに携わっている人々のなかにはUターン組も多く、一旦奄美を出たことによって、奄美の良さに気付いたことが契機になっている人が多い。だからこそ、奄美の文化を伝え、奄美の人々が奄美の文化に誇りと自信を持つことを目指している。そこに共通点が見出されると金山は指摘する。

## 5.3 シマ社会を結ぶ自治体広報紙

シマの人々を結ぶ情報として、自治体の広報紙の役割も大きい。奄美の広報紙の特徴は、住民の名前や顔を多く登場させていることである。個人情報を重ねる都会では考えられないことである。

奄美の市町村の広報誌には、代々続いているシマ毎の結束を意識した地域情報の編

<sup>373</sup> 金山智子(2010)「離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達;奄美大島編」『ジャーナル・オブ・グローバル・スタディズ』3号、1-20頁。

集が求められる。また、シマ毎に、歌や踊り、地域の情報や個人の情報も重要とされる。例えば、瀬戸内町ではシマ単位の情報が掲載され、住民の誕生祝い、結婚祝い、お悔やみなどが含まれている。

奄美らしいものに、香典返しがある。故人が住んでお世話になったシマや社協に香典返しを寄付する習慣である。「ゆいまーる」という言葉で、「ゆい」は結い=共同、「まーる」は順番を意味し、今でも相互扶助の精神が大切とされ、それが情報として伝えられるしくみがある。

#### 5.4 長寿を支援する行政

奄美の長寿者がさらに長生きをしようと思う要因に、行政や集落、企業、老人クラブからの長寿お祝い金（品）がある。行政からは、100歳を超えた人には、毎年町長さんや副町長さんが自宅にお祝いを持ってくる習慣がある。

祝い金は全国的には、高齢者の増大の中で減少傾向にあるが、奄美地域には残っている。現金支給についての是非はあるものの、現金収入が少ない奄美の超高齢者には、自分のものよりも家族や孫に使う何か買ってあげられると喜ばれている。規模の小さい町村ほど、高額になっている傾向にある。

高齢者に対する配慮を示す施策として、有効ではないかと思われる。祝い金に対する高齢者の語りを聞く限り、健康長寿の要因にも少なからず貢献していると筆者は類推する。市町村の長寿支援策制度は、図表 6-8 のとおりである<sup>374</sup>。

図表 6-8 市町村別祝い金の状況（年間）

市町村	祝い金等の施策の状況
奄美市	敬老祝い金（80歳以上の市民 3000円） 敬老年金（満 100歳の誕生日に支給）
瀬戸内町	敬老祝い（85歳 1万円、90歳以上 3万円、100歳以上 10万円）
龍郷町	敬老祝い金(80歳以上 5000円)
宇検村	敬老年金(80～89歳 1万円、90～99歳 2万円、100歳以上 3万円)
大和村	敬老祝い(100歳を迎える誕生日 10万円) 敬老年金(75～89歳 18000円、90～99歳③6千円、100歳以上 12万円)
喜界町	敬老金(85歳以上 2万円、90歳以上 3万円、100歳以上 10万円)
徳之島町	健康長寿顕彰金(100歳になった住民 5万円) 敬老祝い(100歳以上の住民 3万円) 金婚式を開催

<sup>374</sup> 奄美群島のねりやかなや移住支援サイトからの情報。

伊仙町	敬老祝い金 (88 歳 1 万円、85～89 歳 8 千円、90～99 歳 1 万円、100～110 歳 8 万円)
天城町	敬老祝い金 (90～100 歳 1 万円、100 歳以上 5 万円) 合同金婚式
和泊町	在宅介護者支援(65 歳以上の要介護者を介護者に対し月 1 万円)
知名町	敬老祝い金 (基準日 (9 月 1 日) に 90 歳以上の方は 10,000 円)
与論町	敬老祝い金(90 歳 1 万円、100 歳以上 2 万円) 敬老年金(90 歳以上、年 1,8 万円)

出所：奄美群島のねりやかなや移住支援サイト情報から筆者作成

## 6 おわりに

### 6.1 シマの蓄積された叡智

奄美のシマの暮らしには、かつての民俗の世界ではなく、今も、祭りや伝統行事、習慣が引き継がれて、それらを継承する人々のつながり、きずなが日常の学として存在し、豊かな社会関係資本を形成している。

インタビュー内容を奄美の歴史的、風土的な自然の中で位置付けて総括すると、特に、神が希望のシンボルであり、人間的な結いの大切さを教えていることを共通点とする。その風土の中で、大らかな精神性や利他の心が養われ、お互いを尊重し合う相互扶助や結いの習慣が機能している。

そして、ここには、一人ひとりに出番と生きがいや、使命感を実践する場を作る力量がコミュニティの中にある。この力量は、単なる文化的伝統の継承というだけでなく、人々が学びあって、成長しあう場としての意味を持っている。このことは、伝統行事や祭りなどの継承は、知識や技のストックと並んで、シマの「人々の良心を理解し、良心を評価して、良心を開花させる場」をつくる経験のストックを意味する。まさに、伝統と協働のダイナミズムのなせる業である。

都会では、祭りや伝統行事が廃れ、地域のつながりが希薄になっているが、奄美では、時代の風を入れながら、共同体の良さを継承している。そこには、シマの人々の度量がある。

### 6.2 超高齢者の自主性・自立性

奄美のシマの生活の営みには、自分たちの暮らしを成り立たせている自主性がある。集落行事の全員参加、環境整備、行事のルール化、お金の集め方、全て自立と自主で成り立っている。昔からの一重一瓶意識も今に生かされている。現金収入の少ない奄美の集落での生きる知恵である。

これらは先代から超高齢者へ引き継がれ、確実に若い世代に引き継がれている。超

高齢者は奄美復帰時の中心的世代である。そのことが超高齢期になっても、次世代の危機には立ちあがる。率先して基地移設に反対し、プラカードをつくり、マイクを握る。ここには、依存ではない自立した超高齢者たちの姿がある

### 6.3 奄美のシマの紐帯と超高齢者の役割

区長を対象とした調査結果からは、老人クラブの加入率の高さと、集落の紐帯の高さや行事数の多さ、伝統と習慣の継承の強さ、高齢者評価の高さが、統計的に有意に関連していた。超高齢者の活動の活発さは集落の紐帯や伝統行事に影響を与えることがこの調査からも明らかにされた。

さらに、カイ二乗検定して、高齢者との関連で統計的に有意に関連した項目では、① 紐帯の強い集落の高齢者評価の高さ、② 紐帯の強い集落の老人クラブ加入率の高さ、③ 健康長寿者が多い集落の社会関係資本の多さ、④ 老人クラブ加入率の高さと「敬老会に若い人も参加する人が多い」が統計的に有意に関連している。このことから、シマの超高齢者の存在が、シマの紐帯や社会関係資本を豊かにしていることが読み取れる。超高齢者は、シマの豊かな自然や文化、社会関係資本を育て守る存在として重要な役割を果たしていることが明らかにされた。



## 第2部のまとめ

長寿研究ではあまり議論されていない伝統文化や民俗・習慣・精神的風土などの奄美シマのコミュニティ特性に注目し、これらをもう一つの長寿要因と捉え、結いや知識結いに関する研究の中に位置づけ、超高齢者の健康長寿と幸福な老いに果たす役割を考察してきた。

奄美は、地理的にはヤマト（本土）とナハ（沖縄）の狭間に位置し、歴史的にも外からの権力に抑圧・翻弄されてきた。気象的には、毎年のように大きな台風が通過し、主産業である砂糖黍などに大きな影響、被害を与えている。そのため、郡民所得は低く、生活保護世帯率も高く、経済面では脆弱な地域である。経済的豊かさを計る GDP（国内総生産）で計る幸福指標では、低位に属する地域のひとつである。

しかしながら人々は、シマを単位に、自然と一体化した暮らしを営み、伝統行事や年中行事、習慣、信仰、などを継承する生活の中で、結いや知識結いが機能し、生活満足度や地域愛着度の高い状況にある

一方で、このような受難の歴史、劣位な経済環境に関わらず、過去には泉重千代さん、本郷かまとさんなど、世界長寿記録者を輩出し、合計特殊出生率も高く、「長寿で子宝の島」を形成してきた。

これらを概観するとき、シマのコミュニティ特性は、奄美の歴史や伝統、習慣や信仰などを含めて構築された奄美のシマという「場」と「場の意思」が地域経営の源となって、長寿と幸福な老いの要因となっているといえる。このことは、超高齢者の潜在能力を開花させるには、その実現を推進するコミュニティの「場」と「場の意思」に着目することが重要性になるということである。

福原は、「場」には地域固有の歴史があり、伝統や習慣に裏打ちされた文化があると指摘する。そして、その地域の固有の文化には、それぞれの地域の人々を動かす「場所の意思」というべき力を持っていると、論じている<sup>375</sup>。

そして、「場所の意思」とは述語的な意思であると解説する。通常、意思をもつのは人間（国、企業、経営者、私）という主語的な立場のものと考えられるが、地域にも述語的な意思というものがあって、それが「場所の意思」とであると解説する。それぞれの地域の固有の歴史・文化に裏打ちされた「場所の意思」を尊重することこそ、その地域の快適環境に貢献する方法であると論じるのである。

この指摘は、奄美の「長寿で子宝の島」を地域の文化的経営という視点から解明することへの示唆を与えてくれる。そして、奄美の集落の「場」と「場所の意思」を結

---

<sup>375</sup> 福原（2010）『銀座のまちと資生堂；文化資本と場の経営学』『国際文化政策』N0.1、1-6頁。

ぶものとして、“結い”や“知識結い”という相互扶助の「人々の意思」がある。超高齢者の笑顔の多さ、地域と濃密につながった生活、活動的な超高齢期の暮らし、ポジティブな考え方がシマの地域経営の成果物として理解されるのである。

奄美の歴史や辛酸な生活から形成された奄美の人々の精神性が奄美固有の文化を開花させ、暮らしの基盤に相互支援の結いを強める「場」を形成し、「場の意思」が超高齢者の喪失感や脆弱さを超えて、長生きと幸福感の形成に寄与しているのである。

地域経営の「場」と「場の意思」の解明を通じ、GDPの経済指標では計れない奄美の幸福感と精神的な豊かさが明らかにされた。それらは人と人の関係性から形成され、現在の生を超えて過去の世代や次世代に結びつき、人格の形成に寄与している。奄美を象徴するのは、「トウトウガナシ」という先祖や周囲の人々に感謝する日常的な挨拶の言葉がある。「島唄」や「八月踊り」は、奄美の人々のアイデンティそのものであり、心の魂でもある。それらの仲介者として超高齢者の存在がある。

### 第3部 超高齢者の老いと文化

第3部は奄美の超高齢者を対象に4種類の実証研究(量的・質的調査)を基に、3章から構成されている。第7章と第8章は、「老年的超越」理論に基づいた超高齢者の心理適応や精神的次元と幸福感を明らかにするために、アンケート調査とインタビュー調査から分析している。

第9章は老いと看取りの文化をテーマに、全国的には病院死が8割を超える傾向の中で、自宅で亡くなる人が8割を超える与論島を対象に、フィールド調査とインタビュー調査からその要因を明らかにしていく。

## 第7章 奄美・超高齢者の老いと「老年的超越」

### 1 はじめに

本章は、超高齢者の心理適応や精神世界を明らかにするために、加齢に伴う世界観や価値観の変容をポジティブな発達とする老年的超越理論をベースに解明する。内容は、これまでに公刊された老年的超越理論の実証研究3論文のうち、量的調査の2つの論文をもとにしている。1つは、ライフサイクル第9段階（85歳以上の超高齢者）を対象とした調査<sup>376</sup>である。もう1つは、高齢期の老いに伴う変化を明らかにするために、第8段階（65歳～84歳）の高齢者を対象に調査を行い、第9段階の超高齢者との2段階比較を目的に行ったもの<sup>377</sup>である。

なお、老年的超越理論を日本で紹介したのは、中嶋ら（2001）<sup>378</sup>の論文によってである。この理論尺度を用いて実証を行ったのは、筆者の質的研究<sup>379</sup>が最初と位置づけられている。

本章の構成は、一つは、超高齢者の老いと「老年的超越」をテーマに、ライフサイクルの第9段階に位置づけられる超高齢者の実証結果を論じる。二つ目は、高齢者と超高齢者を合わせた実証結果を論じる。特に、高齢者の実態との比較を通じ、超高齢者特有の心理適応や精神世界が明らかにすることに焦点を当てている。

### 2 研究の目的と枠組み

#### 2.1 目的

これまでの研究ではあまり明らかにされていない超高齢者の老いの姿について、老年的超越理論を踏まえて量的調査から明らかにする。そのため、奄美の自宅居住の超高齢者を対象に、次の点から明らかにする。

第1は、超高齢者の生活スタイルや満足度、長寿意識などの実態とその要因を分析する。第2に、超高齢者の老いの豊かさと精神性を「老年的超越」尺度を用いて明らかにする。第3に、同様の調査について65歳以上の高齢者を対象として行い、加齢に伴う傾向の差について、超高齢者（ライフサイクル第9段階）と高齢者（ライフサイクル第8段階）の2段階に分けて明らかにする。

<sup>376</sup> 富澤公子（2009b）「ライフサイクル第9段階の適応としての「老年的超越」；奄美群島超高齢者の実態調査からの考察」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』2、327-335頁。

<sup>377</sup> 富澤公子・Masami Takahashi（2010）。「奄美群島超高齢者の『老年的超越（Gerotranscendence）』形成に関する検討：高齢期のライフサイクル第8段階と第9段階の比較」『立命館大学産業社会論集』、87-103頁。

<sup>378</sup> 中嶋康之・小田利勝（2001）「サクセスフル・エイジングのもう一つの観点；ジェロトランセンデンス理論の考察」『神戸大学発達科学部研究紀要』6（2）、255-269頁。

<sup>379</sup> 富澤公子（2009a）「奄美群島超高齢者の日常からみる『老年的超越』形成意識」『老年社会科学』30、477-488頁。

第4に、上記の結果を踏まえ、奄美の超高齢者の幸せな老いとそれを支える環境要因を明らかにする。

第5に、これらを通し、近代化がおしなべてステレオタイプなイメージを作り上げてしまった老いに対する偏見や差別<sup>380</sup>に対し、新たな知見を提示することである。

なお、奄美群島を選定する理由は、1つに気候・風土の面がある。奄美は、トーンスタムが老年的超越理論を実証した北欧と異なる温暖な地域であること。

2つめに、個人のライフサイクルは社会的文脈と切り離しては理解できないとする視点からは、様々な危機・困難を経験してきた奄美の超高齢者の精神性は、老年的超越の次元を測るに適した地域であると考えたこと。

3つ目に、奄美は長寿地域で、一方で出生率の高い子宝の地域という実態がある。人口構成が危惧されている「少子高齢化社会」とは異なるいわば、「長寿多子化社会」が形成されている地域であり、地域コミュニティの中での健康長寿のあり方に対する示唆が得られる地域であると位置付けたことである。

## 2.2 枠組み

### 2.2.1 データ収集と対象者

#### 1) 超高齢者調査

奄美の2町村（宇検村、徳之島町）の協力を得て、住民基本台帳を基に、自宅に居住する85歳以上の超高齢者（2006年2月現在）に対し質問紙による郵送調査を実施した。

調査対象数は、宇検村は自宅居住超高齢者全員（105人）を対象とし、徳之島町は自宅居住の超高齢者（総数502人）の半数（251人）を対象とした。回答者は102人（回答率28.7%）で、調査期間は、2006年4月～8月である。回答者の平均年齢は90.0歳である。

#### 2) 高齢者調査

奄美の3町村（奄美市、徳之島町、宇検村）の生涯学習講座等を受講生した高齢者176人に対し、講座終了後にアンケート調査を実施した（回収率100%）。調査時期は、2009年6～7月である。回答者の平均年齢は74.4歳である。

### 2.2.2 質問紙の構成及び分析データ

#### 1) 超高齢者調査

超高齢者調査で用いた質問紙は、基本属性（性別、年齢、居住年数、暮らし向き、医

<sup>380</sup> 嵯峨座晴夫（2000）「21世紀の高齢社会と老年社会科学のフロンティア；大衆長寿と高齢者のライフスタイル」『老年社会科学』22（3）、234-330頁。

者の有無、健康状態、介護認定、記入者)と行動能力、心理的適応(生活満足感、愛着度、時間認識、長生き観<sup>381</sup>、現在の心境、楽しみごと)、老い観及び老年的超越に関する質問項目で構成した。分析はSPSSで行った。

## 2) 高齢者調査

高齢者調査で用いた質問紙は、基本属性(性別、年齢、居住年数、暮らし向き、医者  
者の有無、健康状態、介護認定、記入者)、行動能力、心理的適応(生活満足感、愛着度、時間認識、現在の心境、楽しみごと)、老い観及び老年的超越に関する質問項目から構成した。分析はSPSSで行った。

## 2.3 倫理的配慮

超高齢者調査では、回答者のプライバシー保護に関する誓約書を郵送時に添付し、調査以外の目的で使用しない旨を誓約した。

高齢者調査では、講座主催者に対し、プライバシー保護に関する誓約書を提出するとともに調査票に調査目的以外で使用しない旨を誓約した。データは適切に管理している。

## 2.4 データの内容

### 2.4.1 基本属性

性別、年齢、居住年数、家族構成の項目は該当を○又は数字で回答してもらった。暮らし向きは「大変苦しい(1点)」から「大変余裕がある(5点)」までの5件法。健康状態は「元気(4点)」から「寝たきり(1点)」の4件法。通院状況は、医者に「かかっている(0点)」、「かかっていない(1点)」の2件法。介護認定は「認定外(0点)」から「要介護5(6点)」までの7件法で回答を求めた。

### 2.4.2 行動能力

行動能力は、老研式活動能力指標13項目<sup>382</sup>で「はい(1点)」「いいえ(0点)」を用いた。また具体的な行動内容を把握するため、1週間でいった仕事や活動として、「収入のある仕事」「畑や山の手入れ」、「魚・海藻採り」、「食事の支度」、「部屋の掃除」、「洗濯」、「買い物」、「孫やひ孫の世話」、「店番・留守番」、「庭の手入れ」、「郵便局」、「ボランティア」、「何もしなかった」など、13項目を例示した。回答は複数回答可とした。

<sup>381</sup> 高齢者調査では長生き観に関する項目は行っていない。

<sup>382</sup> 老研式活動能力指標には、手段的ADL(バスや電車で外出できる、日用品の買い物や食事の支度など)知的ADL(新聞、本、雑誌を読んでいるなど)、社会的ADL(友達の家を訪ねる、相談に乗る、病人を見舞うなど)13項目で構成され、10点以上がほぼ自立と見なされる。

### 2.4.3 心理的適応

心理的適応の尺度は、現在の生活満足度について「大変満足（5点）」から「不満（1点）」までの5件法、地域愛着度は「感じる（2点）」、「感じない（0点）」、「どちらともいえない（1点）」の3件法、時間認識は、「来週」、「来月」、「1年後」の3区分から予定があるかどうかを、「はい（1点）」、「いいえ（0点）」の2件法で回答を求めた。

長生き観は超高齢者のみを対象に、長生きの秘訣について、「健康に気をつける」、「食べ物に気をつける」、「身体を動かす」、「規則正しい生活」、「楽天的な性格」、「前向きな性格」、「趣味がある」、「家族が大事にしてくれる」、「気分が若い」、「やる仕事がある」、「生きがいがある」、「その他」の12項目を例示して、複数回答可とした。

また、あと何年くらい生きたいかについては、「希望年数の記入」、「百歳は生きたい」、「もう十分生きた」、「寿命がくるまで」「その他」の5件法で尋ねた。

さらに、あなたの長生きをもっとも喜んでいるのは誰かについて、「自分自身」、「家族・親戚」、「亡くなった両親・兄弟」、「友人・知人・近所の人」、「その他」の5件法で尋ねた。

日中の楽しみごとは、「テレビ・ラジオ」、「新聞」、「読書」、「デイサービス」、「病院・リハビリ」、「おしゃべり」、「散歩」、「ゲートボールなどスポーツ」、「カラオケ」、「趣味」、「講演会・観劇」、「その他」、「楽しみ事はない」などの13項目を例示し、複数回答可とした。

現在の心境については、「この年になるともう勉強することはない」、「いつまでも人に頼らないで生きていこう」、「以前ほど自分をまじめだと思わない」、「同年齢の人と比べ元気な方」、「もっと世の中の動きや新しいことを知りたい」「若い人が希望すれば経験談を話してもよい」、「もっと新しい出会いや新しい人間関係をつくりたい」、「何ができることがあれば社会の役に立ちたい」、「生きた証を子や孫に残したい」の9項目について「そう思う」、「思わない」の2件法で尋ねた。

### 2.4.4 老い観

老い観は、トーンスタムの憂鬱尺度5項目にある「孤独だと感じる」、「時間の経過が遅い」、「無視されている」、「余計者と感じる」、「老いたと感じる」から、「はい（1点）」、「いいえ（0点）」の2件法で尋ねた。

## 2.5 老年的超越尺度項目

本章で用いる「老年的超越」尺度項目は、トーンスタムの「老年的超越」の認識上の兆候・次元の特徴（Tornstam, 1989）の最初の尺度を参考とした。しかし、直訳では回答しづらい表現になるため、日本の高齢者に理解されやすいように馴染みやすい日常的言葉に置き換えた。独自に作成した11項目を尺度（Tomizawa's Geront transcendence Scales ;

以下 TGS という) とした。尺度項目は次のとおりである。

図表 7-1 第 7 章で用いる老年的超越尺度項目

1.死に対する恐怖がなくなった
2.若いときには気づかなかったささやかなことにも幸せを感じる
3.自分は何かに生かされていると感ずることがある
4.離れた所にいる兄弟や子どもを近くに感ずることがある
5.過去の出来事がつい最近のように感ずることがある
6.亡くなった両親や祖父母への愛情が増してきた
7.若いときに比べ心が穏やかになった
8.自分のいい面も悪い面もすべてを受け入れられるようになった
9.ものやお金に対する興味がなくなった
10.表面的な付き合いへの関心がなくなった
11.物思いにふけることに幸せを感ずるようになった

### 3 超高齢者を対象とした調査結果

#### 3.1 対象者の基本属性

対象者の基本属性は図表 7-2 のとおりである。年齢は 85 歳から 101 歳までで、平均値は 90.00 歳。最頻値は 86 歳で、86 歳～88 歳に回答者全体の 40%が占めている。

性別の割合は男性 34.3%、女性 65.8%で女性が多い<sup>383</sup>。調査票の記入者は本人 41.1% (39 人)、家族 48.4% (46 人)、その他はケアマネージャー、民生委員などで 10.3% (10 人) である。

家族構成は「1 人」が 39.4% (39 人) で、次いで「2 人」は 28.3% (28 人) である。1 人暮らしの 84.6% (33 人) は女性であった。

居住年数の平均は 71.6 年、中央値は 80 年。暮らし向きは「普通」が 6 割 (60.6%) で、「や

図表 7-2 超高齢者の基本属性

項目	内容	人数	割合(%)
年齢	平均	90±3.95歳	
	最頻値	86歳	
(年齢幅85歳～101歳)			
性別	男	35	34.3
	女	67	65.7
	合計	102	
家族構成	1人	39	39.4
	2人	28	28.3
	3人	22	22.2
	その他	10	11.0
	合計	99	
居住年数	平均	71.6年	
	中央値	80年	
暮らし向き	大変苦しい/苦しい	15	15.2
	普通	60	60.6
	ややゆとり/ゆとり	24	24.3
	合計	99	
医者	かかっている	72	75.0
	かかっていない	24	25.0
	合計	96	
健康状態	元気	40	40.0
	普通	40	40.0
	寝込み	9	9.0
	寝たきり	11	11.0
	合計	100	
介護認定	認定外	48	47.1
	要支援	13	12.7
	要介護1	22	21.6
	要介護2	8	7.8
	要介護3	1	1.0
	要介護4	7	6.9
	要介護5	2	2.0
合計	102		
記入者	本人	39	41.1
	家族	46	48.4
	その他	10	10.5
合計	102		

<sup>383</sup> 奄美の 85 歳以上の人口比は男性 27.4%、女性 72.6% 『奄美群島の現状』(29 年度) であり、調査の方は男性が 6.9 ポイント多い。



やゆとり」、「ゆとりがある」をあわせると、普通以上が 84.8%を占める。

健康状況は、「元気」と「普通」が全体の 8 割という状況にある。介護認定の状況では、「認定者」は 52.9%、「認定外」は 47.1%で、85 歳過ぎても半数が介護保険の認定外という状況が明らかにされた。また、認定者の過半数以上が要支援か要介護 1 であり、介護度の重度の者は少ない状況にあった。

### 3.2 行動能力の状況

図表 7-3 超高齢者の行動能力

#### 3.2.1 日常の行動能力

日常の行動能力（老研式活動能力指標 13 項目）の回答状況は図表 7-3 のとおりであった。0-1 点の低い得点は全体の 2 割、12-13 点の高い得点は 2 割と 2 極化の傾向を示し、残りの 6 割はその中間にある。

なお、10 点以上のほぼ自立は 31.3%（32 人）で、3 人に 1 人は自立という傾向にあった。全体の平均点数は 6.41 であった。

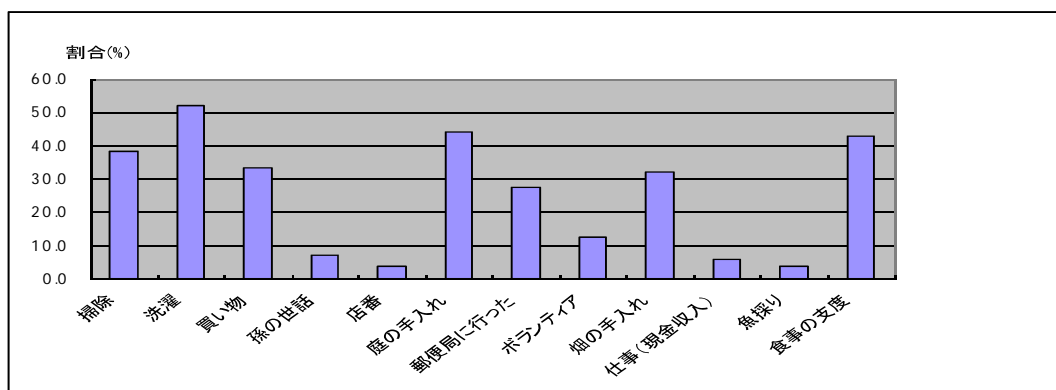
得点	人数	割合(%)
0	10	10
1	10	10
2	11	11
3	3	3
4	3	3
5	9	9
6	4	4
7	6	6
8	7	7
9	5	5
10	8	8
11	4	4
12	8	8
13	12	12
合計	100	

#### 3.2.2 超高齢者の 1 週間の仕事

超高齢者が 1 週間の間に行った仕事や活動の状況は図表 7-4 である。

洗濯（52.0%）、庭の手入れ（44.1%）、食事の支度（43.1%）、掃除（38.2%）、買い物（33.3%）、郵便局（27.5%）と、回答は多様で自立した暮らしが伺えた。一方で、孫やひ孫の世話（6.9%）や店番・留守番（3.9%）などは低い状況にあった。

図表 7-4 1 週間の仕事



### 3.3 心理的適応状況

#### 3.3.1 生活満足度

「生活満足度」は図表 7-5 のとおりである。「大変満足」(13.2%)と「満足」(34.1%)を合わせた満足は約半数(47.3%)で、「普通」(46.1%)を含めると、全体の93.4%が普通以上の満足度となっている。

図表 7-5 心理適応状況

項目		人数	割合(%)
生活満足度	大変満足	12	13.2
	満足	31	34.1
	普通	42	46.1
	やや不満足・不満足	6	6.6
	合計	91	
地域愛着度	感じる	90	93.7
	どちらでもない	6	6.3
	感じない	0	0
	合計	96	

### 3.3.2 地域愛着度

「地域愛着度」は「感じる」が93.7%と、非常に高い状況にあることが分かった(図表 7-5)。

### 3.3.3 長生き観

超高齢者の長生き観については、図表 7-6 のとおりである。何歳まで生きたいかについては、

「寿命が来るまで」が48人(54.5%)、

#### 図表 7-6 超高齢者の長生き観

「百歳」は22人(25.0%)で、「もう十分生きた」という消極派は5.7%であった。なお、100歳を超えて生きたいとする人も数人いた。

次に、あなたの長生きをもっとも喜んでくれる人を尋ねたところ、「家族・親戚」が7割(68.2%)、「自分自身」が3割(29.5%)で、「家族・親戚」が喜んでいるとの回答が圧倒的に多かった。

長生きの秘訣については、「健康に気をつける」、「家族が大事にしてくれる」、「身体を動かす」がともに63人(61.8%)で6割を超え、次いで「食べ物に気をつける」が60人(58.8%)であった。長生きにおける家族の存在の大きさが伺えた。

なお、「百歳」と回答した人の健康状態は「元気」か「普通以上」の人である。「寿命が来るまで」の回答者は、「元気」から「寝たきり」までさまざまであった。

項目	内容	人数	割合(%)
何歳まで	寿命がくるまで	48	54.5
	百歳まで	22	25.0
	もう十分生きた	5	5.7
	その他	13	14.8
	合計	88	
長生きを喜んでくれる人	自分自身	26	29.5
	家族・親戚	61	69.3
	その他	1	
	合計	88	
長生きの秘訣	健康に気をつける	63	61.8
	家族が大事にしてくれる	63	61.8
	身体を動かす	63	61.8
	食べ物に気をつける	60	58.8
	規則的な生活	52	51.0
	生きがいがある	39	38.2
	趣味がある	34	33.3
	やる仕事がある	33	32.4
	前向きな性格	32	31.4
	気分が若い	30	29.4
	楽天的な性格	29	28.5
	その他	4	3.9
合計	102		

### 3.3.4 現在の心境

現在の心境を9項目で尋ねた結果は、図表 7-7 のとおりである。82.1%(69人)が「同年代の人に比べ元気な方」と回答している。80.5%(66人)が「生きた証を子や

孫に残したいと思っている」。67.5% (56 人) は「いつまでも人に頼らずに生きていこう」と回答し、「もっと世の中の動きを知りたい」と 59.5% (47 人) 思っている。

図表 7-7 現在の心境

「自分の経験を話しても良い」という回答は 60.5% (46 人) あった。「もう勉強することはない」に肯定する人は約 4 割で (38.5%)、6 割は否定するなど、ほとんどの項目が前向きの回答である。唯一否定の多い回答は、「もっと新しい出会いや人間関係をづくりたい」で、半数以上 (55.8%) がそうは思わないと答えている。

この回答からは、若い世代とつながる感覚や、自立を望む活動性、利他・貢献性、新しい出会いより現在の関係性を重視するなど、老年的超越につながる兆候が読み取れる。

### 3.3.5 日中の楽しみごと

日中の楽しみごとの回答状況は、図表 7-8 のとおりである。1 位は「テレビ・ラジオ」の 65.7% (67 人) がトップ。次いで「散歩」44.1% (45 人)、「おしゃべり」43.1% (44 人)、「新聞」41.7% (43 人) が同じ程度で続き、「ディサービス」32.4% (33 人)、「読書」26.5% (27 人)、「趣味」25.5% (26 人) となっている。

楽しみごとの種類は多様であるが、特に、散歩、おしゃべりなど能動的な行為が上位にきているのが注目される。

### 3.4 老い観

項目		人数	割合(%)
いつまでも人に頼らずに生きていこう	そう思う	56	67.5
	そう思わない	27	32.5
	合計	83	
もう勉強することはない	そう思う	30	38.5
	そう思わない	48	61.5
	合計	78	
以前よりまじめとは思わなくなった	そう思う	27	38.0
	そう思わない	44	62.0
	合計	71	
同年代の人に比べて元気な方	そう思う	69	82.1
	そう思わない	15	17.9
	合計	84	
もっと世の中の動きを知りたい	そう思う	47	59.5
	そう思わない	32	40.5
	合計		
若い人に自分の経験を話しても良い	そう思う	46	60.5
	そう思わない	30	39.5
	合計	76	
もっと新しい出会いや人間関係をづくりたい	そう思う	34	44.2
	そう思わない	43	55.8
	合計	76	
何か出来ることで社会の役に立ちたい	そう思う	41	52.6
	そう思わない	37	47.4
	合計	78	
生きた証を子や孫に残したい	そう思う	66	80.5
	そう思わない	16	19.5
	合計	72	

図表 7-8 日中の楽しみごと

項目	人数	割合(%)
テレビ・ラジオ	67	65.7
散歩	45	44.1
おしゃべり	44	43.1
新聞	43	42.2
ディサービス	33	32.4
読書	27	26.5
趣味	26	25.5
病院	13	12.7
スポーツ	17	16.7
カラオケ	11	10.8
講演会	10	9.8
その他	14	13.7
合計	102	

老い感の回答は図表 7-10 のとおりである。「老いた」感は 77 人 (92.8%) で、ほとんどの人が感じている。しかし、「孤独」22 人 (26.7%)、

「時間経過遅い」26 人 (26.8%) は、4 人に 1 人が感じている程度である。「無視される」3 人 (3.8%)、「余計者」9 人 (11.1%) と感じる人は少数派であった。なお、超高齢期になっても老いを全く感じていない人が 5 人 (6.3%) 存在した。

図表 7-9 老い観

老い観		人数	割合(%)
孤独	感じる	22	26.8
時間経過遅い	感じる	26	31.7
無視される	感じる	3	3.7
余計者	感じる	9	11
老いた	感じる	77	93.9
合計		82	

### 3.5 老年的超越傾向

#### 3.5.1 老年的超越の認識状況

老年的超越 (11項目) の認識状況は、図表7-10のとおりである。肯定の高い項目は、「亡くなった両親への愛情」86.2 % (57人) で、次いで、「若い頃より心が穏やか」82.7% (67人)、「ささやかなことに幸せを感じる」70.4% (57人) であった。一方、最も肯定が低かったのは、「物やお金に対する興味がなくなった」26.8% (22人) であった。

なお、11項目の認識状況を男女別で比較すると、5%水準で統計的に有意差のあった項目では、男性は、「亡くなった両親への愛情が増す」(p<0.05)、女性では、「物やお金に興味なくなった」(P<0.05) であった<sup>384</sup>。

この有意差は男女の意識の差として理解される。つまり、男性は超高齢期になっても家意識と経済への強い関心の表れとして、一方、女性はずべてを委ねる傾向と考えられる。

図表 7-10 超高齢者の老年的超越の認識状況

老年的超越項目	肯定		否定		肯定男女内訳		Pearson の カイ2乗値	漸近有意確 率(両側)
	人	(%)	人	(%)	男(%)	女(%)		
表面的なことに興味がなくなった	39	51.9	36	48.15	36.7	54.7	2.516	0.113
物やお金に興味なくなった *	22	26.8	59	73.2	12.9	<b>35.3</b>	<b>4.924</b>	0.026
ささやかなことにも幸せを感じる	57	70.4	24	29.6	75.9	67.3	0.653	0.459
生かされていると感じる	42	52.5	38	47.5	58.6	49	0.683	0.488
自分のすべてを受け入れられる	50	61.7	30	38.3	55.2	65.4	0.822	0.205
物思いにふけることに幸せ	34	42.5	46	57.5	48.1	40.4	0.437	0.365
過去のことが最近のように感じる	51	64.6	27	35.4	69	62	0.389	0.533
離れた兄弟・子供を近くに感じる	46	57.5	33	42.5	62.1	54.9	0.389	0.533
亡くなった両親に愛情がます *	57	86.2	9	13.8	<b>86.2</b>	62.7	<b>4.968</b>	0.026
死に対する恐怖心がなくなった	44	54.3	37	36.7	66.7	47.1	2.927	0.109
若い頃より心が穏やかになった	67	82.7	13	17.3	86.7	80.4	0.52	0.471
* p < 0.05								

<sup>384</sup> 有意差のある数字はゴシックで示している。

### 3.5.2 探索的因子分析

超高齢者の認識状況を踏まえ、「老年的超越」11項目についての潜在的因子を探るため、探索的因子分析を行った。まず、この11項目について、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性を測定した(図表7-11)。結果、標本妥当性は0.654で、好ましいとされる0.7より少し低い値であったが、Bartlettの球面性検定の有意確率は0.000で帰無仮説を棄却することができ、「KMOおよびBartlettの検定」の結果から因子分析を行っても不都合はないという結果が得られた。

図表 7-11 KMO および Bartlett の検定

項目		検定数値
Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度		.654
Bartlett の球面性検定	近似カイ2乗	130.028
	自由度	36
	有意確率	.000

次に、探索的因子分析(主成分分析・Kaiserの正規化を伴うバリマックス法)により11項目で因子分析を行ったところ、「ささやかなことにも幸せを感じる」、「物思いにふける幸せ」の2項目がそれぞれ1因子構成として抽出され、単独では超越次元を構成できないと判断し、この因子を除いた9項目について因子分析をした。結果、3つの因子が抽出された(図表7-12)。

図表 7-12 回転後の成分行列 a

	成分			共通性	分析N
	1	2	3		
過去のことが最近のよう	.757			0.579	79
離れた兄弟を近くに感じる	.719			0.592	79
生かされていると感じる	.566			0.511	79
亡い両親の愛が増す	.524			0.674	79
若いころより心が穏やか		.802		0.646	79
自分の全てを受け入れる		.611		0.539	79
物やお金の興味の減少			.819	0.713	79
表面的なことの関心の減少			.706	0.553	79
死に対する恐怖心の減少			.453	0.571	79
因子抽出法: 主成分分析					
回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法					
a 6回の反復で回転が収束した。					

第1因子は、「過去の出来事が最近のように感じる」、「離れた兄弟を近くに感じる」、「何かに生かされている感じ」、「亡くなった両親への愛が増す」の4項目から構成された。これらは場所や空間を超えた次元として、「宇宙的超越」と名付けた。

第2因子は、「若いころに比べ心が穏やか」、「自分の良い面も悪い面も全て受け入れられる」の2項目から構成された。これは自己の再評価を示す次元として、「自己超越」

と名付けた。

第3因子は「物やお金への興味の減少」、「表面的なことへの関心の減少」、「死に対する恐怖心がなくなった」の3項目から構成され、拘りや執着の超越を表す次元として、「執着の超越」と名付けた。3因子の累積寄与率は、第1因子 29.275%、第2因子 47.306%、第3因子 59.783%となり、約6割の説明力であった。

### 3.5.3 重回帰分析

次に探索的因子分析から導かれた3つの下位次元の「宇宙的超越」、「自己超越」、「執着の超越」を従属変数として、独立変数は、基本属性の「年齢」、「性別」と心理的な関連項目として「生活満足度」、居住空間の満足度として「地域愛着度」、老いの自覚尺度として「老い感合計」、日常生活能力の状態である「日常行動」、自立度の尺度として「介護認定」、最後に、経済的な尺度として「暮らし向き」の8つを独立変数として、強制投入法による重回帰分析を行った。

その結果、「宇宙的超越」次元は、老い感 ( $p<0.05$ ) の高さと同行動能力 ( $p<0.05$ ) の高さで、負の有意な関連が見られた。「執着の超越」次元は「介護認定」 ( $p<0.05$ ) の高さと同負の関連が見られた。「自己超越」の次元は統計的に有意な変数は見られなかった(図表7-13)。

この結果は、「宇宙的超越」は老い感が高く、行動能力が高いと低下すること、「執着の超越」は介護度が高いと低下するということであった。

図表 7-13 超高齢者の「老年的超越」重回帰分析

	宇宙的超越			自我超越			執着の超越		
	標準化係数ベータ	t 値	有意確率	標準化係数ベータ	t 値	有意確率	標準化係数ベータ	t 値	有意確率
性別	-.132	-1.016	.315	.073	.540	.591	.117	.117	.288
年齢	-.183	-1.238	.221	.115	.745	.460	-.081	-.648	.520
生活満足度	-.062	-.411	.683	.211	1.346	.184	.141	1.120	.268
老い感合計	-.329	-2.138	.037	-.096	-.594	.555	-.085	-.656	.514
日常行動	-.371	-2.014	.049	.152	.790	.433	.027	.174	.863
愛着度	.059	.447	.657	.215	1.560	.125	-.162	1.461	.150
介護認定	-.106	-.595	.554	.094	.508	.614	-.471	-3.161	.003
暮らし向き	-.232	-1.552	.127	-.014	-.091	.928	.120	.954	.345
	R=. 422 <sup>a</sup>	R <sup>2</sup> =. 178		R=. 321	R <sup>2</sup> =. 103		R=. 648	R <sup>2</sup> =. 420	

## 3.6 超高齢者調査からの考察

### 3.6.1 奄美超高齢者のポジティブな老いの意識

超高齢者の平均年齢は 90.0 歳で、居住年数は長く（平均 71.6 年）、全体の約 4 割（39.4%）は一人暮らしである。生活経済面では 75%が普通以上の暮らし向きと答え、約 75%が医者にかかっているが、80%の人は健康状態を普通以上と答えている。

これらの結果を全国調査の国民生活基礎調査（2006）と比較すると、85 歳以上の単独世帯は男性 10.8%、女性 15.3%であり、奄美群島の超高齢者の一人暮らしの比率はとても高い<sup>385</sup>。

また、85 歳以上の健康意識では健康状態が普通以上は 54.9%であり、これも奄美の超高齢者が上回る。生活意識面では 85 歳以上の世帯の調査がないため、65 歳以上の高齢者世帯でみると、普通以上は 44.1%である。これらと比較すると、いずれも奄美の超高齢者の回答は全国平均よりも高い値を示していた。

しかし、実際は、奄美の群民所得は国民所得と比べると低く、若干の自給自足体制があるとはいえ経済的には豊かとはいえない。このような奄美の人たちの意識について、奄美研究家の甲東哲（きのうとうてつ）は、「奄美には、かつての『よりよき時代』というのではない。常に現在が感謝すべき『よい良き時代』なのです。その意味で奄美の人は貧困であっても楽天的なのです」<sup>386</sup>と述べている。この指摘は現在にも通じると理解できる。加えて奄美の超高齢者は、自らの物的水準要求を低くして満足感を高めているという、補償のプロセスが機能しているとも考えられる。

### 3.6.2 長生きは家族や周囲への信頼感

長生きをもっとも喜んでくれる人は「家族・親戚」であり、「自分自身」ではない。加えて、長生きの秘訣のトップに、「家族が大切にしてくれる」をあげ、「もう十分に生きた」というネガティブな人は少ない。周囲の環境に支えられながら自立し、長生きを望んでいる実態と意識が浮かび上がってくる。

佐藤は、「日本の場合、自立が個人の最大の尊厳であるという考え方が欧米に比べ希薄なことである」と指摘している<sup>387</sup>。奄美の回答においても、長生きをもっとも喜んでくれる人は「家族・親戚」であり、「自分自身」ではないのである。このような「依存型自立」といえるような回答は、自立を重んじる欧米のサクセスフル・エイジングの感覚とは異なる結果が導く出されたといえよう。

### 3.6.3 楽しみごとを支える地域要因

<sup>385</sup> 厚生労働省（2006）『国民生活基礎調査』。

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa06/i>

<sup>386</sup> 先田光演（2004）「奄美の研究者：甲東哲」『現代のエスプリ別冊奄美復帰 50 年：ヤマトとナワのはざままで』至文堂、340-343 頁。

<sup>387</sup> 佐藤真一（2003）「心理学的超高齢者研究の視点；P.B. Baltes の第 4 世代論と E.H. Erikson の第 9 段階の検討」『明治学院大学心理学紀要』、41-48 頁。

奄美の超高齢者の楽しみごとの回答からは、在宅型余暇である「テレビ・ラジオ」は 65.7%でそう高くない。特徴的なのは精神的余暇活動として分類される「散歩」、「おしゃべり」、「趣味」などの比率の高さである。また意識面においても、「生きた証を子や孫に残したい」と 8 割以上が考え、「若い人に自分の経験談を話しても良い」、「もっと世の中の動きを知りたい」、「何か社会に役立ちたい」などの積極的な回答は 5 割を超えている。このことは、第 1 部で見た奄美の伝統文化や行事での役割、期待、潜在能力の開花と関連して理解できる。

老研式活動指標からみた行動能力に関しては、0-1 点の虚弱な層が 2 割ある反面、12-13 点と自立に近い層も 2 割と、超高齢期においても高齢期の 2 極化<sup>388</sup>傾向が明らかにされた。また、1 週間の生活行動では、洗濯、庭の手入れ、食事の支度、掃除、畑の世話、買い物など多様であった。反面、孫やひ孫の世話は低い。あまみ長寿・子宝調査報告（鹿児島県）では、高齢者は子や孫の世話に生きがいを感じている傾向と報告されているが、超高齢者になると孫の関わりは薄くなることが本調査からは伺えた。

### 3.6.4 超高齢期の老年人的超越傾向

#### 1) クロス分析

「老年人的超越」尺度（11 項目）の回答から、奄美の超高齢者の心理的次元の豊かさが浮かびあがってきた。「物やお金に興味がなくなった」への肯定回答は 28.8%と 11 項目中で極端に低い。このことは、超高齢期になっても物やお金という世俗的なことから離れることはないということである。しかしそこには男女差があり、「物やお金に興味なくなる」には女性の 4 割近くが肯定するが、男性は 2 割にも満たない。一方で、70%以上の肯定認識を示したものは、「若いときと比べ心が穏やかになった」（86.7%）、「亡くなった両親への愛情が増した」（73.0%）、「若いときには気づかなかったささやかなことにも幸せを感じる」（72.7%）であった。

なお、回答の男女差をみると、「亡くなった両親への愛情が増す」は男性（88.5%）に高く、5%水準で男性に有意に関連していた。反対に「表面的なつきあいへの関心がなくなる」は女性（59.6%）に高く、5%水準で女性に有意に関連していた。このような回答傾向からは、家意識を固守する男性、それから解放された女性というジェンダーの差と理解される。

#### 2) 探索的因子分析・重回帰分析

探索的因子分析からは、「宇宙的な超越」、「自己超越」、「執着の超越」の 3 つの下位次元が抽出された。これは、トーンスタムの北欧（スウェーデンやデンマーク）で行

<sup>388</sup> 柴田博（2005）「サクセスフル・エイジングの条件」『桜美林大学大学院国際学研究科桜美林シナジー』4、1-11 頁。



った量的調査とは異なるものであった。つまり、トーンスタムの実証からは「宇宙的な超越」と「自己超越」2つの下位次元が抽出され、奄美の調査からは、3つ目の「執着の超越」の次元が抽出されたのである。

これらの差異は、自立を重んじる欧米の高齢者に比べて、物への執着よりも家族の支えにより価値を感じる差ともいえる。このことは、自分の長生きは「自分自身」より「家族・親戚」が喜んでくれるという回答の高さにも現れており、その差異が理解できる。

また、「老年的超越」を構成する3つの次元と、性別、年齢、生活満足度、老い感、日常行動、愛着度、介護認定、暮らし向きの8つのモデルで重回帰分析を行った結果からは、有意に関連する変数は少ない。しかし、「宇宙的超越」は老い感が低く、行動能力が低くなると低下すること、「執着超越」は自立度の程度が低くなると低下するなどの関連が見られた。

#### 4 高齢者（ライフサイクル第8段階）と超高齢者（ライフサイクル第9段階）を比較した調査結果

##### 4.1 対象者の基本属性

対象者の基本属性は図表 7-14 のとおりである。

図表 7-14 基本属性

「平均年齢」は高齢者 74.4 歳、超高齢者 90.0 歳で、その差は約 16 歳である。性別では高齢者は女性 71%、超高齢者は女性 64.7%でともに女性の比率が高い。「家族構成」は高齢者の半数 50%は「2人」、「1人」は 27.1%である。一方、超高齢者の家族構成は「1人」は 39.4%となっている。「居住年数」の平均は、高齢者は 45.5 年(最頻値 39.0 年)、超高齢者は 71.6 年(最頻値 80.0 年)で、両者の平均年齢差を考慮しても超高齢者の居住年数は高い。

項目	区分	高齢者		超高齢者	
		割合(%)	人数	割合(%)	人数
年齢	平均(SD)歳	74.4(±57.7)	176人	90.0±4.0)	102人
性別	男	29.0	51	35.3	36
	女	71.0	125	64.7	66
家族構成	1人	27.1	45	39.4	39
	2人	50.0	83	28.3	28
	3人	13.3	22	22.2	22
	4人以上	3.6	16	10.1	10
居住年数	平均	45.5年		71.6年	
	最頻値	39.0年		80.0年	
暮らし向き	大変苦しい	4.0	7	3.0	3
	やや苦しい	13.0	23	12.1	12
	普通	62.5	110	60.6	60
	ややゆとり	18.2	32	16.2	16
	大変ゆとり	2.3	4	8.1	8
通院	あり	27.8	49	75.8	75
	なし	72.2	127	24.2	24
健康状態	元気	68.2	120	40.0	40
	普通	26.1	46	39.0	39
	寝込み	3.4	6	10.0	1
	寝たきり	2.3	4	11.0	11
介護認定	認定外	97.3	171	47.5	48
	要支援	1.1	2	12.9	13
	要介護1	0.6	1	21.8	22
	要介護2以上	0.0	0	17.8	18
行動能力	平均(SD)	11.8(±1.9)		6.4(±4.5)	
	最頻値	13		6.5	
合計			176人		102人

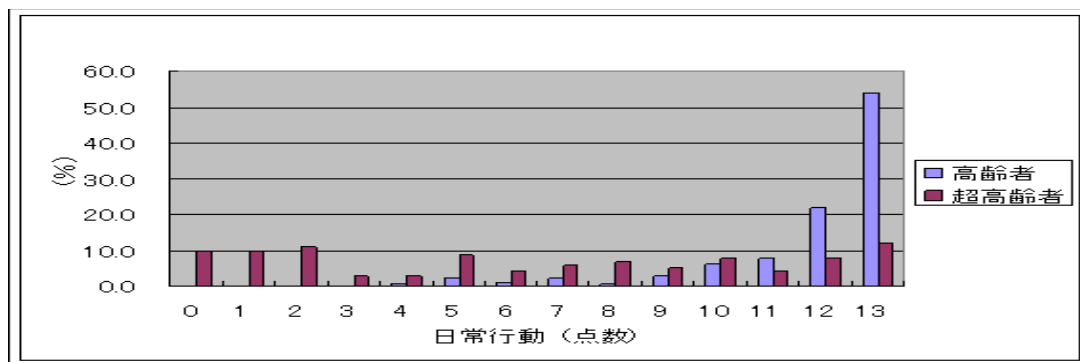
「暮らし向き」は高齢者・超高齢者ともに、「ゆとり」層 20%台 (20.5%~24.3%)、「普通」層 60%台 (62.5%~60.6%)、「苦しい」層は 10%台 (17.1%~15.1%) である。「通院の有無」は、高齢者は「あり」が 27.8%で、反対に超高齢者では、「なし」が 24.2%である。

「健康状態」では、高齢者の 68.2%は「元気」、26.1%は「普通」と 94.3%は普通以上の健康状態と回答する。一方で超高齢者は、「元気」40.0%と「普通」39.0%で、高齢者よりやや低いものの全体の 79.0%は普通以上と答えている。

「介護認定」の状況では、高齢者の 97.3%は「介護認定外（自立）」であるが、超高齢者は 47.5%が「介護認定外（自立）」である（図表 7-15）。

「日常の行動能力」（老研式活動能力指標 13 項目）では、高齢者の平均は 11.8 点、最頻値は 13 点で、満点に近い状態である。一方、超高齢者の平均値は 6.4 点、最頻値は 6.5 点であり、満点・満点に近い（13 点・12 点）層が 20%ある反面、0 点・1 点の層が 20%と、2 極化に分かれながら 60%はその中間にある。高齢期のほぼ自立と比べ超高齢期は多様な状況を示している（図表 7-15）。

図表 7-15 日常行動 高齢者と超高齢者の比較



#### 4.2 心理的適応状況

「生活満足度」及び「地域愛着度」からみた心理適応の状況は図表 7-16 のとおりである。「生活満足」は超高齢者に「大変満足」の割合が高く、「普通」以上をあわせると、93.4%にのぼる。高齢者も「普通」以上をあわせると、93.5%と同様に高い。地域愛着度も高齢者・超高齢者ともに感じるは 94%に上る。なお、超高齢者では感じないという回答は 0 であった。

図表 7-16 心理適応

項目		高齢者	超高齢者
生活満足度	大変満足	5.5%	13.2%
	満足	35.8%	34.1%
	普通	52.2%	46.1%
	やや不満足・不満	6.5%	6.6%
地域愛着度	感じる	93.6%	93.7%
	どちらでもない	4.1%	6.3%
	感じない	2.3%	0.0%

#### 4.3 現在の心境

現在の心境について、9項目(うち、「もう勉強することはない」は反転項目)で尋ねた結果

は図表 7-17 のとおりである。

全体に高齢者の回答は積極的で、それぞれ

図表 7-17 現在の心境

この項目で 74～89%近い肯定回答であった。超高齢者も肯定率は下がるが、9項目中7項目で肯定回答が上回っている。総じて、高齢者・超高齢者ともに、社会とのかかわりについて積極的な考えを保持していることが伺える。

項目	肯定	高齢者	超高齢者
		割合(%)	割合(%)
いつまでも人に頼らずに生きていこう	そう思う	85.3	67.5
もう勉強することはない(反転項目)	そう思う	11.8	38.5
以前よりまじめとは思わなくなった	そう思う	37.1	38.0
同年代の人に比べて元気な方	そう思う	79.4	82.1
もっと世の中の動きを知りたい	そう思う	89.4	59.5
若い人に自分の経験を話しても良い	そう思う	80.6	60.5
新しい出会いや人間関係をつくりたい	そう思う	74.3	44.2
何か出来ることで社会の役に立ちたい	そう思う	83.5	52.6
生きた証を子や孫に残したい	そう思う	85.3	80.5

#### 4.4 日中の楽しみごと

「日中の楽しみごと」について例示して尋ねた。結果は、図表 7-18 のとおりである。高齢者は、在宅型余暇活動の「テレビ・ラジオ」(74.4%)、「新聞」(58.0%)と続き、第3位・第4位に積極的余暇活動

図表 7-18 日中の楽しみごと

の「散歩」(48.3%)、「おしゃべり」(47.7%)と続いた。

次いで「仕事」(34.7%)と「読書」(34.7%)が続き、高齢者では3人に1人が仕事に従事していた。超高齢者では、「デイサービス」の利用が超高齢者3人に1人と高くなるが、積極的余暇活動の散歩、おしゃべりは高齢者と同様40%台と高い。超高齢期では仕事と答えた人はいなかった。

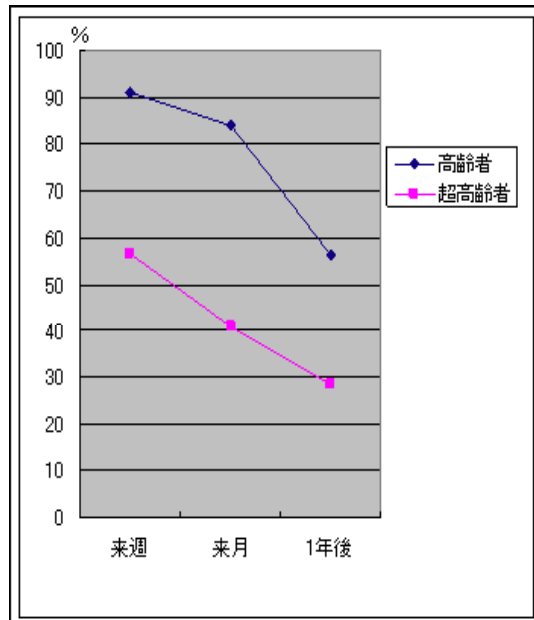
項目	高齢者	超高齢者
	割合(%)	割合(%)
テレビ・ラジオ	74.4	65.0
散歩	48.3	43.7
おしゃべり	47.7	43.1
新聞	58.0	42.2
デイ・サービス	3.4	32.4
読書	34.7	26.5
趣味	31.3	25.5
スポーツ	28.4	16.7
病院	9.7	12.6
カラオケ・鳥歌	21.6	10.7
講演会	29.0	9.8
仕事	34.7	0.0
その他	4.4	13.7

図表 7-19 時間展望

#### 4.5 時間展望

未来をどの程度予想しているか、時間展望を「来週」「来月」「1年後」の3区分で、予定が考えられるかどうかを尋ねた。結果は図表 7-19 のとおりで、時間展望は、高齢期と超高齢期には顕著な差がでている。

高齢期は、「来週」(91.1%)、「来月」



(83.9%)と肯定率は高い。「1年後」(56%)は半数程度に落ちる。一方、超高齢期では、「来週」(56.6%)は半数を少し超えた程度、来月(40.0%)は4割程度と下がり、1年後の時間展望は29%と3割を切る。時間展望は高齢者と超高齢者では大きな差があることが明らかにされた。

#### 4.6 老い観

5項目の「老い観」の回答は図表7-20のとおりであった。高齢者は、「老いた」感が63.3%とあるものの、孤独感(13.6%)、時間の経過が遅い(14.2%)、無視される(10.1%)、余計者(5.9%)といずれも低率であった。超高齢者では、「老いた」感は92.8%とほとんどの人が感じている。一方、「余計者」(11.1%)は高齢者より高く、「無視される」(3.8%)は低率であった。

図表7-20 老い観

項目	高齢者 割合(%)	超高齢者 割合(%)
孤独	13.6	26.8
時間経過遅い	14.2	32.1
無視される	10.1	3.8
余計者	5.9	11.1
老いた	63.3	92.8

#### 4.7 老年的超越項目

##### 4.7.1 クロス分析とカイ二乗検定

図表7-21 2段階別老年的超越

老年的超越各項目の肯定状況は図表7-21のとおりであった。

この回答の傾向を、高齢者と超高齢者に分けて、カイ二乗検定した結果、はっきりと差異が現れた。高齢者は、「亡くなった両親に愛情が増してきた」( $p<.05$ )、「自分のすべてを受

	高齢者 割合(%)	超高齢者 割合(%)	Pearson カイ二乗値	漸近有意 率(両側)
表面的つきあいに関心がなくなった	17.2	48.1	25.83	***
物やお金に興味なくなった	10.1	26.8	11.69	***
死に対する恐怖心がなくなった	39.1	54.3	4.41	*
亡くなった両親に愛情がます	81.1	71.8	4.82	*
自分のすべてを受け入れられる	81.1	61.7	11.31	***
生かされていると感じる	66.9	52.5	6.22	**
ささやかなことにも幸せを感じる	71.0	70.4	.34	
物思いにふけることに幸せ	37.3	43.0	.56	
過去のことが最近のように感じる	56.5	64.6	.55	
離れた兄弟・子供を近くに感じる	54.4	57.5	.02	
若い頃より心が穏やかになった	78.1	82.7	.23	
得点平均	5.92(SD2.24)	6.17(SD2.63)		

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

「自分のすべてを受け入れられる」( $p<.001$ )、「生かされていると感じる」( $p<.01$ )の3項目の得点が有意に高い。

一方、「表面的なことに関心がなくなった」( $p<.001$ )、「物やお金に興味なくなった」( $p<.001$ )、「死に対する恐怖心がなくなった」( $p<.05$ )の3項目は超高齢者の得点が有意に高かった。

「老年的超越」の合計得点では、超高齢者の平均は 6.2 (SD2.6)、高齢者の平均は 5.9 (SD2.24) で、超高齢者が高いものの有意な差は見られなかった。

#### 4.7.2 探索的因子分析

「老年的超越」11項目に対して、潜在因子を見つけるために、探索的因子分析（主因子法・Promax回転）を行った。その結果、共通性が0.1台と低かった1項目「死に対する恐怖心がなくなった」を除外して再度因子分析（主因子法・Promax回転）を行うこととし、この10項目で因子分析に適しているかどうかの検定（KMOおよびBartlettの検定）を行った。結果は図表7-22のとおりで、標本妥当性（Kaiser-Meyer-Olkin）は.72で、標本として望ましい数値と判断された。また、変数間の相関関係をみるBartlettの球面性検定の有意確率は.000で帰無仮説を棄却した。

図表 7-22 KMO 及び Bartlett の検定

項目		検定数値
Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測定		.72
Bartlett の球面性検定	近似カイ2乗	351.60
	自由度	45
	有意確率	0

この結果から10項目について再度因子分析（主因子法・Promax回転）を行ったところ、3つの因子が抽出された。

Promax回転後の最終的な因子パターン行列と因子相関及び共通性は図表7-23のとおりである。また、下位尺度の信頼性は図表7-24のとおりである。

なお、この3因子で10項目の全分散を説明する割合は53.8%であった。

項目	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
若い頃より心が穏やかになった	.57	-.08	-.01	.34
生かされている	.56	-.07	.02	.23
自分のすべてを受け入れられる	.49	-.05	.03	.20
ささやかなことにも幸せを感じる	.44	.10	.08	.31
亡くなった両親に愛情が増してきた	.42	.20	-.01	.24
過去のことが最近のように感じる	-.14	.71	.05	.42
離れた兄弟・子どもを近くに感じる	.00	.69	.09	.50
物思いにふける幸せ	.18	.44	.12	.32
ものやお金に興味がなくなった	-.32	.01	.75	.42
表面的な付き合いに関心がなくなった	.07	.02	.57	.42
因子名	自我超越	宇宙的超越	執着の超越	
因子相関行列				
	1	—	.05	
	2		—	.11
	3			—

図表 7-23 パターン行列

#### 4.7.3 因子の命名

第1因子は、「若い頃より心が穏やかになった」、「生かされていると感じる」、「自分のすべてを受け入れられる」、「ささやかなことにも幸せを感じる」、「亡くなった両親に愛情

が増してきた」の5項目で構成されており、自己の再評価や自我意識の変容に対する項目に高い負荷量が示されたことから、「自我超越」と命名した。

第2因子は、「過去のことが最近のように感じる」、「離れた兄弟・子どもが近くに感じる」、「物思いにふける幸せ」の3項目で構成されており、時間や空間を超えた感覚に対する項目に高い負荷量を示していたことから、「宇宙的超越」と命名した。第3因子は「ものやお金に興味がなくなった」、「表面的なことに、関心がなくなった」の2項目から構成され、

こだわりの減少に対する項目に負荷量が高いことから、「執着の超越」と命名した<sup>389</sup>。

内的整合性を検討するために各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出したところ、「自我超越」で $\alpha=.63$ 、「宇宙的超越」で $\alpha=.63$ 、「執着の超越」で $\alpha=.60$ で、いずれも $\alpha$ 係数は高くないが、項目数が少ないことに起因すると推測されることから、 $\alpha$ 係数は容認できる範囲として取り扱っていく。

図表 7-24 尺度の信頼性

因子(項目)	因子名	Cronbachの $\alpha$	累積説明力	N
第1因子(5)	自我超越	.63	28.14	252
第2因子(3)	宇宙的超越	.63	41.64	251
第3因子(2)	執着超越	.60	53.77	252

4.7.4 下位尺度相関と  $t$  検定 図表 7-25 老年的超越の下位尺度間相関と平均、SD

1) 下位尺度間の関連

これら3つの「老年的超越」下位尺度間の関連は、図表 7-25 のとおりであった。「自我超越」下位尺度と「宇宙的超越」下位尺度は、正の有意 ( $p<.01$ ) な相関がみられた。

	自我超越	宇宙的超越	執着の超越	平均	SD
自我超越		.40**	0.00	0.73	0.28
宇宙的超越			-0.02	0.51	0.38
執着の超越				0.34	0.34
** $p<.01$					

2) 高齢者・超高齢者別の相関

高齢者と超高齢者別に、「老年的超越」下位尺度の相関をみたところ、高齢者 (.302,  $p<.01$ )、超高齢者 (.612,  $p<.01$ ) とともに自己超越下位尺度は「宇宙的超越」下位尺度と有意な正の相関が示された (図表 7-26)。

図表 7-26 2段階別の相関係数

	自我超越	宇宙的超越	執着超越
自我超越		.30**	.05
宇宙的超越	.61**		-.10
執着超越	.06	.07	
** $p<.01$			
右上: 高齢期 左下: 超高齢期			

3) 高齢者・超高齢者間の差の検討

高齢者と超高齢者の差の検討を行うため、「老年的超越」の各下位尺度得点について  $t$  検定を行った。その結果は、図表 7-27) のとおりで、「自我超越」下位尺度 ( $t$

図表 7-27 2段階別の相関係数

	超高齢期		高齢期		t値
	平均	SD	平均	SD	
自我超越	0.66	0.03	0.76	0.02	2.47*
宇宙的超越	0.53	0.04	0.50	0.03	-0.68
執着の超越	0.37	0.04	0.14	0.02	-4.79***
* $p<.05$ *** $p<.001$					

<sup>389</sup> 3因子の命名には、3の高齢者調査で命名した因子の項目とは若干の差異があるが、同じように3因子が導かれ、構成的にも同じような傾向が示されたことから、同じ因子名として解説している。

(252)=2.47,  $p<.05$ ) は高齢者に有意に高く、「執着超越」下位尺度 ( $t(252)=-4.79, p<.001$ ) は超高齢者に有意に高いという結果であった。この結果は、図表 7-21 の項目ごとの  $\chi^2$  検定の結果をほぼ反映していた。

#### 4) 重回帰分析

3 つの下位尺度（「自我超越」、「宇宙的超越」、「執着の超越」）を従属変数として、独立変数は基本属性の「性別」と個人の意識特性を表す「健康状態」、「生活満足度」、「地域愛着度」、「老い観合計」、「時間展望」の 6 変数で重回帰分析を行い、高齢者・超高齢者別に関連する変数をみた結果は図表 7-28 である。

図表 7-28 老年的超越 2 段階（高齢者・超高齢者）別重回帰分析

	自我超越		宇宙的超越		執着の超越	
	高齢者 t値	超高齢者 t値	高齢者 t値	超高齢者 t値	高齢者 t値	超高齢者 t値
性別	-1.50	.04	-.82	.34	.28	-1.67
生活満足度	-1.69	2.38 *	-2.24 *	2.03 *	-1.37	-.04
老い観	-.06	2.78 **	-.04	3.01 **	2.38 *	.16
健康状態	-.12	-.96	-.92	-.58	-1.40	-1.73
地域愛着度	2.23 *	1.19	2.08 *	1.52	-.86	-1.54
時間展望	3.62 ***	3.67 ***	2.37 *	3.70 ***	-1.51	-2.79 ***

「自我超越」次元は、「地域愛着度」( $p<.05$ )と「時間展望」( $p<.001$ )で高齢者に正の有意な関連がみられ、超高齢者は、「生活満足度」( $p<.05$ )、老い観 ( $p<.01$ )、「時間展望」( $p<.001$ )と正の有意な関連がみられた。

「宇宙的超越」次元は、「自我超越」次元と同じく、高齢者では「地域愛着度」( $p<.05$ )と「時間展望」( $p<.05$ )に正の有意な関連が見られたが、「生活満足度」( $p<.05$ )とは負の有意な関連が見られた。超高齢者では「生活満足度」( $p<.05$ )、「老い観」( $p<.01$ )、「時間展望」( $p<.001$ )と正の有意な関連が見られた。

この結果から、高齢者では「自己超越」次元、「宇宙的超越」次元ともに「地域愛着度」と「時間展望」が高くなると超越傾向は高まり、「生活満足度」が高くなると「宇宙的超越」次元は低くなるという関連が示された。

超高齢者では、「自我超越」次元、「宇宙的超越」次元ともに、「生活満足度」が高く、「老い観」も高く、「時間展望」が高いほど超越傾向は高くなることが示された。

一方「執着の超越」次元は、高齢者では「老い観」( $p<.05$ )と正の有意な関連が見られたが、超高齢者では「時間展望」( $p<.01$ )と負の有意な関連が見られた。

つまり、高齢者は「老い観」が強いほど「執着の超越」次元は高まるが、超高齢者は「老い観」でなく「時間展望」が高まると「執着の超越」を下げることを示された。

#### 4.8 調査結果の考察

本章では、奄美の超高齢者の老いに適応した生活実態や老いに伴う精神的次元の高まりを「老年的超越」尺度で測り、超高齢者の老いの豊かさとその要因を新たな視点から明らかにすることであった。

奄美の超高齢者の生活実態に注目すると、奄美の超高齢者の特徴は昔からの馴染みのある地域で暮らす環境が効用となって、超高齢期の生活をポジティブに維持しているということである。それは居住年数の長さ、地域の愛着度の高さ、信頼の関係、子どもや地域との日常的な交流の豊かさである。そしてこれらが一人暮らしを成立させる要因ともなっている。

高橋は住み慣れた地域の持つ力として、①日常生活リズムの継続性、②高齢者の生活圏域の整合性、③近隣がもたらす信頼感と安心感、④住民の小さな参加を結びつけやすい点をあげている<sup>390</sup>。奄美の超高齢者の自立を地域要因地域の効用から分析すると、さらに次のようなことがみえてくる。

##### 1) 奄美群島の高齢者／超高齢者の生活実態

奄美群島の超高齢者は、高齢者と比較すると身体機能面の低下は顕著であるが、家族・近所の絆に支えられ生活満足度や地域愛着度は高く、日中の楽しみことも多様で、老い観は高いものの孤独感や無視される感覚は低いなど、心理面での適応は高齢者とほぼ同じように高い状況にあった。また、日常の家事や身近に畑や庭があることが成果物を生み出し、身体を動かす環境となって、役に立つという有用観や健康に対する自信を増している。このことが、孤独感や余計者や無視されたというネガティブな感覚がなく、満足感と信頼感を伴って、超高齢期においても前向きに生きる感覚を維持している。

##### 2) 「老年的超越」の形成

明らかにされた老年的超越の特徴を整理すると以下のとおりである。

- ①老年的超越として「自我超越」、「宇宙的超越」、「執着の超越」3つの下位次元が明らかにされ、特に「執着の超越」の次元は北欧では見られず、独自の次元として現われている。
- ②高齢者と超高齢者では老年的超越形成に差があることが明らかされた。つまり、カイ二乗検定及びt検定を用いて明らかにされた2段階の差は、「老年的超越」の下位次元のうち、「執着の超越」は超高齢者に有意に高く、「自我超越」は高齢者に有意に高いという結果が示されたことである。
- ③重回帰分析の結果からは、超高齢者では、「自我超越」、「宇宙的超越」ともに「生活満足度」、「老い観」、「時間展望」が高いことが超越傾向を高めていること。

<sup>390</sup> 高橋憲二（1998）『厚生福祉1月10日号』。



高齢者は「自我超越」、「宇宙的超越」が高いことが「地域愛着度」と「時間展望」を高める反面、「生活満足度」が高くなると「宇宙的超越」次元は低くなるということと関連が示された。

- ④「執着の超越」は、「宇宙的超越」、「自己超越」と異なり、超高齢者では「時間展望」の狭まりが「執着の超越」を高め、高齢期は「老い観」が強いほど「執着の超越」は高まるという結果で、「執着の超越」は他の2つの次元と異なりネガティブな心性要因との関連が示されたことである。

以上、明らかにされたことは、老年的超越は加齢と関連するが、高齢期と超高齢期では老年的超越の形成要因は異なっているということである。

## 5 まとめ

### 1) 先行研究との関係

J. エリクソンが記述した超高齢期は、年を重ねるごとにますます「御用済み」となり、「途方にくれる」、「寄るべもなくなる」という無能性や依存性を強調<sup>391</sup>し、第9段階のいかに悲観的となるかを記述していた。しかし、奄美群島超高齢者の老いの実態は、家族や周囲に支えられ、行動的な日常が明らかにされた。ネガティブに見られがちな超高齢期への新たな知見を示すものと考ええる。

加えて、超高齢者の「時間展望」と「老年的超越」の関連について再考すると、「時間展望」は、過去、現在、未来への指向性が含まれ、エリクソンは第9段階の時間見通しは1週間程度に狭まると論じている<sup>392</sup>。

一方で老い観の高さは、「自我超越」次元と「宇宙的超越」次元を高めている。これは老いを肯定的にとらえる人ほど自身の有用性を意識するとした先行研究<sup>393</sup>を肯定するものであった。

### 2) ライフサイクル第9段階の存在の確認

本研究で使用したTGS（老年的超越尺度）からは「執着の超越」次元は超高齢者に有意に高く、「自我超越」次元は高齢者に有意に高いという結果が示された。この結果は、ライフサイクル第8段階は「自我統合」の次元を追認し、新たに提起された第9段階の「老年的超越」は高齢期よりも高く、特に、死を含めた物や表面的な関心からの減少を構成する「執着の超越」次元と強く関連することが示された。

さらに、高齢期は自我超越と宇宙的超越次元と有意な関連が示されたが、第9段階は自我超越と宇宙的超越次元がより強まることが示された。

<sup>391</sup> エリクソン（2001）『ライフサイクル、その完結<増補版>』（村瀬孝雄・近藤邦夫訳）、みすず書房、80頁。

<sup>392</sup> エリクソン（2001）、前掲書。

<sup>393</sup> 水上貴美子（2005）「高齢者の主観的健康観と老いの自覚との関連性に関する研究」『老年社会科学』2(1)1) 5-16頁。

この結果は、J・エリクソン が示唆した第 9 段階の発達課題としての老年的超越の存在を実証することになった。本研究からは、身体的側面・心理的側面ともに超高齢者は前期・後期高齢者とは異なる高齢者集団であり、高齢者理解において第 9 段階を設定することの有用性が示されたといえる。

### 3) 北欧の実証研究との違い

トーンスタムが北欧で調査した最初の尺度からは、「宇宙的超越」と「自我超越」の 2 つの次元が抽出されている。しかし、その尺度をベースに行った本調査からは、宇宙的超越と自我超越は同じく抽出されたが、さらに 3 つ目の次元として執着の超越の次元が抽出され、北欧とは異なる 3 の超越次元構成となった。

また、トーンスタムは老年的超越の高まりは自然な加齢に伴う傾向としているが、本研究からは超高齢期は高齢期に比べ老年的超越は高まるものの、下位次元では執着超越と有意な関連を示し、自我超越は高齢期と有意に関連するという結果が示され、加齢と老年的超越の関連は重層的であることが明らかにされた。

またトーンスタムの次元である「社会と個人の関係（積極的な孤独）」の次元は見出せなかった。これは、奄美群島の超高齢者は子どもや近隣に囲まれた依存型自立に幸せを感じることに関連していると思われる<sup>394</sup>。

### 4) おわりに

ローマの政治家キケロは、「自然がもたらすものに、悪いと考えるべきものは一つもない。老いもそのひとつである」と述べている<sup>395</sup>。また神谷<sup>396</sup>は、「安らかな老いに到達した人の姿は、…有用性よりも『存在のしかた』そのものによってまわりの人をよろこばし、気をゆるせる者のなかで、安らかにくらすことができれば、老いは自然にゆるやかな形で進行する」と論じる。

本研究の結果から言い換えるならば、超高齢者の内面世界には、加齢に適応する方略として、執着超越を核にする「老年的超越」の形成がみられることが示唆される。

## 6 おわりに：本研究の限界と今後の課題

本研究は奄美群島という限られた地域であり、また歴史的・社会的にも特別な背景を持つ地域であり、一般化には限界があろう。また、老年的超越下位尺度の信頼性（内的整合性）を示す Cronbach の  $\alpha$  は 3 尺度とも 0.6 台であり、少し低い値でもある。

しかしながら、大衆長寿社会を迎え、超高齢期を生きることは特別の人のものではなく、我々は超高齢期を生きる人を役割モデルとして、高齢期のそれぞれ

<sup>394</sup> 富澤公子（2009b）「ライフサイクル第 9 段階の適応としての「老年的超越」；奄美群島超高齢者の実態調査からの考察」『神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要』2、327-335 頁。

<sup>395</sup> キケロー（2004）『老年について』（中務哲郎訳）、岩波書店。

<sup>396</sup> 神谷美恵子（2005）『こころの旅』、みすず書房。

の時期を幸せに生きる術を学ばなければならない。高齢者の積極的な思いを受けとめ、長寿を寿ぐ成熟した超高齢社会の形成を築くために。

今後「老年的超越」尺度の精緻化を測り、他地域での更なる実証を深め、高齢者の幸福感を高める施策に寄与する高齢者研究の発展が望まれていると考える。

## 第 8 章 奄美・超高齢者の語り(インタビュー) にみる幸福な老いと老年的超越

### 階層モデル—超高齢者を対象とした質的研究

#### 1 はじめに

本章の目的は、前章の量的調査から明らかにされた奄美の超高齢者の地域での生活実態や長寿へのポジティブな姿勢、老年的超越の3つの次元を踏まえて、質的調査から質的分析手法を使って、「老年的超越」概念を磨き上げ、「老年的超越」仮説モデル提示することにある。

##### 1.1 調査地域と対象者

本調査の対象者は第6章で行った奄美群島超高齢者を対象とした郵送調査の回答者のうち、インタビュー調査に同意してくれた自宅居住超高齢者11人(男性4人、女性7人)で、年齢は85歳から101歳である。

家族構成は、1人暮らしは11人中7人(男性2人、女性5人)である。介護認定者は11人中4人で、101歳の要介護4を除き要介護1が3人とほとんどの人が自立である。しかし医療面では1人を除き全員が通院治療中である。

図表 8-1 調査対象者の基本属性

NO	性別	年齢 歳	元職業	家族 構成	介護認定 状況	通院 状況	居住歴
A	男性	89歳	農業従事中	1人	要介護1	月1回	43年
B	男性	86歳	元役場の職員	1人	なし	なし	86年
C	女性	86歳	主婦(教員)	1人	なし	月2回	60年
D	女性	85歳	主婦・農業・織	1人	なし	月1回	85年
E	女性	92歳	主婦・農業	1人	なし	月2回	92年
F	女性	89歳	主婦・織	1人	要介護1	月1回	47年
G	男性	86歳	商店経営中	5人	なし	月1回	61年
H	男性	86歳	商店経営他	2人	なし	月1回	86年
I	女性	87歳	主婦・織	1人	要介護1	週1回	87年
J	女性	87歳	主婦・織	2人	なし	月2回	35年
K	女性	101歳	主婦・農業・織	3人	要介護4	月3回	60年

##### 1.2 倫理的配慮

先に実施した郵送調査の際に筆者の身分を明らかにし、調査内容については調査目的以外には使用しないことを誓約し、聞き取り調査の際には了承を得てテープレコーダーを使用した。逐語は筆者自身で行った。データは適切に保管・処理している。

## 2 研究方法

### 2.1 調査方法

本調査に同意してくれた 11 人に対し半構造化面接を行った。用意したインタビューガイドは現在の生活スタイル、人生へのふりかえり、長生きの秘訣、何歳まで生きたいか、信仰や生かされている感などであった。その順番はこだわらず、話が途切れたときに次の質問を行った。インタビューの場所はそれぞれの自宅で、一人暮らしの方は本人 1 人、家族で暮らしている方は本人と家族のどなたかが同席する形になった。

インタビュー時間は予め予約していた時間帯の中で行い、60 分から 90 分の範囲であった。なお聞き取りがスムーズにできた前提として、事前にアンケート調査に回答してもらっていたこと、面接者もアンケート内容から対象者の生活環境など事前に把握できていたことと考える。

面接期間は 2006 年 7 月 13 日から 16 日の 4 日間で行った。

## 2.2 分析方法

質的研究法は文脈依存的でローカルな現実に着目して、生き生きとした情報を含むデータの解釈が得られる<sup>397</sup>ことから、生活歴の長い超高齢者の老年的超越形成を明らかにするには有効であると判断した。また、本研究で用いるデータは、超高齢者の日々の営みの語りテープ起こししたもので、分析に使用する手法は質的研究法の一つである M-GTA 「(Modified Grounded Theory Approach) : 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」である<sup>398</sup>。質的研究法を選んだのは文脈依存的でローカルな現実に着目して、生き生きとした情報を含むデータの解釈が得られることから、生活歴の長い超高齢者に対する研究法として有効であると判断したからである。

なお、これまで M-GTA の手法では、自宅居住の高齢者を扱ったもの<sup>399</sup>はみられるが、自宅居住の超高齢者を対象とした研究は見られないことから、新たな知見が得られると考える。

第 2 の理由は、M-GTA は「研究する人間」の存在を強調しており、その視点からデータを深く解釈して理論を導いていくことが期待されている。その際、データからの意味を解釈するときの伸びやかさ、大胆さも必要で、研究者はデータに従属することではなく、データの本質的理解をすることという視点は、長い社会人経験のある筆者に合う方法と考えた。

第 3 に、M-GTA は事象に即して具体的に考える立場であるプラグマティズム性を重視している。プラグマティズムはそれを行動に移した結果の有効性いかんによって明らかにされるという視点からは、超高齢者の増加傾向にある今日、この立場からの

<sup>397</sup> やまだようこ (2004) 「質的研究の核心とは」(武藤隆・やまだようこ・南博文ほか編『質的心理学；創造的に活用するコツ』新曜社、8-13 頁。

<sup>398</sup> 木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生』、弘文堂。

<sup>399</sup> 水戸美津子 (2001) 『高齢者の存在確認行動変容する高齢者像と教育実践への視座』(上越教育大学) 博士号論文。

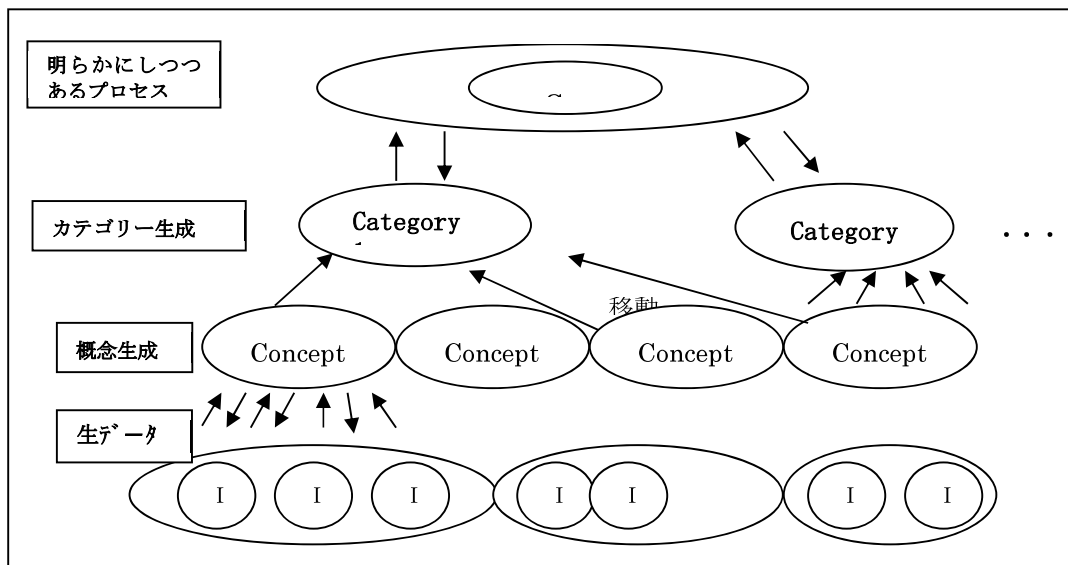
研究は意味があると考えた。

なお、M-GTA の手法を使用した高齢者対象とした水戸の研究<sup>400</sup>では、高齢者の認識は「存在確認行為」する存在＝その人の生きた丸ごとの時間と空間＝人生として、過去の人生の受容であり、第 8 段階の高齢者の発達課題である「統合対絶望」からの示唆として高齢期＝being という世界観を提示している。しかし、本研究の対象とする超高齢者は、水戸が対象とした次の段階にあり、高齢者とは異なるニーズや困難を抱え、死がより身近に感じられる存在である。したがって、これまでに研究されていない超高齢者の「老年的超越」を明らかにするには M-GTA の手法は有効で新たな知見が得られると考える。

### 2.3 分析プロセス

M-GTA による分析プロセスは、全体として図のような流れとなる。

図表 8-2 M-GTA による分析プロセス概念図



11 人の逐語録をデータとし、M-GTA の手法に従って、図のような流れで進めた。まず、分析テーマは「超高齢期の適応（サクセスフル・エイジング）プロセス」とし、分析焦点者は「奄美群島の自宅居住超高齢者」と設定した。M-GTA では、研究者の視点から分析テーマと分析焦点者にとって関連のありそうな箇所注目し、理論を構成する最小単位となる概念を生成していく。概念の生成にあたっては、概念名・定義・具体例・理論的メモを分析ワークシートに作成し、ヴァリエーションを追加していく。この過程は常に分析テーマに密着しているかを比較検討しながら進め、そして複数の

<sup>400</sup> 水戸 (2001)、前掲書。

概念からコアカテゴリーへと包括的に収束される。最終的には分析対象にした現象を結果図として表わしていき、分析結果は実践に応用されることを重視するものである。

#### 2.4 概念の生成過程

M-GTA では最初の概念生成が重要とされることから、分析テーマに照らして「ディテールが豊富で多様な具体例がありそうな者」を選んだ。1例目は89歳で現役の農業経営者。足が不自由で要介護1であるが、一緒に働いている息子に毎月の給料を支払っている男性である。語られている意味・内容を解釈しながらコーディングを進めた結果、16の概念が生成された。

2例目は1例目と対極にある事例として、超高齢期前半である86歳の役場の元職員で、今はリタイヤし読書三昧の生活という人を選んだ。恣意的にならないように類似比較と対極比較を行う中で、新たに2つの概念が生成され、既に生成された概念のうち8つでヴァリエーションの追加がされた。

3例目以降も同様の継続的比較分析をすすめ、新たに3例目で4つ、4例目で1つ、5例目で2つ、6例目で1つの概念が生成され、それぞれの概念のヴァリエーションも豊富になっていった。

7例目に移ったとき、新たな概念は出てこなかった。新たに確認すべき問題点もなく、「理論的飽和化」と判断し、分類と整理を行った結果、最終的に25の概念、9つのカテゴリー、3つの次元、1つのコアカテゴリーが浮かびあがってきた（表2）。

図表 8-3 表 概念・カテゴリー一覽

日々の営み・The Phenomenon of everyday life

<確立した生活スタイル>

- 1 100歳まで生きる = 自立している100歳以下の超高齢者の目標は100歳まで生きることであり、そのために努力し独自の生活スタイルを形成している行為。(7<1>)
- 2 工夫された日常生活 = 自立した暮らしを継続するために支援を自分にとって合うように適合したり、提供する側との無理がない関係を築くなど工夫した日常生活を形成している行為。(7)
- 3 生活リズムを守る意志力 = 1日の生活は決められた時間によって進行していくという生活リズムを頑なに守る意志力で自立生活を支える行為。(12)
- 4 食べ物へのこだわり = 自分が元気で長生きできる食べ物や食習慣はこれだという確信やこだわりを持って生活を確立させている行為。(7)
- 5 道具や知恵の活用 = 加齢による機能低下を自覚する中で自立生活を継続するために自分に合わせた道具や知恵を活用し、これまで通りの生活スタイルを維持している行為。(7)

<ポジティブな人生観>

- 6 前向きに生きていく = 過去を振り返り返るより超高齢期の今の生活を楽しみ、1日の時間経過を早く感じるなど、前向きに生きていくこと。(7)
- 7 楽しかった高齢期 = 超高齢期を受容している人にとって楽しかった時期は子育て後の60~80歳代の高齢期ということ。(11<3>)
- 8 若い頃からの頑張った感 = 若い頃からの頑張った感も頑張った感も持っているという感覚を保持していることが生活満足感を高め、超高齢期の今を主体的に行動する原動力になっていること。(11)
- 9 長生きは獲得するもの = 長生きは遺伝より食生活など生活習慣から自分が獲得するもので、努力の積み重ねの成果という意識があること。(7<1>)

<社会的な行為>

- 10 社会と繋がる行為 = 自立している超高齢者の意識には社会の動き、情報と繋がっていることが重要であり、新聞やテレビのニュースを見るのはその象徴的な行為であるということ。(7)
- 11 仕事からくる自信 = 超高齢期においても収入のある仕事や役に立っていることをしている自信が、その人の自立生活を支え、生き生きさせる源ということ。(7)
- 12 関係性を持つことの喜び = 超高齢期の日常生活の中で自身を生き生きさせる場、仲間との喜びを感じる場など、社会との関係性を持つことが生きる原動力につながるということ。(9)
- 13 ささやかな周囲への貢献 = 自分の生活は始末してでもことや孫、次代へつなげるなどの自分にできるささやかな貢献を見返りを求めないで行う行為。(6)

<ネガティブな語り>

- 14 身体に起因するネガティブな語り = 自立した超高齢者においても、身体に起因するネガティブな語りがあるということ。(13<1>)
- 15 同年代がいないという孤独 = 超高齢者になると同年代や親しい友達が既に亡くなって、共有する話や一緒に行動できる同年代がいないという孤独が深まるということ。(5)

形成基盤 The Condition

<環境要因>

- 16 家族や周囲との絆を感じている = 超高齢者にとっては家族の絆や周囲の支えを感じること、さらに長生きしようという思いを強くする。(9)
- 17 畑がある = 自ら耕す畑があり、畑作業を通じてまだまだ働けるという身体への確認や収穫を通じて役に立っているというほこりと存在の再認識の場としての畑。(7)
- 18 奄美の自然との一体 = 豊かな自然環境や穏やかな人間関係に包まれ、奄美の自然と一体感を感じながら生きていることで、超高齢期の生活満足感を深めているということ。(9)
- 19 自然の怖さ = 奄美大島の豊かな自然の中に潜む危険がある。はぶ、珊瑚礁、台風である。長い人生の中で体験してきた自然の怖さ、自然の怖さと背中合わせの生活でもあるということ。(5)

<内的形成要因>

- 20 戦争体験から得た知 = 超高齢者は青年期に戦争体験から形成された人生観、「戦争体験から得た知」の中で生きていくということ。(12)

精神世界・The Transpersonal Life

<自我超越>

- 21 親と自己の再定義 = 小さい頃の性格や親からの影響は人格の根っこを形成し、超高齢期には親と自己についての対話のなかから親や自己の再定義がなされていく行為。(11)

<執着超越>

- 22 執着の距離 = 超高齢期なつてもものに対する執着はもっているが、同時に執着からの距離感ももっている。(3)
- 23 おおらかな適応 = これまでの生活から得た知恵や工夫を押しつけることなく、おおらかに適応していることで、周りとの良好な関係を作っている行為。(6)

<宇宙的超越>

- 24 追憶は現在形で続く = 人生での喪失経験、中でも身近な人の死への追憶は常に進行形で人生のなかに生き、過去と現在との対話となりその人を内省に導いていくということ。(7)
- 25 ご先祖様のお陰 = 長生きはご先祖様のお陰と思っており、生かされる感覚は少なく、折りの対象として自然や仏壇、お墓がその信仰の対象であるということ。(19)

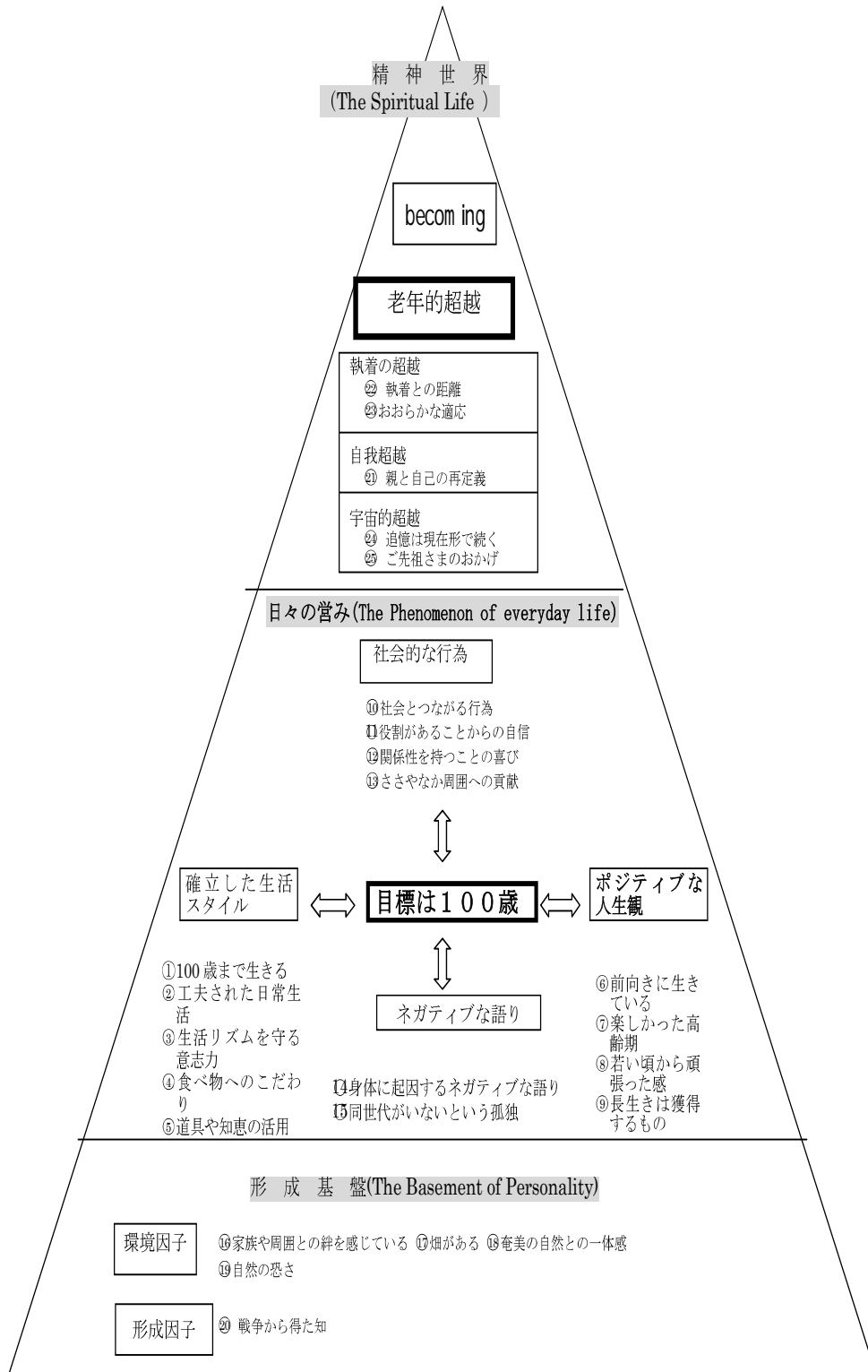


### 3 結果

結果は全体図のとおりで、カテゴリーとカテゴリーを比較分析するなかから確立した生活スタイルなどの日々の営みに関する次元、その基盤の営みを成り立たせている次元、そして、それらが精神世界に繋がる次元へとピラミッド型の3階層が構成された(図1参照)。中心層には日々の営みにおける「目標は100歳」というコアカテゴリーがある。つまり、人は生きる目標があることで超高齢期においてもポジティブで自立した生活を営むことができ、感謝の気持ちと同時に社会に繋がろうとする行為を促進させるということが示された。その下層には奄美群島特有の環境と戦争から得た知がある。この2層から精神世界においては老年的超越の形成を核とする、3層の老年的超越形成モデルが現われた。

以下、抽出された概念とカテゴリーの生成に従って記述する。1. は次元、『 』はコアカテゴリー、《 》はカテゴリー、<>は概念、「 」は高齢者の語りを表す。

図表 8-4



### 3.1 日々の営みの次元

#### 3.1.1 確立した生活スタイル

自宅居住の超高齢者は、孤独感や過去に浸るという後ろ向きの傾向になく日々の生活に満足感を持っており、《確立した生活スタイル》を継続し、自分に適合した自立生活を営みながら積極的に100歳をめざしている。

##### ① 工夫された日常生活

「できるものなら100歳まで生きたい。こう考えるんです。あと、10年気張れたら、そんな気持ちでいます」と、生きる目標を100歳と語る。そのため<工夫された日常生活>を送る。「もう年金だから、余り使わないように工夫して、野菜食べて。でも交際費がいるの。友達とか。そう、使うのは交際費」と語る。

またある男性は、「長生きは香辛料を食べないから」と<食べ物へのこだわり>を話す。1人暮らしで農業をしている男性は、「給食のおかずは一つも残さず食べます。お弁当で十分。ちょうど4品ぐらい入ってあるので、晩酌のおかずはそれで間にあいます」と、それぞれが自分に合うように、<工夫された日常生活>を持っている。

##### ② 生活リズムを守るという意志力

現役で商店を営んでいる男性は、「今ね、朝5時頃目覚めて5時30分にラジオ体操に出かける。そして6時頃帰ってきて食事。6時50分ぐらい、そして少し寝る。それからね、8時35分までテレビでニュース見る。それからトイレに行って、9時には店を開ける。朝から1日やることが決まっていて、365日の360日はこの流れで行っている。後の5日は旅行。だから身体の不自由は余り感じない」など、<生活リズムを守るという意志力>を語る。

奄美群島の四季を通じて温暖な気候が同じ生活スタイルを保障し、豊かな自然はお金を使わない生活を保障し、生活満足感を提供している。

##### ③ 道具や知恵の活用

一方で身体機能の低下への自衛手段として、<道具や知恵の活用>がある。「家の中でもこの杖です。杖は離せんです。杖を使っているので不自由はないです・・・それでこのトラクターに乗る仕事は出来る。立ってする仕事はもう出来んですけど、運転操作や機械作業は出来るんです。畑の整備、植え付けの準備は私が全部一人でやるんです」。

また、無人市場に作った物を出している女性は、「野菜なんかいろいろつくっているでしょう。だから種蒔いたら、そしてまた払ったり払わなかったりするのがあるでしょう。(家計簿)付けていればお金、何日積み立てしたとかね。(ふふ)」と、超高齢期を適応する工夫が語られる。

備忘録としての家計簿記帳、農作業の時期や支払いの確認の工夫、その他、洗濯物の出し入れの際、工夫した竿を活用した事例や、上ることが億劫になって平地へ住居

を移動するなどの工夫を語った。

### 3.1.2 ポジティブな人生観

#### ① 前向きに生きている

また精神面においては《ポジティブな人生観》がある。その1つに「前向きに生きている」があり、過去より超高齢期の今を楽しみ、前向きに生きることで1日の時間の経過を早く感じている。しかし、過去には辛酸な経験を経て、そして今日がある。

「(火事で何もかもなくした体験を持つ A さんは) 私、もう過ぎ去ったことは何も思わぬ。こういう考えで今、生きています。もう過去の悩みは考えんごととしています」と言う。商店を営む男性は、「(若い頃と) 別に変わらない。まあ、くよくよしないこと。財産なんだとか拘らない。娘3人いるのであとはこれにやる。やるものないかな」と語る。

#### ② 若い頃から頑張った感

ポジティブな人生観を支えるもう一つに、「若い頃から頑張った感」の持続がある。頑張ったということが現在の生活満足感を高めて、超高齢期の現在を主体的に生きる原動力になっている。

「今考えたらようやくだと思いますね。若い頃はもう本当にがんばった。さとうきびの刈り入れ時は朝4時から起きて畑に出おったです。まあ、おかげさまでですね、土地があって良かったと思いますね」と今も現役の男性。

「子どもを学校に出すとき大変だった。11時まで織って、朝早く行って人より早く織ったよ。子どもは小さいときの苦勞知っているからお金送ってくれる・・・苦勞は昔からずっとしてきましたよ」と一人暮らしの女性。

「もう、(苦勞は) あるかぎりしましたよ。若いときは戦争の体験もあるし、大変だった。ほんと大変だったよ」と戦争中の苦勞を話す女性。

「27歳から(店経営)。大変は大変。今でも大変ですよ。慣れてきましたが・・・木材も扱っていたよ、今はしてないけど。60年。うちの家内が毎朝早く起きて支えてくれた」と改めて内助の功を振り返る男性。

#### ③ 楽しかった高齢期

超高齢期の今を肯定的に受容している人にとって「楽しかった高齢期」がある。子育て・リタイヤ後の60歳～80歳代の高齢期であるという。「楽しかったこと、やっぱり60代ね。60代が楽しかった。老人クラブに入って楽しかった・・・今老人クラブの活動が一番多い」と語る。

「60歳、子育てが終わってからが楽しかった。若い頃は子ども育てるのに一生懸命だった。子どもが大きくなっていろいろ連れて行ってもらったんですよ。」

自立した超高齢者にとって楽しかった時期は60歳代ということは示唆的である。つ

まり、高齢期の入り口の60歳代は現在からさかのぼって20-30年前で、現在以上に体力に自信があり、子育てや仕事から解放され自由に使える時間が到来したという感じなのであろう。

逆に若い時が楽しかったという語りは男性一人が青年時代は楽しかったという答えのみである。超高齢者の青年期は戦争の影響が色濃い時代であったというコホートもその要因かもしれない。

#### ④ 長生きは獲得するもの

ポジティブな人生観の4つ目に「長生きは獲得するもの」という人生観がある。長生きは遺伝より食生活をはじめとした生活習慣から自分で獲得するものであり、遺伝より努力の積み重ねの成果という意識がある。

### 3.1.3 社会的行為

#### ① 社会と繋がる行為

超高齢期の日常生活においても積極的に「社会と繋がる行為」を行っている。社会の動きや情報を知ることは社会と繋がる自立意識を高めるもので、新聞の閲読やテレビのニュースを見るなどはその象徴的な行為である。同世代との集まりの場やおしゃべりの場も社会とのつながりを確認出来る場となっている。

「毎日、全国紙のAと地元紙の2紙読んでいます。これは小学校を卒業して大阪に行ったとき兄がA新聞を購読していたのでそれからずっとです」。

「新聞は一通り目を通します。見出しをばらばら、大事なものを」「O新聞(地元紙)、昔はじいさんが見るから全国紙のY新聞も」。

「一面からみるよ、毎日。新聞は3紙。それが日課だけどだいたいよ。ゲートボールに行かないといけないから」。

超高齢期においても新聞の閲読率は高い。拡大鏡を使用しながら多い人は毎日3種類読んでいます。新聞閲読の高さは意外な回答であったが、それはもつともであるかも知れない。自分の足で立っていると自覚する限り、足下の状況把握をすることは当然のことだろうから。超高齢期においても社会からの離脱とは違う、積極的な社会と繋がる行為がある。

#### ② 仕事からくる自信

また、社会的行為の2つめに、「仕事からくる自信」がある。超高齢期においても収入のある仕事や役に立っているという自信は、その人の自立生活を支え生き生きさせるということである。

「子どもが毎日来てですね、私は監督しなあかんで、あらゆる仕事の段取りを打ち合わせして、そして、畑に出る。・・息子、あれなんかに私が日当を払っている。月に22、3万円払っているよ」と農業現役の男性。

「(手入れされた庭を指して) あのみかんですね、あと 2ヶ月したら 3倍ぐらいの大きくなるんですが、東京に娘婿がいるのですが、それなんかに農薬使っていないので重宝がられてですね、毎年送っています」と一人暮らしの男性は語る。

「年間 30万円くらいはあるよ。無人市場で販売して 10年になる。悪いことする人いるから、ほら 1円や 10円も入っているけど。それを使わないで農協に貯金するわけ」と一人暮らしの 86歳の女性。

「(毎朝 9時から) お客さんは来ないけど(店)開けている。このあと 10時まで店番する。娘がきたら山や畑へいく」。

### ③ 関係性を持つことの喜び

社会的行為の 3つめに「関係性を持つことの喜び」がある。超高齢期においても日常生活の中で自分自身を生き生きさせる場、仲間との喜びを感じる場など社会との関係性を持つことの喜びが生き生きの原動力につながっているということである。

「三味線、明日また行くけど、(75歳から)・・・三味線。年取っても続けようと思っている。上達はしなくても。自分の家でぼっとしているよりね、皆が大事にしてくれるから」。

また、「講演会に行く、講演聞いたら自分のためになるから。うちでいるより色々行く方がいい。島で活動の時間作ろうと思えば・・・畑仕事は前の日にしていってとか、いろいろできるからね」と語る。

「教育委員会でいろいろ教養講座がありますので、行くようにしています。対象は若い人から年寄りまでだから。色々な会合があって必ず行きます。もうみんなが退屈というのが不思議なくらい(笑い) 忙しいばかり」と別の女性は語る。

### ④ ささやかな周囲への貢献

社会的行為の 4つめに、「ささやかな周囲への貢献」がある。自分の生活は始末してでも子どもや孫に、またシマの伝統を次代へつなげるなど自分の生きている間に自分にできるささやかな貢献を行う行為である。

「昔の 8月踊りね、私たちが青年時代に稽古したよ。若い人は今はできないですよ。だから公民館で教えたりしてね。踊りはすぐ出来るけど、歌がねなかなか歌えない。昔の恋の歌だから、男と女のかげあいで歌わないとね。畑で逢い引きよ。ふふ」。

「若い人に和裁を教えていました。受講生がいなくなって辞めました。(教えてくれと言われたら) そのときに考えますよ(笑い) ついて行けないかな」。

「郵便局にね、孫の保険をかけてるの。10月 1つ満期。10年間、2つかけている」は、無人市場で収入を得ている女性である。

シマ歌を若い人に伝承する行為は自分の生きてきた足跡が残せることである。また、子や孫からの援助を逆に自分が孫へ出来る精一杯の気持ちを返す行為には、自分にはまだ出来ることがあるという自立した姿勢が伺える。それらの行為は気負いがなく自

然体である。

超高齢期になっても誰かの役に立っているという<役割があることからの自信>や<社会とつながる行為>、<ささやかな周囲への貢献>など、《社会的な行為》への指向性は強い。それは逆に、超高齢期を生き生きと暮らす上で重要な要素となっている。

### 3.1.4 ネガティブな語り

#### ① 身体に起因するネガティブな語り

しかし一方でネガティブな語りがある。一つは、<身体に起因するネガティブな語り>である。自立している超高齢者にとっても年と共に身体に起因するネガティブな語りは避けられないようだ。

「年をとれば耳は遠くなるし目は悪くなる。本当にそうですよ。80代まではどこも悪くなかったけどね。それからは次々とね」

「85歳までは海に行って魚釣りしていた。珊瑚礁は危険だからと家族に禁止されたのです」「トイレに時間がかかるようになったんです。それで、ここはトイレまで長いから、その間にもらすこともあるんです」

（「(詩吟の)練習所がアパートの3階になって、前は平屋だったんだけど階段を上るのが大変になって、それで辞めて」

「私はゲートボールでなく、グラウンドゴルフをしようとしたけど、最近足がこんなになったのでしよらんで、やめた。去年ぐらいいまでやっていましたよ」

超高齢期になると避けては通れない身体的な衰えがやってくる。人によって身体機能の低下の時期は異なる。92歳の女性は80歳代までは全くどうもなかったという。85歳で海外旅行に行った女性は、89歳の現在は身体の状況についてネガティブな語りをするようになっている。

#### ② 同年代がいないという孤独

もう一つのネガティブ観は、<同年代がいないという孤独>である。超高齢者になると、同年代や親しい友達が既に亡くなっていて、共有する話や一緒に行動できる同年代がいないという孤独が深まる。

「一緒に動く人が居ないから。友達はみんな亡くなった。主人もそればかりいつていた。友達が出来る機会はなくなったから、(活動は)もうできない」

「もうこの部落には、同窓生はいないですよ。ほかももう、女一人と男一人だけ。

そうですよ。歳とればね」

「人間は運命ですよ。同級生はいないの、一人も。兵隊にいつてね。みな亡くなったから」「この間ね、文通していた友達が亡くなった。遠くにいた友達で歌を書いたりしていた。その友達が亡くなって、楽しみが減った」。

超高齢期に至って同年代の友達がいないという喪失感は深い。日常行動を制限する

要因ともなり楽しみの減少でもある。同年代の友達がいないという発言は行動的な女性から語られた唯一のネガティブな発言であった。特に超高齢者年代にとって同年代の喪失は、戦争が大きく影響している。

<身体に起因するネガティブな語り>や<同世代がいないという孤独>で《ネガティブな語り》は、80歳代後半から90歳代に進むにしたがって強くなる。しかし、身体状態や寂しさにこだわって消極的傾向になるというふうでもない。

超高齢者達は老いる身体を受容し、死を受容し、身体状態の良い悪いの二元論を超えた域にある。老年的超越徴候へ導かれる発言である。

## 3.2 形成基盤の次元

### 3.2.1 環境因子

#### ① 家族や周囲との絆を感じている

自立生活を支えているものに<家族や周囲との絆を感じている>環境がある。長寿のお祝いは超高齢者にとって家族の絆や信頼を高めるものであり、さらに長生きしようという思いを強くするようである。

「去年は、私の88歳の米寿の祝いをしてくれました。子ども達や孫に良くしていただきました」

「そんなに長生きできないだろうと97歳の時、100歳の時に親戚が集まって、祝いごとをした。その時は70~80人が集まって、ばっちゃん、孫にお年玉をあげたりしていた」(女性101歳の家族)

「こどもは小さいときから苦労したのを知っているから、いろいろ送ってくれる」「一人暮らしは心配だから同居しよう、おいでと(息子は)言ってくれるけど、ここがいい」

(面談中に近所の人がニガウリ(ゴーヤ)の味噌漬け、豆みそを持って来られた。)「こんなして、みんないろいろもってき来てくれる。いつも貰っているから、食べ切らんよ」

奄美群島の近隣環境は超高齢者に支援的である。長年の近所づきあいが、「差し上げる、頂く」互助の関係を自然に作り上げている。この地域には、超高齢者が住み慣れた自宅で安心して長生きできる支援環境があり、超高齢者の言葉は子や孫、近隣の支援に対する感謝の言葉が溢れる。思いやりの絆が超高齢者達を生き生きさせている。

また、101歳の今を自宅で過ごすことができる背景には、この地域では100歳に達する人がいることは親を大事にしていることの証拠とされ、親族の名誉とされることがある。

#### ② 奄美の自然との一体感

また、豊かなく奄美の自然との一体感>は、「ここに生まれてありがたいと思います。



お金がなくても生活できる」、「こんな島だけど、ここは住みよい」と、今ある環境への感謝の気持ちに満ちている。

「ここが一番」、「ここに暮らして良かった」という思いを異口同音に語る。そして「こんな島だけど」に、離島として辺境視された歴史、敗戦後の8年間に及び辛酸な暮らしなど歴史体験者の思いが滲む。

### ③ 畑がある

加えて、自分の〈畑がある〉ことで超高齢期にも出来る作業の場が与えられ、ささやかながら実りをもたらしてくれる。収穫物を子どもや孫、近所の人に配り喜ばれることによって、普段の受け身的な立場から役に立っているという逆転した立場になれる。畑は超高齢者に能動的な感覚をもたらす存在である。

### ④ 自然のこわさ

一方で、ハブ、台風、珊瑚礁という〈自然のこわさ〉が身近に潜んでいる。

「田舎で一番怖いのはハブ、何もしなくても向かってきますよ」という語りがある。

「台風で家は全壊でした」と語りに、台風の常襲地に住む人の大変な暮らしを見る。

また、「魚釣りね、85歳で家の人から禁止された。珊瑚礁の上を歩くと転んだり、危険だからね。ゴツゴツしててね」という語りになっていく。

超高齢者は長い生活史の中で自然の優しさとそこに潜む自然の怖さを知っているし、それを含めて奄美の自然と共存している。

## 3.2.2 形成因子

### ① 戦争から得た知

このような超高齢者が100歳を目指す能動的な行為と生の満足感を示すベースに、超高齢者はコホートとして死と向き合った戦争体験世代ということがある。現在の生き方には〈戦争から得た知〉が人格基盤を形成している。

「一番辛かったのは戦前・終戦直後」、「この砲弾がすごかった。危ないから移ったら今さっき居た場所に落ちた」という語りや「同級生は戦死して一人もいない」という語りがある。ある男性は自分が生き残っているのは奇跡に近く、「それをこの言葉で生き扶（富）というのです。扶（富）は運と言うことです」と感慨を込めて語った。

人は人生途上に自らの生きる意味を追求し、体得していく知がある。それぞれの所属する社会環境や習慣や風習、生活文化の影響を受けながら、学び、育ち人格を形成していく。

「生き扶（富）」という言葉を含め生活や地域から形成される知、ローカルな知<sup>401</sup>の形成が見られる。超高齢期は喪失、危機、痛み、喜びなどさまざまなライフイベントを体験し、それぞれにローカルな知が形成され、人格次元ではそれぞれの精神世界につながっていく。

### 3.3 精神世界の次元：老年的超越

超高齢者が到達していく精神世界はさまざまな社会的個人的危機が人格形成の基盤となる。戦争は最大の社会属性的危機であり、超高齢者は死を見つめた世代でもある。また、精神世界の形成は日々の営みと連関し、100歳以下の超高齢者にとって『目標は100歳』という一つの現実的な生の目標が生まれ、それらが促進要因となって《老年的超越》が形成されていくことがうかがわれる。

語りからみられた3つの次元を見ていく。

#### 3.3.1 自我超越

《老年的超越》の次元の1つとして《自我超越》がある。苦勞して頑張ってきた生活は、年齢を重ねる中で親からの影響がその根っこを形成していることに気付かされるようである。

超高齢期の緩やかな時間の流れの中で親と自己の対話が深まり、ある人は養子だった親の心情が理解でき、またある人は、改めて「母は賢かった。学校は出てないけど知恵があった」という〈親と自己の再定義〉がなされていく。

#### 3.3.2 執着の超越

2つ目の次元として、物質的なものからの《執着の超越》がある。超高齢期においても物やお金は欠かせぬ存在として物への執着はあるが、同時に執着からの距離感もある〈おおらかな適応〉である。

「大きな畑があるので高い値で売れたらと思うけど。もう、食べていけたらいいですね」、「経済面では楽でなかったけど精神的には割り方おおらかに生きてきました」、「経済的もいいし、今の年寄りなんか年金はもらえるしね。ありがたいと思いますよ」

#### 3.3.3 宇宙的超越

3つ目の次元として時間や場所の定義の変化がもたらす《宇宙的超越》がある。

---

<sup>401</sup> クリフォート・ギアーツが提唱する「ローカル・ノレッジ」をモデルとして、特に社会教育や地域学の新たな視点として提示しているものである。前平は、ローカルな知とは、「人々のそれぞれの生活や仕事、その他の日常実践や身の回りの環境について持っている知で、人々の生きる状況に依存して意味を持ちうる知である」と解説する（2008）。

101歳と暮らす家族は、「たまに亡くなった人や遠くにいる人の名前を呼んで、会いたい、話がしたい、とか言ってます」と、現在と過去の時間境界や距離空間を超えた言動がある。しかし家族は認知症ではないとはっきり言う。

「三男は5つの時、そのころ滅多にないことですが交通事故でなくなった。一番いい子だったです」と追憶は現在形で続く、今でも惜しまれる死がある。

島唄の継承をしている人は、「昔の歌、ぼっちゃんが歌ってくれた歌思い出すよ。おむつ交換したり、散髪もした。産婆さんみたいだねと喜んでくれた」という、亡くなった人との一体感の語りがある。

奄美には、毎日の生活の中にご先祖様があり、<ご先祖様のおかげ>という感謝の念が語られる。

しかし一方で、「生かされている感じ？フフないわ。長生きはご先祖様のおかげ」、  
「信仰は仏壇だけ、他にはなにも。それだけ拜んでいればいいと思っています」、  
「(信仰) 特にない。先祖は守っているよ。田舎はお墓に1日、15日に参るの」、  
「(信仰) ない。(何かに生かされている感じ) ない」、という語りが続く。

ただ一人、「靈魂というものがあるような気がする。長生きできるのは生かされていると思う。病気したのに、皆戦死したのに」と戦争の悲惨な体験を語った男性が生かされている感じを肯定した。

奄美の超高齢者の語りからこのような3つの超越次元が現われた。しかし、北欧で実証されたトーンスタムの《老年的超越》の3つの兆候の1つ、「孤高(孤独の欲求)」(Need for solitude) は見いだせなかった。自立し生産的であることに人間の価値を置く欧米の文化との違いとも考えられる。

さらに、これら3つの次元を内包する超高齢者の存在は、現役世代をさす **doing** (なすこと) ではなく、高齢期の存在を表す **being** (在ること) でもなく、超高齢期の精神的基底は「変化」や「生成」から、変容が特徴となる時期という意味を深めて、**becoming**(生成)の概念で提示したい。

エリクソン<sup>402</sup>は、超高齢期の課題を「死に向かって成長する」とした。**becoming** は、何らかの状態(**be**)はなく、何かになっていく自己と捉えるとき、死に近い距離にある超高齢期のスピリチュアルなこころの状態を示す概念と思考するのである。

#### 4 考察

本章では、奄美の超高齢者の語りから、老年的超越の形成モデルを明らかにすることを意図してきた。結果は、老年的超越は3階層からなる形成モデルが示された。そして、老年的超越形成は超高齢者のポジティブに生きる要因と関連しながら重層的・

<sup>402</sup> Erikson E.H., Erikson, J., M & Kivnick, H.,O (1990)『老年期；生き生きとしたかわりあい』朝長正徳・朝長梨枝子訳 みすず書房, (*Involvement in old age*),1986)。

複合的に形成されるということが明らかにされた。

この結果から超高齢期の老年的超越は、自己が存在し続けられた悠久な自然や周囲の環境への感謝を基盤に、幾多の危機を前向きに乗り越えてきた生活の営みから編み出されたローカルな知の成熟として解釈される。

また、老いや死を間近に感じる有限な生の時間の中で、先祖との繋がりや子どもとの繋がり意識を強めていく。また、人生の終盤になって生きることの意味を問う時間過程の中で、深まる洞察から形成されるものとも示唆される。それらがスピリチュアルな発達を促し、周囲への感謝と幸福感を高め、超高齢期のサクセスフル・エイジングを形成していくという連関である。

一方、奄美群島超高齢者の意識の特徴的なことは、「生かされている」という感覚は少数派であるということである。長生きは先祖の「お陰」と思っているが「生かされている」対象と思っていない。「生かされている」という感覚が少ないことは量的調査からも出ている。

その理由に、奄美群島独特の精神的世界が考えられる。奄美群島のシマには今なお、かつての琉球文化の流れを受けた民間信仰の存在やアニミズムがある。それは奄美各地の居住空間にもみられ、伝統行事においても継承されている<sup>403</sup>。

その親ユタ（奄美のシャーマン）の言葉として、「神に頭を下げることは忘れても、水や太陽に頭を下げることを忘れるなっちゅうのが奄美」と紹介されている<sup>404</sup>。また、先祖との距離は高齢者の語りの月 2 回のお墓参りなどにも見られるように距離的にも精神的にも本土よりも近い関係にあり、伝統行事は農耕行事とともに先祖供養の行事が廃れることなく行われている地域でもある。

このような奄美の人たちの自然や先祖と一体感を持った暮らしからは、生かされているのは形而上学的な神でなく、そこには自分を包む存在としての自然がありご先祖様がある。

ここで暮らす超高齢者には、かつての日本にはあって今は廃れた生活と密着した宗教性が残っている証ともいえるのではないかと思考する。これらを総合的に見るとき、奄美群島の超高齢者の精神世界は日々の暮らしの過程でさまざまな危機や困難、自然環境がもたらす脅威と対峙しながら、加齢とともに超越的度合いを深め、老年的超越へ到達していくプロセスへ導かれる。

そのなかの宇宙的超越は奄美群島の超高齢者のことばに置き換えると「ご先祖様」が理解できる。奄美の先祖信仰からは有限な生から子々孫々とつながる感覚を得て<sup>405</sup>、

<sup>403</sup> 富澤公子（2011）「奄美群島における長寿とスピリチュアリティ；奄美大島、徳之島、与論島の事例から」『老年社会科学第 53 回大会報告要旨号』33-2、218 頁。

<sup>404</sup> 齒博明（2004）「いま奄美は：日本復帰後の開発と自然・社会環境の変容」松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰 50 年；ヤマトとナハのはざままで』至文堂、101-110 頁。

<sup>405</sup> 河合隼雄（2001）『日本人の心』潮出版社、13-31 頁。

超高齢者の安定した精神世界に、老年的超越を核とした幸福感を高めていくという生が明らかにされた。

#### 4.1 先行研究との関係

##### 4.1.1 ネガティブな超高齢者像を否定する実態

J. エリクソンが記述した超高齢期は、年を重ねるごとにますます「御用済み」となり、「途方にくれる」、「寄るべもなくなる」という無能性や依存性を強調<sup>406</sup>し、第9段階のいかに悲観的となるかを記述していたが、奄美群島超高齢者の老いの実態は、家族や周囲に支えられ、行動的な日常が明らかにされた。ネガティブに見られがちな超高齢期に対する新たな知見を示すものとする。

##### 4.1.2 ライフサイクル第9段階の確認

老年的超越尺度 (TGS) からは「執着の超越」次元は超高齢者に有意に高く、「自我超越」次元は高齢者に有意に高いという結果が示された。

この結果は、ライフサイクル第8段階は「自我統合」の次元を追認し、新たに提起された第9段階の「老年的超越」は高齢期よりも高く、特に、死を含めた物や表面的な関心からの減少を構成する「執着の超越」次元と強く関連することが示された。

さらに、高齢期は自我超越と宇宙的超越次元と有意な関連が示されたが、第9段階は自我超越と宇宙的超越次元がより強まることが示された。

本研究からは、身体的側面・心理的側面ともに超高齢者は前期・後期高齢者とは異なる高齢者集団であり、高齢者理解において第9段階を設定することの有用性が示されたといえる。

##### 4.1.3 超高齢期に対する評価

超高齢期に対するエリクソンのネガティブな意識からは、トーンスタムが指摘するような、西洋の中産階級の高齢者意識である自立、生産性を重んじる価値観の枠組みから抜け出せなかったのではないかと推察される。秋山は、このような欧米の「自立、社会貢献」をサクセスフル・エイジングの前提条件とする社会では、特に、身体機能が低下し、社会貢献できなくなった超高齢者には、失敗者の自覚など、アン・サクセスになると危惧する<sup>407</sup>。

しかし、本研究の対象である奄美群島の超高齢者は、そのような悲壮感には楽に超え、彼ら/彼女らは家族や社会との繋がりの中で、できるところで自律する生活を楽しんで

<sup>406</sup> Erikson E.H., Erikson, J., M & Kivnick, H.,O (1990)『老年期；生き生きとしたかわりあい』(朝長正徳・朝長梨枝子訳), みすず書房 (*Involvement in old age*,1986), 80 頁。

<sup>407</sup> 秋山弘子 (2008)「生涯現役を超えて」毎日新聞 (2008年3月16日付)。Erikson(1990)前掲書 183 頁。

いる。周囲の支援や厚意を受け入れながら、日本独特の依存型自律<sup>408</sup>に支えられながら、超高齢期の幸福感を高めていると考えられる。

#### 4.1.4 超高齢期と時間展望

時間展望は過去、現在、未来への指向性が含まれるが、エリクソン第9段階の時間見通しは「今現在もしくは次の1週間くらいに限定される。それを超えると見通しがぼやけてしまうと論じている<sup>409</sup>。河野ら<sup>410</sup>は健常高齢者と虚弱高齢者の主観的時間の比較から、虚弱高齢者の特徴は「未来指向性」を意識しないことであると論じる。

本研究においても、時間展望は高齢期と超高齢期では大きな差がみられ、加齢の進行と時間展望は大きく関連する結果となった。「老年的超越」と超高齢者の「時間展望」との関連から考察すると、「時間展望」の認識の高さと「生活満足度」の高さは「自我超越」次元、「宇宙的超越」次元ともに有意な関連を示した。一方で「時間展望」が低いことが「執着超越」次元を高めることが示された。

「執着の超越」次元は他の2つの超越次元と異なり、加齢の進行と関連する超高齢期の特性と言える。

なお、老い観の高さは「自我超越」次元と「宇宙的超越」次元を高めていることは、老い感はネガティブな感覚でなく、老いを肯定的にとらえる人ほど自身の有用性を意識するとした先行研究（水上，2005）を肯定するものと考えられる。

#### 4.1.5 北欧の実証研究の違い

トーンスタムが北欧で調査した最初の尺度からは、「宇宙的超越」と「自我超越」という2つの次元のみが抽出されている。しかし、その尺度をベースに行った本調査からは、宇宙的超越と自我超越は同じく抽出されたが、さらに3つ目の次元として執着の超越の次元が抽出され、北欧とは異なる3の超越次元構成となった。

また、トーンスタムは老年的超越の高まりは自然な加齢に伴う傾向としているが、本研究からは超高齢期は高齢期に比べ老年的超越は高まるものの、下位次元では執着超越と有意な関連を示し、自我超越は高齢期と有意に関連するという結果が示され、加齢と老年的超越の関連は重層的であることが明らかにされた。

## 5 おわりに

<sup>408</sup> 岡本民夫（2006）「活力ある高齢者の台頭と対策」（富士谷あつ子・岡本民夫編『長寿社会を拓く：生き生き市民の時代』、ミネルヴァ書房）、9-22頁。

<sup>409</sup> Erikson（1990）前掲書、183頁。

<sup>410</sup> 河野あゆみ・金川克子（1998）「在宅高齢者の主観的時間に関する研究；性、年齢、日常生活自立度との見当『老年社会科学』20（1）、25-31頁。

本章の最後に、奄美の超高齢者の語りから奄美の長寿を支える地域コミュニティ要因と社会経済システムを考察する。

1 つは、奄美の超高齢者の歳を重ねることで到達した精神世界の豊かさが超高齢者のポジティブな生き方につながっているということである。超高齢者は支援されるだけでなく、自ら役割を見出し家族や近隣の人々の役に立っている。野菜やくだもの、釣りで、随所に見られた。長い人生の中で、さまざまな苦労や危機を経験し今の生がある。前向きに頑張った感が今のポジティブな精神生活を支えている。

2 つに、その頑張りを支え、安心して暮らせる超高齢期の生活基盤は現金収入である年金に支えられている。口々に、「年金のありがたさ」を語る。

特に奄美の超高齢者は、厳しい自然・社会環境の中で、働いても、働いても楽にならない不安定な生活を経験してきた。それゆえ、少ないながらも毎月いただける年金はありがたい存在である。しかしその生活に安住することなく、超高齢期の今も自らできる畑仕事をし、生活の糧にしている。

3 つめに、子どもや地域のコミュニティに支えられたくらしの中で、自らの役割を發揮でき、周囲のつながりの中で精神的にも長生きを楽しむ幸福感がある。

奄美の超高齢者の語りからは、身体機能の低下だけでは推し量れない、超高齢期の老いを受容しながら地域の中で暮らす喜びが明らかにされた。

超高齢者の存在を世阿弥の論ず花に例えると、時分の花(年齢によって現れ、年齢が過ぎれば散っていく花)ではなく、誠の花(けいこと工夫を極めたところに成立する、散ることのない花<sup>411</sup>)としての存在である。若い生命力の持つ華やかな「時分の花」から、枯れても人間として本質として咲き続ける「誠の花」として、地域の若い世代に生きる意味を明示している。

---

<sup>411</sup> 世阿弥 (1958) 『風姿花伝』岩波書店、14 頁。

## -第9章 奄美・与論島における看取りの文化

### 1 はじめに

#### 1.1 魂の島：与論島

与論島は、奄美群島の中で最も沖縄に近い島である。また、長寿者の多い奄美群島の中でも、長寿者の比率が高い島でもある。加えて、超高齢者が自宅で最期を迎える「在宅見取り」<sup>412</sup>の習慣が現在でも一般的であり、魂の島と呼ばれている。

本章では、在宅見取りが継続してきた背景とそれを可能にしてきた要因を明らかにすることを通じ、看取り文化が長寿者の精神的次元や幸福感醸成にどのような影響を与えているかについて考察をする。

一方、与論島でも近年火葬場や葬祭業者ができ、葬儀も自宅から葬祭場と変わってきている。加えて、外で働く女性が増え、在宅療養から死を迎える期間も短縮している。しかし、在宅で死を迎える割合は低下していない。

その背景には、昼以外での死を忌み嫌う与論神道の存在がある。また、延命治療を望まず、本人の「家に帰りたい」、家族の「家に帰らせたい」という願いを受け止める医療機関や福祉施設の協力がある<sup>413</sup>。加えて、島の平地が多く、中心部にはどこからでも30分程度で行ける面積が、非常時に対応しやすいという条件もある。

与論島の在宅見取りの高さと健康長寿者の多さに焦点を当てると、安心して死を迎えられる環境が安心して老いる環境となっていることが浮かび上がってくる。

#### 1.2 問題の所在

日本におけるターミナルの場所は病院が圧倒的である。「死の場所」が病院に移行するに伴って死は自宅から遠けられ、人々の死に対する感覚も日常から切り離されている。家族を中心とした看取りの担い手は弱体化し、死生観<sup>414</sup>の変容とともに、今日では、看とりの文化は消失したともいわれている<sup>415</sup>。

しかし、与論島（与論町・人口約5,300人）は、今でも在宅死が80%を超える地域である。与論島では入院設備の整った総合病院が整備された後も、在宅看とりの習慣が継続している。加えて与論島は、「長寿と子宝」の島として知られている奄美群島の中でも長寿者の多い島でもある。

<sup>412</sup> 「看取り」の定義は、「無理な延命治療はせずに、自然の過程でしに行く高齢者を見守るケアをすること」とする。養岡（2011）「日本における終末ケア」看取りの問題点『長寿社会グローバル・インフォメーションジャーナル』、17巻8頁。

<sup>413</sup> 稲野慎（2008）『揺れる奄美、その光りと陰』、南方新社、26-31頁。

<sup>414</sup> ここでいう死生観は「地域住民が持つ『生』と『死』の考え方」（近藤，2008）と定義する

<sup>415</sup> 近藤功行（2008）「与論島の自宅死亡」『死の技法；在宅死に見る葬の例節・死生観』近藤功行・小松和彦編、ミネルヴァ書房。



本章で、長寿と幸福な老いとの関連から与論島の在宅死の高さを考察しようとする意図には、次のような視点がある。

1 つ目に、厚生労働省が入院医療・施設介護を中心とした政策を見直しと、住み慣れた自宅での療養の支援やターミナルケアに向けた施策を推進する方向性を打ち出していることがある<sup>416</sup>。

2 つ目に、在宅療養・在宅死の推進が、国民医療費の抑制や施設介護の限界というネガティブな目線でなく、超高齢者の生活の質を高め、生を全うする支援であることを、与論島の事例から確認する。

3 つ目に、与論島での在宅死を可能にしているシステムを考察することを通じ、看とりの文化の再構築に向けた取り組みを促すこと。このことは、超高齢者が安心して老いる環境づくりへの示唆となると考える。

4 つ目に、在宅看とりの文化に光をあてることは、現代における生と死のあり方を捉えなおすことにつながる。このことは、地域でのきずなやつながりを復活するための、地域づくりへの重要な示唆が得られると考える。

## 2 日本における看取りの現状

### 2.1 死の場所の推移

日本において、「死の場所」が病院に移行したのはそんなに古いことではない。明治から大正時代にかけての「死の場所」は、自宅が普遍的であった。終戦直後の 1951 年でも、自宅死は 80%を超えている。死は自宅において家族に見守られて、死後の措置も家族でなされた。戦前の高等学校の家政学ではそのための看とり教育がなされていた<sup>417</sup>。

戦後の高度経済成長のもとで、人口の都市集中・核家族化による住宅事情、医療・健康保険の充実等を背景に、病院での死が増大していく。1977 年に、病院死と自宅死亡の割合が逆転して以降、自宅死の割合は減少を続け、現在では 1 割（12%台まで低下している。わが国の死亡場所は、図 1 のとおり急激な変化で推移した。

厚生労働省の終末期医療に関するアンケート<sup>418</sup>では、58.8%の人が「死に場所」を「自宅」と希望しているが、「死の場所」は病院が 8 割(78.8%)を占めている。「死に場所」と「死の場所」が大きく乖離しているという現状が指摘される。

ここでいう「死に場所」は、生きている自分自身が死を考えたときにどこで死にた

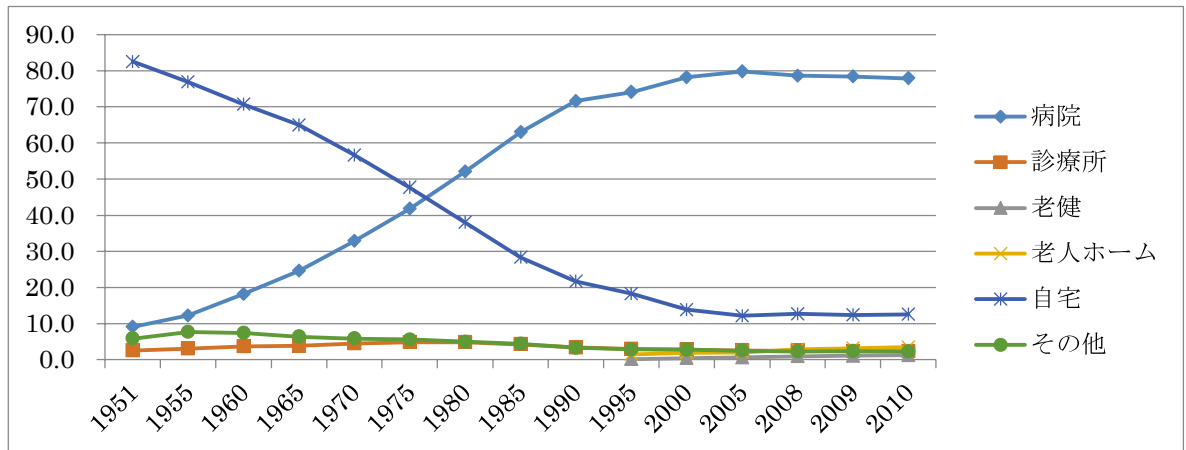
<sup>416</sup> 厚生労働省「在宅医療・介護あんしん 2012」では、そのための予算、制度対応、診療報酬・介護報酬など、総合的に検討されている。

<sup>417</sup> 新村拓（1989）『死と病と看護の社会史』法政大学出版、170-177。例えば、穏やかな死を迎えるための環境づくりの重要性や、ベッドの作り方、病室のあり方、死の判定、死後の処置など、細かい指示がなされている。

<sup>418</sup> 厚生労働省（2012）『平成 19 年度終末期医療に関する調査結果概要』<http://www.mhlw.go.jp/>（2013 年 2 月 10 日閲覧）。

いかの意味であり、「死の場所」は、結果としてどこで死んだかを意味する<sup>419</sup>。

図表 9-1 死の場所の推移



出所：平成 22 年厚生労働省人口動態統計から筆者作成

## 2.2 病院死の増加と死生観の変容

病院死が増加した理由について、一般的にあげられるのは、人口の都市集中、核家族化の進行と家の狭さである。それに加えて、①医療施設の増加による医療の利用可能性の増大、②生活水準の向上による医療の経済的可能性、③健康保険制度による本人負担の軽減があげられている<sup>420</sup>。

一方、在宅医療への転換が示されながら、病院死が減少しない理由について新村<sup>421</sup>は、①病院医療に対する高い依存心、②在宅死を支えるシステムの不備、③死を看取ることの家族や福祉職員の不安を上げる。特に、家での看取りを覚悟していても、だんだん募ってくる不安や恐れに圧倒されて、最後には救急車を呼んで病院死させるケースが多いことをあげる。この原因には看取りの文化が継承されていないことを指摘する。

一方、死が病院に移行したことによって、人々の死生観も大きな変化をもたらしている。新村は、その理由を 9 つの視点から分析する。

平均寿命が 30 年近く伸び、人生に 20 年間余の執行猶予が付いた（この「間延び」した死への歩みが死の意識を希薄にさせている）。

① 身近な生活の場から死が遠ざけられ、死を身近に見ることがない現実（死の 8

<sup>419</sup> 小松和彦 2008 『刊行にあたって；死生観研究の意義』近藤功行・小松和彦編『史の技法；在宅死に見る葬の礼節・死生観』ミネルヴァ書房、i - iii 頁。

<sup>420</sup> 辻彼南雄・高見沢たか子・ジョン・キャンベル (2011) 『国際長寿センター「看取りの文化」を考える talk 座談会』<http://www.ilc-japan.org/chojuGIJ/pdf/> (2013/2/18 日閲覧)。

<sup>421</sup> 新村拓 (2001) 『在宅死の時代；近代日本のターミナルケア』法政大学出版。

割が病院、葬儀も5割が自宅外)。

- ② 「死は無になること」と捉える人が増え、死に対する恐れが死の苦痛に向けられ、医療機関に任せることになる(結果として家族が遠ざけられた)。
- ③ 死より老後の不安が勝って、介護費用や寝たきり、終末期医療費など死ぬこと以上の恐れとなる。
- ④ 日本人の死生観を形作った死者儀礼や伝統的な宗教の地位が低下し、高齢者からも見捨てられている。
- ⑤ 浄穢の意識が希薄化した(葬祭業者が身内や近隣に代わって行う)
- ⑥ 核家族化と転勤の多い社会を迎え、先祖や親の祥月命日が早めに切り上げられる(現実の忙しさが死者の記憶を遠ざける)。
- ⑦ 遺灰を海や山にまく散骨(自然葬)など、墓標に示された象徴としての死を忌避する意識が芽生えている。
- ⑧ 自然とのふれあいが少なくなっていて、死や喪失体験を学ぶ機会が持たなくなっていること。

以上の分析結果から新村は、死の希薄化がもたらすものは、生の貧しさであることを指摘する。生に限りあることを教えてくれる死は、生をいとおしむ心を育てる。生を豊かさにさせる上で、「死の復権」が必要であると強調する。

新村の強調する死の復権は、大切な人が死に行く過程に同席することである。在宅での死の復権は、看取りの文化の復権を指しているといえよう。

諸外国と比べて日本人の死の不安は高い<sup>422</sup>。死の不安を取り除く上からも、希望する「死に場所」としての在宅死を実現するためにも、看取り文化を復権する課題は大きい。次に、在宅死を阻む要因をみていく。

### 2.3 在宅死を阻止する要因

前述のアンケートで、「死に場所」を自宅と希望する人の理由は、「住み慣れた場所で最期を迎えたい」(62%)、「最後まで好きなように過ごしたい」(47%)、「家族との時間を多くしたい」(43%)などの理由である。その人らしい生き方やその人らしさは、生活を基盤としたいろんな関係性の中で作られる。多くの人がかれまでの関係性の継続の中で最期を迎えたいと望む実態がある。

---

<sup>422</sup> 看取りの国際比較調査(中島, 2011)では、日本人は死について考える頻度(82.3%)や死の不安や恐れ(47.7%)が高く、フランス、イギリス、オーストラリアは死について考える頻度は46.4~50.0%と低く、死への不安や恐れも、フランス、オーストラリアともに、8.9~20.0%と低い。一方、「たとえ会話ができなくても、できる限り長い時間ともに暮らして看取りたい」の回答は、日本は(55.3%)で、オーストラリアは(96.5%)、フランスやイギリス、オランダともに、88.2~89.3%と高い。この結果から、看取りの時間を多く過ごしている国ほど、死への不安や恐れを感じる人は少ないということが判明する。

他方、自宅以外の場所で最後まで療養したい理由の1位には、「家族の介護などの負担が大きいから」が83.6%を占める。家族に迷惑をかけるという意識が、自宅を「死に場所」とすることの遠因となっている。このことは、家族と同居している人の方が病院で亡くなる傾向が強いという結果にも現われている（山本・朔・近藤 2003）。

その回答の背景には、「同居は、住宅事情から仕方なく一緒に住んでいるケースなどがあり、住宅の狭さは『迷惑』という理由に影響しているのではないかと、辻は指摘している。そして、在宅ケアには、看取りを可能にする住宅政策があつて、その上に、福祉制度、医療制度、医療の質があると、住宅政策の重要性が課題であることを指摘する。

一方で、医師の側の意識の問題も指摘される。最後まで住み慣れたわが家での意思を持っていても、医師に在宅では無理といわれると、入院せざるを得なくなる。家族を支える看護などの外部のスタッフの全面協力がないと、看取る方もたおれてしまうことになる<sup>423</sup>。

### 3 与論島における看取りの現状

#### 3.1 与論島の概要

与論島<sup>424</sup>は、地形的には周囲約24kmで平坦地が多い。沖縄の文化を色濃く残している地域でもある<sup>425</sup>。長寿地域の目安とされる百寿者率は、奄美群島平均は132.01人で、与論町は245.01人、伊仙町に次いで高い。65歳以上の一人暮らし老人の比率<sup>426</sup>は、一人暮らしが多い奄美群島の中でも低い。

一方で与論島には、医療機関は、総合病院与論徳州会病院（81病床）と民間の診療所パナウル病院（19床）がある。自宅から病院までは車で30分程度と近距離にある。老人関係の入院施設は特別老人養護施設と介護老人保健施設がそれぞれ1か所ある。

#### 3.2 自宅死の継承と与論神道

##### 3.2.1 与論島における死

与論島での在宅死の高さを明らかにしたのは近藤で、全国の在宅死が20%だった1990年初めにおいて、与論町立国保診療所の自宅死亡者が94.9%であることを明らかにした<sup>427</sup>。現在においても、総合病院をはじめとした医療体制が整っているにも関わ

<sup>423</sup> 辻彼南雄ら『国際長寿センター「看取りの文化」を考える talk 座談会』

[http://www.ilcJapan.org/chojuGIJ/pdf/\(2013年2月18日閲覧\)](http://www.ilcJapan.org/chojuGIJ/pdf/(2013年2月18日閲覧))。

<sup>424</sup> 与論は、別名、パナウル王国という名を持つ。観光客誘致で1983年に建国された。

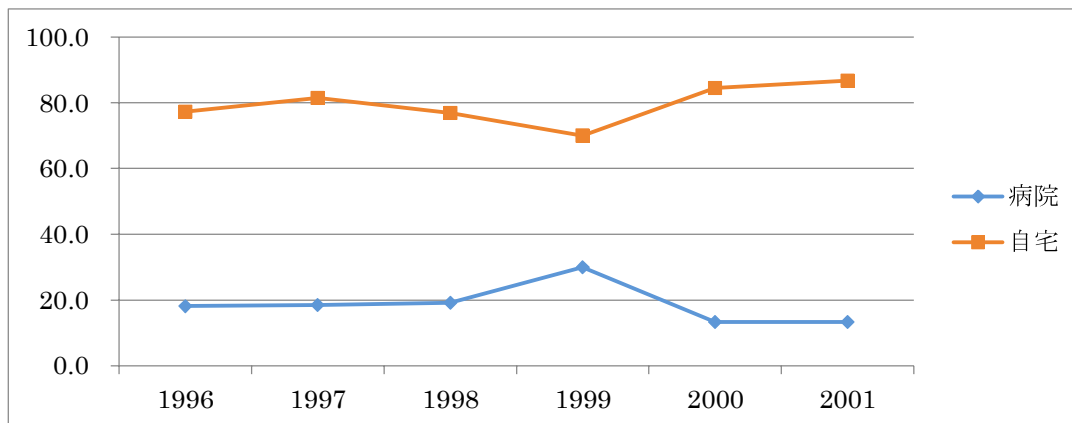
<sup>425</sup> 奄美群島は、琉球の影響の強さで奄美大島（加計呂麻島、与呂島、請島含む）、喜界島、徳之島の群島北部と、沖永良部島、与論島の南部に区分される。シマ唄の音階や踊りに差異があり、南部は地理的影響や早くから琉球王朝の統時下になったことが関係しているのではないかと指摘（稲野，2008）。

<sup>426</sup> 群島平均の高齢者の一人暮らし24.5%であるが、与論は13.9%と低い（奄美群島の概要 H22）。

<sup>427</sup> 近藤功行（1997）「高齢者の生と死：与論島における在宅・終末期ケア」松井政明・山野井敦徳・山本

らず、8割が在宅死で死を迎えていることを明らかにしている。

図表 9-2 与論島における死の場所の状況



その背景について近藤は、1 つに、つい最近まで土葬・洗骨の葬法の儀式の変化が少なかったことと、2 つに、琉球文化圏に見られる固有の強い死生観の残存をあげる。死に場所は自宅の畳の上で死ぬのが通常の在り方で、自宅外での死が忌嫌われる与論島の伝統的な死生観・宗教観が在宅死に大きく関わっていると指摘する。

与論島の人々は、死の直前には何としても自宅に連れ戻す努力をする。自宅外死亡の場合は、「ヌジファ儀式」という魂を死亡場所から自宅へ呼び戻す抜魂儀式を行なうことになる。病院では、入院患者の血圧が 80 を下回り、死が避けられないとなると最低限の処置をして看護師が同伴し、時には医師が同伴し、自宅へ帰る。

施設入居者も死が近づくと、施設職員が車で送る。沖縄の病院でも、与論出身者と分かると、できるだけ自宅に戻れる努力をする。たとえつかの間でも、自宅に帰り、住み慣れた自宅で、家族や親せきに看取られて亡くなる。住民の根強い習慣が脈々として受け継がれているのである<sup>428</sup>。

### 3.2.2 与論神道

このような在宅死が継続してきた要因に、与論神道がある。与論島は魂の島といわれ、人々の口から魂ということが普通に語られる。亡くなって 33 回忌を経た人はカミサマとなる。日常生活の中に、亡くなった人とともに生きているという意識がある。与論島の人々が在宅死を選ぶのは、毎日の祈りの中でつながっている先祖のいる場所

都久編『高齢者教育論』東信堂、97 頁。

<sup>428</sup> 近藤 2008 近藤功行 (2008) 「与論島の自宅死亡」『死の技法：在宅死に見る葬の例節・死生観』近藤功行・小松和彦編、ミネルヴァ書房。

で、先祖のいる場所で死にたいという思いを強く持っているのではないと思われる。

与論島では仏壇がある家を探すのは難しい。屋内で先祖を祀る役割は神棚が担っている<sup>429</sup>。神棚は床の間の一段高い所の空間に社殿を模した祠が祀られている。その中央にある鏡が「イペー（位牌）」とされる。仏教形式の位牌や戒名はないが、神棚には蠟燭と線香が供えられている。神仏混合となっている。

与論島の人々は、神棚に祀られている先祖のカミを始めとし、多くのカミサマを祀っている。毎日、朝晩2回、それらのカミサマにお茶やお水をあげ、声を出して祈る慣習がある。亡くなった人の月命日はミジヌパチ<sup>430</sup>を行う。命日には亡くなった方の好物や煮もの白いお餅も供えられる。

祈りの言葉はその家の女性から女性に伝わっている。毎回、敬語で声を出してなされるのが一般的ある。誕生日や成人、還暦等の家族内でのささやかな祝い事や正月などといった節目には、神棚に家の主が代表して子や孫や家族、親せきが皆健康で元気でいられるようにと祈る。

図表 9-3 Eさん宅の神殿



出所：筆者撮影

図表 9-4 Iさん宅の神殿



出所：筆者撮影

### 聞き取り事例

Aさんの祈る神様は、先祖の神、火の神、水の神、海の神、福の神、屋敷の神で、家の全てのカミサマにお水を取り換え祈るので、1回20分、1日40分をお祈りの時間に使っていると話す。また、朝起きた時にまずすることは、神棚のある床の間の部屋の雨戸をほんの少し開けて、外からカミサマが入って来られるようにすることと話す。

そのほか、Iさんは、「声を出してお祈りします。子や孫が120歳まで長生きできますようにと祈ります」。Kさんは、「先祖への思いは、先祖の名前を子どもに名づける習慣<sup>431</sup>にも現われています」と語った。

## 4 与論島での在宅死の継承要因

<sup>429</sup> 町健次郎 (2008) 「与論島における家と死生観」(近藤功行・小松和彦編『死の技法：在宅死に見る葬の例節・死生観』ミネルヴァ書房、9-20頁。

<sup>430</sup> 島の言葉で家に関わる死者の命日祭祀のこと。

<sup>431</sup> ヤーナ(家の名、幼名)と呼ばれ、本名とは別に、徳のある先祖の名がつけられる。長寿者が多いという。

#### 4.1 土葬・洗骨の葬法の堅持

与論島に火葬場が完成したのは2003（平成15）年である。他と比べるとずいぶん遅い完成である。1973（昭和48）年当時に、与論町役場が全世帯アンケートに火葬場ができた際の利用の有無について聞いているが、その時点では約60%の人が利用すると回答している。

実態として、これまで火葬を希望する人は、隣の沖永良部島まで遺体を輸送している。当時、与論島の火葬場建設が遅れた理由に、土葬・回葬という葬法の踏襲を強く希望する人々の死生観と、周囲が24kmで山林面性が少なく火葬場という遺体処理の空間の確保が難しかったことが大きいとされる<sup>432</sup>。



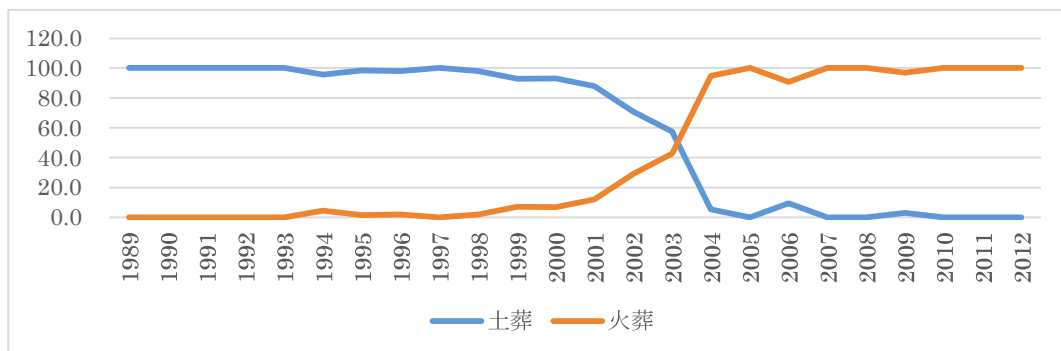
図表 9-5 墓地（土葬・ガンブタ）

出所：筆者撮影

図表 9-5 は、世論島独特の「ガン」と呼ばれる小さな家形式の墓。掘られた穴に埋葬され、その上にガン蓋が置かれ、故人ゆかりの品が並べられる。3.4年経つと洗骨改葬を行う。

しかし、近年は、図表 9-6 のとおり、火葬場完成によって土葬の割合は極端に減少した。加えて、自分たちで行っていた葬儀も、2011年5月に初めて葬祭業者ができ、これまで自宅で行っていた葬儀も変わってきた。

図表 9-6 土葬と火葬の割合



近藤(2008)に与論町から得たデータを加え筆者作成、

与論では、先祖は神棚に祀り、仏壇や戒名はなく、中央に先祖代々の鏡がある。神棚の中央に鏡が配置され、線香が供えられている。祈りの言葉は、女性から女性へ

<sup>432</sup> 町(2008)前掲書。

引き継がれる。与論では、最近まで土葬の習慣があった

## 4.2 相続と家制度

与論島には独特の家の相続制度がある。与論島の農家相続には、家の継承と遺産の相続、承継者の同居による親の扶養という聖俗原理の一体化が見られ、戦前・戦後を通じ目立った変化はない<sup>433</sup>。

その特徴は「親持ちダマシ」と「バシャタイ<sup>434</sup>」で、「親持ち」は跡取り息子または跡取り娘のことで、家督の中から家屋敷を含め親持ちが特別に相続するのが「親持ちダマシ」である。一方、「バシャタイ」は娘の相続分をいい、「親持ちダマシ」と「バシャタイ」をあらかじめとった残りを男子間でほぼ均等に相続する慣行である（玉城、前掲書）。

## 4.3 家制度についての聞き取り事例

### ① Kさん 83歳（女性）

今でもありますよ。家持ちダマシは、家を守ってくれる長男に全遺産を譲ることで、他の子どもたちは財産のことで争い事はしないよ。与論の子は、心穏やかだから。自分たちは帰れる場所を守ってくれるから。

バシャタイは、昔は10a程度の畑をもらっていたけど、今はお金を渡す場合が多い。畑をあげるのは、嫁いでも食べ物に困らないようにという配慮。万が一、嫁ぎ先から出戻っても住む家が建てられるようにという意味もある。

### ② Hさん 60歳（女性）

私の場合は、バシャタイはお金でもらった。信仰している先生から、両親の土地がいいけど、先祖の土地を嫁ぐ人が貰うのはいけないと言われたから。

このような家制度は、今でも与論で残っている慣行である。この相続制度によって親は安心して療養できる居場所が確保されている。加えて、住宅の構造も在宅死を継続させている。すなわち、療養に専念できる部屋の広さがある。療養時は奥の部屋で、いよいよ死が近づいた時には表の広い座敷で、いつでも近所の人が訪ねて来られる部屋に移動するようになる。序々に、迫る死への準備がなされていくのである。

## 4.4 医療機関の支援

与論島で在宅死が継続されてきた要因には医療機関の協力は大きく、住民の在宅で畳の上で死ぬことを強く願う与論神道を医療機関が理解してきたことによる。

<sup>433</sup> 玉城隆雄（1980 9 「与論の家族；朝戸部落の事例を中心に」『与論・国頭調査報告書：地域研究シリーズ NO.1』沖縄国際大学南東文化研究所、63-73 頁。

<sup>434</sup> バシャタイの言葉は、芭蕉の布からきている。



与論島に赴任した医者は、まず、住民の延命治療への希望の低さと、終末期になると本人の希望や家族の決断で自宅に戻り最後を迎える状況にショックを受ける。その様子は、与論の在宅医療を支えているパナウル病院のK医師を取材して紹介されている<sup>435</sup>。

家族の側も在宅療養では、痛み止め以外は人工的な特別の措置を望まない。もっとも、島では痛みを訴える患者は少ない。モルヒネなどの鎮痛剤を使わない人もいる。「家にいることで、心の奥にある精神的な宇宙のようなものが癒され、肉体の痛みも和らぐのではないかと K 医師は話す。医師は、毎日様子を見るために患者宅を訪問し、家族を安心させる。医師法上の検視の問題を回避するためでもある。

総合病院（81床）の徳州会与論病院には現在でも霊安室はない。院長の S 医師はじめスタッフも、与論島の看取り文化を継承すべきという考えが支えている。今でも、「急に亡くなったり、身寄りがいない患者もいるので 100%ではないが、約 8 割は自宅で亡くなる」と語る。

#### 4.5 移動しやすい島の規模

これらを可能にしているのは、非常時に対応しやすい島の大きさと人口規模である。与論島は周囲約 24km の広さで、平坦地が多い。医療機関から車で 30 分程度に全ての自宅があり、この距離や地形が毎日の訪問診察の負担感を少なくし、在宅での療養を可能にし、非常時の自宅への搬送を可能にしてきたといえる。

一方で変化も起こっている。近年、在宅療養の期間が短くなり、大半は病院から自宅に戻って 1 日程度で亡くなっている。その背景には、女性が外に働きに行くようになったことがある。以前は、大島紬などの機織りで、自宅で仕事をしながら介護することが可能な環境があった。しかし、今日の療養の場は病院と化している。

## 5 考察

### 5.1 看取り文化継承の要因

与論島の自宅死の高さ、看取りの文化を支えてきた要因は次のようにまとめられる。一つ目に、与論特有の信仰としての与論神道の存在である。人々は毎日の祈りの習慣によって、先祖とのつながりを強固にし、生者と死者がともに生きている世界観が形成されている。それゆえ、我が家での死が先祖とつながり、死後の世界で先祖になるための出発点として捉えられる。畳の上で亡くなることを頑なに願う伝統的死生観が形成されているのである。

二つ目に、高齢者が在宅療養や自宅で死を全うできる支援制度として、与論島独特

---

<sup>435</sup> 稲野（2008）前掲書、31頁。

の家の相続制度がある。安心して自宅で看とってくれる子どもが存在し、死を迎えられる家の空間と構造ができていることである。

三つ目に、与論神道や習慣・伝統を理解し、それを支える医療機関側の協力がある。自宅での死の継続においては、当事者の思いに応え協力してくれる医療機関や施設の支援は欠くことができないものである。加えて、在宅診療を可能にし、急変時に自宅へ搬送できる島の環境が挙げられる。施設から 30 分以内にそれぞれの自宅が存在することは自宅死の継続を可能にしていた要因である。

四つ目に、看取りの文化が地域で共有されていることによって、家族や本人が死に際する不要な医療行為を排除し、穏やかな死を看取る知識が形成されている。

## 5.2 継承システムの機能

与論の自宅死の高さは与論特有の信仰を基層としながらも、さまざまな要因が上手く機能しながら継承されている。すなわち、他の地域で在宅死が実現できない要因として、①住宅の狭さ、②看取りの知識、③信頼できる介護者の存在、④地域医療の支援が指摘されている。これを与論島の現状に置き換えると、①住宅の狭さの問題は、与論特有の家制度及び住宅構造によって解決されている。②看取りの知識は看取り文化の継続によって地域の人々の間で共有されている。③信頼できる介護者は家制度によってあらかじめ決められている。④医療機関の支援は住民の強い信仰・慣習を叶える形で、長年の慣習の中で構築されている。

自宅死を拒む 4 つの障壁は、与論島特有の慣行とシステムによって解決されているのである。一方で、近年与論島においても、高い自宅死は保持しながらも療養の場が自宅から病院に移行してきている傾向が明らかにされた。

しかしながら、与論島では、たとえつかの間でも、自宅で大勢の家族や親せき・近隣に見守られ死を迎えられる環境がある。超高齢者の語りからは、死にゆく人を看取る体験を通じ、死への恐怖を超え、死者との一体感を醸成し、そのことが精神的安寧につながって、超高齢期の暮らしを生き生きとさせている。

中村は、「死にゆく者」は何かをくする **doing**> 存在ではないが、ただそこにくある **being**> 存在によって、我々は生命体としての根源的なつながりを得ることができる。くある **being**> ことによってしか見えてこないものは、現在に必要なとされる幸福感なのではないかと論じている<sup>436</sup>。

与論島の人々は自宅死や看取りの慣行を通じ、死は無に帰すのではなく死後先祖になって子や孫が見守る役割があること。そして、自分の死後は自分が先祖を祀ってき

<sup>436</sup> 中島民恵子 (2011) 「終末期、看取りについての国際制度比較」国際長寿センター『日本の看取り世界の看取り：在宅看護・医療と見取りに関する国際比較研究 summary』  
[www.ilcjournal.org/study/doc/summary\\_1001.pdf](http://www.ilcjournal.org/study/doc/summary_1001.pdf)(2013/2/10 閲覧)。

たように子や孫が大事に祈ってくれるということが、核心となっている。安心して死ぬことは安心して生きることで、超高齢者の精神的次元に幸福感を深め、長寿につながっているとと言えるのではないかと考える。

## 6 おわりに

施設ケアから在宅ケアへの移行は、医療費の増大・施設の限界というネガティブな目線ではなく、最後まで住み慣れた自宅ですごしたいと願う人々の「死に場所」と、実際の「死の場所」が一致する支援である。自宅で看取ることのできる在宅死は、最後までその人らしさを支える原点と言えよう。

病院死における生の最後の視野に集中治療室に閉じ込められ、慌ただしい中で医者の機械的な姿をみて終る死がある一方で、愛着のあるわが家で家族に囲まれ看取られて終わる死がある。死にゆく人にとっては、「家族のために働いてきた自分の人生が間違っていなかった」ことを確認できる場でもあり、家族の絆を確認できる場でもある。

加えて、身近に大切な人が死に行く過程に同席する自宅での死は、残された人にとっても生に限りあることを教えてくれる大切な教えでもある。残された者に、有限な生をいとおしむ心を育て、生を豊かにさせることにもなる。

与論での葬儀には、シマの人のみならず、島中が参列する。一般的には、2,300人が普通という。亡くなった人の最後には手を合わせることは暮らしの行事の中でも大切にされている習慣である。

このような習慣は、死を意識する超高齢者にとっては自分の最後に安心をもち得る要素となろう。長生きを楽しみ、死を恐れることなく安寧の中で暮らせるのは、看取りの習慣の意義は大きい。

一方で、儀式の場は地域の絆を深める大切な場でもある。与論には、老いと生、死と生がしっかりと結びあい、お互いに交信しあう関係性がある。そこに、長寿と幸せな老いの原点が感じられる。

## 終章 地域コミュニティにおける長寿と幸福な老いの課題と展望

### 1 はじめに

本研究の対象とする 85 歳以上の超高齢者は、身体機能の衰退や要介護リスク、認知症リスクの高まる絶望の時期として、捉えられてきた。超高齢者の心理適応や幸せな老い（サクセスフル・エイジング）の研究も少ない状況にある<sup>437</sup>。したがって超高齢者の潜在能力に注目し、その存在を地域の財や資本としてみる研究は見当たらない。

これまでの長寿研究は、医学的視点から遺伝子や食生活、生活スタイルなど個人の長寿要因に注目してきた。他方、地域要因に着目した長寿の研究となると稀有で、筆者以外の研究では見当たらない。

筆者は、健康長寿者の多い地域には長寿を実現する地域要因や支援要因があるのでないかとの仮説を立て、健康長寿者を多く輩出している地域に注目して、学際的視点から、実証研究を積み上げてきた。

その実証地として、長寿者の多い奄美群島を選定した。奄美のシマの伝統的コミュニティと超高齢者に注目し、地域固有の自然や歴史、祭りや伝統行事、相互扶助の習慣や信仰など、奄美のシマのコミュニティ特性と超高齢者の役割に焦点を当てた。超高齢者の人間発達と長寿を支援する地域要因を解説するためである。そのために、老年学や心理学、社会学、経営学、文化経済学や民俗学などの学際的手法を用いて考究してきた。

その結果、長寿地域奄美のシマでは、老いることがポジティブに受け入れられる風土があり、そのようなコミュニティ環境では、超高齢者は経験や叡智、超越等の潜在能力を開花させる役割と居場所がある。また、奄美のシマには、超高齢者の生活の基盤となる経済資本と、超高齢者に内在する文化資本との相互連環・交流がある。それらは、文化資本を活かした地域経営といえるシマの社会経済システムを形成することが明らかにされた。

本研究に通貫する主張は、これまでのネガティブな超高齢者論に対峙するものである。本研究は、超高齢者を地域の伝統文化や技、ノウハウなどの潜在能力を内在する存在として注視することの重要性と、長寿地域には超高齢者の潜在能力を活かし長寿を支える地域経営が機能していることを明らかにする。さらに、今後進展する長寿・超高齢社会において、地域の文化資本を活かした地域経営が社会保障費の軽減につながり、健康長寿のまちづくりに貢献する方策であるということを実証したことである。

---

<sup>437</sup> Baltes, P.B. & Smith, J.(2003) New frontier in the future of aging ;From Successful Aging of the young old to the dilemmas of the Fourth age, *Gerontology*, 49, 123-135.

## 2 本研究の構成

本研究は、これまでの京丹後市での長寿研究の結果を踏まえ、同じように長寿を形成する奄美のシマを対象地として、実証研究を踏まえ、学際的視点から長寿と幸福な老いについて考究した。

本研究は、超高齢者が有する潜在能力に光を当てたものである。超高齢者の経験や潜在能力は、これまで評価されず、むしろ、支援コストのかかる対象としてネガティブに評価されてきた。しかし超高齢者、文化資本を体化させ、地域社会・経済・文化に寄与している。さらに進んで、超高齢者の能動的・主体的行為が地域の新たな文化や経済に寄与する可能性も少なくないことについて、文献調査やフィールド調査、インタビュー調査、アンケート調査から実証した。

序章では、長寿・超高齢社会における人間発達と地域コミュニティアプローチとして、奄美の超高齢者と奄美の伝統的共同体を基盤とするシマに注目してきた。本研究の新規性として、学際的視点からの長寿の地域要因の実証、潜在能力アプローチの有効性、経済資本と文化資本の相互連関、長寿多子化傾向の解釈を全体目的とすることを論じてきた。

第1部の理論編において、第1章では、本研究に通貫するポジティブな超高齢者観の理論的根拠として、超高齢期に対する人間理解の枠組みを明確にした。特に、超高齢者は機能低下や衰退の時期としてネガティブに捉えられる一方で、幸福感の増大や精神的発達がある点にも注目した。これらは、超高齢者の老いや死の受容からくる心理・精神的な適応として示され、超高齢者は、前期・後期高齢者と異なる心理適応があることが明らかにされた。

第2章では、「老年的超越理論」を用いて、超高齢者のポジティブな心性を整理した。

特に、超高齢者の人間発達と脆弱な身体に適応し幸福な老いを実現する要因について、老いに伴う発達に焦点を当てた老年的超越理論から考察することによって、超高齢者のポジティブな心性と老いの成熟の多様な側面が明らかにされた。これらから、奄美の超高齢者の幸福感を紐解く理論的基礎が提示された。

第3章は、奄美における文化資本を活かした地域経営と社会経済システムの機能を解説するために、キーワードとなる地域経営や社会経済システムの概念定義を行ったうえで、奄美の長寿を実現している内部の諸要因を明らかにした。特に、祭りや伝統行事を継承してきた奄美のシマの伝統的共同体の機能に注目する意義、そして、都市コミュニティの崩壊の中で、伝統共同体のなかにあるつながりやきずなの今日的意義、祭りが継承されている長寿地域での地域経営の持つ意味、さらに、長寿・超高齢社会に対応した健康長寿のまちづくりが模索されるなかで、奄美のシマのモデルとしての可能性について言及した。

第2部では、翻弄され、抑圧された奄美の歴史やその成り行きを紐解き、現在の奄

美の人々の寛容性ともいえる精神的大らかさの原点を明らかにした。

さらに、奄美の辿ってきた歴史から形成されたシマの暮らしにある伝統行事や習慣に密着し、超高齢者の幸福感の醸成に関わる文化資産について、民俗学的視点からも学びつつ、掘り下げた。そのなかから、奄美のシマに残る祭りや伝統行事などの文化資本の役割や結いの習慣などが、奄美の社会関係資本を豊かにし、実質所得だけでは測れない幸福度を高める要因として機能することが明らかにされた。

第4章では、奄美の辿ってきた特異な歴史と人々の精神的次元に焦点を当てた。奄美の歴史を辿ることで、搾取された奄美の人々の精神世界が理解された。

そして、祭りや伝統行事は過酷な労働を生きる力に変換し、人々のエネルギー源として機能していった歴史や、極貧のなかで乏しい食料を分け合い、命をつないできた結いの基盤が明らかにされた。奄美では過酷な自然・歴史のなかで、先祖の知恵と技が引き継がれ、自然と共生する生活が健康長寿を形成していることが明らかにされた。

奄美群島の特性をまとめると、4つの軸に集約される。4つの軸とは、①歴史・自然環境軸：翻弄された歴史・自然の恵みと厳しさを伴う環境下での暮らし。②経済・生活軸：本土との所得格差が大きく経済的には貧しい生活環境であるが生活満足度の高い暮らし。③伝統文化と祈り軸：ゆったりとした生活時間と祈りの習慣の中で、超高齢者は伝統行事・祖霊行事を次世代に継承する役割をもっている。④長寿軸：生きる目標があり、長寿が喜ばれる風習である。これらの4つの軸から、奄美の超高齢者の長寿と幸福感を形成する要因が見えてきた。

第5章は、奄美のシマの豊かな伝統文化と超高齢者の役割をテーマにした実証編で、奄美における自然資本、文化資本、社会関係資本の実際について、フィールド調査やアンケート調査、インタビュー調査から明らかにした。

奄美のシマの生活には、今も祈りの居住空間があり、自然を崇めるアニミズムの世界が残っていること。暮らしの中に祈りの世界があり、カミ山、カミ道、行事の際の祭場や祈り場があること。人々は月に2回の墓参りと毎日のお祈りのほかに、女性は健康祈願の祈りの場として各自が聖なる泉を持っているなどが明らかにされた。

これらは、厳しい自然の中で生きていくための知恵として、今も継承されている。また伝統行事の豊年祭や八月踊りは、日常の「ケ」から非日常の「ハレ」の行事となって、1年のエネルギーを蓄積する場であり、なかでも超高齢者は儀式や技を伝える役割の場が用意されている。豊年祭は先祖への感謝と収穫に対する感謝祭でもあり、年長者を大事にする習慣の中で超高齢者は特別の席と食事がふるまわれる。

さらに、年齢に関する伝統行事、年の祝いは奄美独特の行事であり、長寿を祝う歌が今も歌われていること。祭りや伝統行事は、シマの人々の共同行事として、お互いの無事と豊作に感謝する、楽しみの場として機能していた。超高齢者は、このようななかで、さらに長生きを目指すエネルギーが醸成されることが明らかにされた。

第6章は、現在の奄美のコミュニティの「場」が、超高齢期の幸福感にどのような影響を与えているかを分析した。伝統行事や習慣、信仰を中心とした暮らしや、超高齢者を支援する奄美の集落や地域の取り組み、そして現代版の結いの機能の実際に注目し、奄美の「場」と「場所の意志」から超高齢者の主観的・客観的満足感の連関を明らかにされた。

加えて、集落の区長へのアンケート調査からは、奄美の集落の紐帯の強さ、伝統と習慣の継承の高さ、社会関係資本の豊かさ、高齢者評価の高さ、健康長寿者の多さが明らかにされた。クロス集計の結果を $\chi^2$ 検定した結果からは、老人クラブの加入率の高さと集落の高齢者の活動の高さ、集落の紐帯の強さ、集落行事の多さ、集落の伝統行事の継承などと、統計的に有意に関連することが明らかにされた。このことは超高齢者の活動が、集落の紐帯の強さや伝統行事の継承に大きな力を発揮しているということである。

シマの現代版結いの機能からは、超高齢者の自立を支えるシマの人々や制度、敬老の習慣、そこから超高齢者の幸福な老いの姿が明らかにされた。奄美の超高齢者は年金収入を基盤としながらも、現物経済が機能し、これらは現金収入が少ないなかでも幸福感を高める要因となっている。現物経済は、生存をお互いが支えると同時に、支えあいを通じた心の交流が利他の心を育て、幸福感につながっていると考えられるのである。

さらに、超高齢者は支えられる存在ではなく、先祖から引き継がれた文化資本を次世代へ継承することを通じ、シマの創造的な発展に貢献する存在でもあった。奄美のシマには、現役世代からの年金や子どもや行政からの長寿祝い金などを受け取りながら、一方で、超高齢者の持てる叡智や文化資本を次世代の安心や地域づくりに生かす社会経済システムが機能していた。

このようなシマの地域性と超高齢者の自立が相乗効果で、長寿を実現する地域経営となって機能していることが明らかにされた。

第3部は、3章構成で、超高齢者の老いと文化をテーマにし、超高齢者へのインタビュー調査やアンケート調査から構成されている。

第7章は、奄美の超高齢者の老年的超越意識についての量的調査を、高齢期との比較も加え、SPSSで分析したものである。暮らし向きや行動能力、心理適応、老い観、そして、老年的超越については筆者の老年的超越尺度を用いて実証した。その結果、超高齢者の高い生活満足感と高い地域愛着度などが明らかにされ、健康な超高齢者は100歳をめざしていることが浮かび上がってきた。老年的超越の因子分析からは、老年的超越は、宇宙的超越、自我超越、執着の超越の3つの下位次元から構成されていることが明らかにされた。執着の超越は、北欧では見られなかったもので、日本特有の文化に起因するものと考えられる。

これらの結果からは、ネガティブな超高齢者観を否定し、身体能力は衰えながらも老いと共存しながら、満足感の高い暮らしを実現している実態が明らかにされた。

第8章は、奄美の超高齢者の長寿と幸福な老いの語りの結果である。分析手法は、分析の最小単位概念をつくり、概念をカテゴリー化してコア概念を明らかにしていく M-GTA 法を用いて行った。その結果からは、老年的超越の下位次元として3層構造モデルが明らかにされた。最下部には人格形成基盤の次元、日々の営みの次元、そこから精神世界につながる次元である。中心部の日々の営みの次元には、「目標は100歳」というコアカテゴリーが導き出された。

この背景要因には、＜確立した生活スタイル＞を継続し、自分に合った＜自立生活＞を営みながら、＜できるものなら100歳を生きたい＞と思っている。そのために、＜工夫された日常生活＞や＜ポジティブな人生観＞、＜社会とつながる行為＞がある。超高齢者はシマの祭りや伝統行事の継承、敬意意識、近隣、家族の絆に支えられたコミュニティを基盤にしながらか、ひとり暮らしでもさみしさを感じない生活が営まれている。

超高齢者が到達していく世界では、「目標は100歳」という長生きを楽しむ生と向かいあいながら、「老年的超越」が形成されていく。老年的超越の次元は、第7章の量的調査から明らかにされた3つの下位次元を追認するものであった。奄美の超高齢者の目標は100歳というポジティブな側面は、社会関係資本が重層し、豊かな人間関係のみならず、自然や文化を媒介とした繋がりがその要因であることが明らかにされた。

第9章は、与論島における在宅死と看取りの文化についての質的調査である。奄美は、『文芸春秋』2014年5月号で全国の在宅医療充実度ランキングで第1にランクされている。その象徴的な島が機能与論島である。病院死が8割を超える日本において、入院できる病院（81床）がありながら、与論島は逆に自宅死が8割を超えている。その要因を分析している。

与論島での在宅死の継続要因として、畳の上で死ぬことがまっとうな死とする与論神道の存在と、それを支える医療機関の支援、在宅死を実現している家制度や住宅環境、非常時に対応しやすい島の大きさと人口規模が明らかにされた。与論島の人々の自宅死と看取りの慣行は、全国的に、施設ケアから在宅ケアへの移行が政策的に進められる中で、最後まで住み慣れた自宅で過ごしたいという人々の願いに叶っていると思える。安心して死を迎えられることは安心して生を全うできることを与論の事例は示していた。

最終章では、以上の理論・実証研究から明らかにされた長寿と幸福な老いの課題と展望を示している。



### 3. 明らかにされたことは何か

#### 3.1 奄美の文化資本を活かした地域経営の解明

以上の考察を通して明らかにされたこととして、次の4点をあげることができる。

一つ目は、奄美の超高齢者のポジティブな老いの背景にある地域のコミュニティと経営のあり方である。超高齢者を包摂しながら持続可能なコミュニティを形成しているシマのコミュニティ、さらには超高齢者の長寿と人間発達を支える長寿地域の地域経営ともいえる、文化資本を活かした地域経営の実態が明らかにされた。

加えて、地域での役割や信頼感などの「つながり」意識が、超高齢者の存在意義や潜在能力を高め、精神的次元にも安寧をもたらす効用となる。このことは、地域とのつながりのなかで老いることの重要性が再認識される。

また、長寿の地域要因を解説する試みは、これまでの長寿研究にはない視点であった。本研究から、幸福な老いを実現するうえで地域の環境づくりの重要性が理解される。加えて、地域での祭りや年中・伝統行事の継承や、地域での超高齢者の潜在能力を活用する有効性が考察された。現代における結いや知識結いに焦点を当てると、多世代の交流を目指した新たな地域再生と健康長寿のまちづくりを創造する上で有効となる。

#### 3.2 奄美の健康長寿のシステム構造の解明：経済資本と文化資本の再分配

二つ目は、奄美の地域コミュニティと文化的経営と深く関わり健康長寿につながる社会経済システムである。奄美の長寿を実現しているシステム構造は、経済資本の軸と教育・文化にかかわる軸からとらえることによって、文化資本と経済資本との関係が解明でき、文化資本の影響を受けて、経済資本にも変化が現れることが明らかにされた。

文化資本の軸として、超高齢者の人生体験から獲得された「目にみえない文化資本」から、祭りなどの文化的伝統が伝えられ、次（現役）世代はこれらの文化的伝統を創造的に発展させる場が提供される。同時に、経済資本の軸から見ると、超高齢者がこのような機能を発揮しうる経済的な基礎は、国民年金制度や医療保険制度である。

これらの制度によって超高齢者は衣食住、移動、交流などの機会を活かす経済力を得て文化の再分配システムを機能させていた。文化の再分配システムは、現役世代の所得を生み出す基礎となり、さらに経済資本を生み出すという循環が生じる。

奄美には、超高齢者層が地域コミュニティにおける文化を再生産する担い手となり、次世代との学びあい・育ちあいの中で文化資本が継承され、創造的に発展していく姿があった。地域コミュニティにおける超高齢者層の文化資本と経済資本の総合的考察を通じて、地域再生の展望を実証的に解明することができた。

### 3.3 都市と農村における社会保障システムの相互連関の考察

三つ目は、超高齢者がこのような機能を発揮しうる経済的な基礎としての社会保障制度、すなわち国民年金制度や医療保険制度である。年金積立などは現役世代からの超高齢者への所得の再分配が行われ、超高齢者にとっては少額であっても、衣食住、移動、交流などの機会を活かす経済力となるのである。

同時に、都市部における人権や学習社会に向けての動きは、工場法などの成立を契機に社会権が確立に向かい、すべての市民を対象とする社会保障制度を生み出し、このシステムが農村部や地域コミュニティにも普及し、人権、学習権、生存権、営業権などを支える近代的システムとして定着した。

都市高齢者の成果の上に、新たなシステムは全国・農村部にも広がり、地域コミュニティにおける高齢者の経済基盤の一つとなったのである。

本結果からは、地域コミュニティにおいて超高齢者層の文化資本と経済資本の相互連関・交流が明らかにされるとともに、都市と農村における社会保障システムとコミュニティの再生・持続的発展へのつながりが考察可能となったのである。

### 3.4 奄美の長寿多子化の要因の解明

四つ目は、健康長寿者の多さと同時に、高い出生率を実現している奄美の文化的要因である。その要因を、経済資本に還元できない奄美のシマの豊かな資本に求め、自然・風土、伝統文化、習慣・信仰、結い・知識結いなどのコミュニティ特性から解明することができた。

奄美の長寿多子化を実現している要因は、固有の伝統文化を内在するシマの共同体コミュニティから育まれた、幸福感を醸成する伝統的心性ともいえる「大らかさ」である。奄美の人々のこのような幸福への価値観は、従来の経済学の「効用」を最大化して行動する物的資本の経済資本ではなく、奄美の固有価値を形成する自然資本、文化資本、社会関係資本の3つの資本から成り立っているということである。

これら3つの資本によって超高齢者の潜在能力は引き出され、長寿を尊び「子どもは地域の宝」の価値観が形成される。近隣の支援環境のなかで、超高齢者にとっても老年的超越を形成する幸福な老いと長寿に導かれ、子育て中の母親にとっても安心して暮らせる環境となって、長寿多子化をもたらしている要因となる。

## 4 全体的考察

安心して長生きできる健康長寿のまちづくりには、経済資本だけでなく、その地域が歩んできた歴史、自然、社会環境、地域固有の自然資本、文化資本、社会関係資本に着目することの重要性が確認された。

とりわけ奄美では、第二次大戦後の苦難の歴史体験が全国的な人権法システム、そ

して、社会保障制度の発展の中で、個と共同のバランスのとれた地域コミュニティの基盤をシマの人々は創造してきた。地域での厳しい抑圧や弾圧、台風・ハブなどの災害の影を背負いながらも、地域コミュニティの伝統文化を守り、産業や生活を創造的に進化させる地道な努力を重ねてきた。

これらの努力は、戦後の民主主義、法体制の下で開花し、奄美の人々に光を放ったのではないかと感じた。さらに、「法や制度を生かす“守る人権”」基盤だけでなく、地域コミュニティにおいて「伝統文化や技を、暮らし・事業おこしのなかで、継承しつつ、創造的に発展させる“攻めの人権”」を持続的に発展させてきた。これら伝統文化や年中行事、民俗芸能、習慣が超高齢者の長寿と幸福な老いに起因する要因であることは十分に確認された。

一方、超高齢者に着目すると、超高齢者は生きる叡智を持ったゆえに命を長らえている存在でもある。伝統文化の語り手として広く畏敬され、年長者を敬愛する習慣につながっている。このような超高齢期の生き方を支える要因には、命の連続性を意識した質の高い地域の信頼感の構築が注目される。奄美のシマに機能している祭りや伝統行事、結いや知識結に象徴される相互扶助のコミュニティ、カミや先祖を懇ろに祀る信仰・習慣が強固に残っていることが、人々の心を耕し、きずなを強めていた。

つまり、日常の生活の中にある自然と共生する営み、固有の伝統文化が継承された営み、子や孫、近隣、そして先祖とつながるコミュニティの営みが、超高齢者の有用観を高め、健康長寿と幸福な老いに寄与する要因である。そして、先祖を大事にする習慣は、超高齢者に自らの死後においても家族が祀ってくれるという安心感が醸成される。死を安心して迎えらるる環境は安心して生を全うできる要因でもあろう。

このように、民俗学や文化人類学の視点からみると、共同体が長寿を支える要因であることは明らかとされ、奄美の長寿と幸福な老いの実現には、シマのコミュニティの支援と超高齢者の役割意識が相乗効果で実現しているのである。

日本の近代化の過程で失った伝統的共同体が持っていた豊かな社会関係資本の重層性は、長寿の時代を生きる今日の人々が最も希求していることでもある。年金や医療などの社会保障制度の中で、経済と健康の生活基盤を得た超高齢者の内在する文化資本を生かし、現役世代の経済資本を活用しながらさらに長生きと幸福な老いを創造する。

## 5 課題と展望

### 5.1 残された課題

最後に、残された課題をあげたい。一つ目に、本研究から明らかにされたのは、奄美におけるシマの信頼やきずな、結いの習慣などの社会関係資本の重層性であった。これらは、日本の近代化の過程で失ったものであるが、長寿の時代を生きる今日の人々

こそ、最も希求していることであるといえよう。今後、それぞれの地域での健康長寿の実現に際し、この視点からのコミュニティ再生は重要な研究課題として浮かび上がってきたことである。

二つ目に、現在の年金や医療などの社会保障制度の中で、経済と健康の基盤を得た超高齢者は、自らが内在する文化資本を生かし現役世代の経済資本を活用しながら、生き生きとした老後を過ごすことは人生 100 年時代を迎える課題である。ここにおいては、祭りや伝統行事が地域コミュニティの結束の源であり、これらを、長寿を支援する地域経営としてどのように生かすという地域経営の研究課題が浮かび上がってきたことである。

三つ目に、さらに少子高齢化が進む日本では、健康長寿と出生率の向上は今後の大きな政策課題として横たわっている。しかし、本土からはるか離れた離島で、GDP の経済指標では低域にある奄美で長寿と子宝が実現している要因に学び、それぞれの地域での解決の方策を考えていくという研究課題が浮かび上がってきたということである。

四つ目に、本研究が明らかにした結果は、長寿地域奄美の超高齢者という限定された地域・対象者であった。このことから、今後は同テーマで、都市部での実証を重ねていき、全国的に、人生 100 年時代に対応する健康長寿と幸福な老いを実現していくという研究課題が残されている。

## 5.2 展望

今日、人と人のつながりが希薄となった都会で老いる超高齢者は、身体機能の衰退や社会的役割の喪失、社会的孤立などに焦点が当てられ、当人以上にネガティブな評価にさらされがちな状況にある。同時代を生きながら、奄美の超高齢者と都会に住む超高齢者には、異なる老いの姿がみられた。超高齢者の長生きと幸福な老いには、地域のコミュニティ特性が大きく関わっているということであった。

加えて、奄美は少子高齢化が心配される中で、長寿多子化を実現している。つながりやきずなのある地域コミュニティでは、双方向の場と場の意思が形成されていた。そこには、長寿者の力を畏敬し敬愛する習慣の存在と、次（現役）世代の期待にこたえようとする超高齢者との応答関係がみられる。

本研究から、奄美は衰退地域ではなく、むしろ未来を先取りする先進地域であることが浮かび上がってくる。長寿多子化が実現し、長生きが幸福と感じられる幸福実現の地域経営が行われている。この意義は大きい。つまり、奄美の共同体での祭りや伝統行事に新たな評価が高まり、奄美は辺鄙で貧しいという地域でなく、未来への健康長寿を実現している社会であることが理解されるのである。

近年、超高齢社会への挑戦として健康長寿のまちづくりへの視点から、霞が関、先

進自治体、先進企業の取り組みが紹介されている。そこでも、健康寿命を伸ばすには個人のモチベーションだけでなく、社会との多様なつながり、とくに家族や地域における自分の存在意義が欠かせないことが指摘されるようになったのである。

加えて、70代、80代が活躍する時代における健康概念の変化もある。これまでの「健康」か「病気」という2区分でなく、大多数の人は、“病気は持っているけれど病人ではない”「未病」の概念が提案されるようになった。そして、「未病」の人がより多く地域で暮らせる社会の創造が重要としている。奄美では、改めて「未病」の概念を使うことなく、「未病」の人が多く活躍しているコミュニティである。都市部で気づき始めた健康長寿のまちづくりからも、奄美は既に先進地なのである。

奄美の事例が示すことは、祭りや人々のつながりやきずなが続く限り地域は消滅しないということである。その要には、地域の財や文化資産を体化する超高齢者と、次（現役）世代とが学びあい育ちあう場の重要性である。文化創生、地域創生の健康長寿のまちづくりはそのような場を通じてこそ実現するであろう。一方、農村における地域コミュニティの持続的発展は、もともと農村であった日本の大半の地域・都市部にも存在していたものである。現在の都市においても京都の祇園祭のように、伝統の祭礼文化が持続的に発展している地域がある<sup>438</sup>。

また、京都では伝統的生活文化である華道や茶道を学校教育の場で子どもたちに学んでもらう取り組みが今年度（31年度）から全国に先駆け始まった<sup>439</sup>。それによると、教師は地域の華道・茶道の流派や資格をもつ保護者を想定しているという。高齢者／超高齢者の技を学校教育の場で活用する試みでもある。高齢者／超高齢者にとっては地域貢献は生きがいともなる。子ども達にとっては地元の伝統文化の素晴らしさを学ぶ機会となる。双方にとってメリットとなる取り組みである。

これまで、京都の華道や茶道の技は京都の観光資源として、京都を訪れた外国人や他府県の人々が享受してきた。筆者も長年華道に従事しているが、その作品は京都の観光に役立てられたもので、学校教育などの場で子どもたちに華道を親しくしてもらう機会はなかった。京都市教育委員会が取り組む、地元の生活文化を多世代が共有する試みは、長寿・超高齢社会にとって、歓迎すべきことである。

最後に、本研究で指摘した都市と農村、伝統の技や文化との共生については、研究が開始されたばかりであるが、今後の日本における地域コミュニティの研究を拓くうえでも重要な視点となろう。農村の経験から学びつ、都市における地域コミュニティ再生に向けた一層の研究と発展を実証する方向性を確認して、本論文の展望としたい。

---

<sup>438</sup> 山田浩之編（2016）「新しい共同性を構築する場としての祭り」『都市祭礼文化の継承と変容を考える；ソーシャル・キャピタルと文化資本』ミネルヴァ書房、46-81頁。

<sup>439</sup> 読売新聞（2019年2月22日付け）。

## あとがき

おかげさまで、博士論文として、『奄美のシマにみる文化資本を活かした地域経営；長寿と人間発達を支える伝統と協働のダイナミズム』を完成させることができました。ここに至るまでに、13年かかりました。研究者としてのこの12年間は、正に、博士論文を書きあげてを目的に費やした期間でもありました。

これまでの経過を振り返りますと、博士論文の取り組みは、2006年に、旧国立大学の博士後期課程に入学した時から始まりました。その頃は、ポジティブな高齢者理解につながる老年的超越理論に魅力を感じ、超高齢者を対象に実証研究をしたいと思っていましたので、その理論を研究している先生の下で研究をスタートしました。

当時は、勤めながら大学院に通い3年間で博士論文を仕上げる予定でした。その間に、理論を実証する視点や解釈、それに伴う調査票の設計、実施時期などで、指導教員との齟齬が生じてきます。在学中には指導らしい指導を受けることなく孤独な研究生生活の4年間に、博士論文を仕上げました（第1回目）。しかし、指導教員からは酷評され、提出さえできないままに、単位取得退学を余儀なくされました。この4年間の指導はアカデミック・ハラスメントにあたるのでは、との思いを抱きつつ。

退学後、その旨を大学に相談する中で、博士論文を再提出することになりました。そこで2回目の博士論文、そして3回目の博士論文を提出しました。しかし、その都度、予備審査は合格するものの本審査の段階になると、なぜか本審査の提出を断念せざるを得なくなるという繰り返しとなりました。

しかしながら、奄美の研究で得た成果は、世に問うべき内容と確信していましたので、書くことを諦めることはできませんでした。

その時期に出会ったのが、京都大学名誉教授の池上惇先生や中谷武雄先生でした。池上先生が代表を務める市民大学院(文化政策まちづくり大学院)で、文化経済学や文化政策などを学ぶなかで、奄美のシマの文化資本や人間発達の視点も加わり、学際的な視野から博士論文を書き進めました。

博士論文をまとめることができ、論文の申請先を探していた時（2018年春）に出会ったのが、名古屋学院大学の十名直喜先生でした。十名先生のご厚意で、十名ゼミ（産業システム研究会）に参加させていただいて、さらに、博論のタイトルや目次構成、文章など全面的に見直す機会を得ました。そして、十名先生を窓口にして、名古屋学院大学大学院経済経営研究科に博士論文を提出することになりました。

審査にあたっては、十名先生の定年退職に伴い、主査は古池嘉和先生にお願いすることになり、副査には十名直喜先生、木船久雄先生、阿部太郎先生にご担当いただき

ました。予備審査では、予想以上の厳しい指摘に大きな衝撃を受け、研究の深さと自らの至らなさを痛感いたしました。しかし、先生方から、研究論文としての重要な視点や弱点について詳細に指摘していただいたことが、論文の質をさらに高めることにつながったと感じています。先生方の深いご指導に心より感謝しております。

予備審査後も、先生方のご指摘を踏まえ、十名ゼミで本審査論文としてまとめ直す作業を進めました。そのなかで、奄美の長寿とコミュニティの視点に地域経営という視点を加味し、新規に織り込んだ第3章を軸にして体系的に編集することができ、論文内容は劇的に深みと迫力を増したように思います。

GW中にかかわらず、十名先生から電子メールで集中指導を受け、それらを踏まえ最終の仕上げに取り組み、漸く本審査論文が出来上がりました。

十名先生と出会ってからご指導いただいた1年間は、これまでの研究人生の仕上げに向けた濃縮した1年となりました。とりわけ名古屋学院大学でのゼミを通じたご指導、ご支援に感謝申し上げます。

また、重ねて、研究上のご助言・ご指導を賜っている池上先生、中谷先生をはじめとする市民大学院の先生方、そして、学外者の研究者に対し博士論文審査を引き受けてくださった名古屋学院大学の古池嘉和先生はじめ、十名直喜先生、木船久雄先生、そして、阿部太郎先生のご配慮・ご支援に深く感謝申し上げます。

そして、最後になりますが、奄美の方々へも感謝申し上げます。この博士論文は、奄美の方々の惜しみないご協力やご支援を賜ったことによって完成したものです。祭りや、伝統行事、結いや敬老の習慣を継承している奄美のシマには、かつての日本の生活文化を息づいています。

奄美には、少子高齢化の危機より長寿多子化の未来があります。長寿・超高齢社会における、長生きを幸せと呼べる奄美のシマの存在とその要因を明らかにしたことは、長寿・超高齢社会への新たな一歩を踏み出す契機となり、その意味は大きいと感じています。

研究を通じたすべて出会いに深く感謝申し上げます。

## 参考文献（一括）

### 日本語文献

- 青井和夫（1997）「白秋・玄冬の社会学」井上俊ほか編『成熟と老いの社会学』岩波書店、1-26頁。
- 秋山弘子（2008）「生涯現役を超えて」『毎日新聞』（2008年3月16日付）。
- 秋山弘子（2000）「日本の老年社会科学から欧米へ向けての発信」『老年社会科学』22（3）、338-342頁。
- 天野正子（2006）『おいへのまなざしー日本近代は何を見失ったか』平凡社。
- 新井康通・廣瀬信義（2017）「これからの百寿者研究；スーパーセンテナリアン研究」『老年社会科学』39（1）、32-37頁。
- 有賀喜左衛門（1968）「ユイの意味とその変化」『有賀喜左衛門全集V村の生活組織』未来社。
- 池上淳（1991）『文化経済学のすすめ』丸善。
- 池上淳（2003）『文化と固有価値の経済学』岩波書店。
- 池上淳（2010）「農村地域の創造環境と文化資本再生；持続可能な農村の理念・実現の根拠・政策」『農村計画学会誌』29（1）、12-20頁。
- 池上淳（2012）『文化と固有価値のまちづくり；人間復興と地域再生のために』岩波書店。
- 池上淳（2015）「創造産業地域の再生と発展」十名直喜編『地域創生の産業システム』水曜社、191-207頁。
- 池上淳（2017）『文化資本入門』京都大学学術出版会。
- 池上淳・植木浩・福原義春編（1998）『文化経済学』有斐閣。
- 石井洋二郎（1993）『差異と欲望；ブルデュ「ディスタンクシオン」を読む』藤原書店。
- 石川雅信（1993）「奄美の家族と『一重一瓶』」村武精一・大胡欣一編『社会人類学からみた日本』河出書房新社、142-154頁。
- 稲野慎（2008）『揺れる奄美、その光と陰』、南方新社。
- 井上薫（1959）『行基』吉川公文館。
- 井上勝也・大川一郎編（2000）『高齢者の「こころ」辞典』中央法規。
- 猪木武徳（2012）『経済学になにができるか；文明社会の制度的枠組み』中公新書。
- 色川大吉（1974）「近代日本の共同体」鶴見和子・一井三郎編『思想の冒険』筑摩書房、235-276頁。
- 宇沢弘文（2000）『社会的共通資本』岩波書店。
- 内山節（2010）『共同体の基礎理論；自然と人間の基層から』農文協。
- エベット・ロジャーズ（2007）『イノベーションの普及』（三藤利雄訳）翔泳社。
- エリクソン, E. H（1977）『幼児期と社会』仁科弥生訳 みすず書房（*Childhood and Society*,



- 1963)。
- エリクソン, E.H., Erikson, J. M & Kivnick, H.O (1990) 『老年期；生き生きとしたかわりあい』 朝長正徳・朝長梨枝子訳 みすず書房 (*Involvement in old age*, 1986)。
- エリクソン, E.H & Erikson, J. M (2001) 『ライフサイクル、その完結<増補版>』 村瀬孝雄・近藤邦夫訳 みすず書房 (*The Life Cycle Completed; A Review (Expanded Edition)*) WW Norton & Company, 1997)。
- 大塚俊夫 (2001) 「日本における痴呆性老人数の将来推計」、『日本精神病院協会雑誌』、20 (8)、41-845 頁。
- 大塚久雄 (1955) 『共同体の基礎理論』 岩波書店。
- 大井玄 (2010) 「『意味の世界』と幸せ」『科学』 80 (3)、286-289 頁。
- 岡本民夫 (2006) 「活力ある高齢者の台頭と対策」 富士谷あつ子・岡本民夫編 『長寿社会を拓く；生き生き市民の時代』 ミネルヴァ書房、9-22 頁。
- 岡本民夫 (2008) 「長寿社会における挑戦と開発；新しい福祉社会を目指して」『全国日本学士会会誌 ACADEMIC』 111 号、13-24 頁。
- 小倉啓子 (2002) 「特別養護老人ホーム新入居者の生活適応の研究；「つながり」の形成プロセス」、『老年社会科学』 24 (1)、61-70 頁。
- 小澤利男 (2010) 「人間の学としての老年学」『日本老年医学雑誌』 47 (1)、17-23 頁。
- 長田須磨 (1973) 『奄美女性誌』 農山漁村文化協会。
- 小野重朗 (1892) 『奄美民族文化の研究』 法政大学出版局。
- 皆村武一 (1988) 『奄美近代経済社会論』 晃洋書房。
- 皆村武一 (2003) 『戦後奄美経済社会論；開発と自立のジレンマ』 日本経済評論社、255-269 頁。
- 角田修一 (2011) 『概説社会経済学』 文理閣 第2版。
- 鹿児島県 (2004) 『平成16年あまみ長寿・子宝調査概要報告書』。
- 鹿児島県大島支庁 (2009) 『平成21年度奄美群島福祉の概要』。
- 片岡栄美 (2008) 「芸術文化消費と象徴資本の社会学；ブルディ―理論から見た日本文化文の構造と特徴」『文化経済学』 6 (1)、13-25 頁。
- 神谷美恵 (2005) 『こころの旅』 みすず書房。
- 金子勇 (1990) 「高齢化の新しい考え方；「生活の質」アプローチ」『季刊社会保障研究』 26-31 頁。
- 金山智子 (2010) 「離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達；奄美大島編」、『ジャーナル・オブ・グローバル・スタディズ』 3 号、1-20 頁。
- 金山智子 (2011) 「離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達；沖永良部編」『ジャーナル・オブ・グローバル・スタディズ』 8 号、7-23 頁。
- 川崎澄雄 (1987) 「鹿児島県奄美群島出身者の郷友会について」『奄美学術調査記念論文集』 鹿児島県短期大学附属南日本文化研究所、p45-49 頁。
- 河合隼雄 (2001) 『日本人の心』、潮出版社。
- 河合隼雄 (2002) 『ユング心理学と超越性』 岩波書店。
- 河合隼雄 (2009) 『生と死の接点』 岩波書店。

- 川島大輔 (2011) 『生涯発達における死の意味付けと宗教; 奈良ティブ死生学に向けて』ナカニシヤ出版。
- 河野あゆみ・金川克子 (1998) 「在宅高齢者の主観的時間に関する研究; 性, 年齢, 日常生活自立度との見当」『老年社会科学』20 (1)、25-31 頁。
- キケロー (2004) 『老年について』中務哲郎訳、岩波書店。
- 木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生』弘文堂。
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂。
- 木下康仁 (2007) 『ライブ講義 M-GTA ; 実践的質的研究法. 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂。
- 木下康仁編 (2005) 『分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂。
- 喜山荘一 (2009) 『奄美自立論』、南方新社。
- キューブラー・ロス, E (2001) 『[死ぬ瞬間と死後の生] (鈴木晶訳) 中央公論社 (Death is of Vital Importance, 1999)。
- 京丹後市 (2014) 『今に生きる「京丹後」百寿人生のレシピ 2 ; 百歳健康長寿の秘けつ集』。
- 京丹後市 (2015) 『今に生きる「京丹後」百寿人生のレシピ 3 ; 百歳健康長寿の秘けつ集』。
- 窪寺俊之 (2000) 『スピリチュアルケア入門』三輪書房。
- グレイザー, B.G & ストラウス, A.L (1967) 『データ対話型理論の発見; 調査からいかに理論をうみだすか』後藤隆・大出春江・水野節夫訳 新曜社 (*The discovery of grounded Theory ; Strategies for qualitative research*, 1996)。
- ケインズ (1971) 「自由放任の終焉」『世界の名著 57. ケインズ・ハロッド』宮崎義一・伊東光晴編中央公論社、133-158 頁。
- 向坂健次 (編) (2008) 『幸福の社会理論』放送大学教育振興会。
- 小坂井澄 (1984) 『悲しみのマリアの島; ある昭和史の受難』集英社。
- 小松和彦 (2008) 「刊行にあたって; 死生観研究の意義」近藤功行・小松和彦編『死の技法; 在宅死に見る葬の礼節・死生観』ミネルヴァ書房、i-iii。
- 後藤小百合 (2006) 「知的財産会計の構築と制度化; 主として特許権に関する会計と企業価値の創造」『高崎経済学論集』48 (4)、199-212 頁。
- 古谷野亘 (2002) 「現代日本の高齢者観」、『老年精神医学雑誌』13、877-882 頁。
- 古谷野亘 (2003a) 「高齢期を見る目」(古谷野亘・安藤孝敏編『新老年学; シニアライフのゆくえ』ワールドプランニング、13-26 頁。
- 古谷野亘 (2003b) 「幸せな老いの研究」古谷野亘・安藤孝敏編『新社会老年学; シニアライフのゆくえ』ワールドプランニング 141-152 頁。
- 近藤克則 (2010) 「幸福・健康の社会的決定要因; 社会免疫学の視点から」『科学』80 (3)、290-29。
- 近藤功行 (1997) 「高齢者の生と死: 与論島における在宅・終末期ケア」松井政明・山野井敦徳・山本都久編『高齢者教育論』東信堂、91-107 頁。
- 近藤功行 (2001) 「与論島における死をめぐる人類学的考察; 『適寿』という用語につ

- いて」『国立歴史民俗博物館研究報告第91集』、237-247頁。
- 近藤功行（2003）「与論島における死亡場所；死生観と終末行動をめぐる人類生態学的研究」『志學館法学』第4号、181-201頁。
- 近藤功行（2008）「与論島の自宅死亡」（近藤功行・小松和彦編『死の技法：在宅死に見る葬の例節・死生観』ミネルヴァ書房。
- 近藤誠（2013）「少子高齢化が日本経済に与える影響」『経済科学研究所紀要』43、17-50頁。
- 権藤恭之（2002）「超高齢者の認知機能の特徴」『老年精神医学雑誌』13、906-911頁。
- 権藤恭之（2002）「長寿はしあわせか；東京百寿者調査からの知見」『行動科学』41（1）、35-44頁。
- 権藤恭之（2007）「百寿者研究の現状と展望」『老年社会科学』28、504-512頁。
- 権藤恭之（2008）「生物学的加齢と心理学的加齢」権藤恭之編『朝倉心理学講座15』。
- 権藤恭之（2016）「超高齢期の心理特徴」『Aging & Health』、No.79。
- 権藤恭之・古名丈人・小林江里香ほか（2005a）「超高齢期における身体機能の低下と心理的適応；板橋区超高齢者悉皆訪問調査の結果から」『老年社会科学』7、327-337頁。
- 権藤恭之・古名丈人・小林江里香ほか（2005b）「都市部在宅超高齢者の心身機能の実態；板橋区超高齢者悉皆訪問調査の結果から」『日本老年医学会雑誌』42、199-208頁。
- 嵯峨座晴夫（1993）『エイジングの人間科学』学文社。
- 嵯峨座晴夫（2000）「21世紀の高齢社会と老年社会科学のフロンティア；大衆長寿と高齢者のライフスタイル」『老年社会科学』22（3）、234-330頁。
- 先田光演（2004）「奄美の研究者；甲東哲」松本泰丈・田端千秋編『現代のエスプリ別冊奄美復帰50年；ヤマトとナワのはざままで』至文堂、340-343頁。
- 桜井徳一郎（1984）「結集の原点；ハレとケとケガレの相関」桜井徳一郎編『ハレ・ケ・ケガレ共同討議』青土社、219-235頁。
- 佐藤眞一（2000）「心の加齢」井上勝也・大川一郎編『高齢者の「こころ」辞典』中央法規、2-5頁。
- 佐藤眞一（2003）「心理学的超高齢者研究の視点；P.B. Baltesの第4世代論とE.H. Eriksonの第9段階の検討」『明治学院大学心理学紀要』13、41-48頁。
- 佐藤眞一（2007a）「高齢期のサクセスフル・エイジングといきがい」谷口幸一・佐藤眞一編『エイジング心理学；老いについての理解と支援』北大路書房、37-54頁。
- 佐藤眞一（2007b）「社会性・コミュニケーションのエイジング」谷口幸一・佐藤眞一編『エイジング心理学；老いについての理解と支援』北大路書房、141-157頁。
- 柴田博（2004）「社会老年学のあり方」『老年社会科学』26（3）、351-358頁。
- 柴田博（2005）「サクセスフル・エイジングの条件」『桜美林大学大学院国際学研究所 桜美林シナジー』4、1-11頁。
- 柴田博（2006）『スーパー老人の秘密』技術評論社。

- 柴田博 (2016) 『スーパー老人のヒミツは肉だけではない』 社会保障出版社。
- 霜山徳彌 (1985) 「老いと死の意味」馬場謙一他編『老いと死の深層』有斐閣、1-40 頁。
- 島尾敏雄 (1966) 『島にて』冬樹社、20-32 頁。
- 島尾敏雄 (1977a) 『名瀬たより』農村漁村文化協会。
- 島尾敏雄 (1977b) 『島尾敏雄編ヤポネシア序説』創樹社。
- 島菌進 (2007) 『スピリチュアリティの興隆；新霊性文化とその周辺』岩波書店。
- 下仲順子 (1997) 「人格と加齢」下仲順子編『老年心理学』培風館、62-76 頁。
- 下仲順子 (2002) 「超高齢者の人格特徴」『老年精神医学雑誌』13 (8)、912-920 頁。
- 白澤卓二 (2013) 「内科的アンチエイジング」『順天堂医事雑誌』59 (4)、307-312 頁。
- 白澤卓二 (2010) 「老化学説と老化制御」『日本老年医学雑誌』47 (1)、24-27 頁。
- 主婦と生活社 (2013) 「笑いながら死ぬる島；鹿児島県与論島の医師と患者たちが作る『看取りの楽園』」『週刊女性』2013 年 2 月 5 日号。
- 新保輝幸 (2009) 「信頼生成の社会的基盤と生理的基盤」浅野耕太編『自然資本の保全と評価』ミネルヴァ書房、133-148 頁。
- デューイ、ジョン (2004) 『経験と教育』市村尚久訳 講談社。
- 杉村和彦 (2007) 「健康長寿研究の地域論的展開」『福祉県立大学論集』29、39-55 頁。
- スロスビー・D (2002) 『文化経済学入門：創造性の探究から都市再生まで』中谷武雄・後藤和子監訳、日本経済新聞社 (Economic and Culture, Cambridge University Press.) 78-102 頁。
- スロスビー・D 『文化政策の経済学』後藤和子・阪本崇訳、ミネルヴァ書房。
- スティグリッツ、ジョセフ・E・ら (2012) 『暮らしの質を測る；経済成長率を超える幸福度指標の提案』福島清彦訳、一般社団法人金融財政事情研究会。
- 鈴木隆雄 (2012) 『超高齢社会の基礎知識』講談社。
- 鈴木忠 (2008) 『生涯発達のダイナミクス；知の多様性生き方の可塑性』東京大学出版会。
- 鈴木亘 (2010) 『財政危機と社会保障』講談社。
- 鈴木瑞枝・金森雅夫・白木まさ子ほか (2003) 「85 歳・90 歳高齢者の人生満足感度の因子構造に関する研究」『老年精神医学雑誌』14 (8)、1017-1027 頁。
- 鈴木亮子 (2006) 「認知症患者の介護者の心理状況移行と関係する要因について；心理的援助の観点から見た介護経験」『老年社会科学』27 (4)、391-405 頁。
- セン、アマルティア (1988) 『福祉の経済学:財と潜在能力』鈴木興太郎訳、岩波書店 (Commodities and Capabilities, Elsevier Science Publishers B.V, 1985)。
- セン、アマルティア (2000) 『自由と経済開発』(石塚雅彦訳) 日本経済新聞社、(Development as Freedom, 1999)。
- 鈴木興太郎・後藤玲子 (2001) 『アマルティア・セン；経済学と倫理学』、実教出版。
- 世阿弥 (1958) 『風姿花伝』岩波書店。
- 蘭博明 (2004) 「いま奄美は：日本復帰後の開発と自然・社会環境の変容」松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰 50 年：ヤマトとナハのはざままで』至文堂、101-110 頁。
- 祖父江逸郎 (2009) 『長寿を科学する』岩波書店。
- 大藤ゆき (1982) 『子どもの民俗学』草戸文化。

- 高島博 (2009) 『文化による地域づくり ; 一つの文化経済的アプローチ』 晃陽書房。
- 田島康弘 (1991) 「関西における奄美郷友会の実態 ; 徳之島出身者の各集落郷友会に対する調査から」 『鹿児島大学教育学部研究紀要・人文・社会科学編』、1-19 頁。
- 田島康弘 (1995) 「奄美大島名瀬市における郷友会の実態」 『鹿児島大学教育学部研究紀要・人文・社会科学編』、11-30 頁。
- 高須由美子 (2003) 「奄美諸島のノロ (女性祭司) 関係文書」 『史資料ハブ地域文化研究』 (2)、148-158 頁。
- 高橋一郎 (1994) 『伝承のコスモロジー : 琉球と大和の淵 ; 奄美』 第一書房。
- 高橋正実・井出訓 (2004) 「スピリチュアリティの意味 ; 若・中・高齢者の3世代比較による霊性・精神性についての分析」 『老年社会科学』 26 (3)、296-307 頁。
- 立松和平 (2006) 『立松和平日本を歩く第6巻 ; 沖縄・奄美を歩く』 勉誠出版。
- 田中每実 (1994) 「老いと死の受容と相互形成」 岡田渥美編 『老いと死 ; 人間形成論的考察』 玉川大学出版部、319-341 頁。
- 田中きよむ (2006) 『少子高齢社会の福祉経済論』 中央法規。
- 田中滋・川渕孝一・河野敏鑑編著 (2010) 『会社と社会を幸せにする健康経営』 勁草書房。
- 谷口貢・松崎憲三 (2006) 『民俗学講義 : 生活文化へのアプローチ』 八千代出版。
- 田畑千秋 (1992) 『奄美の暮らしと儀式』 第一書房。
- 田畑洋一 (2017) 『琉球弧の島嶼集落における保健福祉と地域再生』 南方新社。
- 玉城隆雄 (1980) 「与論の家族 ; 朝戸部落の事例を中心に」 『与論・国頭調査報告書 ; 地域研究シリーズ NO.1』 沖縄国際大学南東文化研究所、63-73 頁。
- 橘覚勝 (1971) 『老年学 ; その問題と考察』 誠信書房。
- 地球産業文化研究所 (2003) 『新しい社会経済システム構築に向けた NPO、企業、政府が協働を行うために提案』  
<http://www.ggispri.jp/newsletter/200302-3> (2019/2/12 閲覧)。
- 辻哲夫 (監) (2017) 『健康長寿のまちづくり ; 超高齢社会への挑戦』 時評社。
- 津波高志 (2012) 「与論島における洗骨改葬」 『沖縄側からみた奄美の文化変容』 第一書房、11-26 頁。
- 鶴若麻里 (2002) 「『Spiritual Well-being』に関する研究の分析と動向 ; アメリカにおける高齢者の視座から」 『ヒューマンサイエンスリサーチ』 11、80-98 頁。
- 寺谷篤志・平塚伸治 (2015) 『「地域創生」から「地域経営」へ ; 街づくりに求められる志向のデザイン』 仕事と暮らしの研究所。
- 暉峻淑子 (1989) 『豊かさとは何か』、岩波書店。
- 暉峻淑子 (2011) 『助け合う豊かさ』、フォーラム・A。
- トーンスタム, L (2017) 『老年的超越 ; 歳を重ねる幸福感の世界』 富澤公子・タカハシマサミ訳、晃洋書房 (Gerotranscendence; A Developmental Theory of positive Aging, Springer, 2005)。
- 戸谷修 (1981) 「奄美農村にみられる社会的諸相 ; 本土と農村との比較を中心に」 松原治郎・戸谷修・連見音彦編 『奄美農村の構造と変動』 御茶の水書房。

- 十名直喜 (2003) 『ひと・まち・モノづくりの経済学』水曜社。
- 十名直喜 (2017) 『現代産業論；ものづくりを活かす企業・社会・地域』水曜社。
- 十名直喜 (2018) 「日本的経営と品質管理」、『名古屋学院大学論集 (社会科学篇)』vol.55 (1)、1-92 頁。
- 十名直喜編 (2015) 『地域創生の産業システム』水曜社。
- 富澤公子 (2009a) 「奄美群島超高齢者の日常からみる『老年的超越』形成意識」『老年社会科学』30、477-488 頁。
- 富澤公子 (2009b) 「ライフサイクル第 9 段階の適応としての「老年的超越」；奄美群島超高齢者の実態調査からの考察」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』2、327-335 頁。
- 富澤公子 (2011) 「奄美群島における長寿とスピリチュアリティ；奄美大島、徳之島、与論島の事例から」『老年社会科学第 53 回大会報告要旨号』33-2、218 頁。
- 富澤公子 (2015) 「超高齢者の老年的超越」『国際文化政策』6、21-30 頁。
- 富澤公子 (2015) 「遠野スタイル；超高齢者生き生き物語」遠野みらい創りカレッジ編『地域社会の未来をひらく；遠野・京都二都をつなぐ物語』水曜社、88-99 頁。
- 富澤公子 (2018a) 「“老年的超越を” 導く地域のきずな」『医療と介護 Next』vol.4 (1)、28-31 頁。
- 富澤公子 (2018b) 「少子高齢化社会から長寿多子化社会へ；長寿で子宝の島奄美群島から発信する健康長寿と幸福な老いの実現」『経済科学通信』No.145、53-59 頁。
- 富澤公子 (2018c) 「長寿地域における長寿の地域要因と支援要因の分析；京丹後市を事例」として『大阪ガスグループ福祉財団調査・研究報告集』Vol.31、13-19 頁。
- 富澤公子 (2019) 「奄美群島における長寿の地域要因と支援要因の分析：シマ（集落）のコミュニティに注目して」『国際文化政策』10、1-20 頁。
- 富澤公子・Masami Takahashi (2010) 「奄美群島超高齢者の「老年的超越 (Gerotranscendence)」形成に関する検討；高齢期のライフサイクル第 8 段階と第 9 段階の比較」『立命館大学産業社会論集』46 (1)、87-103 頁。
- 富澤公子・Masami Takahashi (2014) 「健康長寿におけるコミュニティの役割：奄美群島の幸福な老い」ユニバーサル財団『豊かな高齢社会の探求』、1-15 頁。
- 富澤公子・Masami Takahashi (2016) 「つながりが自律と健康長寿に与える影響；長寿地域京丹後市の超高齢者調査からの考察」『老年社会科学』38 (2)、17 頁。
- 中川吉晴 (2005) 『ホリスティック臨床教育学；教育・心理療法・スピリチュアリティ』せせらぎ出版。
- 中畠康之・小田利勝 (2001) 「サクセスフル・エイジングのもう一つの観点；ジェロトランセンデンス理論の考察」『神戸大学発達科学部研究紀要』6 (2)、255-269 頁。
- 永田浩三 (2015) 『奄美の奇跡；祖国復帰の若者たちの無血革命』WAVE 出版。
- 中原ゆかり (2007) 『奄美のシマの歌』弘文堂。
- 中村雄二郎 (1992) 『臨床の知とはなにか』岩波書店。
- 中山清美 (2010) 「文化財から未来をデザインする」『奄美郷土研究会会報』41 号、54-61 頁。
- 永山修一 (2004) 「古代・中世併用期の奄美」松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰 50 年；ヤマトとナハのはざままで』至文堂、52-62 頁。
- 奈倉道隆 (1999) 「老いと宗教」『老年社会科学』21 (3)、311-316 頁。
- 名瀬市誌編纂委員会 (1974) 『名瀬市誌第 1 巻歴史編』、122-123 頁。
- 新村拓 (1989) 『死と病と看護の社会史』法政大学出版、170-177 頁。

- 新村拓 (2001) 『在宅死の時代；近代日本のターミナルケア』法政大学出版。
- 西平直 (2003) 「スピリチュアリティ再考—ルビとしての『スピリチュアリティ』」安藤治・湯浅泰雄編『スピリチュアリティの心理学；心の時代の学問を求めて』せせらぎ出版、71-93 頁。
- 西村富明 (1993) 『奄美群島の近現代史』海風社。
- 野口才蔵 (1982) 『奄美文化の源流を慕って』道の島社。
- 野沢慎司 (2006) 『リーディングス ネットワーク論；家族・コミュニティ・社会関係資本』野沢慎訳、勁草書房 (*American Journal of Sociology* Coleman, James, 1988)。
- 昇曙夢 (1949) 『大奄美史』奄美社。
- 野間晴雄 (1978) 「野生百合の栽培化から球根商品化への過程；鹿児島県甕島と沖永良部島の比較」『関西大学人文地理』30 (3)、211-226 頁。
- 林蘇喜男 (2004) 「奄美ルネッサンス」松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰 50 年：ヤマトとナハのはざままで』至文堂、1-90 頁。
- バルテス, P. B (1993) 『生涯発達の心理学 1 巻, 認知・知能・知恵』東洋・柏木恵子・高橋恵子編・監訳、新曜社 (*Theoretical propositions of lifespan developmental psychology: On the dynamics between growth and decline. Developmental Psychology*, 1978)。
- 速見侑編 (2004) 『民衆の導者行基』吉川公文館。
- 原井一郎 (2005) 『苦い砂糖：丸田南里と奄美解放運動』高城書房。
- パットマン, R (2001) 『哲学する民主主義；伝統と改革の市民的構造』河田純一郎訳、NTT 出版 (*Making Democracy Work: Civic Traditional in Modern Italy*, 1993)。
- ピエール・ブルデュー (1989) 『ディスタンクシオン(社会的判断力批判)』石井洋二郎訳、新評論。
- ビュイトナー・ダン (2010) 『ブルーゾーン：世界の 100 歳人 (センテナリアン) に学ぶ健康と長寿のルール』千名紀訳、ディスカヴァー・トゥエンティワン。
- 日野原重明 (1997) 『老いに成熟する』春秋社。
- 平山正実 (2005) 『始まりの死生学；「ある」ことと「気づく」こと』春秋社。
- 広井良典 (1999) 『日本の社会保障』岩波書店。
- 広井良典 (2001) 『定常型社会；新しい「豊かさ」の構想』岩波書店。
- 広井良典 (2009) 『コミュニティを問い直す；繋がり、都市、日本社会の未来』筑摩書房。
- 広井良典 (2013) 『人口減少社会という希望；コミュニティ経済の生成と地球倫理』朝日新聞出版。
- 廣瀬信義 (2016) 「百寿者から超百寿者研究へ；ヒト長寿科学のご紹介・研究」『生活福祉研究』92、15-32 頁。
- 廣瀬信義・鈴木信 (1999) 「百寿者研究の現状と展望」『日本老年医学会雑誌』36 (4)、219-228 頁。
- 廣瀬信義・新井康通・稲垣宏樹ら (2008) 「百寿者調査から超百寿者調査へ；健康長寿達成の秘訣を探る」『脂質栄養学』17 (1)、19-31 頁。
- ブキャナン, J. M., ワグナー, R. E (1979) 『赤字財政の経済学；ケインズの政治的遺産』深沢実ら訳、文真堂。

- ブキャナン, J. M (1990) 『財政赤字の公共選択論』 加藤寛監訳、文真堂。
- 福原義春 (2010) 「銀座の街と資生堂」『国際文化政策』 1-6 頁。
- 藤原成一 (2013) 「琉球弧の伝統文化とウエル・ビーイング」イチローカワチ・等々力  
英美編『ソーシャル・キャピタルと地域の力』日本評論社。
- 平凡社 (1999) 『日本歴史地名体系「第 4 巻鹿児島県の地名」』平凡社、奄美編 56-74  
頁。
- ホライズン編集室 (2000) 『生命めぐる島奄美；もりと海と人と』南日本新聞社。
- 星野和美 (2006) 「老年後期の心理社会的発達としての老年的超越性；高齢期のナラテ  
ィブによる検討」『人文論集・静岡大学人文科学部』 57、35-42。
- 堀薫夫 (2009) 「ポール・バルテスの生涯発達論」『大阪教育大学紀要第IV教育部門』  
58 (1)、173-185 頁。
- 堀薫夫 (2010) 『生涯発達と生涯学習』ミネルヴァ書房。
- ボールディング, ケネス・E (1987) 『社会進化の経済学』猪木武徳ら訳、H B J 出版局  
(Evolutionary Economics, Saga Publication, Inc. 1981)。
- 前田英樹 (2013) 『民俗と民藝』講談社。
- 前野隆司 (2013) 『幸せのメカニズム』、講談社。
- 前利潔 (2004) 「近代の奄美」松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰 50 年；ヤマトとナハの  
はざままで』至文堂、32-42 頁。
- マッキーヴァ, R. H (2009) 『コミュニティ社会学的研究；社会生活の性質と基本法則  
に関する一試案』中久雄・松原通晴監訳、ミネルヴァ書房。
- マルクス, K (1967) 『資本論第 1 巻』高坂逸郎訳、岩波書店。
- 正高信男 (2000) 『老いはこうして作られる；心と体の加齢変化』中央公論。
- 増井幸恵 (2008) 「性格」権藤恭之編『高齢者心理学』朝倉書店、134-150 頁。
- 町健次郎 (2008) 「与論島における家と死生観」近藤功行・小松和彦編『死の技法；在  
宅死に見る葬の例節・死生観』ミネルヴァ書房、9-20 頁。
- ミラー (1996) 『ホリスティック教育』吉田敦彦・中川吉春・手塚郁恵訳、春秋社 (The  
Holistic Curriculum (2<sup>nd</sup>))。
- 三木靖 (1974) 「近世島民の自給的生業と島津藩政」長澤和俊編『奄美文化誌』西日  
本新聞社、53 頁。
- 水上貴美子 (2005) 「高齢者の主観的健康観と老いの自覚との関連性に関する研究」『老年  
社会科学』 27 (1)、5-16 頁。
- 三隅一人 (2013) 『社会関係資本：理論統合の挑戦』ミネルヴァ書房。
- 水戸美津子 (2001) 『高齢者の存在確認行動、変容する高齢者像と教育実践への視座』  
上越教育大学、博士論文。
- 宮家準 (1974) 『日本宗教の構造』慶應通信。
- 宮本常一 (1984) 『忘れられた日本人』岩波書店。
- 武藤隆 (1995) 「現代社会の変貌と生涯発達という見方」武藤隆編『生涯発達心理学第  
1 巻生涯発達心理学とは何か：理論と方法』金子書房、1-10 頁。



- 村山家國（1974）「奄美の社会と経済」長澤和俊編『奄美文化誌；南島の歴史と民俗』西日本新聞社、69-70 頁。
- 藻谷浩介（2013）『里山資本主義；日本経済は『安心の原理で動く』角川書店。
- 元森絵里子（2011）「労働力から『児童』へ；工場法成立過程からとらえ直す教育的子ども観とトランジションの成立」『社会福祉学研究』No.136、27-46 頁。
- 守屋慶子（2006）「高齢期にもひとは発達する；経験知で拓かれる新しい道」内田伸子編『誕生から死までのウエルビーイング；老いと死からの人間発達を考える』金子書房、107-125 頁。
- 森有正（1970）『生きることと考えること』講談社。
- 森田洋司（2010）『いじめとは何か；教室の問題、社会の問題』中央新書
- 文部科学省（2014）『平成 25 年度科研費説明資料』、57 頁。
- 八木紀一郎（2006）『社会経済学；資本主義を知ろう』名古屋大学出版会。
- 安田喜憲（2011）『日本文化の風土』朝倉書店。
- 矢吹雄平（2010）『地域マーケティング論；地域経営の新地平』有斐閣。
- 柳修平（2008）「在宅死の減少・病院死」近藤功行・小松和彦編『死の技法：在宅死に見る葬の例節・死生観』ミネルヴァ書房、173-180 頁。
- 柳田国男（1976）『青年と学問』、岩波書店。
- 柳田国男（1977）「先祖の話」『新編柳田國男集第 10 卷』角川出版。
- 柳田国男（1978）『海上の道』岩波書店。
- 柳田国男（2004）『柳田國男全集<第 31 卷>』筑摩書房、444-447 頁。
- 山下欣一（1998）「奄美の精神世界」西田テル子編『聖なる島；西田テル子写真集』星企画、24-27 頁。
- 山下欣一（1998）「奄美のユタ」西田テル子編『聖なる島：西田テル子写真集』星企画）、42-54 頁。
- やまだようこ（2000）「生涯発達心理学の課題と未来」小嶋秀夫・やまだようこ編『生涯発達心理学』放送大学教育振興会、203-224 頁。
- やまだようこ（2004）「質的研究の核心とは」武藤隆・やまだようこ・南博文ほか編『質的心理学；創造的に活用するコツ』新曜社、8-13 頁。
- 山田浩之編（2016）『都市祭礼文化の継承と変容を考える；ソーシャル・キャピタルと文化資本』ミネルヴァ書房。
- 山田誠（2005）『奄美の多層圏域と離島政策；島嶼圏市町村分析のフレームワーク』九州大学出版会。
- 湯浅泰雄（2007）「霊性問題の歴史と現在」湯浅泰雄監『スピリチュアリティの心理学；心の時代の学問を求めて』せせらぎ出版、11-50 頁。
- 弓削正巳（2004）「近世の奄美について」松本泰丈・田端千秋編『奄美復帰 50 年；ヤマトとナハのはざままで』至文堂、43-51 頁。
- ユング, C.G (1977)『無意識の真理』高橋義孝訳、人文書院 (*Über die Psychologie des Unbewussten*, Zurich, 1948)。
- ユング, C. G (1995)『自我と無意識』松代洋一・渡辺学訳、レグルス文庫 (*Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbften*, 1928)。
- 横内正利（2001）『「顧客」としての高齢者ケア』日本放送協会。

- 連見音彦 (1981) 『奄美農村の構造と変動』 御茶の水書房。
- 若井敏秋 (2004) 「行基と知識結」 速見侑編『民衆の導者行基』 吉川公文館、109-136 頁。
- 若本純子 (2010) 『老いと自己概念の媒介機能から捉えた中高年期の発達の機序』 風間書房。
- 鷲田清一 (2015) 『老いの空白』 弘文堂。
- 和辻哲郎 (1979) 『風土；人間学的考察』 岩波書店。

### 英語文献

- Ahmadi, F (2000) Reflections on Spiritual Maturity and Gerotranscendence; Dialogues with Two Sufis, *Journal of Religious Gerontology*, 11, 43-74.
- Ahmadi, F (2001) Gerotranscendence and Different Cultural Settings. *Aging and Society*, 21 (4) , 395-415.
- Atchley, R. C (1989) A continuity theory of normal aging, *The Gerontologist*, 29, 183-190.
- Atchley, R. C (1999) *Goals for developmental direction. In Continuity and adaptation in aging*: Baltimore: Johns Hopkins University.
- Baltes, P. B. & Baltes, M. M (Eds.) (1990) *Successful aging; Perspectives from the behavioral sciences*, New York, Cambridge University Press.
- Baltes, P.B. & Smith. J (2003) New frontier in the future of aging ;From Successful Aging of the young old to the dilemmas of the Fourth age, *Gerontology*, 49, 123-135.
- Baltes, P. B. & Mayer, K. U(Eds.) (1999) *The Berlin Aging Study Aging from 70 to 100*. New York , Cambridge University Press, 259-281.
- Baltes, P. B (1997) On the incomplete architecture of human ontogeny: Selection, optimization, and compensation as foundation of developmental theory. *American Psychologist*, 52, 366-380.
- Bourdieu, P (1986) The (three) Forms of Capital, 46-58.  
<https://faculty.georgetown.edu/irvinem/theory/Bourdieu-Forms-of-Capital.pdf> (2018/6/12 閲覧)。
- Braam. A. W., Bransen, I., van Tilburg, H. M., Van der Ploeg, H. M., & Deeg, D. J. H (2006) Cosmic transcendence and framework of meaning in life ; Patterns among older adults in the Netherlands, *Journal of Gerontology: Social Sciences* , 61 (3), 121-128.
- Crowther R., Martha, Michael W., Parker, W. A., Achehbaum., et al (2002) Rowe and Kahn's Model of Successful Aging Revisited ; Positive Spirituality –The Forgotten Factor. *The Gerontological Society of America*, 42 , 613-620.
- Cumming E, & Henry, W. E (1961) *Growing old ; The process of Disengagement*, Basic Books: New York.
- Dalby, P (2006) Is there a process of spiritual change or development associated with aging? ; A critical review of research. *Aging and Mental Health*, 10, 4-12.
- Hillary. G. A (1955) Definitions of Community; Areas of Agreement, *Rural Sociology* , 20 (2) , 111-123 .
- Lemon., B. W., Bengtson, V.L. & Peterson, J.A (1972) An exploration of the activity theory of aging. *Journal of Gerontology*, 27:511-523.
- Moody Alton B (1995) The institute of navigation in perspective, *Journal of The Navigation* 42(1), 5-26.

- Neugarten, B.L (1975) The future of the young-old. *Gerontologist*, 15, 4-9.
- Peck, R.E (1975) Psychological developments in the second half of life. In: W.C. Sze (Ed.), *Human life cycle*, Jason Aronson.
- Rowe, John W & Kahn, Robert L (1998) *Successful Aging*. New York : Pantheon Kooks.
- Stern, Y (2002) What is cognitive reserve? Theory and research application of the reserve concept. *Journal of the International Neuropsychological Society*, 8 (3), 448-460.
- Tornstam, L (1989) Gero-transcendence; A meta-theoretical reformulation of the disengagement theory, *Aging: Clinical and Experimental Research*, 1 (1), 55-63.
- Tornstam, L (1994) Gerotranscendence ; A Theoretical and Empirical Exploration, In L. E. Thomas & S.A, Eisenhandler (Eds.) *Aging and the Religious Dimension*, 203-225.
- Tornstam, L (1996) Caring for Elderly ; Introducing the theory of gerotranscendence as a supplementary frame of reference for caring for the elderly. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 10, 144-150.
- Tornstam, L (1997a) Gerotranscendence: The Contemplative dimension of Aging, *Journal of Aging Studies*, 11 (2), 143-154.
- Tornstam, L (1997b) Gerotranscendence in a broad cross-sectional perspective. *Journal*.
- Tornstam, L (1999) Gerotranscendence and the Function of Reminiscence *Journal of Identity*, 4 (3), 155-166.
- Wilson, R. S., Bennett, D. A., Bienias, J. L., Aggarwal, N. T., Mendes De Leon, C. F., Morris, M. C., Schneider, J. A., Evans, D.A (2002) Cognitive activity and incident AD in a population based sample of older persons, *neurology*, 59(12), 1910-1914.

## インターネット情報

- 蘆野吉和. 『地域とともに歩む医療：看取り（1）看取りの大切さ』（2009）  
<http://www.igaku-shoin.co.jp/>（2013/2/10 閲覧）。
- 外務省（2014）『国連開発計画 UNDP（平成 27 年 9 月）』  
<http://www.go.jp/mofaj/files/000281386.pdf>（2018/6/3 閲覧）。
- 鹿児島県大島支庁（2017）『平成 27 年度奄美群島の概要』  
<http://www.pref.kagoshima.jp/qa01/chiiki/oshima/chiiki/zeniki/gaikyou/h27amamigaikyou.html>（2018/5/28 閲覧）。
- 厚生労働省（2006）『国民生活基礎調査』  
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa06>（2007/10/2 閲覧）。
- 厚生労働省（2013）『産業構造・職業構造の変化』『労働白書』  
[https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/13/dl/13-1-4\\_02.pdf](https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/13/dl/13-1-4_02.pdf)（2017/6/2 閲覧）。
- 厚生労働省医政局（2012）『平成 19 年度終末期医療に関する調査結果の概要』  
<http://www.mhlw.go.jp/>（2013/2/10 閲覧）。
- 厚生労働省（2017）「Press Release 百歳高齢者の対象者は 320 人」（平成 29 年 9 月 15 日付け）

- <https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304250-Roukenkyoku-Koureishashienka/0000177627.pdf>
- 厚生労働省 (2017) 「Press Release 百歳高齢者の対象者は 32,097 人」 (平成 29 年 9 月 15 日付)。
- <https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304250-Roukenkyoku-Koureishashienka/0000177627.pdf> (2018/5/28 閲覧)。
- 厚生労働省 (2018) 「Press Release 平成 27 年日本人の平均寿命」 (平成 30 年 7 月 20 日付) <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life17/dl/life17-02.pdf> (2018/7/28 閲覧)。
- 箕岡真子 (2011) 『日本における終末ケア"看取り"の問題点』 国際長寿センター <https://www.ilcjournal.org/chojuGIJ/pdf/> (2013/2/10 閲覧)。
- 国際長寿センター. 「日本の看取り、世界の看取り」 (2011)
- [http://www.ilcjournal.org/study/doc/summary\\_](http://www.ilcjournal.org/study/doc/summary_) (2013/2/10 閲覧)
- 内閣府 (2015) 『人口世帯数速報値 27/2/26 閲覧』
- <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka/pdf/gaiyou.pdf> 平成 27 年国勢調査速報値
- 内閣府 (2017) 『平成 29 年版高齢社会白書』
- [http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/gaiyou/s1\\_2\\_3.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/gaiyou/s1_2_3.html) (2018 年)
- 内閣府 (2017) 『エイジレスライフ実践事例』 [http://www8.cao.go.jp/kourei/koukei/age\\_list\\_all.htm](http://www8.cao.go.jp/kourei/koukei/age_list_all.htm) (2018/6/20 閲覧)
- 内閣府経済社会総合研究所 (2009) 「地域経営の観点からの地方創生に関する調査研究」 報告書 <http://www.esri.go.jp/jp/prj/hou/hou041/hou041.pdf> (2019/3/10 閲覧)。
- 中川雅之 (2015) 「特集『地域創生』にあたって」、『日本不動産学会誌』 No.29、2、27 頁。 [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jares/29/2/29\\_27/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jares/29/2/29_27/_pdf) ((2019/3/10 閲覧)
- 中島民恵子 (2011) 「終末期、看取りについての国際制度比較」 国際長寿センター『日本の看取り世界の看取り：在宅看護・医療と見取りに関する国際比較研究 summary』
- [www.ilcjournal.org/study/doc/summary\\_1001.pdf](http://www.ilcjournal.org/study/doc/summary_1001.pdf) (2013/2/10 閲覧)。
- 新村拓 (2008) 『在宅死 看取っての実感、命の重み』
- <http://book.asahi.com/clip/> (2013/2/10 閲覧)。
- 新日経 BP ビジヨナリー研究所 (2018) 「医療経済の視点から探る増大必死の” 高齢者医療負担 “への処方箋」
- [https://special.nikkeibp.co.jp/atclh/NBO/17/kenpo/special/vol5\\_1/](https://special.nikkeibp.co.jp/atclh/NBO/17/kenpo/special/vol5_1/)(2018 /8/24 付)。
- 辻彼南雄・高見沢たか子・ジョン・キャンベル (2011) 『国際長寿センター「看取りの文化」を考える talk 座談会』 <http://www.ilcjournal.org/chojuGIJ/pdf/> (2013/2//18 閲覧)。
- 安井猛 (2008) 「日本人の死生観と看取りの文化」『2008 年第 1 回 特定営利活動法人福島県緩和ケア支援ネットワーク在宅緩和ケアボランティア養成講座』
- [http://www.logotherapie-japan.net/about/images/koen\\_](http://www.logotherapie-japan.net/about/images/koen_) (2013/2/18 閲覧)。